
異世界戦国大乱記

秋雨 夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界戦国大乱記

【NZコード】

NZ6578J

【作者名】

秋雨 夜

【あらすじ】

とある平凡な大学に存在する奇妙なクラブ、「考古学研究会」。一見お堅いように見えるクラブだが、そこは毎日がドタバタ「メヂイナ、何ともお軽いクラブだった。

そこにある部員のキャラの濃さは、他の学生が語るに「学内一、変人が多い」とのこと。

そんな彼らがひょんなことから始めたオンラインゲーム「国盗り戦国乱世」。

戦国時代をモーテルにしたゲームだが、プレイして僅か数時間、いき

なりの落雷でなんとゲームの世界に落ちこむた！？おまけに何やら不思議な能力が身体に宿ってる！？

雨降る桶狭間で出会ったのはあの織田信長、そしてその信長に、今川義元を討ち取る手伝いをしろと命令されて！？

史実を完全無視した異界の戦国時代、群雄割拠するこの世界を舞台に、己の歴史の知識、雑学、唯一手元に残された携帯、そして炎や水を操る力を駆使して生き残れ！

考古学研究会の部員六人が武将を斬り、罵り、ぶつ飛ばして罷り通る！

ここでは正史なんてものは存在しない！はちゃめちゃ破天荒な異世界戦国大乱記、これより開幕いたします。

メインキャラ設定と思われるもの

小川 健 「……そなことより、煙草が切れた方が重要だ。買
いに行つてくる。」

：考研の部長を務める22歳。 あだ名は何故か「王子」。
好きな物は酒と煙草、ちなみに好んで吸う煙草の銘柄は『HOAP』
である。

あまり進んで喋らうとしないクールな男、……を気取つてゐるようだが、
考研では専らタダの弄られ&貶され役。

異界の戦国乱世に落とされて、この一風変わつた世界を渡り歩き、
名だたる武将に会いに行こうツィアーを提案した本人。

中国史に詳しく、山中と話がよく会う。

神憑きとして『炎』の能力を得てゐる。 この能力は攻撃に特化し
ており、防御の技が全くない。「攻撃は最大の防御」を地で行く能
力で、破壊力は最大級だがその分体力の消耗が早く、一撃の威力の
高さが求められる。

武器： 陽炎丸

紅蓮の柄と薄い赤銅色の刀身を持ち、鍔部分には双尾の狐のレリー
フがある。 柄の長さに比べて刀身がかなり長く、形は野太刀に似
ている。 切れ味は相当のもので、大抵の物なら豆腐を切るように
何の抵抗もなく切れてしまう。

戦闘時テーマソング「A Little Faster」 The
re For Tomorrowより。

梅本 佑樹 「だから！お前等勝手に動くな！そこに大人しく座
つてろ！！」

：考研の副部長を務める21歳。 あだ名は「梅」、本人はあんまり呼んでほしくはない。

好きなことは模型造り、今造っているのは戦艦大和。まとまりの全くない考研を必死にまとめ、書類製作やミーティングなどを一身にこなす苦労人。 その為か胃薬と栄養ドリンクが常備薬になっている。

戦国乱世に落ちてからもその損な役割は変わらず、気を抜けばすぐに勝手気儘に動き出すメンバーを叱っている。 それでストレスが溜まっているのか、よく一杯やりながら愚痴ついている。

神憑きとしては『地』の力を得ている。 この能力は防御性に特化しており、攻撃範囲が広いのも特徴。 岩や砂、泥まで操ることも可能で、造形もお手の物と色々便利。

武器： 地国天

黄土色と金茶色の槌で、梅本よりはるかに大きい。 柄の上部に取手があり、それを引くと槌部分が外れる仕掛け。 槌の両サイドには、土竜の堀りが入っている。

戦闘時テーマソング「Alpha Dog Fall Out Boy」。

北 修子 「こんなもんがこの値段?【冗談】あと三割下げ。 それが妥当や。」

：考研の会計を務める22歳。 あだ名は雰囲気が酷似していることから「マンボウ」。

好きな物は宝石、化石、着物、可愛い女の子と危険な香りが漂う。 医者の娘で金銭感覚がちょっとズレており、何故会計の座についたのか問題視されている。

眞子のような黒く長い髪に、死んだ魚の目と顔にあまり生氣がない。

特技は真顔でキツい暴言を吐くことと、宝石や着物の目利き。神憑きとしては『水』の能力を得ている。

また、水に関連して氷の力も備わっている。この能力は攪乱や敵の足止めに長け、最も威力を發揮するのはやはり海上・水中戦である。

武器： 凪鮫

群青と濃紺のグラデーションが入った旋根。先端には鮫の牙のようなギザギザがつけられている。また握り以外の箇所は全てざらざらとした「鮫肌」で、刃を使い物にならなくしてしまう。

戦闘時テーマソング「Super massive Black Hole Muse」により。

谷中 若菜 「悪戯は、仕掛てる間が最高だよ。ね、そう思つでしょ？」

：伊賀出身の孝研メンバーで、年齢は21歳。あだ名は高校時代からの引き継ぎで「殿下」。

好きなことは悪戯と絵を描くことで、二つともかなりレベルが高い。悪戯好きと言うだけあって、悪質なものから笑って済ませられるものまでその種類は選り取りみどり。

戦国乱世では伊賀出身というだけで忍に勧誘されているが、普通の忍ではなく自分の能力から戦忍に興味を持つ。

ワリと孝研の中ではまともそうに見えるが、あくまでもそれは「見えるだけ」であり、やっぱり彼女も少し変わり者である。神憑きとしては、『雷』の能力を得ている。

この能力は全能力中最高距離を誇り攻撃力も高いが、コントロール

が極めて難しく、日々の鍛練が必要不可欠である。

武器・電王

一見金色に見えるが、よく見ると薄く虎縞の模様がある大刀。弦がないのが特徴で、雷を張つて使う特殊な刀。

戦闘時テーマソング「God Speed」アンバーティニョ
リ。

山中 美那 「脅迫? 人聞きの悪いことを……私はお願いしているんですよ。」

：いつでも穏やか、丁寧な口調で喋る、一見大人しい雰囲気の持ち主。あだ名はシンプルかつわかりやすい「ミナちゃん」。

しかし時々ダークでブラックな空気を漂わせ、目が笑っていない笑顔で硫酸並の毒を吐くことも。

怒らせると一番怖いのはこの人じゃないかと専らの噂である。好きなものは三国志で、この事を語り出すと止まらない。

戦国乱世では、豊富な歴史の知識を生かした脅迫が得意分野。神憑きとしては『風』の能力を得ている。

全能力中最も安定した燃費を誇り、空中戦、偵察なども得意。特に『炎』との相性がよく、燃費の悪い『炎』のサポートが向いている。

防御力がやや心許ない為、攻撃を見切つて避ける力が必要。

武器・舞風

萌木色と銀色の扇。大きさは両手を広げた程で、広げれば斬る、または盾に、置めば殴ると三つの使い方がある。ちなみに、表には燕の絵が描かれている。

戦闘時テーマソング「Unbreakable Firefly」
より。

木下 千尋 「オレは大食いじゃないぞ。食べるのが好きな小食人間だ！」

：メンバー中一番小柄だが、口の悪さでは北と張り合える。あだ名は単純に「チロ」。

主に銃器・火器・刃物を愛する危険人物で、食べる事が大好き。食べ物が原動力と直結しており、執着力はもはや異常。

あれこれ考えるのが嫌いで、単純な性格をしており、面白ければそれでヨシという快樂主義者。芋虫・毛虫以外の虫に耐性があり、よく変な虫を捕まえてきては他人を脅かしたりしている。

神憑きとしては『闇』の能力を得ている。

基本的には周囲の影を様々な形に変えて攻撃するが、夜になれば闇そのものを操ることが可能。身を隠すのが便利な能力の為、伏兵や暗殺などに向いている。

武器：影蝶蛹

木下の身長程の長さの黒い棒。よくしなり、強度もあるので打撃力は高い。中程にうねる百足の螺旋細工があり、上下の先端には銀色の装飾がつけられている。

戦闘時テーマソング「A Fact Of Life」Fact
より。

用語について

神憑き：特殊能力者の呼び名。能力は炎、水、風、土、雷、闇、光の七つある。この能力は「資格のある者」しか宿ることがない。神憑きには三つの位があり、「率いる資格のある者」は『将位』と呼ばれ、最も強い能力を持つ。一国には必ず一人『将位』があり、俗に言う殿様がそうである。

次に『官位』と呼ばれる位は、「将を護り、支える資格のある者」、つまり部下の軍師や武将が当てはまる。最後に『兵位』、これは「二つの位の手足となる者」がそう呼ばれる。これは兵卒に多く、神憑きの中でも最も下位の存在で、一般の人間でも正しい訓練次第で能力を開花させることもある。

神器：神憑きが仕様する特殊な武器の名称。不思議な鳥居、「妖怪居」の向こうに存在する妖怪の世界にて、職人妖怪と呼ばれる妖怪達によって作られる。その作り方は門外不出、どのようにして作られているのかは誰にも解らない。解っているのは、制作時に神憑きの血液を必要とすることぐらいである。神憑きにとつて神器はなくてはならないもので、これを壊されると精神崩壊を起こす程である。それは位が高くなればなるほど破壊されたときのダメージが大きく、将位となればそのまま死に至ることもある。しかし兵位だとそこまで神器は重要ではなく、普通の武器で戦う。戦では相手の神器を破壊することが敵将を「討ち取った」ことになる。

戦のシステム：基本は簡単に言えば神器の壊し合いである。ただし位の高いものは低いものになるべく手を出さないのがルール。だが例外もあり、将位VS官位となると話は別になつてくるが、大抵は同じ位の者同士が一対一で戦う。

六武衆：主人公達の通り名。桶狭間での活躍の後、爆発的に広まる。その姿は悪鬼羅刹の如く、根の國より出でし化物のようだと言われるが、これは単なる誇張で本人達は極めて遺憾だと思っている。

六武衆については様々な噂がまことしやかに囁かれており、他国では実在するのか否か、とまで言われている。

メインキャラ設定と思われるもの（後書き）

設定してみました。

あんまり設定らしくないかもしない・・・・。

テーマソングは「愛敬」ほとんど洋楽だよ。

興味ある人聞いてみてね。

歌詞で選んだワケじゃないよーだつて英語嫌いだもの。

洋楽は好きだけど。

開幕（前書き）

歴史上の人物を罵つたりしますが、決して作者は彼らを馬鹿にしているわけではありません。

そして正史に基づいた作品でもなく、時代背景や出来事は完全に作者のオリジナルですので、その辺りはご容赦ください。

「なあなあ、オレこのんなの見つけたんだ。授業終わつたらセ、皆でやられーか？」

全ての始まりは、この一言だ。

ここはごく平凡な大学の、とある部室である。スポーツ部と文化部、クラブは大体この二つに分けられるが、このクラブは他とは少し変わつていた。

その名も「考古学研究会」、縮めて「考古研」である。学内でも一番、何をしているクラブなのかと尋ねられることの多いクラブだ。部員は今のところ六人で構成されている。少し紹介しておこう。

まずは部長の「小川健」。通称『張りぼて部長』。読んで字の如く、張りぼてのような部長である。ぶつちやけた話、いるだけの部長。趣味は喫煙と飲酒という、将来的に病気が心配なヤツだ。ちなみにあだ名は、何故か「王子」である。

副部長は「梅本祐樹」。部長の仕事を一身に引き受け、日々胃痛の絶えない可哀想な苦労人である。手先が器用でプラモ作りが趣味と普通そうに見えるが、日々金欠にて借金大王のレッテルを貼られている。あだ名は「梅」だが、本人は微妙に呼ばれるのを嫌っている。

そして会計の「北修子」。医者の娘にしてクラブ一の田利き。化石と宝石と和服と可愛い女の子をこよなく愛する変人である。普段はボーッとしているが、口を開けばキツイ暴言を真顔で吐きまくる。あだ名は雰囲気が酷似していることから、「マンボウ」である。

次に部員その一、「谷中若菜」。出身が伊賀といつだけ忍者疑惑が持たれている。絵や漫画を描くこと、タチの悪い悪戯を仕掛けるのが得意である。あだ名は「殿下」。

部員その二、「山中美奈」。普段は物静かだが、中国の事を語り出すと止まらない、その名も歩く中国辞典である。その柔和そうな表情とは裏腹、笑顔で黒い事を言い放ち、主に小川を凹ませる隠れブラックだ。あだ名はシンプルに「ミナちゃん」である。

そして最後、「木下千尋」。身長は148センチと小柄だが、態度は誰よりもでかく口の悪さも北と張り合える程だ。刃物や銃器をこよなく愛する危険人物にして、勝手気までイヤだと言つたことは絶対やらない。北と馬が合い、よく一人で男性陣を貶^{けな}したり北をボコつたりしている。あだ名は「チロ」である。

以上、男性二人と女性四人、これで全員だ。なかなかのキャラの濃さに、毎年新入部員確保が大変になつてきているのがたまに傷なのだが・・・とりあえず話を戻そう。
ゲーム好きな木下の携帯には、「国盗り戦国乱世」という名のオンラインゲームの広告が映っている。

「また、チロの好きそうなヤツだな。」

梅本が苦笑いしながら携帯の画面をのぞき込んだ。

「最近戦国時代が有名ですね。私もそれ、やってみようかと思つていたんです。」

「さっすが!!ナちゃん!目の付け所がオレと一緒にだな!」

「……」つ微笑む山中に、嬉しげに木下がまとわつづいた。

「…………俺はやうりんぢ。めんじくせー。」

窓辺で煙草を吸っていた小川がボソッと囁ひのを聞きつけ、即座に宝石カタログ眺めていた北につっこまれた。

「面倒もなにも、どーせ暇なんやる。彼女もおらん、することと言つたら家で一人酒が関の山やないか。」

「何でお前にそんなこと言われなくちゃいけないんだ！？」

相変わらずズッパリと痛いところを突かれ、小川が北に噛み付く。

「やがましいわ。」田酔いはそこで一人寂しくヤーでも吸つてろ。

「男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲くつて言つよね。」

遠慮もへつたくれもない北と谷中の口撃にて返す言葉もなく凹む小川。

「まあまあ、おにマンボウ、あんま言つてやるなつて。けつこう気にしてるんだからよ。」

見かねた梅本が割つて入り、北を押さえる。

「じゃあ、学校終わつたらみんなでやうりうか。」

「つよーかい。」

谷中がそう言い、皆の返事が部屋に響いた。

そして、帰宅した六人は早速それぞれのパソコンの前に陣取る。立ち上げを済ませるとオンラインゲームのTOPページが画面に映り、六人はスタートボタンをクリックした。プレイ人数を入力した後、アバターを作るところから始まりだ。チャット機能を使用して、六人はそれぞれ話し合う。

木下：【アバターだつてさ。やっぱまずはこれだよな。】

北：【なんかめんどいな・・・。あたしは適当でいいや。】

性別、髪型、顔のパーツ、衣装。自分の好きなようにアバターを設定していく。

小川：【属性？何だ、こんなのもつけられるのか。】

梅本：【マンボウは当然水属性だろ？なんせマンボウだし。】

属性は炎、水、土、雷、風、闇、光の七つ。

山中：【まあ、一般的な属性ですよね。私は・・・風にしますね。】

谷中：【じゃあ、僕は雷！チロちゃんは？】

木下：【オレは闇だ！個人的に！】

北：【梅の言いなりつてのが気に入らんけど、やっぱり水やな。】

小川：【なら、炎。】

梅本：【なんだよ、俺は土かよ。地味だな・・・。】

それぞれアバターを作り終えると、モード設定の場面に進む。

山中：【モード設定つて・・・史実モードとフリー モードとあり

ますね。】

梅本：【あれだら、ストーリーモードと自由戦闘。】

木下：【はーはー、オレは自由戦闘がいいー。】

北：【そこはストーリーモードから始めるべきやろ、普通。】

谷中：【マンボウから普通なんて言葉が聞けるなんてねー。】

小川：【どっちでもいいだら・・・早くしろよ。】

結局フリーモードを選び、ようやくプロローグのマーティーが流れ出す。

「これは群雄割拠する戦国の世。君達はチームを組み、天下統一を目指す。誰かの傘下につくもよし、他国を攻めて戦国武将を従えるもよし。戦い方は君達次第。君達に付与された強力な能力を駆使して、自由なやり方で天下を手にしてほしい。」

木下：【ふーん、ナルホド。まあいつちょっとやってみますか。】

北：【あたし、つまらんかつたらすぐやめるで。】

谷中：【まあまあ、そんなつれないこと言わないで。】

谷中：【私は、結構期待してるんですけど・・・。】

梅本：【ミナちゃん、好きだもんなあ。】

小川：【さつさとしろよ。】

マーティーが終わり、日本地図が画面に現れる。戦闘フィールドを選択せよ、といふことらしい。

小川：【どーを攻める?】

北：【まだ始めたばっかりやから、あんまり難易度の高い場所は無理やな。】

山中：【じゃあ、桶狭間なんてどうですか？難易度も低いですし。】

梅本：【織田につくか今川につくか選ぶんだな。どーする?】

谷中：【そりゃー当然、織田でしょ？今川はやられ役ー】

木下：【オレも同意見。今川でも飛ばしに行こうぜ。】

木下、谷中に続き、他の四人も満場一致で撃破する武将は今川義元に決定した。

木下：【そんじゃー皆さん、プレイ開始といきますかー】

この一言の後、六人はスタートボタンを押した。

～一時間後経過～

木下：【いやー、雑魚と言えど吹っ飛ばすのは気分爽快ですねー。】

北：【レベルはそこそこあがつとるな。そもそもボス戦行つてもいいんちゃうか？】

雑魚敵をサクサクと倒しながら、相変わらずチャット欄で会話を交わす六人。画面内では激しい雨が降つており、現実世界でも天候は同じ、雨が降りしきつている。時折ピカッと光る稻光が、窓から見えた。

さて、いよいよ今川軍総大將、いまがわよしもと今川義元を倒しに行こうかと息巻いたそのとき、凄まじい雷鳴が天も裂けよとばかりに響き渡り、激しい光が窓を突き破るが如く、部屋の中までをも照らし出した。

このとき、もし幾つもの景色を見ることが叶うなら・・・・異常な光景を視界に移すことができただろう。彼ら六人の住まう家のすぐ側に、同時に落ちる六つの巨大な稻妻の姿を。

間近に落ちた雷に驚き、停電よりも早く反射的に目を閉じた六人。

不意に、身体が圧倒的な力によって引き込まれるのを感じた。降ろした瞼を開けるより尚早く、前のめりに倒れ込む。見開いた目に映るのは黒一色。身体が感じるのは落下、それも何かに引っ張られるような急降下だ。ツバメやハヤブサなればいざ知らず、スカイダイビングなんぞたしなまぬ一般人にこの感覚はきつすぎた。夢か現か幻覚か、最早そんなことはどうでもいい。彼らができるのはただ一つ・・・意識のブラックアウトのみ。

とある嵐の日に、六人の大学生が忽然と姿を消した。落雷が消え去ったあと、残るのは煌々と光るパソコンの画面だけ。世にも奇妙な異界奇譚、開幕ベルがどこかで鳴り響く。

開幕（後書き）

とつとう投稿してしまいました・・・。
小説の投稿は初めてで読みづらいうこともありますが、どうかぬる
い目で見てやってください。
楽しんで頂ければ幸いです。

「の嘶 「異世界は存在する、と言った奴にノーベル賞をやれ。」

冷たい水が降つてくる。これは多分雨だらう。といふが、何故全身がびしょ濡れなんだ。

「起きろー おー、起きるつー！」

聞き慣れた声が耳に突き刺さつて、彼らは目を開く。

「森・・・・も、森？」

開口一番、真っ先に視界に広がる景色を、木下は口にした。

「森やなあ。ト 口とか。」

「どこかズレた感想を言いながら、むくつと身を起しそのは北だ。」

「いや、関係ないだろ。ってか少しはパニクれお前ひ。」「がくつと脱力したように肩を落とし、梅本は頬を伝う滴を拭う。

「うわー・・・・びしょびしょ。僕濡れるの嫌いなんだよねー。」

心底嫌そうに、谷中は地面から立ち上がりてシャツの裾を絞つた。

「二二・・・・どこなんでしょうか?どうして私たち、こんなところに揃つているんでしょう?」

唯一マトモな疑問を口にした山中は、慌てて木の影に入り込む。

「・・・・煙草が・・・・使い物にならない・・・・」

水を吸つてグニヤグニヤになつた箱を、悲壮感漂わせながら小川は呆然と眺めた。

「・・・・揃いも揃つて、勝手気ままな連中である。」

辺りは緑一色だが、森といつよりは林と言つべきか。激しい雨は止むことを知らず、延々と冷たい滴を落とし続けていた。

「ホントに何なんだ？ オレら、みんな家に居た筈だよな？ 何で、こんなところに？」

雨を避けて、六人は一つの木の根本に身を寄せせる。木下の疑問に、他は首を傾げることしかできない。

「私は雷が落ちて……びっくりして目を開いたら、何かに引き込まれて真っ暗な中を落ちるのを感じました。そして、目が覚めたらしいのに。」

山中の説明に、全員が息を呑んだ。

「俺も、同じだ。ミナちゃんの言つた通りの目にあった。」

梅本が困惑したような顔つきで言い、残りの五人も頷く。

「どうしたことや？ 何で全員、全く同じ目にあつとる？」

「解らないよ……。そんなことより、この場所がどこなのかを先にはっきりさせないと。」

谷中はキヨロキヨロと辺りを見回し、どうにかして手がかりを得ようと試みる。だがどこを見ても、記憶に引っかかるモノは見つからない。

「途方に暮れるつてのはこのことだな。」

小川は天を仰ぎ、あんうん暗雲たる空を眺めた。

とりあえず、雨が一段落つくまでここにこもることで、六人はやれやれと木の根本に座り込む。

しかし一息つく暇など、彼らには『えられなかつた。運命とは厳

しいものである。

にわかに物音・・・恐らく足音であろう音が聞こえ、誰か来たのかと六人はパッと顔をあげる。

「誰か来たみたいやな。道でも聞くか?」

「はは・・・・言葉通じなかつたらどうする?」

「そりやー即死だな。オレ、英語無理だし。」

そんな冗談を言い合しながら、走ってきた数人の男達の姿を見て六人は固まつた。

「き・・・・貴様ら何者だ!?」

「今川の手の者か!?!」

歴史を知る者でなくとも、現れた男達の姿形を示す言葉はすぐに浮かぶだろう。胸から腹を防御する、黒く丸みを帯びたシンプルな鎧。頭に被つているのは、三角の形をした黒い笠状の質素な兜。足にも同色の脚絆きやはんを巻き、手には長く鋭い槍を握りしめている。

「え・・・・?何コレ、大河ドラマの撮影?」

目を丸くして木下は男達を凝視する。

「んなワケあるか。今の大河ドラマってこんな時代設定じゃないだろ。」

梅本が溜息をつきながら言い、男達に近づこうとする。

「撮影中すんません。俺ら、ちょっと迷っちゃつたみたいなんですよ。ここどこだか・・・・「おあつ!-?」

いきなり男の手から繰り出された突きを間一髪でかわして、梅本は仰向けにひっくり返った。

「何を意味のわからんことを！…今川の奴め、このような餓鬼共で俺達を馬鹿にしているのか！？」

男達はギリッと歯を軋ませ、六人を睨みつける。

「ちよ、いきなり何するんですか！？」俺達はただ、道を…」側にいた小川は梅本を助け起こすと、男達に食つてかかる。

「やかましい！…今川に組する輩が、今ここで屍にしてやるわ！」

男達は槍を構えると、六人の言葉もろくに聞かずに襲いかかってきた。ザクッ、と地面に突き刺さる穂先に、これはヤバイと六人の顔が青ざめる。

「こーいうときって…・・・どーするんやつたつけなあ殿下？」

冷や汗を流しつつ、引き攣つた笑みを浮かべる北に、同じく似たような表情の谷中が叫び声で答えた。

「逃げるが勝ちって、ことわざこもあるよね！」

そう言つや否や、六人は回れ右して脱兎の如く逃げ出した。

「逃げたぞ！追えつ、追つて殺せつ！…！」

男達の怒鳴り声をバックに、血相を変えて必死で逃げる。

「これつ・・・どうこつことでしょつ・・・！？」

「わっかんねえ！…ってかあの槍モノホン！？モノホンなわけ！」

？

困惑の極み、といつのような山中に、若干キレ気味な表情で喚く木下。

「どこまで逃げるんや！？」

「知るか！あのイカれた奴らが諦めるまでだよ！！」

走れメロス、いや走れ考研。止まれば確實にぶつた斬られるのは明白だ。カーブをきり、直線を突つ切り、泥を跳ね飛ばし、落ちている枝やその他諸々（もろもろ）を飛び越える。

だが思いつきり年中インドア派、体育何それおいしいの？な連中が、長時間走るという行為を続けることは勿論出来ない。

「あつ・・・・・！」

「ミナちゃんっ！－！」

ついに、山中が石に足をとられ転んでしまつ。悲鳴に近い声で木下は名を呼び、手を伸ばして引き起こそうとするが。

「！」今までだ、死ねつ、今川軍！－－

無情に振り下ろされる槍の穂先。終わりだ、と誰もがそう思つたとき、それは輝く金色の光と凄まじい衝撃波を以て彼らを救つた。

槍を振り下ろした男は勿論、他の男達もまとめて、突然フツ飛んできたナニかに弾き飛ばされ、それはそれは美しい放物線を描いて地面に落下する。

ドシャッ、という音に、呆然とした顔でその場にへたりこむ六人。何が起きたのか。とりあえず今、自分達は生きている。斬られてもいない。当然、血も出でていない。

「・・・・・・・な、に？今の・・・・・」

「と、飛んできた・・・・・よな？」

やつと口から出てきた声は酷く掠れていて、風邪もひいていないのに喉が痛んだ。

「アレ・・・・・・・僕が投げた・・・・・石?」

死んだような田で啞ぐ谷中は、他の視線が集中する。

「石・・・・・? 何で・・・?」

梅本の問いかけに、のろのろと谷中が先ほどまでの状況を説明した。彼女曰く、山中を助けようと近くにあつた石を拾つて、思い切り投げつけただけだ、ということだ。

「投げる瞬間・・・・・いきなり、腕が・・・・・バチバチッて。」

「・・・・・で、ああなつたのか・・・?」

小川の言葉に、コクンと谷中は頷いた。

「雷ですね・・・? アレは。」

ふと、山中が何かを思いついたような表情をして、既に確認をとる。

「多分・・・・セウだら。オレ、ちょっとだけ痺れたし。ほんのか
一 るぐだけど。」

間近でアレを見た木下が、うんうんと頷きながら言った。

「雷・・・・雷・・・・・まさか。」

田を驚きに見開き、おもむろに山中は手を前に突き出す。そしてそのまま、田を閉じると間に皺を寄せて、何やら念じ始めた。

「な、何やつてんの・・・?」

「ちよつと黙つててください。」

「す、すんません・・・。」

ひしゃつと言われ、梅本は口を開かずして引っ込んだ。

山中はジッと集中して、一心に何かを念じている。六人は黙つたまま、訝しい表情で山中を見守つていた。

一分、二分、三分・・・やがて、ヒュウヒュウと風の音が聞こえてきた。しかしそんな音を伴う風は吹いていない。どこから聞こえてくるのか？

「つべー～!! タカちゃん、手つ、手が・・・～？」驚きの声をあげ、木下が山中の掌を指さす。

なんと、そこには小さなつむじ風がぐるぐると回ってゐるではないか。

谷中は目を丸くして、掌に現れたつむじ風を眺めた。

「……………おまえ、何でこんなやうな顔なんだよ。」

山中が一息つき、突き出していた手を下ろすと、つむじ風はふわ
と消えた。

「うう」とつて、何かわかつたんか？」

北の問いかけに、山中はつっこり微笑んでさす答える。

「マンボウさんは、水ですよ。」

ハモる間の抜けた声に、山中はお構いなしに不思議な答えを告げていく。

「梅さんは土、王子さんは炎、チロさんは影ですね。」

「待つた待つた！何のことだ一体。」

小川が困ったような表情で山中に詰め寄る。

「だから、私達が使える力です。殿下さんはさわを見た通り雷。私は風でした。」

山中はぐるつと六人の顔を見回し、更に続ける。

「私達の頭がおかしくなつてなければ、完全にこれは現実です。多分、皆も出来る筈ですよ。」

それぞれ顔を見合せ、恐る恐る山中と同じように手を突き出し、力を込める。

程なくすると、

「で、出たつ！」

「こりや、凄いな……」

小川は指先から炎を、梅本は大地を壁のよつに立ち上がらせ、北は水の球を掌てのひらに現すことが出来た。

「おい、チロ！何でやらないんだ？何か凄いぞ、これ！」
興奮した面持ちで木下に呼びかける梅本に、木下は眉を寄せて言った。

「オレが選んだの、影なんだぞ。影ないだろ、今。」「
どんよりとした空をつまらなそつに見上げる木下。

「何言つてんだ。影ならあるだろ。」
そう言いながら小川は地面を指差す。

「曇り空つてのは、でつかい影じゃないのか？」

「…………あ、そつか。」

成程、と木下は納得して、掌を下に向けて力を込める。すると、ザザザツと黒い影が持ち上がりその手にまとわりつく。そして影は

うねうねと蠢き、鋭い爪を持つた形に姿を変える。

「…うつわー、悪そうな能力だなー。」

「うるせー梅干つ！…カツコいいじゃねーかよつ…！」

「梅干つて言つな…！」

ジト目で言う梅本に、木下は心外だとばかりに歯みつく。

「まあまあ、梅干だか一夜干しだかはどーでもいいって。」
ケラケラと谷中は笑うが、次には表情を一変させて真面目な顔になる。

「これ、僕達がやつてたゲームのアバターの設定…だよね？」
それに、皆は深く頷いた。

「ここ、そのゲームの世界…じゃないかな。」

何と奇想天外な言葉だろうか。それが真実だとすれば、何と数奇な運命だろうか。

「つーことは、あのスゲエ落雷が引き金つてことか？」
低い声で、木下は唸るように言った。

「夢やつたらええけど…現実やな、これは。」

乾いた笑いを浮かべ、疲れたように北は溜め息をついた。

「…これは。」

愕然とする彼等そつちのけで、山中は一人、先程フツ飛ばした男達を分析している。

その呟きに、どうしたと集まる五人。

「…おい、この家紋つて。」

固まる梅本の言葉を引き継ぎ、小川が答える。男達が身につけて
いる、有名すぎる家紋。その苛烈すぎる性格で恐れられ、戦国一と
謳われた騎馬隊を易々と破つた男。その異名は、『第六天魔王』。

「織田……信玄？」

見違うわけのない、戦国時代の御三家。

「じゃあ、この場所って……あのステージか？お、桶狭間！？」
木下は叫び、再びぐたりと座り込む。

「僕達、今川軍だと思われてたんだ……。」

谷中は恐らく足軽であろう、男達に視線を向けた。
そして、天候の変化に気付き慌てて空を見上げる。

「雨が……止んでる？」

「あ、ほんとですね。」

山中も空を見上げ、嬉しそうに叫ぶ。それと同時に、何やら下
で、どこか昔が聞こえてきた。

一の斬 「異世界は存在する、と言った奴にノーベル賞をやれ。」（後書き）

まずは第一話です。

感想なんか頂ければ凄く嬉しいです。

「の嘶 「戦場体験は初心者です、ハイ皆様!」一緒に…」

「これ、蹄鉄の音だ…！」

「隠れろ…！」

サッと血の気が引くのを感じ、急いで六人は木の影に身を潜める。息を殺してそつと様子を伺い……言葉を失つた。

雨の湿気が一瞬で消えるような、霸氣。

黒い馬に乗り、黒い甲冑と赤紫のマントをその身に纏まといった男の姿。刃物のように鋭い切れ長の目と、口元に浮かべる不敵な笑み。

殺氣や霸氣なんてものに全く無縁の、ド素人そのものである六人でも男のオーラに呑まれた。

「お、織田・・・・・信長だよね、あの人・・・・・。」

「織田瓜の家門背負つた騎馬隊のトップ張つてんだから、そうなんだろ。」

声を潜めて、六人はヒソヒソと話し合つた。

出来るなら、あんな恐ろしく禍々（まがまが）しい雰囲気を引っさげて登場した魔王様に見つかりたくないものだ。見つかったら、確実に天国の階段を一気に駆け上ること間違いないし。

固唾を飲んで通過を見守るが、そとは問屋が下ろさなかつた。道のちょうど真ん中で信長は急に手綱を引き絞り、騎馬隊は急停止した。

「しまつた…」

小川が戦慄く声で呟く。

「アレ……隠してない。」

アレ、とは谷中が倒した織田軍の足軽だ。ヒツ、といふ小さな悲鳴が喉から洩れる。同時に、信長の低い笑い声も聞こえてきた。

「そこにいるのは何者だ？」

たつた一言。たつた一睨み。しかしそれだけで六人の背筋は凍り付く。

「な、何でバレンの！？」

「知るかよ・・・・！」

ガクブルと震える身体を寄せ合つて、六人は硬直した。そこに追い打ちをかけるように、信長の声が響く。

「答えぬか。ならばそれもいいだろう。」

そう言い終わらぬうちに風を切る音聞こえ、次の瞬間一本の矢が、六人が隠れている木の幹にガツッ、と突き刺さつた。

「・・・・・・・・ツ！？！？」

恐怖にあげる筈の悲鳴もあがらず、六人はますます身を寄せ合つ。

「そこから出てこれば・・・・これ以上は何もせん。出てこぬといふなら、そうだな・・・・次は何本撃ち込んでほしい？」

一同、心中で呟く。

(あ、マジに死んだ・・・・・・。)

出て行つて見逃してもうつか、抵抗して全身ハリネズミのよつになつて惨めにくたばるか、二つに一つ。出るしかないだろう、ああそうだと、でなけりや死ぬ。

「・・・・・・い、行こう。」

「うん……。」

膝がおかしくなったんじゃないのかと思うくらい、ガクガクと震える。身体の全ては氷のように冷え切り、恐怖に戦慄している。動かぬ足を叱咤して、つまづきそうになりながらも六人は隠れていた場所から歩み出た。

「……ほお、餓鬼共か。」

炎のような目が六人を一人ずつ眺め、信長はにんまりと笑った。

「随分とけつたいな格好をしている。貴様らがアレを使い物にならなくしたのか？」

信長は谷中にやられてのびている男達を一瞥して、そう問い合わせた。

「…………あ、あの、それはですね……。」

田は口ほどに物を言つ、という言葉がこの時ばかりは心の底から憎らしい。泳ぐ田に拳動不審になる態度。

信長は図星か、と頷き、次の瞬間いきなり黒い刀身の大刀を抜き放つて六人に向ける。

「答える。貴様らは今川の人間か？」

声なく高速で首を横に振る六人に、信長は火のような問いかけを続けた。

「ならばどこの者だ？」

それに、半泣きで木下が絞り出すような声で答えた。

「どこの…………軍、にも…………屬して、ません…………た
だの、通りすがり…………。」

「戦場を通り抜けようとするつづけなど、聞いたこともないわ。」

すかさず言い返され、言葉に詰まる六人。

「やはり、いやつら怪しそぎます。始末してしまいましょう。」

家来であるう男の一人がそう言い、弓兵が一斉に弓を引き絞り、矢を向けた。終わりだ、絶対終わりだ、と六人そう思い、観念して目を閉じた。しかし、思いもよらぬ信長の言葉が弓兵に矢を降ろさせる。

「止めよ。使い物にならなくなればどうする。」

「つ、使い物・・・・?」

ぴしゃりと言つ信長に、どういふことだと閉じていた目を開けた。そこには興味深そうな目で、六人をじっと見つめる信長がいる。

「貴様らがのした彼奴等・・・・いくら弱卒といえど、我が織田軍の一部。貴様等のような餓鬼共を殺すなど、朝飯前よ。しかしアレを倒したとなると、貴様等ただの餓鬼共ではないな。ついてこい、面白いモノを拾えたわ。」

信長は目で合図を送ると、いきなり六人は馬から下りてきた兵士に腕を捕まれ、馬上に無理矢理押し上げられる。

「なつ、ええ!? 何コレつ!/?」

「待つて下さい、私達はその・・・!/?」

慌てて制止を求めるが、信長はどこ吹く風ともいつゝうな表情だ。

そして行くぞ、と一言。

「ヤダヤダヤダつ、馬はイヤアアアアアアツ!-----!-----!-----!

六人の悲鳴が後を引いて、騎馬隊は無慈悲に走り去った。

「…………う…………うおえ～…………」

「気持ち悪い…………吐く…………」

「死ぬつて…………コレ死ぬつて…………」

馬上で飛んだり跳ねたりして元気でいられる程、六人は逞しくない。文字通り死ぬほど荒々しい馬ドライブをたっぷり堪能して、車酔いならぬ馬酔いを絶好調で味わっている。

「貧弱だな。どこの世間知らずだ。」

地面上に這いつくばり、うえーと情けなくバテている六人を信長や家来達は半ば呆れたように見ている。

「さて…………間抜けな今川軍は未だ暢氣のんきに休んであるわ。おい、貴様等！今から今川軍に奇襲をかける。貴様等も手伝え。」

「…………はい？」

「同じ事は一度も言わん。貴様等が潰した部下共の代わりだ、存分に働け。」

ピタリと六人は黙り込んだ。

「そんな…………！？僕達、そんなこと出来ません！！！」

「冗談じゃない！何で俺達がそんなこと！？」

「無理ですよ！戦場で私達は足手まといです！…」

次の瞬間、口々に無理、嫌だ、という言葉が飛び交つ。

「ならば今ここで殺してやるつ。前に出る。」

血の氣の引くような声で、信長は大刀を抜く。その日は絶対零度の冷たさで、六人を貫いた。

「俺は役に立たぬ塵などいらん。さあ、好きな方を選ばせてやろ

う。俺に従つか、ここで屍と化すか。」

まさに前門の虎、後門の狼。背水の陣にて、四面楚歌の絶対絶命。こんな極論を突き出されて、目の前が暗くならない人間がどこにいるのか。

スライスされて死ぬのは御免だが、人殺しの片棒を担ぐのも御免だ。しかし悩む時間はどこにもあらず、逃げだそうにも隙すら見つからない。

「腹をくくるしか……ないみたいだ。」

呻くように小川は言い。

「まさか、命なんかかける田にあつとは……。」

梅本は歯を食いしばる。

「弓矢に……氣をつけてくださいね。」

山中は震える声で囁くよう。

「せめて、誰も殺さずにな。」

北はいつものボケた表情を消し去り。

「能力があるつてのが、せめてもの救いだね。」

谷中は手を強く握りしめ。

「勝つたら……美味しいもん、一杯食わしてもらおうぜ。」

木下は精一杯の虚勢を張つて。

六つの顔が一斉に信長を見つめて、コクリと一つ頷いた。

「話は纏まつたようだな。馬に乗れ。」

死刑宣告のように、信長はそつ命じた。

「全軍……突撃せよ……！」

応、と勇ましい声が上がり、騎馬隊は激しい蹄鉄の音と地響きをたてて、下方に見える今川軍の陣へと突っこんでいった。

「お、織田軍の奇襲だあああああつ……！」

「嘘うそ、出ででこつ……奇襲だぞつ……」

奇襲といえども、攻撃が全くないとはいえない。空を切り、何本もの矢がビュンビュンと飛んでくる。それが頬をかすめ、生きた心地がしない。

声なき絶叫をあげながら、六人は目の前の武将の背にしがみついた。動けるわけがない。振り落とされないようにするだけで精一杯だ。そこに、雷のような声で信長の激励が飛ぶ。

「どうした、何故戦わない！？ 戰わなければ死ぬぞ。貴様等は木偶の坊か？俺の部下を倒したようにやつてみせろ！－！」

あまりにも勝手な言い分に、ついに木下がぶち切れた。

「うるつせえんだよ！！ノブナガだかノザワナだか知らねえけど
つ、無茶なことばっかり言うな、この腐れ魔王っ！！！！！」

そう絶叫するやいなや、黒い影が木下の手にまとわりつき、いきなり槍のよろに伸びて今川の兵士を薙ぎ払つた。

仰天する木下に、信長は一ヤツと笑う。

「チロが死んで、今のルイちゃんは困ったのー。」

「わがんねえ！ 何かムカついたら急に・・・・・とりあえずムカつ
け！」

谷中に答える木下だが、要領を得ていない。文句を言おうとする
梅本に、北の一言が突き刺さつた。

「そーいや、」の前梅がナンパにつきあつた」と・・・・・彼女に言ったわ。」

一テメエふざけんな

その余端、大也が接

その途端、大地が壁のように立ち上がりて敵の侵攻を阻んだ。

「心の鬱憤をありつたけ出せば良いんですね。」

山中はそう咳くと全身に力を込めた。

就活なんか・・・・・大ッ嫌いです！！！！！」

珍しく大声を張り上げて誰もが思っていることを叫ぶ。

卷之三

れ
！
！
！
！

色々やることあるんでめんどいれど

「この状況でよくもまあ、そんな絶叫が放てるものである。寧ろこの世界に対する文句はどこにもないのか。

とりあえず攻撃のやり方が解った六人が次々に喚き散らすと、火の玉が、水球が、雷が、つむじ風が、一斉にわき上がり今川の兵士達を攻撃する。しかし威力や大きさは小さく、あまり効果はないようと思えた。

「…………無駄だ……」

「なんと、あのよいうな子供がか？」

やねやねと、敵味方の区別なくあちこちで驚きの声があがる。

「カミツキって何……？」

「 知るか、ボケ。」

「人間じゃないね。」
僕達。

「し、死なずにすみそつ・・・」

常軌を逸脱した出来事に、何度もわからぬ茫然自失状態に陥る。

ところが、いきなり高々と笑い出した信長の声に、我に還った。

「面白い！やはり貴様等、普通ではなかつたか。神憑きたつとは本当に良い拾い物をしたものよ！！」

そうこう言つてゐる間に、今川軍の本陣深くまで侵入する織田軍。もう本陣は完全に包囲されていた。ようやく止まつた騎馬隊に、深々と安堵の息をつく六人。

「そ、そ、それ以上まろに近づくでない！…」、この下賤の輩めつ！！

引き攣つた情けない声が聞こえて、馬から下りた六人はそちらに顔をむける。

「うわ・・・・・超・まろだよアレ。」

「生で見ると・・・どうも氣色悪いな。」

「ダッセエ。公家つて、オレ嫌いだな。」

「幽靈みたいですよね。あ、それともオカメでしょうか。」

「あれぞ、変態！やな。」

「何か、桶みみたいな体型だね。かつこ悪いかも。」

「ふむ・・・・・やはりそう思つか。俺も同意見だ。」

好き勝手な感想を、信長も含み口々に言い合つ。今川義元の姿形は、イメージ通りの公家スタイルだ。白塗りの顔に、額の上部につけられた眉墨、やたら煌びやかな衣装。ホントにコイツ戦う気があるのかと問いただしたくなるような格好だ。

「い、いきなりまろを見て、言つてどがそれか！？ 無礼すぎるでおじやるぞ！？」

初対面なのに思いつきり失礼な感想を述べられ、もつともなことを義元は叫んだ。

「やはり公家とやらは脆弱すぎていかんな。貴様等が調子に乗るにはこの乱世・・・・少々厳しいぞ。」

信長の静かだが冷たい声に、義元は冷や汗を流しながらも豪奢な弓を構えた。

「そちのようなうつけに・・・・まろは屈せぬぞ！――！」

豪、と風を纏つた矢が放たれ信長に飛ぶが、彼は冷たく一笑して抜き払った大刀を一振りした。

途端に黒味を帯びた炎が刀身に宿り、義元の矢は炎と刃に軽く打ち落とされた。

「・・・・口ほどにもない。興も冷めたわ、公家。」

チツと舌打ちし、今度は六人に大刀を向ける。

「特別にアレとやり合わせてやるつ。ありがたく」

「おもわねーよつ――！」

またまたとんでもないことを言い出す信長に、素早く六人はつっこんだ。

「ほう、ならば死」

「すいまつせんでした！？ 全力で殺らせて頂きます！――！」

そしてあつさり玉碎する。半ば泣き顔で六人はびしつと敬礼し、織田軍から矢の嵐が来ないうちに義元の前に立ちはだかる。

「な、なんじゃそなたちは。」

「お前の敵だこんチクシヨー。」

グスン、と涙しながら木下が吐き捨てるように言った。

「…………六対一は卑怯だと憚りますが。」

「某ファイナルなファンタジーゲームでも同じこと言えるか?」

「…………そうですね。」

山中と梅本はそう言つて、やれやれと肩をすくめた。

「何を悠長に話している。餓鬼共、さつさと仕留めろ。」

いつもの凶悪さうな笑みを浮かべて、信長は顎をしゃくってみせる。

「ほんっと、いっそ清々しいまでの魔王っぷりやな。」

ああ、忌々しいと北は唸る。

じりじりと義元を包囲した輪は狭まっていく。

「お…………おのれ…………」このまろが…………このまろが、
斯様な蛮族に討ち取られてたまるかあああああつ…………！」

「いきなりキレたよこいつ！？」

耳障りな声で絶叫した義元、そして突如現れた幾つもの竜巻。そこでかさに、ざざつと六人の顔からは血の気が引く。

「ヤバイよな、ヤバイだら、ヤバイに決まってる……」

標的は当然、この六人。

「また逃げんのかよおおおおおお！？！？」

体力と相談して決めたいが、そういうわけにもいかない。助けを求めるように、信長とその他大勢に視線を送るが。

「…………打つ手なし、といつときだけ助けてやる。貴様等も手出しだすな。」

「仰せのままに！？」

鮮やかにスルーされた。

「この人でなし！ バカ！ 極悪人！ いぶし銀！」

「最後のは個人的に褒めてるだろ！？」

竜巻に追いかけ回されながら、ギャーギャーと喚く六人。しかし誰も助けに来ない。というより、皆興味深そうに彼らを眺めている。

「竜巻の作り方は！？」

「三分じゃ一できんわな。」

「まずはコレをなんとかするのが先だらうが！？」

爆発するような音、木霊するのは阿鼻叫喚。

試しに谷中が雷を放つてみるが、威力が弱く巻き込まれてしまう。さすがにゲームと現実は凄まじく異なり、荒れ狂う竜巻に為す術もなく倒れてしまうのだろうか。

あたふたと駆けずりまわる六人を、冷静に観察する信長。それに家来の一人が声をかける。

「よろしいんツスか？」

「彼奴等は普通の神憑きとは違う・・・・・。そつは思わんか、またさ又左？」

逆立つた髪は、磨き上げた鋼の色。浅黒い肌をしたその身体は、信長に負けじとがつしりしている。大きな手が握るのは、これまた持ち主にふさわしい厳つい槍。

信長の隣に立つた『槍の又左』こと前田 利家は微かに頷いた。

「そりや、確かに妙な雰囲気は感じますがねえ・・・・見たトコ、どこにでもいそうな餓鬼じゃないツスか。あれじや、神憑きでもいつまでもつか。」

胡散臭げな目つきで、利家は義元とやり合つ六人を眺めた。それに信長は愉快そうに笑うと利家に言い放つ。

「たわけ。だから貴様はいつまでも俺に名を呼ばれんのだ。」

「すんませんねえ、いつまでも『又左』で。」

片や期待の眼差しを、片や冷めた眼差しを送りつつ、二人は六人の戦いを観戦し続けた。

「の斬 「戦場体験は初心者です、ハイ皆様」一緒に。（後書き）

やつと第一話出来ました・・・。
疲れました・・・。

「の瞬 「能ある鷹の爪は、無理矢理手をあつ出せ。」

魔王とその家来が彼等の戦いをのんびり観戦しているとは露知らず、命の瀬戸際に立たされている六人。

「私…疲れて、きました……」

「俺…もー駄目だ…」

小柄な見た目通り、真っ先に電池が切れかかってぐる木下と山中。

「へたばると……死ぬぞ。」

「そーいう、お前こそ……！」

よひめく小川の腕を掴んで支える梅本。

「こりや、ちょっとマズイわ……つー？」

「マンボウ！？」

足を滑らせ、バランスを崩した北が転びかける。

その拍子に、北の着ていたジャンパーから飛び出る何か。

「あああー！？あたしの携帯つ！？」

途端、北の絶叫が響き渡る。

「バツカ、んなもんほつとけ！！」

「アホ！みすみすあたしのドラ ハデータ捨てられるかあ！？」

小川の叫びに同じく絶叫で答え、北は落ちた携帯に手を伸ばす。寸でのところで携帯を掴み捕り、いそいそと服の裾で拭い取った。

そのとき、指先が当たったのか携帯がパカッと開く。

「画面を覗きこんだ北は、思わず目が点になる。

「何やコレ…！？」

そこには、正に棚からぼた餅と言える情報が映っていた。

『プレイヤー・北 修子

使用可能技：水流弾、雨喚び

友軍

1：谷中 若菜

使用可能技：電磁砲、雷撃

2：木下 千尋

使用可能技：影爪、影盾

3：梅本 祐樹

使用可能技：地壁、岩石落

4：山中 美奈

使用可能技：旋風、風喚び

5：小川 健

使用可能技：発火弾、火炎之鞭

なんと、自分達の情報である。何故こんなことが携帯に映っているのだろう。

「皆！携帯持ってるかあ！？」

これは伝えなければ、と北は巻から逃げまくる仲間達に呼び掛けた。

「何なんだよお前こんな時に！？」

「マンボウのクセにホイミとか唱えるボケ！？」

「後でテーマの携帯逆バカするぞコラア！！」

……完全に逆ギレしている。

「いや、あたしケアルの方が好きやから。」

「うつせえ黙れマンボウ！！！」

非常時にもボケとツツ「//」を忘れない、それが考研。

「つて、ちやうわ。お前ら携帯持つてるか？」

いきなりの質問に、荒れ狂う風をかいぐる彼等は困惑する。

「そんなもん、見てる暇なんかねえだろ！？」

風の音に負けじと、木下は怒鳴った。

「ええから見てみ！！使えるで、これは。」

珍しく強い調子で言つ北に、皆は渋々とポケットに手を伸ばし、携帯を掴み出す。

それを開き、ハツと顔付きを変える。

「使用可能な技つて……え、ポ モン？」

「あのな、わかったとこりで」

「水流弾ツ！！！」

梅本と谷中の文句を遮り、北の叫びが響いて、バスケットボール程の水球が爆音をたてて竜巻に突っ込んだ。

水球が炸裂すると、その威力絶大、竜巻が弾けるようにして消える。

「マジで……？」

圧倒的な威力で竜巻を捩じ伏せた北に、愕然とする今川と仲間達。

「…気付きたわ。」

「スゲエ……何スカ、アレ。」

北の放つた水球の威力に、にんまりと笑う信長。

利家は今までの冷めた目から一変、食い入るような視線になる。

「何か、名前呼んだらやつとまともに出たわ。」

「あはは～、と北は暢気に笑つてみせる。

「名前……名前、か！」

何かを思い付いたように、木下の目がキラッと光る。そして深く息を吸い込むと氣合い一発、腹の底から声を出した。

「かあげづめえええっ！――！」

その呼び声に呼応して木下の足元が波打ち、グウッと黒い影が身を起こした。

そして影は木下の両手にまとわりつき、龍の手のように姿を形作る。

「伸ばしてつー。」

威勢のいい指示通り、両手の影が竜巻に向かつて飴のよつに伸びる。

「ズバッヒー引き裂く！」

言葉通り、竜巻は鋭く変化した影の刃に引き裂かれて消えていく。

「やつた！やつぱり、名前が鍵だぜこれ！」

木下は飛び上がって喜ぶ。

「説明しろよ、意味がわからん！』

苛々と小川は説明を求めた。

「名前ってのはさ、存在を固定するための呪なんだ。今までのオレ達だと、感情の高ぶりだけで攻撃が出ただろ？それだと本当の威力は發揮されなかつたよな。」

木下はキツ、と義元を睨み付けた。

「ふさわしい名前を与えて初めて、オレ達の力は固定されるんだ。名前は凄く大事なモンだつて、陰陽師でいってた氣がする……」

「結局情報源そっちかよ！？」

しかしその話は否定できない。現に木下の言つ通り、実証されたのだから。

「ま、とつあえず反撃出来るつてことだよね？」
逃げ回る足を止めて、六人は呼吸を整える。

ガラツと雰囲気の変わった彼等を、義元は青ざめた顔で見詰めた。試合開始のゴングは、これから初めて鳴るのだ。

今までよくも好き勝手やつてくれたな、とでも言いたげに、邪悪な笑みを浮かべてにじりよつていく。

「ひい……か、風切り羽根ツ！！」

豪奢な『から放たれた矢が、六つに分かれて目標に唸りをあげて飛ぶ。

「地壁、×6！！」

梅本がダン、と片足で地面を踏み鳴らすと、六人それぞれの前に大地から壁が立ち上がる。

まともに喰らえば切り傷だけではすまない攻撃だが、その壁は見事に矢を防ぎ、尚且ビクともしていない。

「おお、脆くなくなつた……！」

そして感心する梅本。

「せーのっ、雷撃ツ！！」

続く第二波、地壁を貫き、バリバリと雷が今川に向かつて牙を剥く。

「！」のよくなもの…！消し飛ばすおじや！」

今までの非力な攻撃とは違つ、ヒヤッとしたのだろう、義元の顔付きが変わる。

ギュルギュルと風が圧縮され、襲いくる雷へ砲弾の如く発射した。雷と風の塊がぶち当たり、互いに弾けて強風が吹き荒れる。

「集まつて…旋風です！」

あまりの強さに飛ばされそうになりながらも、山中の言葉に反応して強風が集まつていく。

総勢十個のつむじ風が彼女の回りを飛び交い、更に小川が加勢する。

「発火弾…。」

炎の玉が風と混ざり合い、紅のつむじ風と変化する。高速で回る紅い風、一声放てば、全てのつむじ風は一気に義元を攻撃するだろう。

しかし公家だらうと何だらうと、総大将を名乗るからにはみすみす敗北するわけにはいかない。

「させぬおじや…！」

つがえた矢に、竜巻が蛇のように絡み付いた。

「撃たせるか今川おじや元…！」

「はよ終わらせたいねん、邪魔すんなや…！」

させるかとばかりに木下の影が弓を押さえ付け、北の水流が義元の顔めがけてバシャバシャとかけられる。苦し紛れに放たれた竜巻が暴れるが。

「ダメだよ、危ないでしょ？」

笑顔で谷中が次々に雷撃で撃ち落とした。

「「発破ーーー！」」

動きと視界を封じられ、ジタバタする義元をぱつちりロックオンして、山中と小川が声を揃えて真っ赤なつむじ風を解き放った。

「「たーまやーーー！」」

炎と爆風がモロに直撃し、妙にか細い悲鳴をあげて、義元の姿はかき消された。

勝負あり。考研・初陣……見事な勝利である。

三の斬 「能ある鷹の爪は、無理矢理取れり出せ。」 （後書き）

桶狭間は一応一段落です。
やつぱり戦闘というものは、文章で書くと物凄く難しいですね。
誤字とか多くてすみません。

四の斬 「お話しましょ、そーしましょ。 前編なんです。」

義元をよってたかって倒すと、六人を急激な疲れが襲つた。
その余りの疲労感に、立つていることすらままならない。

「つ…かれた……」

「立つ…てらんない…」

ふらつと倒れる背中を、力強い手が支える。

「よくやつたな。」

「こんなちつちえのに、大したもんだ。」

「後は信長様に任せな。」

いつの間に近くまできていたのか、織田軍の兵士達が次々に六人を受け止め、感心したように言つ。

「まあまあだな……だが、ド素人にしては上出来といったところか。

「

ニヤリと笑いながら歩み出てきた信長に、もつ返す言葉すら出ない。

「さて、公家よ。貴様の敗けだ。」

黒焦げになつて、パツタリ倒れてる義元は、よひよひと起き上がる。

「貴様の獲物……名は『青柳』と言つたか。この織田 信長が確かに破壊した。」

義元の傍らに、焼け焦げ、砕け散つた弓が転がっていた。

「……まるの、青柳が……」

義元の震える手が、残骸となつた弓に伸び、そのままぎゅっと抱き締める。

「貴様の身柄……拘束させてもらひござる。」

信長がそう言い、サツと身を翻した。
入れ代わりに、兵士が義元の肩と腕を掴んで引き上げる。
連れられていく義元を虚ろな目で見送り、六人の意識は完全に落ちた。

「お、桶狭間……白塗り妖怪……！」
「魔王に……喰い殺される……」
「ハリネズミ……死ぬ……」

うんうんと唸る六人の顔を見ながら、利家は溜め息をつく。
あの後、引っくり返つて氣絶してしまつた彼等を抱えて、城まで帰る途中の織田軍。

だが、いつまでも氣絶されていては、正直邪魔である。
なので、彼等が起きるまで小休憩をはさむことにしたのだ。

「どうだ、起きたか？」

「寧ろこのまま死にそうなシラしてゐるッス。」

瓢箪に入った、酒だか水だかを飲みながら様子を見にきた信長に、利家は退屈そうに六人を指差す。

「……どけ、又左。俺が直々に起こしてやるつ。」

「ちよ、待つて下さいつて！－！こんなにうなされてんのに、信長様が出ていつたら今度こそ永眠しちまいますよ－？」

「貴様俺を何だと思つてる……？」

慌てて信長のマントを掴んで引き止める利家にムカついたのか、信長は眉間に皺を寄せる。

「さすがの俺でも、目を開けて最初に見るのが魔王様つてのはちよつと……」

「人相の悪さなら、貴様も俺と張り合えるだろうが。」

「信長様ほど、人間離れした強面じやない自信はあるツス。」

信長と利家が下らない話をしていると。

「うう……ん？」

間延びした呻き声がして、パカッと谷中の口が開いた。

ムクッと身を起こし、ぼうっとした顔で、信長と利家の方に口を向け、そして。

「ひやああああああつ！？！？何かいるつづう！？！？」

文字通り飛び上がって悲鳴をあげ、連鎖反応を起こしたように残る五人も跳ね起き、口々に悲鳴をあげる。

のわーだの、ひょーだの、パニックを起こす六人を、利家は必死になだめて落ち着かせようとする。

「あー、大丈夫だつて、な? いくら信長様だつて、人捕つて喰つたことはねえから、多分……多分な。」「確實にないわ……」

ゴスツと信長の拳骨が利家の頭にめり込む。

「ツテエ! ? 何するんツスかあんた! ? 人がせつかくあやしてやつてんのに! ?」「喧しいわ、この犬又左が!! 黙つておれば下らんことばかり言いおつて……!」

額に青筋を浮かべて信長が怒鳴る。

今度は信長と利家の言い争いになり、それに引き換え段々と六人は落ち着いてくる。

「あれ……誰だろ?」「犬又左つて言つてたね。」「もしかして、あの田サロでブリー・チな兄ちゃんつてぞ……」「まさか……前田 利家?」

信じられん、と六人は目を剥いた。

確かに前田 利家の幼名は犬千代、そして槍の又左と呼ばれている。

「率直な感想言つていいかな?」「……なんならハモるか?」「おーけー。」「

それぞれ顔を見合させて一喝。

「 「 「 チンピラヤンキー。」 「 」

ブレずにじっかりハモれた。

「誰がチンピラヤンキーだ誰があー!?」

「お、食い付いた。」

利家がグリンと振り向き、大声で吠える。

「意味がわかつたんですか?」

田を丸くして問いかけた山中に、利家はフン、と鼻で笑つた。

「何となく失礼な言葉だと思つただけだーー!」

……と、まあ「タタタは置いといて。

「え…と。改めまして、お初にお田にかかります…?」

こんな時だけ、部長だからお前が言えと背中をつつかれた小川が、恐る恐る頭を下げた。

それに続けと全員も一礼する。

「もつお前達は知ってるみたいだが、一応名乗つておく。俺は前田利家、こちちは織田信長様だ。」

さうとした自己紹介を済ませて、利家は軽く身を引いた。

「俺は、小川 健といいます。」

「梅本 佑樹です、初めまして。」

「あたしは北 修子。」

「僕は、谷中 若菜です。」

「私は山中 美那と申します。」

「オレは、木下 千尋ですっ！」

それぞれ名前を言い、もう一度頭を下げた。

「さて、まずは褒めてやろう。今川との戦い……未熟だったが、ようやくやったな。」

微かだが信長の田元が柔らかくなり、見る者が見れば満足そうな笑みが浮かんでいることに気付くだろう。

「利家さん、ここいつ偽者?」

やはりそうなるのがお約束だ。

疑うような目で、六人は信長を見る。

「貴様等……削ぎ落とされたいか?」

「「「「メンナサイ。」「」」」

どす黒いオーラを漂わせる信長に、一斉に土下座する六人。

「で……貴様等は一体何者だ？何処から来た？」

氣をとりなおして、信長は底光りする目で六人を探るよつて見た。

「お前達が氣絶してる間に、持ち物を探してみたら……こんな妙な力ラクリを見つけてな。」

利家の手から、六つの携帯がそれぞれ放り投げられる。

「こんなものはこの俺も見たことがない。それにだ……何故こいつが前田 利家だとわかった？」

信長はズズイツと身を乗り出し、彼等を見据える。利家が正式に名乗ったのはついさっき。

「俺の幼名を、お前達みたいな餓鬼が知る筈がないしな。」

利家もズズイツと身を乗り出す。

そして一人は声を揃えて脅すよつて言つた。

「「洗いざらい吐け……いいな？」」

魔王とその手先に歯向かう度胸は、多分ない。

「別の世界……か。」

「いやまた、予想の斜め上をいきますねえ……」

これまでの経緯をかいづまんで話すと、感心したように一人はほつ、と息を吐いた。

「その、何だ？」の世界は、ぱられるわあるど、つてこう世界なんだな。お前達からすると。

利家が言つ辛そうに言葉を紡ぎ、六人はそれに頷いた。

四の壁 「ね語りもしそ、セーしましそ。 前編なんです。」（後書き）

今回は話が長くなりそうなので一つに分けました。

突然ですけど、場面場面にあつた音楽を聞きながら書くと凄く進みますよね。

みんなのテーマソングとか決めたいな・・・って、気が早いですね。

五の嘶 「お話しましょ、そーしましょ。後編なんです。」

「ぱらはるわあるど…か。ならば、多少の違ひは生じむさせよ、貴様等は未来を知つてゐるといふことになるのだな。」

信長は思慮深い顔になり、何かを考え込んだ。それに、ギクッと六人の肩が跳ねる。

もしかして、自分達を利用するつもりか、と六人は身構えた。

「……案ずるな。俺は、先の知れた未来など望まん。」

しかし、彼等の思いを見透かしたように、信長は笑つてみせた。その笑みの渋さに、しばし見惚れる。

「ですがねえ、世の中うづうづ人ばっかりつてワケじやねえツス ょ。」

利家の言葉に、信長は頷いた。

「厄介な人間も多いからな。氣をつけよ、あまり言い触らすものではあるまい。」

たとえ異世界と言えど、この世界は六人の住まう世界の歴史をモデルにしたものだ。

「あの…今度は俺達から質問してもよろしいですか？」

小川が遠慮がちに口を開いた。

「いいだろ？、答えるものは全て答えてやる……又左がな。

「つて、何で俺ツスか！？」

ビシツと利家からつゝこみが入るが、信長は偉そうに腕を組んで一言。

「そんな面倒なことは、家臣である貴様がやれ。」

「聞かれたのはあんたでしきうが！――

「……給料削るぞ。」

究極の脅しに、あえなく利家は撃沈した。

「わかりましたよ、やりやいいんでしょ――

ああむづーと投げやりに言い捨てて、利家は六人に向き直った。

「で、何だよ。」

苦笑いしつつも、梅本が最初の質問をする。

「カミツキって俺達の事を呼んでましたけど、あれは何の事ですか？」

「お前達が使える能力のことだ。ちなみに信長様は炎、俺は水だぞ。」

利家はそう言つて、掌に水球を出してみせた。

「じゃあ今川は風なんやな。大概の人気が持つてんの？」

次は北が尋ねる。

「いいや、神憑きは普通の人間にはなかなか宿るモンじゃないぞ。」

よつこらせ、と利家は座り直して、更に詳しく説明を始めた。

「神憑きには『位』ってモンがあつてな。上から「将位」、「官位」、「兵位」の順位がつけられてる。「将位」は『率いる資格がある者』しかなることが出来ない位だ。「官位」は『將を護り、支える資格のある者』が、「兵位」が『一つの位の手足となる者』つて具合にな。」

懐から帳面を取り出すと、そこに小筆で位の名を書き記して見せ、六人は帳面を覗き込んだ。

「それじゃあ、大名で殿様な人は「将位」、軍師や配下の武将は「官位」ってことになるんだ。「兵位」は……文字通り、歩兵や弓兵?」

「下位だと例外でな、わりと兵の中にもいるぜ。」

谷中がへへ、と感心したように相槌を打つ。

「はいはーい、次はオレ。何で今川を討ち取らなかつたんですか?」

木下が手を上げ、不思議そうに尋ねた。

そう、疑問はそこだ。信長は義元の弓を壊しただけで、その場で首をとることはなかつた。だが利家は怪訝そうな顔で首を傾げる。

「何言つてんだ?ちゃんと討ち取つたじゃねえか。」

「……もう、首を跳ねてしまわれたんですか？」

少し悲し気な顔で山中が問う。そこには信長が口を挟んだ。

「首などとつて、何に使うのだ？」

「…………あれ？」

間。

「成程、首を塩漬けにするのか。まるで漬物だな。」

「でも後始末大変そーッスね。夏場とか。」

負けた武将は首を落とされるのだと説明された信長と利家。といふか、漬物だと夏場大変だとそういう問題ではないような気がする。

「こっちだと、神器を破壊することが「討ち取る」ってことになるとんだ。」

神器と聞き、いきなり北と木下が口を開いた。

「洗濯機、テレビ、冷蔵庫やつたな。」

「八咫鏡、草薙剣、八尺瓊勾玉だぞ！」

「どうでもいいから黙つてろ！」

すっぽーん、と梅本が一人の頭をしばき倒した。

「すみません、気にせず続けて下さい。」

頭を押されて呻く一人を白い目で見やり、小川は溜め息をつきつつ先を促した。

「む、おう。神器つてのは……まあ簡単に言えば、神憑きが使う武器だ。でもタダの武器じゃねえ。己の分身……魂の片割れみたいなモンだ。」

急に利家は表情を変え、自分の左胸に手を当てる。

「それを壊されるつてことが、どれ程デケエ事か……考えただけでも、心の臓が抉られるような感覚だぜ。しかもテメエにあう神器は、一生に一つしか得る「こと」が出来ない。」

六人にはその感覚がまだわからないが……利家の言葉は舌のよくな重みを含んでいることだけはわかつた。

「ですが、他の武器で戦うことも出来るのでは？」

山中がそう言つが、利家は首を振った。

「無理だな。自分にあつ神器じないと、どんな名器でも神憑きの力に耐えられず壊れちまうんだ。」

そこで、利家は六人を見る。

「ちなみに、お前達も神器はあるが。鍛冶屋で造つてもらえるからな。」

「近々必要になつてくるやうにな。あたしらが帰れるまで。」

ゲームのクリアが、元の世界に戻る条件ではないのかと六人は考
えている。それはすなわち、戦いに身を投じなければならぬとい
うことだ。

「武器だけではないぞ。戦い方も貴様等に叩き込んでやるつ……
フフフフ。」

とりあえずは、魔王様は協力してくれることになった……のだろう。

信長の黒い笑いに、ムンクのような顔で後退る六人。それに哀れ
な視線を送る利家。

「さて、話は一度終わりだ。……先に行つていろ。」

脱け殻のようになりながら、フラフランチと漂うように歩いてい
く六人を見送り、利家は声を潜めて信長に囁く。

「……あいつら、鍛え上げれば化けますね。」

「曲がりなりにも「将位」である今川を、神器なしで潰したのだ。
彼奴等の位は、俺にもわかりかねるわ。」

信長の目は好奇心に爛々と光っている。

その様子を見ながら、利家はあの不幸な六人に心の底からエール
を送るのであった。

(頑張れよ、餓鬼共……。)

話を終えた六人は、馬に乗り城までの道のりをガクガクと揺られている。

「あんたら見事だつたぜ、今川軍をあんなに短時間でやつつけちまつとはな！」

「神憑きが六人も加勢してくれるたあ、俺達運がいいぜ！」

親しみを込めて、口々に兵士達が話しかけてくる。

「あ、あの……ありがとうございます。」

「兄ちゃん達も力ツコよかつた！！」

「…………どうも。」

馬鹿丁寧にお辞儀したり、人懐っこく話しかけたり、居心地が悪そうにしたり……それぞのリアクションをとりながら、織田軍一行は帰路を急ぐ。

目指すは恐らく、伝説の名城『安土城』。魔王が君臨する幻の城

……その全貌は如何に？

五の斬 「お話しあしょ、そーしましょ。 後編なんです。」

（後書き）

次はいよいよ安土城です。
そろそろ他の人も出せやつになつてきました。

六の嘶 「城つて、中に入るまでが長すぎるわ疲れよな。」

いくら馬が苦手でも、ぶつ続けて乗つていれば嫌でも慣れる。だが、痛みといつものほ、いくら味わっても慣れないものだ。痛いものは痛い。

「尻が……あり得ないくらい痛い…」

「どんな感じに…？」

呻きながら言つ小川に、同じように憔悴した顔で北が聞く。

「……割れるように、って言えればいいんだろ…。」

「相変わらず面白味のない奴だなつ。」

「つまらない人つて、モテないみたいですよ。」

「関係ないよなそれ！？」

笑顔の山中と木下は、やたら「モテない」「つまらない」を強調して言い、小川は痛いのを堪えつつ、妙に元気な一人を恨めしそうに睨む。

「だいたい、何でお前等そんなに元気なんだ？」

一人はふふん、と得意気に笑つと、回りにいる兵士達を眺める。

「」の兄ちゃん達にお尻痛いつて言つたら、当て布くれたんだぞ！羨ましいだろヤーー中ーー！」

「色々気遣つて下さつて、あまり辛くないんですよ。」

多分、見た目が見た目なだけに余計気遣われるのだらう。

小っちゃいってことは、便利だね。

「僕も意外と疲れてないよ。当て布があるのとないのどじや、全然違うよね。」

「俺は上着をそれの代わりにしたぞ。」

愛想のいい谷中、要領のいい梅本も然り。

「……あたしらだけか。」

「……ハア。」

愛想の悪い小川と北は、肩を落として頃垂れた。
そんなこんなで、お城を日指して大行進すること数日。

「お、見えたぞお前等！」

前を行く利家が、励ますように前方を指差す。
その方角を見て、六人は言葉を失つた。

目の前に堂々とそびえ立つ山。

その山のほとんどは、ほぼ巨大な城郭だ。

山の周囲をぐるりと、堀だか池だかわからないが、水に取り巻かれている。

適する言葉は、『絶海の孤島』だろうか。

「キヤ、キヤッスル・オブ・安土……」

感動というより、異怖の響きが大きい。

今までは、団体だけはでかいが、無機質で表情のない灰色のビルしか目にしていなかつた。

だが、幻の城である安土城を見て、その姿に氣圧される。

「す、凄いです……」

「これが……ゲームの世界の景色だって……わかつてること……」

ぼうつとした顔で、六人は呟くように言った。

安土城を目前に、一行は馬の足を早める。

城下町だろう、賑やかしいところになると、町人や農民が歓声を上げて迎えていた。

「信長様、おかえりなさいまし！」

「無事のお戻り、嬉しくござります！」

飛び交う温かい言葉に、六人は眉をよせた。

魔王様は、意外と人気者。

「てっきり寂れた温泉街みたいな雰囲気かも、って思つてたのに。

「それか、黒い霧が漂つてて、ドクロとか転がってるとかな。」

谷中と北が、感嘆したように辺りを見回した。

「……俺は貴様等の世界ではそんなに悪人なのか。」

さつきから後でヒソヒソ聞こえてくる六人の言葉に、ほんのちょっぴり悲しい魔王様なのでした。

城下町を通り抜けて、いよいよ安土城に入城する。城の周囲を取り囲む大きな堀には、白っぽい岩の橋が掛かっていた。

「凄いな、この橋どうやって掛けたんだ？」

目を丸くして梅本は石橋を眺めた。

「地の神憑きが掛けたのさ。」

「こんな大規模なことまで出来るんですか！？

梅本と相乗りしている兵士が答え、梅本は仰天した。
見るからにがっかりしたその橋は、叩いて渡る必要などないだろう。

そこを渡り、門番が守る大門を抜けると、そこはもう安土城内部だ。

既に大勢の出迎えがいて、城下町同様かなり賑やかである。
ようやく、本来の入り口……現代でいう「玄関」の一歩手前まで
辿り着くと、一行は馬から下りる。

「これでやつと、ゆっくり出来るな。」

疲れはてた顔で北が腰を叩き、他も無言で頷く。
身体は慣れぬことを続けたせいか、今にも壊れてしまいそうだった。

何より、服を着替えたくてたまらない。

雨や汗、泥で汚れた服を着たままでは、綺麗好きな現代人にとって、え、これ何て拷問？状態だ。

下馬してへバつていると、この小汚ない雰囲気に似つかわしくない、柔らかな声がした。

「殿……よくぞ、御無事で！」

「…………誰だよあのお嬢様は。」

光沢のある白い着物がヒラリと揺れ、濡れたような黒く長い髪が輝く。

サラサラ、と衣擦れの音をさせて現れたのは、何とも美しい女性だった。

そのお上品な様子に、疲れで気の逆立つた六人は、ジロツと彼女を見る。

だが次の瞬間、信長の発した言葉に畠然とする。

「無事も何も、公家如きにやられる俺ではないわ…………今帰つたぞ、お濃。」

「の、濃……！？濃つてあの、濃姫！？通称お濃ちゃん！？」

本当の通称は『蝮の娘^{まむしのむすめ}』であるが、六人がイメージする濃姫とは随分とかけ離れた清楚な姿に、驚きを隠せない。

あわあわと間抜け面を晒している六人に気が付いたのか、濃姫は仲睦まじく話していたのを止めて静々と近寄ってきた。

「貴殿方は……殿の配下の方々ではないと思いますが……。」

急いで姿勢を正して、六人は丁寧に名乗ろうとしたが。

「ああ、俺の拾い物だ。薄汚れていて悪いな。」

「「「名乗らせろよオイ！……」「」」

信長の適当極まりない紹介にすかさずつゝじみが入った。

「まあ……それはお可哀想に……！」

どこかを勘違いした濃姫は、悲痛そうな表情をして口元を押され
た。

「殿、この方々……わたくしがお預りしても宜しくござります
か！？」

「ああ、好きにしろ。」

「即答かよ。」

そして何か思い付いたのか、両手を握り締めて信長に許可をとる。
あつさり〇〇を出した信長は、シッシッとまるで犬でも追い払う
ように手を動かした。

「少しば見れるような格好をしてこい。見苦しくてかなわん。」

「誰のせいだ誰の。この俺様何様魔王様が……。」

木下の悪態にそーだそーだと喚きあうが、着替えさせてくれると
いう魅惑的なお誘いに乗らない筈はない。

「参りましょう。うんと綺麗にして差し上げますわ。」

につつ笑つて言つ濃姫に、一つ返事で六人は後に従つた。

ところ変わつて、ここは安土城の湯浴み処。

「ちよ、待つて下さって一人で出来ますから！？」

「止めるよ！…うわつ服を剥ぐな！！」

「そ、それだけは！それだけは勘弁してくれ！！」

「ギヤアアア！…？変態変態変態イイイイ…！」

「お願いですから止めてください…！」

「あー…気持ちエエわ…。」

一名を除いて、侍女の皆さんに丸洗いされていた。
一応、男女は分けられているから安心を。
だが聞こえてくる悲鳴と絶叫は似たり寄つたりで、出でてくる頃には皆、死んだ鯖目状態だった。

「フ、フーゾクつてあんなのぜ多分…。」「

「もうお婿にいけねえ…。」

野郎一人は着物を着せられ、とりあえず解放されるが。

「いやホント化粧とかいいですから！」

「こんな苦しい帶ヤダ…！」

「あたし、この柄いややわ。」

「かんざしは遠慮したいです…。」

女性陣はまだ弄られまわされていた。
嵐のよつの時間が過ぎて、やっと彼女達が出でくる。

「あら…案外地味ですわね。」

断固化粧を拒否したのだろう、意外にナチュラルな顔だ。
着物も華美なデザインを全力で避け、なるべく無地を選んでいる。

壮絶な戦いだったのか、妙にげつそりしていた。

「……大丈夫か？」

恐る恐る尋ねた梅本に、彼女達は力なく首を振ることだけしかしなかつた。

六の斬 「城って、中に入るまでが長すぎて疲れるよね。」 (後書き)

の、濃姫しか出せなかつた・・・・。ちなみに安土城のイメージはWikpediaの安土城図を参考にしました。

こんな感じですかね、多分。

ヤニ中はヤニ中毒・・・つまり煙草中毒のことですよ(笑)

十八章 「感動の再会？おかしきよね絶対。」

着替えを済ませると、濃姫が口を開いた。

「そう言えば、殿がお呼びでしたわね。もし、この方々を殿の元へと連れして下さいな。」

「畏まりました。」

侍女にそう言い、濃姫は嫌そうな顔をする六人に微笑みかける。

「安心なさつて。殿は確かに、お顔は怖いんですけど……本当はお優しい方ですわ。ただ、厳しい面だけが目立つてしまっだけで。」

そりや嫁にはそう映るだら、とは言えず、「一つ頷くだけしかしなかった。

濃姫と別れ、再び侍女に案内されて、とある部屋に辿り着いた。
……何故か雰囲気が重々しく感じる。

「失礼致します。お連れ致しました。」

「うむ。入れ。」

信長の声がして、スッと襖が開いた。そこに広がる光景に、六人は絶句する。信長をはじめ、ズラツと並ぶのは……重臣、と呼ばれる家来だろう。

「何なのアレ！？何であんなのがワラワラ雁首揃えて座つてんの

そー？」

真っ青な顔で、谷中が梅本に声を潜め食つてかかる。

「いや、俺のせこじやないからー？殿下、落ち着けつて首がとれる
「…」

襟首を捕まれ、ガクガク揺すられながら、梅本は彼女の肩をペシ
ペシ叩いた。

「そこに座れ。」

おつかなびっくり部屋に入ると、信長が座る場所を指定する。
視線が物凄く痛い、と、思うことは六人一緒に。緊張する身体を叱
咤して、何とか腰を下ろすことが出来た。

「ほお、少しほマシな姿になつたようだな？」

ビビッている彼等の姿を楽しんでいるのか、信長はこちと笑
つている。

「お、お陰様で…。」

答える小川の声は上擦っていた。

「そ、うか……。貴様等をここに呼んだのは他でもない。貴様等を
俺の家臣共に紹介してやろうと思つてな、ここに呼んだわけだ。」

信長は、自分の前に並ぶ重臣達をぐるっと見回す。

「此奴等が、先程まで俺が話していた者達よ。此奴等はこう見え
て神憑きでな…今川を討ち取ったのは俺ではなく、此奴等だ。」

途端、大きなざわめきが波打つた。

「神憑き……！？そんな馬鹿な……！」

「このよくな子供らが……！？」

それを気にもとめず、信長は悠々と、重臣である彼等にとつてはとんでもない言葉を言い放つ。

「彼奴等をこの城で暫し飼^{しば}つこととした。」

重臣達が唖然としたのが、黙つたまま話を聞いている六人までもが、手にとるようにわかつた。次の瞬間。

「何を言つておられるのですか殿！？」

「なりませんぞ！もし聞者であればどうなさるのです……！」

否定の言葉が次々と飛び出し、部屋は騒然となるが。

「……黙れ。」

鶴の一聲、氷のような信長の声に、一斉に口を開いた。

「俺の決めたことだ。口出しそは許さぬ。」

圧倒的な眼力で彼等を黙らせ、信長は続ける。

「このやつらには、命を賭しても成さねばならぬ使命がある。その為には、神憑きとしての戦いを知り、学ばねばならない。だが、一つだけ言っておく。」

そこで信長がすつと立ち上がった。

「妙な誤解をするな。こやつらの成さねばならぬことは、決して俺の天下布武を邪魔するものではない。」

そう断言し、チラリと六の方に目を向けた。

怪しさ満点な存在である六人は、なんという紹介の仕方だ、と頭を抱えたい気持ちだった。そんな含みのある言い方で、疑いが晴れるとは到底思えない。

「俺は信長様の言つことを信じるぜ。こいつらも認めてやる。」

今まで黙つて腕を組み、話の流れを見守っていた利家がおもむろに口を開いた。嘘も方便、心強い援護射撃だ。

重臣達はしばらく、困惑と戸惑いの視線を交わしあつていたが、やがて一斉に信長に向かって平伏した。

「殿の、お言葉のままに……。」

声を揃えて言つ重臣達に、信長は満足そうに笑い、再びその場に腰を下ろした。

「まあ、少々変わつた餓鬼共だが…戯れるには申し分ないだろ。しつかりじごいてやれ。」

そういうわけで、無茶とも言える命令が利家の後押しにもよつて通り、とりあえずは不審者扱いされることはなくなつた……表向ちは。

六人は氣疲れのせいで、溜め息を吐き出しながら部屋を退出する。

何だか、疲れが倍増しなつたようだ。

「つていうか……眠つ……。」

廊下を歩く彼等の臉は、今にも落ちそつだつた。
無理もない、普通の一般人が体験するには、余りにも濃すぎる出来事を連續で味わつてきたのだ。

空腹もあるが、今はとりあえず夢も見ないで眠りたかった。

「じつべ、ひびく。」

彼等にあてがわれた部屋だらうか。襖を開けると、そこには樂園とも言える光景が広がつていた。

「おお……ふ、布団……！」

白くて柔らかそうな、六つの布団が敷かれている。
フラフラとそれに近付くと、まな板が倒れるよつて布団に倒れ込む。もう身動き一つ出来なかつた。

一分もしない間に、彼等の意識は暗い眠りの海の中へと落ちていつた。

どれだけ眠つていたのか?「つすら」と意識が戻つてくる。
ゆさゆさ、と肩が誰かに揺すられて、呼び掛ける声が聞こえた。

「もし、起きてくださいまし。もし、神憑き様……。」

重たい臉をこじ開けて、軋む背中をぐいっと伸ばし、モゾモゾと起き上がる。そこには、薄紅の着物をきた、双子の侍女の姿。

「お田覚めですか？」

「うい……」

ポケツとした田で、六人はぼんやり畠を眺めている。まだ完全に田が覚めていないのだろう。

「やあ、しゃんとしてださこまし。お腹がすこひらっしゃるでしょうへ。」飯を用意致しましたよ。」

「う、う、う、飯！？ 食い物つー？ ビーナス、ビーナスだー？」

小柄だが、食べ物への執着心は誰よりもしつこく木下が真っ先に反応する。

「そりゃありがたいな。ろくなもん食べてなかつたから。」

梅本はそう言つて、腹を擦る。

移動中の食事とくれば、質素を通り越して嫌がらせかと思いたくなるようなものだった。

「その前に、わたくし達の名前を申し上げておきますね。」

双子の侍女はさきひとと正座すると、一瞬で頭を下げた。

「わたくしは春と申します。」

「わたくしは夏と申します。」

次は、一人声を挿えて。

「貴殿方のお世話役を勤めさせていただくことになりました。
どうぞよろしくお願い致します。」

流石双子、寸分の狂いもないシンクロ率だ。

「「「あ、よろしくお願ひします。」「」」

六人も正座して、同様に頭を下げる。そして立ち上がりつつある
が、春と夏に止められた。

「お待ちを。実は、殿御の世話役もいるのです。」「
俺達ですか？」

小川と梅本は顔を見合せ、再び座り直す。

春と夏は頷くと、お入りください、と襖の方に呼び掛けた。すると、襖がするすると開く。

「じょり、ぶつじやの。まろがそちうの世話役おじや。」「」

めちゃくちゃ聞き覚えがある。といふか、嫌でも知っている。
現れた姿に、六人はあつ、と驚きの声をあげた。
何と、部屋に入ってきたのはあの今川 義元だった。

十六章 「感動の再会？おかしこよね絶対。」 （後書き）

まさかの今川さん再登場。

可愛くないですかね、この人・・・・ゲームとかでは。

ちなみにこここの今川さんは見栄つ張りで弱いけど、意外と気持ちの割り切りは早くて潔い人です。

次回の投稿はもう少し先になりそうな予感。

まあ気長に待ってくださいまし。

八の斬 「飯は命だお宝だ、喰わねば何にも出来ません。」

「何でテメーがいるんだこの今川焼イイイイー！？！」

「おじやあああ！？」

「ドドドドジ、と六人は凄まじい形相で義元に詰め寄った。
猛牛のような勢いに、義元は部屋の隅まで逃げ込む。

「まあまあ、落ち着いてくださいまし。」

クスクスと笑いながら、春と夏が六人を押さえた。

間。

「殿が言つには、貴様等はどうせ何も知らぬだらつかひ、今川殿に
色々教えてもらえ、とのことらしいです。」

「で、出てきたんがこれが。」

これ、と北に指差された義元は、心外だとばかりに言い返した。

「これとはあんまりおじやー！まろは織田殿から、正式に世話役としての命を承つてきたのじゃぞ！」

「んなこたあ、どうだつていい。大体、よくも自分の敵とそんなに仲良く出来るよな。残る今川家はどうするんだ？」

顔をしかめて小川が言つ。すると義元は微かに悲し気な表情になり、苦笑を浮かべた。

「まろが負けた今、あの領地は織田のものじや。将は一つの国に一に國のひ一に國の人しか必要とされてはおらぬ。負けた国は、勝つた国に従つのが運だめだめ。それはどこの国でも覺悟の上じや。」

義元はきつぱりと言い切る。

その潔さは尊敬出来るだらう、多分。

「でも、どうしてそんなに元氣なんですか？大事な武器を、壊されてしまつたんでしょう？」

山中は腑に落ちない、といづつな表情でそつ尋ねた。
確かに利家の話では、神器と呼ばれる武器を壊されるとまゝ、並々ならぬ損失感を『えられるらじ』。

「壊された数日間は……自刃したくなるほどじやつた。まるで生きたまま死んでおるようなものおじや。じやが……青柳がまろを底つて碎け散つたのに、そのまろが自刃しては、青柳が尽くしてくれた誠意に泥を塗るようなもの。」

義元は晴れやかな顔をして笑つてみせる。

「まろは生きねばならぬ。生きて今川家を支えることが、敗国の将の唯一出来ることおじや。」

超・ポジティブシンキング今川。

そう言い切つた義元を、六人は信じられないような面持ちで見る。

「どうしようミナちゃん、今川がカツコいいぞ……。」

「頭でもぶつけたんでしょうか？」

「あの見た目でさつきのセリフはないよねえ、マンボウ？」
「ま、あたしらは春夏双子さんに世話になるからええけどな。」

女性陣からは、相変わらず容赦ない言葉を浴びせかけられる。
男性陣は深々と溜め息をつき、義元から目を逸らす。
多分、そんなことを堂々と言えるのは義元だけだろう。

「どこまでも失礼な奴等おじゃ……。」

何だか言い返す氣力もなくて、義元は肩を落としてそう呟いた。

義元と双子の侍女に連れられて部屋を出た六人は、食事が用意されている部屋へと向かつ。

「いじですよ。」

「どうぞお入りくださいまし。」

「いやつたあああーーまともな飯一つーー

田の色を変えて、真っ先に木下が飛び付く。

「餓えた犬だな……」

ガツガツと米を貪る木下を、冷たい目で小川は眺めた。

「まあ、チロは食い物が原動力と直結してゐるからな。」

梅本はせつ言いながらも、もぐもぐと魚を口に運び、山中や北にいたっては無言だ。

とにかく空腹を満たすために、ひたすら食べる。一心不乱に食べる。食べて食べて食べまくり、やつと一息つくことができた。

「ああ、美味しかった…。」

「身に滲みましたね。」

満腹になり、食後のお茶をたしなんでいると。

「よつ、お前等！ちつたあ動けるよつになつたか？」

スパン、と利家が襖を開けて登場した。

「あ、トッサーだ。」

「前田のトッサーだ。」

「トッサー何か用？」

勝手にあだ名で呼ばれている。

「トッサーつてもしかしながら俺のこととかよ。」

目を丸くして自分を指差す利家に、六人はこっくりと頷いた。

「だつてそつちのほうが言いややすいしね。」

「お前等なあ……。」

にっこり笑つて谷中が言つと、利家は困つたよつな、照れたよつな顔でガリガリと頭を搔いた。

「いや、んな」とはビードモいいんだ。お前等、城の案内してやるから一緒に来いよ。」

利家の誘いに、めんどうかい、と言おつとした北の口を塞ぎ、六人は立ち上がった。

「安土城は広いからなア、最初は絶対に迷うぜ。慣れないうちは、あんまり遠くまで行くなよ。」

六人を後ろに引き連れて歩く利家の姿は、まるで面倒見のいい兄貴分のようで、周囲から微笑ましい視線を送られている。

「やうですね、あんな山の中に、押し込むように城が建つてますから。」

山中は好奇心に輝く瞳で、あちこちを見回す。あの幻の安土城、中を見学出来るなんて、一生に一度もない大幸運だ。

「じゃあまずは、突撃トッキーのお部屋訪問だね。」

「記念すべき被害者第一号だなっ！」

「お前等俺の部屋で何するつもりだ。」

ニシシ、と笑いあう谷中と木下に、若干引き攣つた顔で利家が言った。だがそこは兄貴分（仮）、ちゃんと案内してくれる。

「ほひ、 じじが俺の部屋だ……頼むから暴れんなよ。」

何だかんだ言いつつ、見せてくれた部屋の感想は？

「意外と小綺麗だな。」

「春画とか散乱してると思つてたのに、つまりんわ。」

梅本はとにかく、北の言葉に利家はワナワナと震えながら言い返した。

無論、怒りによるものだ。

「何処から来るんだ、その発想は……？仮にも女だろ、お前……」「身体的にはな。」

北はどうでもよさそうに答えた。

流石、孝研の千物女にしてオツサン女マンボウ。恥など無縁の厚顔無恥。

「ハイ、 次。」

「じじが廁だ。」

「そこな造りだな。」

「次。」

「んで、書庫だ。」

「カビ臭い……」

「次だなつ。」

「台所だ。」

「レトロ通り越してるだろ。」

……と、城をふらつゝこと約一時間。

一度外に出て、利家はある場所に向かつた。

「今度は鍛練場だぞ。お前等もいづれ行く場所だ、道ぐらい覚えとけ。」

近付くにつれ、何やら勇ましい声が響いてくる。

「おお、やつてるやつてる！」

広いグラウンドらしき所で訓練を積む兵士達。互いに手合わせや筋トレなんかをしている。その大勢の中で、一際良く目立つ人物がいた。一際大きな体躯を誇る、齿のような男。

「おーい、おやじ殿ー！」

利家が手を振りながら大声で呼び掛けると、その大男はくるつと振り返った。

「おやじ殿…？」

「にしちゃあ、全ツ然似てないぞ。」

いぶかしげに大男を見る六人。

すると、その大男はのそそと近付いてくる。

近付けば近付く程、その異形はよく目立つた。真つ黒な肌に、ギヨロッとした目、ゴジゴジした体つき。

「何アレ、妖怪なんたら入道?」

「ちげーよ! ありや柴田 勝家様だつ……」

「……嘘ん?」

利家の言葉に、六人は絶句する。

どんどん近寄つてくる勝家にビビり、彼等は押し合いで圧し合いしながら利家の背後に隠れた。

「利家……案内か……?」

「ああ。信長様の御命令でな。」

「……そうか。」

まじまじと勝家は、利家の背後を見詰める。

「儂は……柴田、勝家と……申す。名を聞いても、よいか?」

なるべく優しい声で勝家が話しかけると、六人はおずおずと利家の背後から出てきた。

そしてそれぞれ名乗ると、勝家は可とも嬉しそうに笑つたではないか。

「…………ん。」

「……え、くれるの?」

おもむろに勝家は懐を「ごそ」と漁ると、薄い紙に包まれた六枚の煎餅を取りだし、彼等に手渡す。

「あ、ありがと! やります……?」

何故煎餅。何故出でくる。

まあくれるモンはもらつとけ。

ハテナマークを乱舞させながらも、六人は煎餅をパリッとかじった。

八の斬 「飯は命だお宝だ、喰わねば何にも出来ません。」

(後書き)

お次は柴田 勝家さんです。

厳ついけどまつたりした性格の優しい人設定です。
気に入られるとお菓子がもらえます。

九の嘶 「驚き桃の木山椒の木、つてもつ沢山だ。」

訓練道場を出て、つらつらと疠る利家の話を聞きながら歩いていると、ふと山中が足を止めて後ろを振り返る。

「どうしたんや？」

「いえ…何か、視線を感じるような……？」

北と山中は、怪訝そうに視線を感じた方向を見る。そこに、利家がやれやれと肩をすくめて呼び掛けた。

「明智殿、森殿。隠れてないで、出でくりやいいじゃないですか。」

すると、物影からギクリといつよつ息を呑む声が聞こえた。

「べ、別に隠れていたわけじゃない！」

「わ、私は……蘭丸様に引っ張られて……。」

一人目は、鮮やかな青と紫の着物を着た、いかにも小姓ですといいたげな格好の美少年。

少女のような顔付きをしているが、やや吊り上がった目は、警戒心露に六人を睨んでいる。

二人目は、黒く長い着物に黒灰色の羽織のような物を羽織った、長い髪の女性だ。

右目が前髪で隠れ、肌は病的に白い。俯き加減の姿勢は、全体的に暗い印象を受ける。

「明智？明智光秀のこと？何処にいるんだ？」

一人は森 蘭丸だとわかつたが、もう一人がわからない。
しかしここで、はあ？といつもうな顔をした利家が爆弾発言をブ
チかました。

「何言つてんだ、明智殿ならいるだろ……の方だ。」

指差す先に、あの暗い女性。

「え……あ、明智さん？」

「は、はい……。」

シン、と一瞬辺りが静まり返り。

「マジでええええ！」
「あり得ん！あり得んぞ！」
「女体化か…萌えるわー。」
「ミツチーがオンナノコだあーー！」
「マニアな設定だなーー。」
「お綺麗な方ですね。」

全員が同時に叫んだせいで、何を言ったのかはわからなかつたの
が幸いだつた。あまり聞かれたくない言葉が少し含まれていたから
だ。

「おいつ、お前達！僕を無視するなー！」

光秀ばかり注目されているのが気に入らないのか、彼女を押し退
けて蘭丸が六人の前に立つた。

そしてキツ、と利家を睨み付けると、いきなりギャンギャンと彼

に向かつて怒鳴り始めた。

「利家殿も何を考えているんです！？いくら信長様の許しが出たからつて、こんなどこの馬の骨ともわからない人達に、城の中を案内するなんて！？」

蘭丸の勢いは止まることを知らない。

今度は六人に向かい、ビシッと言い放つ。

「信長様に良いよにされたからつて、調子に乗るなよこの無宿人！！少しでも怪しいことをしたら、この森 蘭丸が即刻切り捨てやるからな！！」

しかし六人の興味はあつさり蘭丸から逸れていた。

「明智さんつて影があるけど美人だね～。」

「黒じやなくて、もっと派手な着物着ればいいと思しますよ。」

「薄幸の佳人……好みや……」

「これからミツチーつて呼ぶぞつ！」

「この羽織、変わった形だな。」

「…………いいな。」

総員が華麗に蘭丸をスルーし、光秀の周りにたかっていた。光秀は恥ずかしいやら困ったやらで、おろおろしている。

「うつ…………！」

ビキツと蘭丸の額に青筋が浮くのを、利家は二タニタ笑いながら見ていた。

何かと口煩いこの少年がどう出るか、実に楽しみなのだ。

「……人の話を聞けええええ！」

腹の底から叫ぶと、ようやく六人はめんどくさそうに蘭丸の方に首を向けた。

「あー、ハイハイ聞いた聞いた。」

「うつせーな、無駄吠えすんな犬野郎。」

「黙れ小僧！」

実際に迷惑そうな顔で蘭丸を見て、やる気のない声で言い返した。信長の小姓として氣位の高い蘭丸は、怒りのあまり肩を震わせるが。

「おつと、暴力沙汰は御法度だお前等。森殿もそんなに突っ掛かるなよ、見苦しいぜ。」

これ以上は駄目だと見た利家が間に割つて入った。

「蘭丸様、信長様だつて、言つてたでしょ？……この人達は、信長様が面倒みるつて。」

光秀も宥めるように言い、蘭丸の肩を叩く。利家と光秀の二人に挟まれば、さしもの蘭丸も六人に因縁をつけることは出来なかつた。

「……僕は、お前達を絶対に認めないからな。」

蘭丸はそう捨て台詞を残し、光秀を連れて足音も荒く立ち去つた。

「何だよ、あのガキ。」

「小姓だかペッパーだか知らねえけど、随分高飛車だな。」

チツ、と舌打ちして、小川と梅本は吐き捨てるよつに言った。
自分達が不審者であるということは十分に理解し自覚しているが、
あそこまで敵愾心剥き出しにされては気分が悪い。

「あいつは信長様にゾッコンだからな。信長様の気がお前等に向いてんのが、めちゃくちゃ氣に入らねえのさ……しかし犬野郎つてかよ……。」

笑いを噛み殺し、利家は口元を手で覆い隠した。
余程面白かったのだろう。

「ま、あいつのこととはテキトーにあしらつとけ。イチイチ腹たててたらキリがねえ。」

「「「りょーかいトッシー。」「」」

その後、更に安土城の中を歩き回り、滝川一益、池田恒興、
佐久間信盛など多くの武将達に引き合わされ、挨拶をして回った。
六人を快く迎えてくれる者もいれば、森蘭丸のように怪しむ者もいた。

挨拶が一通り終わる頃には、六人はすっかり疲れはてていた。

「ありやー挨拶つて名前の城内引き回しだぜ。」

「疲れたよ……お陰でお腹は減ってきたけどや。」

部屋に戻り、やれやれと六人は一息つく。

「そんなんそちらにはー。」

「 「 「 うわあー? 」 」

いきなり襖が開いて、盆を持った義元と春と夏が現れた。

「 いのまろが茶を持つてきてやつたおじや。 」

「 「 ちなみに甘味もありますよ。 」 」

盆の上に、急須と人数分の湯飲み、それに小さな茶菓子が置かれている。

「 ちよつびええわ、あたしお茶飲みたかつたから。 」

「 機嫌で北が手招きする。お世話係三人は素早く湯飲みに茶を注ぐと、彼等に配り終える。

「 あの、貴殿方も一緒にどうですか? 」

山中の誘いに、三人は目を丸くした。

城主のお客である彼等が、一介の世話係を茶に誘つたのだ。

「 そんな、とんでもない! わたくし達は……! 」

一つ返事で額ひじとした義元の口を一人がかりで押さえ、春と夏は首を振る。

「 いいじゃんか、別にゆづくらしたつても。 」

木下が彼女達の袖を引っ張り、座らせようとする。

「 だーつ、いい加減に離すおじや! ……苦しいぞよー! 」

自分を押さえる手を振りほどき、義元が叫ぶ。

「まろは喜んで頂くおじや。せつかくの誘いを断る理由など、ないのじやからな。」

ササッと義元は六人の傍らに座り、懐から何故か湯飲みを取り出した。

「何故そこから湯飲みが出てくる。」

「公家たる者、これくらいの物がすぐ出せずにはどうするおじや？」

お前は某万能執事か。

そして元・公家の間違いではないのだらうか。

そそくさと湯飲みに茶を注ぐ義元を、呆れたように双子は眺めるが、やがて苦笑しながら頷く。

「わかりました。わたくし達も、御相伴致しますわ。」

そう春は言い、夏は湯飲みを取りに行く。
しばらくすると、六人の部屋から楽しげに笑う声が聞こえてきたのであった。

九の嘶 「驚き桃の木山椒の木、つてもう沢山だ。」（後書き）

明智さんを女の子にしてみました・・・。

蘭丸君はツンデレ設定です。

次回は鍛錬、そして武器のお話になればいいな。

十の嘶 「インドア派の耐久力って、障子紙よか低いんだぜ。」

とにもかくにも、六人の安土城での生活はそこそこ華麗に始まった。

朝、普段ならあり得ない時間に叩き起こされ朝食を食べる。そして義元による字の読み書き講座を受け、小休憩の後、武術と馬術の鍛練。

たつぱり死ぬほどいびられた後、特別に昼食をとり一時間の休みを挟む。

その後は、何故か魔王様とのお話タイムが待っている。充実しまくる日々のスケジュールに、毎日六人は真っ白に燃え尽きてしまう。

「……何、この濃すぎる日課。」

ばつたりと部屋にぶつ倒れ、彼等は呆然と呟く。

馬術はともかく、一番辛いのは武術だ。まず最初に課せられたのは、「攻撃を避ける」こと。技を見切る能力を、徹底的に叩き込まれた。

しかし六人は一般人、パンピー中のパンピーである。

身体には打撲切り傷擦り傷など、生傷が絶えない。忘れちゃいけないのが筋肉痛だ。訓練初日の次の日なんかは、指一本動かすことが出来なかつた。

無理が祟つて、発熱して寝込むことが何度あつたか。

そんな中、世話係三人と利家以外に、よく彼等の力になつてくれたのが勝家と濃姫であつた。

勝家は、何処からどう調達してきたのか、よく饅頭だの大福だのを差し入れし、濃姫は気晴らしに城下へ連れて行つてくれたり。

そんな気遣いもあつてか、なんとか六人は地獄のような日々を乗り切つていた。

そんなんある口、こつものよひで武術の鍛練を行つていゆと、彼等はふと身体の変化に気付いた。

一兵卒達が繰り出す槍を一心に避けていゆと。

(あれ?なんかトロい?)

やたらと攻撃が遅く見える。

(み、見えるー私にも見えるぞ…ー)

テンショソンがあがり、某赤い彗星のセリフが浮かぶ。

「はい、ちよつと休むか。」

「「「了解です。」」」

わらわらと六人は集まり、汗を吹きながら視線を交わしあつ。

「……なあ、何かわ…見えるよな?」

最初に口火を切ったのは、小川だ。

「やつぱり?やつぱり見えるよな?」

続ぐ梅本の言葉に、他もうんづんと頷く。

「普通、僕達みたいな一般人が、こんな短期間で才能開花するかな?」

「オレ、なんか反撃出来そうな気がすんだけど。」

谷中と木下は身体のあちこちを見回す。

「あの、少し試してみませんか？」

「試すつて何を？」

山中の提案に、北が尋ねた。

「槍をぶんてるんですよ。それで反撃してみませんか?」

につこりと笑い、山中はそう言ひへ。

「……え？」

ポカンと口を開けていると、山中は楽しそうな顔で続ける。

「試す価値はありますよ？」泡吹かせてやりましょう。

久し振りに見る、山中の黒笑。

「…………えーっと、ミナちゃん何かお怒り？」

恐る恐る木下が尋ねると、山中はフルフルと首を振る。

「いいえ？ただ……今まで好き放題に扱わっていたのを思い出し
まして、何だかこう、黒い感情がですね……。」

「それを怒りと言わずに何で呼ぶんだ？」

薄ら寒くなるよつな霧囲氣を漂わせる日中を、
遠巻きに眺め

休憩が終わり、訓練が再び始まる。

彼等は山中の提案通り、槍を奪い取る隙を虎視眈々と狙う。シユツ、シユツと突き出される槍、そして柄を握り直すその時を、見逃さなかつた。

「もらつたあ！！！」

「いつただきつーーーー！」

「ゲットだぜっーーーー！」

六人の手が蛇のよう伸び、一瞬の隙をついて槍を奪い取つた。そしてそれを構え、相手の首筋に突き付ける。流れのよつな動作だつた。

「…出来た……。」

あまりの上出来っぷりに、当の本人達も驚きを隠せない。というか、何故ここまでうまくいったんだ？

「中々見事だ、餓鬼共！！」

固まる空氣を切つて、厳めしい声が響いた。

「の、信長様！」

「信長様だ！」

深紫の着物を糸に着こなした信長が、楽しそうに笑いながらそこ
に立つていた。

「も、もしかして… ものの、見てた?」

六人の背に、嫌な汗がタラーリ流れる。

魔王様はすかずかと近付いてくると、彼等の頭に手を伸ばした。思わず田を閉じるが、頭に感じたのは優しい感覚。

「へ……？」

驚いて瞼を開けると、信長が満足そうな顔で六人の頭をそれぞれ撫でていた。

「あの～、もしもし?」

どうこう状況なのか理解できずに、田を白黒せじこんど。

「よい出来であったぞ。」

つまるところ、褒められているらしい。どう反応していいか困りきって、されるがままになつていると。

「何だ、氣に入らんのか? ふむ……お濃に褒めるときはこうしてみろ、と言われたんだがな。」

「いや、まさか魔王様に頭撫でられる口が来よつとは、コマ粒ほども思わなかつたんで。」

「俺が褒めたのがそれほど意外か。」

感想をストレートに言えば、信長は顔をしかめて腕をくんだ。

「信兄も案外、やさしートコあるんだなつ。」

「バカ、その呼び方は……。」

慌てて梅本が木下を止めようとするが時既に遅し。

「……のぶにい？」

珍しく驚いた顔で、信長は木下の失言を繰り返した。

「しきいまつたあああ！！！」

頭を抱えて絶叫する木下。そして一斉にアサツテの方向を向き、他人のフリをする仲間達。

「信兄とは俺のことか、おい。」

「『めんなさい』すみません口滑りました殺さんで下せ……」「

ペコペコ頭を下げて謝りまくる木下。どうなるのかと思つきや。

「ああ、成程……そつ言えば又左が妙な名で呼ばれていたな。俺は「信兄」なのか。」

何か気に入つたっぽい魔王様がいた。

「貴様等の兄になる気はないが、まあ好きに呼べ。」

「……え、オレ死なないの？」

「なんで死ぬんだ。」

木下の頭を再び撫で、信長は残りの五人を手招きして呼ぶ。全員が揃うと、信長はおもむろにこう言った。

「貴様等、武器が欲しいか？」

「武器つて、神器のことか？」

北が興味深そうに尋ねると、信長は「へつと頷いた。

「まだ早いんじゃ……。」

小川はあまり乗り気ではなさそうだ。
それもその筈、まだまだ自分達は武器を持って戦えるレベルじゃないと思つからだ。

「普通の餓鬼共が、数週間の訓練で敵兵の槍を奪い取り、首に突き付けることが出来るとは思わんが?」

信長はスッと手を細め、ジッと六人を眺める。言われてみればそんな気がしなくもない。

「あたしは賛成やけどな。武器の使い方も同時に教えてもらおうや。」

北は武器を持つことに期待してこちらを見つめた。

「明日、朝飯を食つたら城の裏に来い。遅れたら……わかるな?」

信長は武器を『える気満々のようだ。それだけ言つと、信長はさつと立ち去つてしまつた。

十の斬 「インドア派の耐久力って、障子紙よか低いんだぜ。」

(後書き)

武器がいよいよもられます。

次回はやつとファンタジーっぽい」とが書けるかも……。

いよいよ鍛冶屋に行くお話です。

作者が趣味に走ります、多分。

そしてあだ名についてはねるこ田で見逃して下さい。

十一の嘶 「有り得ない世界には、有り得ない事が付き物だ。」

次の日の朝。

六人は城の裏に勢揃いし、信長を待っていた。自分にあつ武器はいつたい何なのか、様々な想像が脳裏を駆け巡る。

「ていうか、何で集合場所が裏なんだろう？」

「それはあたしも気になつてたわ。普通裏じゃなくて表やでな。」

谷中が口にした疑問に、北も賛成の意を示す。

目に映る景色は、繁る木々と風に揺れる草や花。とてもじやないが、この場所に加治屋があるように思えない。

変わつたところと言えば、少し離れたところにポツンと建つ朱塗りの鳥居くらいだ。何かを祀る祠もなく、ただあるだけ。

「何なんだ、この鳥居。」

小川はそこに近寄り、しげしげと眺めてみる。何の変哲もない。

「おい、勝手に入るな！大人しく待つてもいられないのか！？」

偉そうな叱責が聞こえ、六人は顔を歪める。一発で誰だかわかつた。

その方向を見れば、いつもの派手な着物を着た蘭丸と信長が立っていた。

「何だペッパーかよ。」

「信兄おはよー。」

蘭丸をやつぱりスルーして、六人は信長に挨拶する。

「ああ。感心だ、遅れなかつたようだな。」

信長はニヤツと笑いながら言つ。

「佩つぱあとは何だ！？それは僕のことかー！？」

「うるさいな、どうでもいいだろ。」

後ろでは蘭丸と小川が言い争つてゐる。それを聞きながら、山中が鳥居のことを信長に尋ねた。

「あの、加治屋さんはどこにあるんですか？あの鳥居は何か関係が……？」

もう一度辺りを見回してみると、やっぱり何も見つからない。

「関係は大アリだな。ついてこい、余り騒ぐなよ。」

何やら愉快そうな表情で、信長は自分の背後に六人を集めさせる。

「いいか、ここから先は人間の世界じゃないんだ。ちゃんと礼儀をわきまえろよーー！」

蘭丸の言葉に、六人は顔を見合せた。

人間の世界ではないとは、どういうことだろつか。

こんな邊鄙なところで、何をするつもりなのか。黙つたまま、信長の様子を見守つてゐると、彼は鳥居に近付きそつと触れる。すると、ぐにゅりと鳥居の向ひつの景色が歪んだ。

「な、何だ…！？」

「気持ち悪い…！」

「静かにしろ。」

騒ぎそうになる彼等を一声で黙らせ、信長はゆっくりと鳥居を潜る。恐る恐る六人も後に続くと、鳥居を潜った瞬間、景色が一変していった。

「何処だらう、ここ…？」

見えるのは、ガヤガヤと賑やかしい通り。あちこちに店が並び、祭囃子のような音楽が聞こえてくる。

だが、道を行き交う者の姿は人間ではなかった。

「よ、妖怪！ 妖怪だぞ梅！」

興奮する木下は、梅本の着物の袖を引っ張る。

「わかったわかった、凄い凄い。」

それをテキトーにあしらい、スッ飛んで行こうとする木下の襟首を掴む。

「だから騒ぐな、バカ！」

蘭丸は苛々と、声を押し殺して言つた。

「蘭、あまり言つてやるな。貴様も落ち着かんか。」

信長の注意に、蘭丸は不服そつたが渋々と従い、木下は梅本に殴

られてやつと静まる。

「『ニ』は一体…？」

「雰囲気的には、某有名アニメ映画に出でてくる風呂屋みたいだな。」

「

確かにそうだ。原色の目立つ建物が多く、まさにその表現がぴつたり当てはある。

「『ニ』は妖怪が住む世界も、僕達人間の住む世界とは一線を引いて、あの『妖鳥居』を境に広がる世界だ。」

鼻高々と話す蘭丸の説明を聞きながら、六人は信長の後を必死についていく。

「神憑きの武器は、妖怪達が造っている。人間にはわからない技法でね。」

「企業秘密つてワケか。」

通り過ぎる者達は、翼ある者、牙や角を持つ者、足がなく這う者、目が身体中にある者など様々。

「着いたぞ、『ニ』だ。」

やつと信長がとある建物の前で足を止めた。

煤けた看板には、『明王堂』と彫られてあるのが辛うじて読めた。

「タダでさえ夢みたいな世界なのに、更に夢みたいな出来事がどんどん起きてるな。」

「ゲームの設定つて、こんなのだつたか？」

ふらふらと飛ぶ鬼火を片手で払い、小川と梅本は看板を見上げた。

「餓鬼共、離れずにしつかりついてこよ。ほぐれたら妖共に喰われてしまつぞ。」

信長はさう言い、明王堂の中へと入った。

すると、すぐに一匹の三毛猫が出迎える。勿論普通の猫ではない。背丈は木下や山中程もあり、黒いハツピのよつな物を着てゐる。

よく見ると、尻尾が一股だ。

「おや、尾張の旦那じゃないか。どうしたつての?」

キラッと瞳孔の細い目を輝かせ、化け猫は人懐っこい言ひ方で云つ。

「久しいな、コマ。」

信長はそう挨拶し、蘭丸も丁寧に頭を下げる。

「へへ、お小姓も一緒?後ろの子達は?」

「コマとこう名の化け猫は、ひょこつと蘭丸の背後を覗き込んで、彼等に好奇心一杯に近寄ってきた。

「実は、彼奴等に武器を捨ててやつてほしい。」

「…こいつは驚きだ。俺も長いこと出迎えをやつてゐるけど、こんな変わった神憑きはお目にかかることがないね。」

「コマ、ヒコマの瞳孔が開き、マジマジと六人の顔を眺める。

「あの、変わってるひつてよく言われるんですけど……一体何がビツ
変わってるんですか?」

谷中がそう尋ねると、コマロイイチと笑う。

「どう、って言われても、変わってるモンは変わってるしさと言
えないよ。アンタ達に宿る力は、ひいてばかしけつたいなのさ。」

何が面白いのか、コマロはからかいつな物言つだ。

「そんなら、うかうかしてられないね。鍛冶屋で伝えておくから、
アンタ達は一つ田に見てもらいな。」

「ママはわづらつたり、サッと回つたり奥に走り去つた。

「一つ田つて、一つ田小僧のことでやうか?」

北はコマロが走り去つた方向を眺めながら、首を傾げる。

「ふん、何も知らない田舎者ではなさそうだな。」

「やかましいわ、女形坊主はおべべの心配でもしあわ。」

憎まれ口に憎まれ口で言い返し、歯軋つする蘭丸を無視する。

「小僧という見た田ではないがな。」

信長はそう言い、奥の部屋へと進む。後に続くと、今度は小ぢん
まりした部屋が見える。

赤い枠縁の、やたら派手な障子に閉ざされていた。

「ここからは貴様等だけで行け。俺は待っている。」

信長に背を押されて、六人は恐々とその部屋に足を踏み入れた。中は薄暗く、何やら不思議な香りの香が焚かれている。

「六人もいるのか。今日は珍しく仕事が多いね。」

いきなり暗がりから声がして、彼等は飛び上がる。目を凝らしてそこを見ていると、勝手に行灯に火が灯り、声の主を照らし出した。悠然とくつろいでいるのは、煙管片手に此方を興味深そうに眺める少女だった。緋色の着物に山吹色の帯、一見遊女のような出で立ちだ。

「座りなよ。いつまでもそこに立たれてたら、私の仕事が出来ない。」

少女はそう言い、座布団を勧める。見たとこ、目の数は二つ……人間と変わりがない。

「私は壱田。^{いちむら}わかりやすい名前だろ?」

座布団に腰を下ろす六人を見ながら、壱田は煙管を灰皿に打ち付けた。

「さて、それじゃ始めようか。アンタ方の神器の見定めをね。」

壱田はさう言い、おもむろに田元を手で覆い隠すよつて撫で下ろした。

十一の嘶 「有り得ない世界には、有り得ない事が付き物だ。」

(後書き)

思い切り趣味に走りました。

好きなんです妖怪。

二股しつぽの猫なんて特に・・・。

十一の斬 「占いの前にやたらひき緊張しない?」

手が顔から完全に下り、再び吉田の顔を見た六人は、わあっと悲鳴をあげたいのを必死で抑え込んだ。

そもそもその筈、さつきまで普通に二つの目があつたのに、今は不気味に光る大きな目がギョロリと動いている。

「だから言つたろ? わかりやすい名前だつてね。」

吉田は悪戯が成功したようで、ケラケラと笑っている。

「やつぱ、一つ目じゃないと見えないんだな!」

何やら木下は納得したような顔で、怖がりもせず吉田の目を見ている。

「詳細希望や。」

「もちゴースだマンボウ!」

北の要望に応え、木下は丶サインをきめた。

「昔はさ、一つ目じゃないと神様のなんたるかは見えないっていう言い伝えがあつて、神官がワザと片目を潰して儀式を行つてたトコもあつたらしいんだぞつ!」

嬉々としてそんなことを説明し、他がヘンと相槌を打つ。

「おや、アンタ人間なのに詳しいんだね。随分的を得たことを言つじやないか。」

壱田は意外だといつよつに、单眼を見開いた。

「オレ、妖怪は昔から大好きなんだ。」

得意気に木下は胸を張つてみせた。

「この調子だと、ずっとチロちゃんのターンだね。」

そんな彼女の様子を見ながら、谷中がさつと山中に歸ぐ。
「仕方ありませんよ。だって私達、この分野には詳しきあります……。」

山中も苦笑して、そつ囁き返すのであった。

「よし、じゃあ始めるよ。まずはそうだね、アンタこいつか。」

壱田は小川を手招きして、田の前に座らせた。

「いいかい、静かに、動かないでおくれよ。」

小川は緊張するのか、若干強張った顔で頷いた。壱田は一度深呼吸すると、ゆっくりとその单眼を覆つ瞼を開き、彼の顔を真剣に見つめ始めた。

壱田は向やうびしづしづと呟き、広げていた帳面に書き込んでいく。見定めとやらはすぐに終わり、彼女は書き記した紙を破りとつて小

川に手渡した。

「「」れを後でコマ公に見せな。今は中を見るんじやないよ。次はアンタだ。」

壱田に次々と呼ばれ、同じように何かを書かれた紙を渡される。まるで占いのようだった。全員の見定めは大体三十分程で終わった。

「何かミラーに緊張したね。」

「……「」の紙、気になるな。」

壱田にお礼を言つて部屋から出た後、彼等は手にした紙を開けたそうにしていた。

「お前達、終わつたのか?」

偉そうな声に振り向けば、蘭丸がそこにいたが、信長の姿が見えない。

「あれ、信長さんは?」

「様どつける! 信長様は奥座敷でゆつくりしていらっしゃる。僕が待つついてやつたんだ。」

心底嫌そうに蘭丸は言い、ぐるりと六人を見回した。むかつ腹を立てたい六人だが、今は自分の武器のことが気になる。蘭丸を見ないフリして、化け猫のコマを呼ぼうとすると。

「終わつたかい? 六人もいちゃあ、意外と時間がかかるもんだね。」

「

グッデタイミングで奥からコマが出てきた。

「コマさん、これを西田さんから渡せって言われたんですが……。

「

山中がそう言つて、コマに紙を渡す。

「ああ、やうだね。じゃあ監のもくれるか?」

コマはピンクの肉球のついた手で、次々に紙を受け取つては目を通す。そして何が面白いのか、ニヤニヤと笑つた。

「フフ……監がさア、柄にもなく張り切つてゐんだよ。『監を今が今かつて待ちわびてるんだ。』

コマは鋭い牙を見せ、愉しげに叫んだ。

「お小姓さん、田那のところへ行つてきな。後は俺が『お駆けの馬』に蘭丸は嬉しそうに笑うと、振つ回きもせずに走つて行つてしまつた。

コマの言葉に蘭丸は嬉しそうに笑うと、振つ回きもせずに走つて行つてしまつた。

「……多分言ふと一人きりになれるのが嬉しいんで。」

シラーッとした目で蘭丸を見送つた北は、やつて呟いた。

「……だらうな。」

梅本も同意見のようだ。

「さて、それじゃあ行こうか。皆がお待ちかねだから。」

ヒラヒラと手招きする口マに従って、六人は彼の後に続いたのであつた。

「口マに案内された場所は、まさに巻物に出てくるような百鬼夜行のような光景だつた。様々な妖怪がところ狭しと集まり、爛々と眼を光らせながら六人を眺めている。

「ど、どこのお化け屋敷だよこれ！」

梅本は身体を強張らせて、低く呻いた。

彼等のいた世界では、妖怪なんてお伽噺にしか登場しない存在だった。妖怪よりも、幽霊の方が信じられただろう。

それが、この異世界には妖怪が普通に存在しており、今自分達はそれをリアルタイムで感じているのだ。

「磯女…山姥…土蜘蛛…鉄鼠…ふふ、ふふふ…。」

木下といえば口に入る妖怪の名前を次々に言い当て、気持ち悪い笑いを溢れさせていた。

「さて、それじゃあアンタ達の神器を捨てる妖を紹介するよ。まずは小川殿だ……紅葉!」

「ママは紙を広げ、百鬼夜行の中に向かって呼び掛けた。蠢く群れから颯爽と歩み出てきたのは、名に負けぬ程の紅い姿。紅蓮の髪に白蝶の如き顔、巫女装束を纏つた絶世の美女。しかし、その焰のような髪からは、一本の黒い角がによつたりと生え、袖口から覗く指先には狂暴な鉤爪が見えていた。

「行きな、くれぐれも不躾なことはしないよにするんだよ。ハ
つ裂きにされちまつたって、責任とれないからね。」

焼けつきそうなオーラを放つ鬼女・紅葉にて、完全に腰が退いている小川。しかし「ママは更に彼をビビらせることしか言わず、背を押した。

他の仲間達も、小川の心配をしている暇はない。

「何か捕つて喰われそいや……あたしヤバいんとちやうかな……。」

北は自分の腹周りを擦り、流石に青ざめた顔をした。

「わ、私達……ガラスープにされちゃいます……！」
「オレも!!ナちゃんも、骨ばつかだしなあ。」

痩せている木下と山中は腕の細さを眺めて溜め息をつき。

「僕は普通だと思いたいけど……一番食べやすかったり?」

谷中は冷や汗を流して後退りする。

「お前等まだマシだろー俺なんか…俺なんかなあー！」

最近ちよつぴつお腹が気になる梅本は、八つ当たり氣味に叫ぶ。

何か論点がズレているような気がしてならない、とコマは一人思
うが、余計なことは言わずにいておいた。

「どうでもいいけど、次言つよ。梅本殿は……鎮岩さがん!」

同じよつにコマが呼び掛けると、今度はズルズルと何か太い蛇の
ような生き物が這い出でた。胴回りは電柱よりも太く、身体には
鎖のような模様があった。

「ありや野槌のつだなつ。」

「にしても、どうやって武器を造るんでしょう?」

山中は野槌の、妙にのつぺりした姿を見て首を傾げた。

十一の斬 「古事記の前ひてやたりと緊張しなー?」（後書き）

まだまだ暴走は続きます。

そして作者の一言、「鳥山石燕はやっぱり偉大だ！」

百鬼夜行つていつ言葉の並びがスゴイと思つのですよ。

十三の嘶 「妖々跋扈、正直生きた心地がしません。」

「梅、気をつけろよ。野槌つて、何でもかんでも呑み込んでいらっしゃいぞ。」

「何でテメーは言うかなそういうこと！？」

木下の忠告に、梅本は彼女の襟首を掴んで喚いた。

「ほら、早く行きなつての。次は木下殿だよ、新月！」

コマは呆れたように梅本を押し退け、次の妖怪の名を呼ぶ。現れたのは、漆黒の身体をした大百足だった。無数にある足の先だけが赤く、煌々（けりけり）と輝く双眼がジッと木下を見下ろす。

「で、デッケエ……！」

恐る恐る、だが好奇心に瞳を輝かせて、木下は大百足の元に向かつた。

「山中殿は……東風之！」

上から羽ばたきの音と共に山中の前に降りてきたのは、松葉色の山伏装束を纏つたこれまた美しい女性。

背に生えた黒い翼から、鴉天狗だとわかる。鴉天狗は值踏みするよつに、山中を鋭い目で見つめている。しかし山中は毅然とした態度で鴉天狗の元に歩み寄つていった。

「谷中殿は、れっくう裂空！」

「うわあ！？」

バチバチと電気を纏つた黄色の体毛を持った生き物が、ストンと谷中の肩に乗つてくる。

鼬のような、狐のような形をしていて、どことなく愛嬌のある顔つきだ。恐らく雷獣だろう。いきなり肩に飛び乗られた谷中は驚いてよろめくが、意外と可愛い雷獣の顔にちょっと安心するのであつた。

「最後は北殿だね。えーっと……磯姫！」

固唾を呑んで妖怪の群れを見る北の前に、ぬうっと突き出てきたのは、蒼白な顔の女の首だった。びっしょり濡れた長い黒髪、深い群青の蛇体。

磯女という妖怪は、薄笑いのような表情で、北を眺めた。

「以上、計六人だ。確かにこの猫又、コマが割り振らせてもらつた！」

妖怪の群れに向かつてそう叫び、コマは六人の背中を見送る。

「さあて、どんな神器が出来上がるかな。あの子達が出てくるまで、尾張の旦那と一杯やりながら待つとしようか。」

そんな呟きを残して。

妖怪に連れられ、六人は一人づつ、それぞれ別の場所に通された。目の前には洞窟があり、そこから焼けるような熱風が吹き込んで

きていた。恐らく、あの洞窟が妖怪達の仕事場なのだらう。

何をされるのかとビクビクしていると、妖怪達は口を開えて血を寄越せ、と言出した。血を吸われるのかと身構える六人だが、どうやら少し意味が違うようだ。

血は命の源、魂や心を溶かす液体であり、神器を拵えるにはどうしても必要なものだと説明された。

求められる血の量は、差し出された器に一杯。大きさは御猪口程度だが、今まで血を流すことに無縁の世界で生きてきた六人、はいそうですかとナイフでざつくりいける程、痛みに慣れているワケがない。

散々躊躇い、ビビる六人だが、苛々しあじめる妖怪に喰われるのは御免である。渡された小刀を握りしめ、腹を決めて勢いよく刃を腕に突き立てた。

普段の切り傷とは比べられない程の痛みと、ドッと溢れる赤い液体に、意識がブツ飛んでいきそうなのを堪えてなんとか器に血を注ぎ込む。どうにか一杯注ぎ終えると、その場につづくまい、傷口を押さえつけた。痛い、とにかく痛い。

知らぬうちに涙がぽろぽろ零れて、止まらなくなる。よくやつたとばかりに、妖怪達はすかさず手当てをしてやり、とりあえず六人のやうにならぬことは済んだようだ。

「……やっぱり、全員同じ目にあつてたか。」

全員が蒼白な顔で出てくると、小川が消え入りそうな声で言つた。

「オレ、こんな怪我したの初めてだ……。」

木下はグズグズと鼻をすすり、白い包帯を巻かれた腕を擦つた。

「でも、これでいい武器が出来るんだよね。」

「やうじゅやなかつたら祟つたるわホンマ。」

溜め息をつき、谷中と北は疲れたように頃垂れた。

「血なんて…久しぶりに見ました……。」

「大丈夫かよ、ミナちゃん。倒れそつだぞ。」

ふらふらする山中を梅本は心配そうに見守った。しかしこれしきで音を挙げていては、これから先、生きてはいけない。

噴き上げる血飛沫など、どれだけ見ることになるだらう。それを思えば、意地でも慣れなければならぬのだ。痛みにも、他人を傷つけることにも。

彼等の道のりには、幾つもの壁が立ち塞がっていた。若干シリアスな心持ちになつて歩こんでいると、向こうから「コマがやつて来るのが見えた。

「おや、やつこと來るのが遅れたね。お疲れさん、大丈夫かい?」
何やら美味しいものでも食つたのか、コマは前足をペロリと舐めていふ。

「大丈夫も何も、エライ田にあつたわ……あんなえげつないことするとか、あたしら聞いてへん。」

彌々しじナコマを一警じ、北は舌打ちする。

「んん? 尾張の田那は、何も言つてなかつたのかい? 僕はてつくり、何をするのか知つてるモンかと思つてたんだけど。」

北の言葉に、コマは田を丸くして驚いたような表情を作つた。

「……あー、何となくわかつたかも。」

谷中は力ない笑みを浮かべ、額を手で押さえた。他も同様、げんなりした顔になる。

「あの魔王様のことだから、敢えて何も言わなかつたのかもな。」

「……サディスティックな顔だしな。」

梅本と小川は、顔を見合せて完全な魔王面で高笑いする信長を想像した。

……恐ろしく似合つ。

「ドリで鬼畜さんですか…………。」

「//ナちゃん、顔がビミョー怖いぞ…………。」

俯き、ボソッと膝へ出中のオーラに木下やはや退き気味だ。

「ま、まあお喋りはこのくらいにして、旦那のトコに戻るうか。」

どす黒い雰囲気を追い払つよう、トコトコと明るい声で六人に呼び掛けた。

「コマに連れられて、店の入り口に戻ると、信長と蘭丸が待っていた。

「終わったか。」

信長が非常に上機嫌に見えるのは気のせいだろ？いや、気のせいではない。

「……なかなかお楽しみだつたようで。」

「機嫌よさそーデスネ、この人でなし。」

「悪趣味の放火マニア。」

「ショタコンのロリコン。」

ジト目で信長をシラーッと見やり、次々に彼を罵る。

「……最後辺りの聞き慣れん言葉の意味を今すぐ教える。」

「「「テメーで考えろバーカ！……！」」」

多分良い意味じゃないとわかったのか、信長は目元をひくつかせ、唸るように言った。しかし六人は捨て台詞を吐くと、脱兎の如く逃げ出す。

「待たないかお前達イイイイ！！！」

「待てと言われて待つヤツがいるだろ？かーーいや、いない……」

鬼の形相で六人を追いかける蘭丸だが、こういうときだけ足が神がかり的に早くなる現代人。たちまち見えなくなってしまった。

「……元気と度胸のある子達だねえ。」

「全くだ。」

ポカーンとした顔で六人を見、コマは信長に言った。やれやれと信長は溜め息をつく。

「そう言えば、彼奴等の戦装束だが……頼んだぞ。」

「勿論承知さ。あの子達の姿形は雲外鏡の奴がしつかり映したから、あとは女郎蜘蛛の姉さんにお願ひしておくれよ。」

「一ヶとコマは笑つてみせ、信長はようしく頼む、と言ひ置いて、手のかかる連中の後をゆつくりと追つたのであつた。

妖怪の住む世界から無事に帰還した六人は、城に戻り暫しの幸せを楽しんでいた。

「やつぱさ、鳴福屋の大福めいふくやがオレは一番うんまいと思おもいつ。」

「いやいや、笹部堂の笹ささべどうの葉煎餅わかまきもなかなかイケるよ。」

そう、細やかな贅沢、おやつタイムだ。いつもならお世話係三人組か勝家が一緒だが、今日は六人だけだつた。

「……なあ。」

和氣藹々、ほのぼのまつたりしていると、不意に小川が口を開いた。

「何だ、煎餅欲しいのか？」

「いらん。」

じゃあ何だ、と五人の目が小川に向けられる。

「皆、携帯はどうしてる?」

「……携帯？」

そう言えば、と彼等の頭の中に、現代社会にはなくてはならない小さな相棒の存在が浮かんだ。

十三の嘶 「妖々跋扈、正直生きた心地がしません。」 （後書き）

今回はちょっと長めに書いてしました。

次は携帯電話の謎についてです、多分出来上がった武器の話も出せたらいいな。

ちなみにタイトルの「妖々跋扈」は某とんでも弾幕ゲームに使われている音楽の一つです。

・・・・・あのゲームのアレンジ曲大好きだなー。

十四の嘶 「最優先事項は欲しいもの、疑問はーの次ーの次。」

桶狭間での戦で、偶然開いた携帯に何故か自分達の能力データが映つていたことを、六人はすっかり忘れていた。

「それよりも、もつととんでもないことが一杯おきましたからね……携帯の不思議にまで、気をとめられませんでした。」

山中はそう言いながら立ち上がり、携帯がしまわれている箱を持ってきた。

「何か久し振りに見るな。」

梅本は箱を開けると、自分の携帯を取り出してパカッと開いた。

「……何コレ。」

同じように携帯を眺めていた谷中が、驚いたように口を見開いた。

「どうした?」

北の問い合わせに、谷中は黙つたまま携帯の画面上部を指差す。

「コレ、電波立ってるぞつー!？」

「マジかよー!？」

真っ先にそこを覗き込んだ木下が叫ぶと、他の仲間達も一斉に谷中の周りに集まる。見れば、確かに電波が立っていた。しかもちゃんと三本。

「普通、圈外の筈ですよね？」

眉を寄せて言つ山中に、彼等は頷く。

この世界に、携帯が存在していることなどあり得ない。

「試しに、電話してみよっか。」

「……そりだな。」

北の出した提案に小川が頷き、早速梅本の携帯に電話をかけてみた。すると、彼の携帯から聞き慣れた着メロが流れ出したではないか。画面には、「王子」としつかり表示されている。

「じゃ、メールは？」

「オレ、やつてみる！」

木下が山中にメールを送ると、やはりメールの着信音が山中の携帯から流れ出す。

「…携帯、使えるで。」

「何でだろ? どーこいつ…?」

出された結果に、首を捻る六人。

ちなみに、六人以外の友人に電話をかけてみたところ、「電波の届かないところにいます。」という音声が聞こえただけだった。

「僕達だけに通じる携帯か…何で繋がるのかはわかんないけど、これは凄く便利かもよ?」

面白そうに笑うと、谷中は携帯を軽く握り締めた。

「便利も便利、とんでもない代物やでこれほ。」

「ヤリ、と北は悪びい表情をつくる。
携帯の存在しない時代、これさえあれば連絡もとりたい放題、密
書だつて送りたい放題だ。もし奪われても、使い方などまず解らな
いだろ?」

「つまりは俺達の強みになるわけだ。バラバラになる事があつた
としても、連絡はとれる。」

小川の言葉に皆は頷き、サツと携帯を懐にしまじこんだ。

「でもさ、充電とかどーすんだ?」
「」「……。」「」

木下の素朴な疑問に、一齊に沈黙が降りる。

「今は電池満タンだけど、多分絶対減るぞ?」
「チロ、それは気にしない方向でいくぞ。」

梅本は低く呟つと、木下の肩をポンポンと叩いた。

「……ま、そーだな。」

考研よ、いいのかそれで。

携帯の謎をあつさり放棄して、六人はおやつを切り上げて訓練場
へと向かつたのであつた。

武器製作の注文を出して、暫く経過した。

相変わらず訓練は度を超したハードさだったが、六人は徐々に体力や反射能力が「平凡」から外れていくのを感じていた。

「背後から殴りかかられたのを避けることが出来る学生なんて、私達くらいでしょつね。」

攻撃をかわしながら、山中は苦笑する。

「ホントやわ。体育の評価なんか、いつも一やつたのに。」

北も俊敏に動き回る。

最初の頃は喋る余裕なぞ皆無だつたが、今ではちりほりと会話が出来るよつになつた。

随分飛躍的な進化である。氣性の荒い木下や梅本なんかは、たまに隙を突いて反撃を仕掛けることもしばしばあつた。

「まあ、皆本当によく頑張っていますのね。」

むさ苦しい空間におじとやかな声がして、訓練中の兵士達はぴたつと動きを止めた。谷中が首を傾げて、声の主に問い合わせる。

「お濃ちゃんだ。どしたの、こんな男臭いといひ。」

艶やかな菖蒲色の着物を纏つた濃姫は柔らかに微笑むと、足早に六人に近寄ってきた。

「あら、わたくしだつていつもお部屋に籠りきりじゃありませんわ。今日は素敵なお知らせを持ってきましたのよ。」

「素敵なお知らせ？」

六人は顔を見合せ、あつと勘づく。

「 「 「 神器ーーー」 」 」

彼等の嬉しそうな顔に、濃姫も笑つて頷いてみせた。

「 殿、皆様方をお連れしました。」

濃姫に連れられ、六人は見覚えのある部屋に案内された。重臣達に紹介されたときに入つた、あの広い部屋だ。

信長の前に、それぞれ緋色、金茶色、群青、若草色、山吹色、漆黒と六色の絹がかけられた物が六つ、白木の台に乗せられていた。

その隣には、神器を拵えた妖怪達が各自きちんと座している。少し様子が違う点と言えば、鬼と鴉天狗以外の妖怪達が人間の姿に化けていることぐらいだ。

「 来たか。」

信長は六人の顔を一人ずつ確認すると、彼等に神器と向かい合う位置に座るよう指示した。

「 貴様等の神器が出来上がつた。早速名付の儀を行つぞ。」

何やら大層な言葉に、六人は眉を寄せる。それを見て、信長の隣に座つた濃姫が説明を付け足した。

「 名付の儀と言つても、そんなに構えなくてよろしいのよ。神器

に名をつけることと、皆様の大切な仲間としてお迎えするだけですわ。」

すると、今まで黙っていた妖怪の一人、紅蓮の髪をした鬼女・紅葉がおもむろに口を開いた。

「あの化け猫の言つ通り、随分と風変わりな子達だ。名付の儀すら知らぬとは。」

深紅の瞳がジロリと六人に向けられた。

「斯様な幼子等がこの神器、扱いきれるのかえ？」

薄笑いを浮かべて言つのは、濃紺の着物を纏つた女。袖から覗く手の甲には鱗が見えた。蛇体の妖怪、磯姫だ。

見下しきつた態度に、六人はむつと顔をしかめた。

「確かに俺達は普通とは違うかもしれないけど、あんた等に馬鹿にされる必要なんか何処にもないな。」

負けじと梅本は妖怪達を睨み返した。

「あんまり余計なこと言つとしたら、評判悪なるんとちやう? どうでもエエから、はよ始めてや。」

北は皿を細くして、どうでも良わざつな態度で言つた。

「全くだ。紅葉、磯姫……余り遊ぶな。この方々に失礼ぞ。」

一つ翼を羽ばたかせて、鴉天狗の東風之が一人に釘を刺す。

「名を与えることで存在を固定し、己の魂の片割れとして共に戦う……。」

「名をつけた神器は大切なもののじゃ。大事に扱われよ。」

目付きの鋭い、黒い長髪の男に化けた大百足の新月、ずんぐりした体型の老人に化けた野槌の鎌岳が次々に言つ。

「わあ、どうぞ。君達の分身の御披露目だ。」

幼い少年の姿の裂空が手を伸ばし、六つの神器を指し示した。人は期待に高鳴る胸を押さえ、それぞれの絹に手を伸ばしたのであつた。

十四の嘶 「最優先事項は欲しいもの、疑問は「の次」の次。」（後書き）

「うおお、なかなか終わらん……。

次ももう少しこの話が続きそうですが、すみません。

早く進めたいんですけどなあ……。そういうことになりますね。

十五の斬 「名前をつけてこれ挑め、でもお手柔らかにお願いします。」

絹を掴んで一気に引っ張ると、隠れていた武器の形が露になる。その途端、おお、という感嘆の声が六人の口から漏れた。小川の前には、真紅の柄と赤銅に似た色の刀身を持つ大太刀。柄の長さに比べ、刃の部分が異様に長い。

「……凄いな。」

燃えるような色合いで、小川は溜め息を混じらせながら言った。

梅本の前には、金茶色の柄に茶色の打撃部がついた大槌。その大きさは、彼の身長を軽く越えている。

「つてか、持てんのか俺。」

ゴツくて重そうなハンマーを、梅本は不安そうに眺めた。

北の前には、鮮やかな群青と水色の旋棍。先の部分には鮫の歯のようなギザギザが付けられていた。

「まさかの近接戦かいな。」

一番不釣り合いだ、と北は苦笑した。

谷中の前には、黄金に輝く大きな弓。だが、不思議なことに弦が張られていない。

恐らく、何か仕掛けがあるのだろうか。

「うーん、『ージャス。』

派手だが品の良い装いに、谷中は満足そうだった。

山中の前には、身長の半分くらいはあるだろう巨大な扇。手で持つ部分が少し長く、優しい萌木色が美しかった。

「何だか、軽そうな武器ですね。」

某有名な三国志ゲームに登場する武器を思い出したのか、山中は一ヤツと笑つてゐる。

木下の前には、艶のある黒い棒。中程には、きらびやかな螺鈿でうねる大きな百足の細工が施されてあつた。

「長つけえ……俺、大丈夫かな。」

木下は自分の身長を気にしながらも、キラキラした田で神器を見つめた。

「名をつける。」

信長が命じると、彼等は一斉に手を伸ばしてこの神器を掴んだ。どんなに重そうでも、手にとれば扱いやすい重さになるのを感じて驚く。

そして、頭の中に一つの言葉が弾かれるように浮かび上がった。

「…陽炎丸。」

小川は紅の太刀に。

「地国天にする。」

梅本は大地の色を宿す大槌に。

「凧鮫や。」

北は海のような旋棍に。

「電王だね。」

谷中は天を裂く雷の鳴に。

「舞風、です。」

山中は吹き抜ける風を起こす扇に。

「影蜈蚣ッ！」

木下は夜を模した棒に。

名前を与えた瞬間、六人の身体から「能力」である炎や雷が溢れ、神器に炸裂した。

「うわあああ！？高い買い物がああ！？」

「え、詐欺？詐欺なのこれ！？」

予想もしていなかつた展開に、大パニックになる六人だが。

「安心しろ、貴様等の神憑きとしての力が神器に宿つただけだ。」

呆れたように信長は言い、笑いを必死で堪えている妖怪達に軽く会釈した。

「態々のお越し、痛み入る。」

「何の、新鮮な反応を久しぶりに見た故、こちらも楽しめたわい。」

鎖石が面白そうに言い、妖の彼等は立ち上がった。

「せいぜい精進なされよ。我等の拵えた武器…無駄にならぬよつて」

「

東風之は六人に、微かだが微笑みかける。

「武運を祈る。」

「君達の噂が聞けるの、待ってるよ。」

新月と裂空は、力強い励ましの言葉を送る。

「それでは、これにて御免。」

「おさらばえ、人の子等……。」

紅葉と磯姫がそう言つやいなや、たちまち妖怪達の姿は溶けるようになってしまった。

「……び、びっくりした。」

妖怪達を見送り、六人はホツと胸を撫で下ろした。

せつかぐの武器が壊れてしまつたと、ヒヤヒヤしていたのだ。

「いちいち驚くな、鬱陶しい。」

「殿、さつきのは殿が悪うござりますわ。」

面倒くさそうに溜め息をつく信長だが、濃姫に手を叩かれて、うつと言葉に詰まる。

「さう言えば、信兄の神器の名前って……国重？」

木下が期待に満ちた顔で尋ねると、信長は得意気に笑つてみせる。

「ほお、よく知っているな。いかにも、俺の神器は黒炎・国重だ。

「あー、魔王っぽい魔王っぽい。」

「似合にすぎだら、期待を裏切れませんな。」

いかにもっぽい文字の並びに、彼等はストレートな感想を述べる。

「…それは褒めているのか?」

「…もうちース。」

テキトーな答えを信長に言つて、六人はそれぞれ神器を掴み上げる。

「早速、訓練開始ですね。」

山中は舞風を一撫として、サッと立ち上がった。

「オレ、コイツのこと気に入つたぞつー。」

「危ないから止めるかい！」

はしゃぐ木下は、気合いたっぷりに影螺旋をぶんぶん振つて、梅本に怒られていた。

「というわけで、信兄さんありがとね。僕達頑張るよー。」

弾んだ声で谷中がそう言い、六人はドタバタと喧しい足音を響かせて部屋から出ていった。

「……成長したものだ。」

その様子をしみじみと眺めながら、どこか満足そうに信長は呟く。
きっと、彼等はこれからもっと成長してゆくだろう。まだまだ未知数の能力だが、いずれ周囲を凌駕する武人になる。
信長はそう思わずにはいられなかつた。

神器をひつ掴んで訓練場に登場した六人を迎えたのは、利家、勝家、光秀の顔馴染み。

「帰ってきたな。」

一ヤツと含み笑いをする利家に、嫌な予感がする六人。

「何で皆がここにおんねん。」

顔を歪める北に、勝家がのんびり答える。

「神器の……訓練を、してやるうと……思つてな。」

六人は顔を見合わせ、納得した。

確かに餅は餅屋、神器の扱いに長けた者に教えをきいた方がいい
だろう。

「あの、私達では」不満ですか……？」

悲しそうな顔で問われては、はこやつですなんて言えない。

「 「 「 お手柔らかに……。」 」 」

物凄く気合いが入っているように見える教官の顔を、冷や汗ダラダラで眺めて一言。

もう言つしかなかつた。

「何してゐるー? もう少し踏み込め!」

「膝をつくな……まだ 休ませんぞ……。」

「田を閉じないで! 視界を閉ざせば、避けられませんよ!」

1対2のツーマンセルで挑むが、六人は片腕一本で軽くひねりあげられてしまつ。

片や神器、片や練習用の武器。なのに手も足もでない。

一番大変そなのは谷中だ。

彼女の神器は弓だが、弦が張られていない。どうするのかといふと。

「 まわか……雷を弦にするなんてね……。」

呻くよつこ谷中は言つて、必死に力のコントロールをする。

雷の能力はコントロールが非常に難しきようで、調整を行ひながらも攻撃をしなければならない。

「 つおー? おわあー?」

梅本はでかいハンマーの扱いに四苦八苦、それに振り回されいる状態だ。

「どー やつて… 使つねん、『コレッ！？』

「私もわからないです…！」

北や山中は、あまり見慣れない形状の武器に、どうすればいいのかわかつていな。

「イテッ、ひょ、タンマタンマ…？」

「……無理、だ…！」

小川と木下も同じ、武器を持つての戦い方なんて一向にわからない。

しかし鬼教官三人は、習うより慣れろとばかりに彼等を打ち据える手を弛めない。

訓練場には、痛そうな打撃音と六人の悲鳴が始終響き渡った。

十五の巻 「名前をつけてこれ擱め、でもね手繋りかどお願いします。」（後書き）

やつと武器編終わつた――――――。

いよいよ主人公達が尾張から出よつとします。

でもその前に、ちょっと番外編を書きたいと思いまして。

番外編の前編はもつあげてますんで、よろしければどうぞ――。
ちなみに「旋棍」はトンフラーと云う沖縄の武器です。
んでもつて「影蜈蚣」は「かげ」しょ「」と読みます。

十六の嘶 「思い立つたら即実行、つて無理だろ準備とか余裕あるから。」

神器の訓練を朝から晩まで重ねること数週間。

やっぱり六人の肉体変化は著しく、自分の身体ながら気味悪さえ感じていた。既に一端の「武人」と化し、一兵卒では相手にならないところまで成長している。ああ、何といつレボリューション、これぞトランスフォーマー。

やはり異世界に落ちたことや、自分達が少し変わった「神憑き」であることに、関係があるのかないのか……。憶測が彼等の間を飛び交うが、依然答は闇の中。

「そろそろいいかなーとか、思つんだよね僕。」

夕食を吸い込むように食べた後、ポツリと谷中が呟いた。

「……何がいいかなー、なんだ?」

一人酒をチビチビやりながら、小川が聞き返した。

「ん?ここから出るの。」

谷中は階に向き直り、更に続ける。

「もう大分神器使えるようになつたし、馬だつて普通に乗れるし。いつまでもここに居るわけにもいかないでしょ。それに、もとの世界に戻るには、ゲームクリアが必要かもしけないんだよね?」

その言葉に、皆ハツとした顔付きになる。

「やうだつたなあ……。でもよ、仮にここから出るとして、その後どうするんだ？行く先々で、大名にケンカ吹っ掛けるわけにもいかないだろ。」

梅本は腕を組んで呟つ。彼の呟つひとも一理あるのだ。

「天下統一が条件つていつても、どうせやればえんやううな？武力行使……なんやろか。」

「たつた六人で、武力行使ですか……？」

北の疑問に、山中が不安そうな表情を浮かべる。
それはいくら何でも無理な話だ。

「でもよ、オープニングムービーで流れた前置きには、「自由なり方で天下を手にしてほしい。」ってあつたよな。色々なクリアパートーンがあるつてことじやねえの？」

思い出したように木下が言い、一つの仮説を立てる。
確かに、「天下」といっても様々な取り方がある。

「…まあ、クリア二三タよりつも、この世界をもつと見てみたいと俺は思つんだが。」

珍しく楽し気に小川は微笑み、空になつた徳利を置いた。

「たまには良いこと言つますね。私も、そう思つていたところでした。」

好奇心に瞳を輝かせ、山中は弾んだ声で賛成する。
現状をとりあえず楽しめ、それが孝研。

せつかくこんな体験をしてるのだ、まだ見ていない武将の顔を拝みに行くのも悪くない。

「そんなら決まりやな。いつ出る?」

「準備が整い次第、いつでもいいな。」

六人は期待に口元を綻ばせ、就寝の準備に入つた。

翌日。

「ここからお発ちになるのですか?」

朝食を持つてきたお世話係三人組に、彼等はその話をしてみる。

「そうだの……神憑きとしての力の積み上げにも、そろそろ外に出でみるのもよいおじや。」

ふむふむ、と義元は頷きながらお膳を置いていく。

「神憑きの方々があ使いになる能力は、実戦の中で初めて成長する」と聞いたことがありますわ。」

「実際に刃を交えなければ、能力は開花しないということですね。」

双子は納得したように言い、白湯を注いでいく。

「まずは信兄にはなさんといかんな。」

そもそもと和え物に箸を伸ばし、北はもぐもぐと口を動かしながら言つた。

皆は「べつと頷き、朝食を食べ始めた。

「ほつ、ほつから発つか……そろそろ言ひへてくる頃だと思つていて
や。」

朝食を済ませた後、六人は連れ立つて信長のもとを訪れていた。
彼は煙管片手に、くつろいだ格好で彼等を迎える。

「それで、馬の手配はどうする?」

「馬?」

信長の問いかけに、六人は首を傾げる。

「当たり前だらう。まさかその足でふらつべつもりだつたのか?」

バカかこいつら、と言いたげな表情で信長は六人を見る。

「いや……そこまでもお世話をなつてもいいものなののかと……。」

困ったよつて言つ小川に、信長は鼻で笑つ。

「たわけが……貴様等の馬を調達した程度で、簡単に揺りぐような
城ではないわ。」

そう言つながら信長は手を伸ばし、紙と筆をひつ掴んで何やら書
き始める。

「そうだな、長旅にも耐え、長時間走らせても息切れせぬ馬がいい

か。となると、並みの馬では務まらぬ……妖馬、それも鬼の血をひいているものがいいな。」

ぶつぶつと呟き、紙に書き込んでいく。

「ヨーバつて何だろな？」

「鬼つて言いましたよね？」

「なーんかヤな予感するな。」

信長の様子をジッと見守り、六人は顔を見合わせる。馬の調達をしてくれるのはありがたい。だが普通のが欲しいのだ、普通のが。

「……」んなものか。おい！

書いた紙、多分注文書であろうそれを折り畳み、信長は声をあげる。

すると、直ぐ様侍女が部屋に入つてくる。侍女は信長のから注文書を受け取ると、六人が声をかける間もなく退出してしまった。

「おお、他にもぐれでやる物があつたな。
「まだあるの！？」

武器と馬、この二つでも十分なのに、まだあるのか。谷中がぎょっと田を見開く。

「確か今日、届く筈だ……貴様等の戦装束よ。
「い、戦装束…？」

うわあ、と何とも言えない表情が六人の顔に浮かぶ。

「女郎蜘蛛の仕立て屋に頼んだものだから、かせざるものではないぞ。奴等の糸だ、置めば置むほど小さくなる。」

彼等の心配とはややはざめたことを聞いて、信長は一人楽しそうだ。

「戦装束か……めちゃめちゃデザインに不安があるのはあたしだけか？」

「いーや、心配すんなマンボウ、全員そうだから。」

北は肩を落として言い、梅本はそんな彼女の腕を軽く叩く。
魔王様直々のデザインだつたらどうしよう、といつのが心配のタネだつた。

若き頃からエキセントリック傾奇者であった信長、そんな彼から頂く装束……袖を通せるか不安である。まあ、そんな彼等の心配はさておき。

「早速旅支度をしていい。資金の心配はするなよ……大人しく頼つておればよいわ。」

煙管の灰を叩き落とし、信長は悠然と言つた。

「信兄つてさ、意外と良いい奴なんだな！」

「意外と、は余計だ。」

「ことじと嬉しそうに笑う木下の額を、信長は容赦なく指先で弾く。

「何から何までお世話になつてしまつて……でも、正直助かります、ありがとうございます。」

痛い痛いとペイペイ言つ木下を、梅本が掴んで引きずつて行くのを後日に、山中は深々と頭を下げる。

「なに、タダの暇潰しよ。装束が届いたら呼んでやるから、それまで城内で必要な物でも物色してるのがいい。」

素つ氣なく言い捨て、信長はそっぽを向いた。

六人はそんな信長の態度に苦笑しながら、彼の部屋を出ていった。

そこから、城内を練り歩いて支度を整える。

まずは一通りの物が入る葛を六つ。

火打ち石、折り畳み式行灯、万能小刀、薬入れと薬、着替え……。

「携帯やすぐに使うかもしねいものは、専用のポーチを作つて、身に付けておいたほうがいいですね。」

山中の提案に、もつともだと頷き、お世話係の双子に裁縫のお願いを出す。

裁縫には無縁の現代人、快くOKしてくれた双子に感謝しなければならない。

そうこうしてると、勝家がのつそりと現れ、戦装束のお届けを知らせてくれた。

「信長様が……呼んで、いらっしゃる……。」「来ちゃつたぜマジで。」

ちょっと不安そうな口調で、梅本が呟いた。

しかし自分専用の戦装束、見たくない筈がない。

期待半分、不安半分な気持ちで、彼等は勝家の後にについていった。

襖を開けると、畳の上に広げられた鮮やかな衣装が畠に飛び込んでいた。

「……これ、僕達の？」

畠を白黒させて、谷中は呻くように囁つた。

「ああ、そうだ。なかなか良いものだね。」

手近な一枚を掴み上げて、信長はサッと広げてみせた。予想通り、派手だ。

「……とりあえず、着てみるか……？」

せっかく用意してくれた装束を、袖を通さぬまま葛にしてしまってしきつのも憚びないので、小川の一時に頷く。

「きっと……似合つ。」

「……やとえんやけどな。」

勝家の言葉に、北は力なく答えて。

「これ、けつこうカッコイイな。オレ、気に入つたぞ！」

『機嫌に言う木下の衣装は、漆黒とくすんだ赤の一色』で、形は『西遊記』に登場する孫悟空のよつだ。

「「」の虎皮？ っぽいのよく目立つね。僕、タイガースファンの人から喜ばれるかも。」

山吹色の上衣に、白いズボンに似たものを穿き、腰には虎皮の覆いを巻き付けている。

確かにタイガースファンが喜びそうな出で立ちだ。

「そこそこ動きやすい服ですけど、私の柄ではないような…。」

山中は、鶯色の着物に桜色の帯、松葉色をした細身の袴。これは意外と可愛らしい装いだ。

「……何か、どういうべきやろ、コレ。」

北は濃紺のノースリーブ型上衣と、膝丈のズボンに脛当で、そして碧瑠璃のケープを纏う。まるで忍者のようである。

「いやー、「」りや毘沙門天みたいだな。」

梅本は明るい茶色と黄土色の衣装…なのか？

彼の言つ通り、形は七福神の一人、毘沙門天を連想できる。

「……赤い。」

小川は紅と朽ち葉色の、神主だか平安貴族だか、そんな形の衣装だ。

もとから黒が好きな彼には、恥ずかしいくらい派手である。

「さすが、女郎蜘蛛の見立てだ。似合っているではないか。」

信長はじ満悦そうに六人を眺め、隣の勝家もうんうん、と頷いている。

「これもメイドイン妖怪なわけやな。」

どおりで伸縮性やフイット感がハンパないわけだ、と北は納得した。

これで旅支度に必要なものは、だいたい揃った。あとは、移動手段である馬の到着を待つばかり。

十六の嘶 「思い立つたら即実行、つて無理だろ準備とかあやがれから。」（後

久しぶりの投稿です。

最近お仕事探しや体調不良で続きがHP出来ません・・・・。（泣）
お仕事も見つからないし、踏んだり蹴ったりです。

えー、衣装に関してはテキトーに想像願います、だつて難しいんだ
よ考えるの・・・・。

次回は『考研、旅立ちの日へ』ですっ！

十七の嘶 「旅つていっても、旅行とかじゃないか。」

更に翌日、城に馬が届けられたわけだが、何やらトントン拍子に物事が進んでいく。

それはともかく、戦装束に続く魔王様セレクト第一弾、馬を田にした六人は、目が点になった。

「これ…馬だよな…。」

「馬なんじゃないの?」

小川と谷中はポカーンとした顔で「それ」を見詰め。

「かつこいい!!スッゲエ!!」

「ヨーバつて、そういう意味だったんですね。」

木下と山中は田を輝かせて。

「何でもアリかよ。ま、もう慣れたけど。」

「あたしは…あの馬がええなあ。」

梅本と北は感心したように吟味を始める。

期待どおり、馬は普通じゃなかつた。

あるものは一本の角が生え、あるものは額にもう一つの田がある。ギラつく鱗のあるものや、明らかに顔が馬とはかけはなれたものもいた。

「これは妖馬。妖の…鬼の血をひく混合種です。なので持久力がとてもあって、長旅には最適なんですよ。」

異形の馬を引き連れた光秀が、化物馬を紹介する。
信長曰く、彼女は妖馬の扱いに長けているらしいのだ。

「人慣れは十分にさせてある筈なので… どれでも好きな子を選んであげて下さい。」

光秀はそう言い、遠巻きに妖馬を見ている六人を手招きます。
恐る恐る近寄ってきた彼等を、妖馬達はじっと見詰める。

「俺は……」いつがいい。

最初に手を伸ばしたのは、小川だった。
選んだ妖馬は赤みのある鬚に、口元からは白い牙が覗いている。
馬は嫌がることなく、小川に撫でられていた。

「見た目が凄いけど、意外に大人しいんだな。」

その様子に安心したのか、梅本も気に入った妖馬に近寄っていく。
彼が選んだのは、一本角の馬。

「あたしはこれやな。」

北は、鬚の代わりにヒレの生えた馬の首を軽く叩いた。

「僕はこの子にするよ。」

谷中は鱗のある、ワニに似た顔付きの馬を。

「私は、この馬を頂きます。」

山中は白い一本角の馬に歩み寄った。

「オレは」こつが好きだなつー。」

残る木下は、三つ目の黒馬をこにこしながら撫でる。
旅の相棒が決まり、光秀から妖馬の世話をもう一度教わりなおす。
これで後は荷造りをきちんと済ませれば完了だ。

六人が安土城を発つまで、あと少し。

「これはこにこに入るんか？」

「…火打ち石つてどうやって使うんだ？」

「瓢箪！ オレの瓢箪はつー？」

がやがや煩いことこの上ない荷造りタイムである。

お世話係の双子が作ってくれた、ウエストポーチらしきものに必需品を入れ、背負う葛には着替えその他諸々を詰め込む。
ちなみに、それぞれの神器はどうしているのかといつと。

「神器って何でもありますね。」

「だねー。こんなトコにしまえるとか、僕びっくりしたよ。」

山中、谷中の二人は早々に荷造りを終え、掌から電気と風を出現させる。

すると、そこからあの荷物としては大きさがあり得ないだらう神器が、スッと顔を覗かせた。

それぞれ能力を象徴する『モノ』から、神器を呼び出せるらしい。

「まるで召喚士になつたみたいだよ。」

「その内、召喚獣とか喚べたりしますかね？」

のほほんと話していると、梅本から手を貸してくれ、と情けない要請が出る。

それを軽やかにスルーして、慌ただしく動き回る仲間達を眺めていると。

「失礼しますね。」

「お濃ちゃん！」

ひょいと襖から顔を出した濃姫は、『じちや』になつた部屋を見て田を丸くした。

「『』めんな、今ちょっとHライ」とこなつてゐるから。」

着物を葛に押し込もうと苦戦中の北が、唸るよつと叫んだ。

「構いませんわ、すぐに済みますもの。少しだけようじい？」

散らかつた物を踏まないよつと氣を付けて、濃姫は六人に近寄つていいく。

作業する手を止めて、彼等は濃姫の周りに集まつた。

「どうぞ。これ渡しておきたくて……。」

彼女の手から六つ、小さな巾着が手渡される。

それはずつしりと重く、金属が擦れる音から、中に何が入っているのか容易に想像がついた。

「これ……お金、か？」

木下が巾着を握り、濃姫を見上げる。

「少し重たいけれど……必要なものでございましょう。殿とわたくしからの餞別ですね。」

「ひつひつ笑つて言ひ濃姫に、慌てて山中が口を開く。

「とんでもないです……」こんなに沢山、頂けません!」

巾着を返そうとするが、濃姫はその手を押さえて頑なに離さうとしない。

「受け取つて下さい。わたくしだつて、貴方達にはお世話になつたんですもの。それに、これは絶対必要になつてくるのですから……」

そこから無理です、受け取れ、といつやり取りが数回続いたが、ついに六人が根負けして恐縮しながらも巾着を受け取つた。

「どうしても申し訳なく思つなら……いつかまた、わたくしのお買い物にお付き合いくしてくださいな。」

濃姫はそう言い残して、部屋を出ていった。

六人は暫く巾着をジッと見詰めていたが。

「まあ、貰えるモンは貰つとか。」

「ちつたあ遠慮しやがれ、このど阿呆!—!」

あつさつと巾着をしまおうとする北の後頭部に、木下の拳が炸裂したのであった。

何はともあれ、荷造りも終了していよいよ出立の日が訪れた。

「今までお世話をになりました！」

「感謝の言葉もありません！」

信長を始め、城内から多くの見送りが来ていた。

「……精々努力して生き残れ。貴様等は元手がかかってるからな、その辺で死んだら殺すぞ。」

物騒な信長の激励に、引き攣った顔で苦笑した。
そこから口々に別れの言葉が、顔馴染みになっている重臣達や使人達から送られる。

「… そう言えば、義元さんの姿が見えませんね？」

あの能天気な元・公家の姿が見えないと気付いた山中が、辺りを見回す。
すると。

「ま、間に合つたおじやー！」

慌ただしく義元が双子と共に走り寄ってきた。

「「『わいざりせえふですねー！』」

双子の手には、何やら小さな包みが六つ。

「どうしたの、そんなにくたびれて。」

谷中が声をかけると、二人は息切れしながら六つの包みを押し付けってきた。中を開けると、大きなおにぎりが四つ入っている。

「…弁当、か？」

まじまじとそれを見て、小川が呟いた。

「お腹が空いたときにどうぞ。」

「特に木下様は必要なものでございましょう。」

双子はくすりと微笑んで言い、「丁寧に一礼する。その隣に義元が並んだ。

「まわりもむづしそしたら、今川家に戻るつもつおじや。そちらともうじでお別れ……達者で過ごせ。」

差し出された彼の手を六人は握り、妖馬に跨がった。

「…それじゃ……行つてきます！…！」

その言葉を残して、蹄の音も高らかに、妖馬達は一斉に走り出す。たちまち遠く離れていく六人の姿を見送り、信長は静かに息を吐いた。

「行つてしまわれましたね。」

「……ああ。」

濃姫が信長の顔を見上げ、そう呟いた。

「何故…配下におけるとなさらなかつたのです？」

あの六人を手放した理由を濃姫は尋ねた。
もし、彼等がいつか国中に名を響かせるようになるなら…信長の
前に立ち塞がるかも知れない。
そうなるなら、いつそ自分のものにしてしまつたほうがよかつた
のではないのか。

しかし信長は首を振り、ニヤリとした笑みを浮かべる。

「彼奴がどこまでやれるか、楽しみではないか。いつか俺と対峙する日が来るかもしれないな……それもまたいいだろ。その時は容赦せん。」

要するに、彼等の成長を楽しみにしているということだろ。濃姫はやれやれと溜め息をつき、苦笑しながら六人の走り去った方向を眺めた。彼等の旅路の無事を祈つて。

「ちょ、待つ、早い早い早い！…？」
「ストップ、じゃなかつた、もつとゆつくりだつづーの！…！」
「はよ走りや、鬱陶しいな……下手くや。」
「あのわ、何処に行くか考へてる？って聞いてないねー。」
「妖馬さんつて、普通の馬に比べるとつても早いですね…！」
「しまつた、おやつ持つてくるの忘れたぞつー。」

六人六色、アホなことを口々に言しながら、『氣の向くままテキト
ーに走つていく。
縦横無尽、しかし五里霧中。行く先は駆ける馬の氣の向くままテキト
彼等を乗せて何処へ行く？

十七の斬 「旅つていっても、旅行とかじゃないか。」（後書き）

やつと旅立てました！

ここまでくるのに結構時間がかかりましたね・・・・。

そろそろペースダウンが目立ちます、多分次があがるのも少し先になる予定です。

でも気長に待つてあげてください、ハイ。

ではまた次回！

十八の嘶 「実戦、そして人助け……戦国は気忙しいネ。」

さて、魔王様の城を離れて、この世界をふらつく旅に出た六人。颯爽と妖馬に跨がり城を出たはいいが。

「なあ、これから何処にいく?」

目的地など定まらぬ旅路だ、何処に行くかはその場のノリと勢いだけで決まる。

「一応、西にも東にも行けますけど……私は甲斐に行ってみたいですね。」

山中は片手だけで手綱を握り、器用に懐から地図を取り出した。絵の上手い谷中に頼んで作ってもらつた、特製日本マップだ。

「甲斐といえば、武田信玄だね。」

「お館様——! お・や・か・た・さ・ま——!」

谷中の一言に、木下が大はしゃぎし始める。
彼女の好きな武将の中には、武田信玄が上位にランクインしてい
るのだ。

「甲斐か……。俺は別に、何処でもいい。」

「じゃあまずは甲斐だね。」

小川がそう言えば、谷中がパシリと地図中の甲斐を指先で弾いた。
といふが、皆は北の一言に再び沈黙することになる。

「……道、誰もわからんやん。」

甲斐へ行く道を、人間を見つける度に尋ね進むこと数時間。今六人は、山越えの真っ最中だった。

「ここを道に沿つて行けば赤カブ村があるんだつけ?」「蕪木村だ。」

森林浴を楽しみながらボケる木下に、小川が村名を言い直した。

「そう言やあ、ちょっと前に道聞いた人が言つてたなあ。この辺、盗賊がよう出るって。」

唐突に、薄笑いを浮かべながら北が口を開いた。

「そうですね。何でも、集団で取り囲んで相手を襲うとか。」

山中の顔にも、ブラックな微笑みが浮かんでいる。

「確か倒せば金が貰えたよなあー!」

背後から何がが自分達をつけてくるのを感じて、梅本が聞こえよがしに叫ぶ。

「腕試しには丁度いいよね……そいつら。」

谷中がピタリと馬を止めるや否や、掌から出した雷から神器を呼び出し、振り向き様に矢を放つた。切つ先に帶電させた雷が、金色の尾を引き飛んでいく。

それを合図に、残る五人も次々に神器を呼び出した。そんな彼等の目の前にバラバラと現れたのは、襤襯同然の着物を着た男達。

「おまえらがこの辺を荒らす盗賊だなっ！！！」

影蜈蚣を構え、威勢良く木下が男達を睨み付けた。
下品な笑みを顔中に張り付けた男達は、六人の煌めく神器に目が釘付けになっている。

「大将、こいつら神憑きだぜ…あの武器、高く売れる。」

大将、と呼ばれた男は見上げるような巨漢で、質素な胴丸を身に付け、手には戦斧を握っている。

「いかにも、俺はここいら一帯を縄張りにしている大盗賊、黒蜘蛛様よー！テメヒラ、命が惜しけりやその神器を置いていけ。」

ガハハハ、と在り来たりな笑い声とセリフを吐き、盗賊・黒蜘蛛は完全に舐めきった目で六人を見る。

「黒クモ…？」

盗賊っぽい名乗りを上げる黒蜘蛛に、小川はボソッとその名を反芻する。そして。

「ダセヒ……片仮名で書くと尚ダセヒ…。」

「まあ、言えどるわな。恥ずかしい野郎やなーあいつ。大盗賊とか自分で言つちやつてるとことか特に。」

小川と北は、哀れみをたっぷり含んだ視線を向けた。

「しかもあのオッサン、全然クモっぽくないぞ。オッサン、名前変えた方がいいんじゃないのか？」

木下は親身になつて提案してやる。

当然、黒蜘蛛は額に青筋を浮かせて怒鳴つた。

「やかましい！ふざけた餓鬼共だ、神憑きがテメエらだけと思つな！！！」

黒蜘蛛の背後からコラリと立ち昇る熱。

「火の神憑きですか。でも……大丈夫ですね。」

不敵に呟く山中は、鋭利な眼差しで戦闘体勢に入る。

「そんじや、いっちょ腕試しと行こつか。」

「やっぱ見たいよな、自分の武器の具合つてヤツをさ。」

興奮を隠しきれない声で、唸るように谷中と梅本は言つた。

安土城で骨の髓まで叩き込まれた武術の成果、そして大切なパートナーである神器の実力、それを發揮するときが来た。

気持ちが高ぶるのは、やはり武人としての感覚が出来上がつてきただからだろうか。

しかし六人を「たいしたことない神憑き」としか見ていない盗賊達は、彼等の目付きが変わったことに気付かない。

今までか弱い獲物ばかりを狙い、それで成功を納めてきた連中である。加えて自分達の大将は神憑きで、敗け知らずときた。

その自信の上にあぐらをかき、ふんぞり返っているのは当然のことだ。

「やつちまえ！」

蛮声が響き渡り、一斉に男達が襲いかかって来る。黒蜘蛛の他にも神憑きがいるようで、風が巻き起こり、雷が弾ける音がする。

「れつ・ぱーりー！ー！」

ＹＡ　ＨＡ！と某六爪流の使い手の掛け声を真似して、真っ先に木下が突っ込んでいく。

「いひ、勝手に走るなって！」

慌てて梅本が後を追い、残る仲間も続いて走り出す。

「死ねえええ！」

白刃を振り下ろそうとする男の顔面田掛けて、木下が影蜈蚣を叩き込む。

所々鎧の浮いた刀は、しなやかで強靭な打撃に脆くも折れ、男は手加減ナシの一発に引っくり返った。

さらに影蜈蚣を振り上げると、背後から真っ黒な影がぬうっと立ち上がり。

「ぶつ飛ばせつ！」

楽し気な指示に従い、そこからドスドス飛び出る影の槍が、次々と盗賊達を突き飛ばす。

意氣揚々の木下だが、その背後を雷の刃が狙つ。

「後ろからは感心せんなあ。」

雷の神憑きである男の真横から、旋棍・廻鮫の強烈な突きが脇腹に打ち込まれ、同時に水流が放射線状に唸りを上げて飛ぶ。

「さんきゅ、マンボウ！」

「おう。にしても楽しいなあ、コレ。」

ニヤーッと二人は口元を歪ませ、次なる獲物を探した。何やらスイッチが入った彼女等を眺めつつ、山中、谷中の一人も問答無用で暴れていた。

「いやあ、Sモード入っちゃったねえ……ほいつとー。」

矢を無駄使いしたくない谷中は、腰に吊り下げた小袋に入っているパチンコ玉程度の鉄球をビシビシとぶつ放つ。

それだけなら大したことないが、放つ玉全てが稻妻を纏つて飛ぶのだ、当たればタダではすまない。

たとえ接近されても。

「まずは何ボルトから行こうかー?」

大弓・電王がスタンガンよろしく、バチバチと青白い電流を相手に叩き込む。

「目障りですよね、私殺意が湧いたらいました。」

山中は鉄扇・舞風を開き、鎌鼬と共に、踊るように盜賊を切り裂いて行く。

開けば刃に、畳めば鈍器にもなるこの神器は、その可憐な見た目にもよらず、十分に頼れる武器だつた。

巻き起こされた風は多くの旋風となり、吹き荒れる。

「……死なせたりしないだらうな。」

「そいらへんはわかつてんじやないか？あいつらだつてバカじやないから。」

黒蜘蛛の前に立ち、小川と梅本はやれやれと肩をすくめた。

「な……何だテメヒらーな、何者なんだ！？」

ポイポイ宙を舞う呆氣ない子分達の姿を目の当たりにし、先程までの自信が崩れた黒蜘蛛は、上ずつた声で叫んだ。

「……何者と言われても、返答に困る。」

「だよなあ。考古学研究会メンバーですつて言つても、わからないだろうし。」

一人は顔を見合せ、うーんと悩む。

「…それは後に回すか。」

「まずは、コイツの始末からだな。」

長太刀・陽炎丸と大槌・地国天を構え、黒蜘蛛を見据える。

「ほつ、ほぞけ！！」

余りにも余裕そうな表情に、黒蜘蛛は焦りと意地からか戦斧を掲げ、猪のように突進してきた。

ブン、と空気を切つて戦斧が振り回される度に、炎が勢いよく吹き出す。

しかし。

「オッサン、大振り過ぎだ。」

攻撃をかわして、地面に屈み込んだ梅本が、下方から地国天を振り上げ戦斧を弾く。

金属同士がぶつかる耳障りな音が響き、黒蜘蛛の足下からせり上がる土の壁が彼のバランスを崩した。

「王子、いいぞー！」

バネ仕掛けの床に引っ掛けたように、宙に放り出された黒蜘蛛。そこに同じ手法で飛び上がった小川が、陽炎丸を抜刀して迫る。何事か喚く黒蜘蛛から、炎が沸き上がり小川を狙うが。

「威力は……俺達よりも下か。」

陽炎丸は逆にその炎を刀身に取り込み、黒蜘蛛を一刀の元に切り捨てた。

鮮やかに着地した小川の後ろに、ドシャツと落下する巨体。

「オレ達の勝ちだつ……！」
「良い出だしやな。」

うず高く積み上げた盗賊の上に立ち、木下が北とハイタッチを交

わす。

「ああ、スッキリしました。」「同じく以下同文。」

武器の汚れを拭いながら、山中と谷中は晴れやかな顔で笑いあつ。彼女達の周辺は氣絶した盜賊達がバタバタと倒れ、その中にこそやかに立つ女四人は、さぞかしあつかないだろう。

「皆、大怪我させないだろうな?」

「俺達が言つたが、それを……?」

多分、一番相手に大怪我をさせているだろう。自分達を棚に上げて確認をとる梅本に、小川が静かに突っ込んだ。

「大丈夫だつて、かるーい切り傷だ切り傷。」

あつけらかんと梅本は言い放ち、軽い蹴りを黒蜘蛛の脇腹に入れ る。

「う……何で……こんな餓鬼が……」ここまで高位な力を持つてる……?」

身体を苛む痛みよりも、驚きのほうが強いのだろう。黒蜘蛛は呻きながらもそんな言葉を吐き出した。

「あたしらの知つたことか。強いて言つなら、魔王様のお陰かな。」

冷たい視線で黒蜘蛛を見下ろし、北は鼻で笑う。

「魔王……ー?ま、まさか……六武衆つてのは……テメヒらのことか

…一…？」

「ふくむしゅう？」

なんだそりや、と顔を見合せる六人。

「ま、魔王の戦に…いきなり現れて…何人もの敵兵を…叩き潰し…将位の神憑きですら、一撃で倒した…六人の神憑き…一…？」
「…いやいやいや、違うから。かなり無理矢理感溢れてるから、それ。」

物凄く尾ひれが付きまくつた話に、六人は手をぶんぶん振りながら否定した。

だが、当たらずと言えども遠からず。

「多少は当たりですけどね……。」

山中は苦笑いを隠せない。それもそうだ、まさか自分達に『六武衆』なんて、大層立派な通り名が付けられているとは思わない。黒蜘蛛と言えば、とんでもない連中に喧嘩を吹っ掛けてしまつたと、顔を真っ青にして縮こまつてゐる。

「で、どうするコレ?埋めるか?」

「アホか、埋めてどーすんだよ。」

「じゃあ、狗の餌にしますか?」

「それも却下だ!」

黒蜘蛛を取り囲み、冗談だか本気だかわからないやり取りを繰り広げる。

「わ、わ、悪かった!許してくれ、頼むこの通りだ!…もう足を洗う

から、命だけは……」「

地面に額を擦り付けて、黒蜘蛛は必死に謝りたおした。

「そんなの僕達に言われてもねえ……じゃ、洗えばいいんじやない？ その方が良いし。」

興味無さそうに叫びつ谷中に、黒蜘蛛はとりあえず死ぬことはないよつだ、と胸を撫で下ろした。

「ど、どひひで……アンタ達の腕を見込んで、頼みたいことがあるんですけど……。」「……はあ？」

恐る恐る六人を見上げて、そつ切り出す黒蜘蛛に、彼等は首を傾げた。

「あれやな、例の小屋って。」

藪に身を隠し、六人は草や苔でカムフラージュされた低く小さな小屋を観察する。

「あの中に、得体の知れないモノがいるっていう話でしたよね？」

山中は藪から少し身を乗り出し、巧みに隠された小屋を眺めた。

「さて伊賀出身の殿下さん、あの小屋は何小屋ですか？」「忍小屋

じゃない？」

木下の問いに、谷中があつさり答える。

忍小屋

文字通り忍が使う小屋である。

普通の山小屋のようなものもあれば、この小屋のように隠されたものもある。中には忍の使用する武器や薬なんかが置かれているが、その場所もちよつとやそつとで見つかる所はない。

で、黒蜘蛛の頼みとは何なのか？

それは……。

「ちょっと前に、偶然子分が見つけたらしいこの小屋…その中に入った奴が死体で見つかって、だつけ？」

「……以後、三人の子分が同じ日に遇い、内部を捜索したが誰も見当たらず。」

梅本と小川が黒蜘蛛に聞いた話を繰り返す。

「で、コレは化け物の仕業やと思うから、強一いあたしらに、中にある化け物を退治して欲しい、か。」

最初はめんべくさいと断つた六人だが、礼は弾むところ葉にころつと態度を変え、俄然やる気で調査を始めた。

旅の心得その1、金の執着は貪欲に意地汚く。

「忍小屋つてことは…中にいるのつて多分、忍さんでしょ？」「化け物ぢやうやん。」

山中と北は呆れたよつて言い、盗賊達の意外な臆病さを嘲笑つた。

「……まずは中に入らないとな。どうする、梅が先頭を切るか？」

「何で俺なんだよ。」

「お前の武器が一番デカい。忍の武器なら小さいから、十分ディフェンス面では頼りになる。」

小川はもつともらしいことを言い、ジーツと梅本を見る。ところが、谷中が異論を唱えた。

「そうだね。でもはたして武器は本当に小さいかな？ 神憑きなら、武器の大きさなんて関係ないんじゃないの？」

「…………あ。」「」

その不穏な発言に、皆は一斉に彼女の方に顔を向ける。うつかり失念であるが。

「梅ツ、お前なら出来る……」

「やれば出来る子だお前は……」

「つむせえ……遠巻きに応援すんなテメHラ……」

ちょっと離れた場所から、フレー、フレー、と手を振る仲間達に、苛つく梅本は怒鳴った。

勿論小声でのやり取りだ。で、しばらくの間、行け、嫌だの言い合いか続き、結局「赤信号、皆で渡れば怖くない。」作戦に落ち着いた。

つまりは、全員でそろそろと近付いて行くところだ。

余計に危険ではないのか、考研。

「つむかさ、もし忍ならもうとつぐに感付かれてんじゃねーの？」

「……もつ何も言つた、ワケわからなくなる。」

木下から田を反らし、梅本は溜め息をついた。

全員で固まり、そーっと、そーっと……。攻撃、未だ来ず。

先頭の梅本が、小屋の入り口らしきところの草を細心の注意を払つて退ける。やっぱり、攻撃は来ず。

そこを押し合い圧し合いしながら、覗き込むと。

「怪我人……怪我人！？」

粗末な壁にぐつたりともたれ掛かる黒装束が見え、血の染み込んだ土の床が視界に飛び込んできた。

十九の嘶 「飯喰えは 元気になるなる 忍ない。」

慌てて六人は駆け寄り、動かぬ黒装束の身体を抱えた。

「三十九さん薬一早く薬用意して！」

「マンボウと王子と梅はお湯だぞつ！」

谷中と木下が同時に叫び、黒装束の上半身と覆面を引ん剥ぐ。現れた顔は、自分達より年下であらう少年。

「応急措置はしてあるみたいですね。」

傷に軟膏を擦り込みながら、山中は素早く具合をチェックする。

「そりや忍ならぬ。チロちゃん、包帯そつちに大きいのあつたつけ

「あるべー。カラシもいるよな。」

谷中に包帯を渡し、更に木下は折り畳んだサラシも引つ張り出す。

「え——つとお——……あつた、鍋！」

梅本は小屋中をガサゴソして隠された鍋物を見つけ。

「水はこんなもんやな… 王子、火。」

「わかつた。」

能力を使用し、北は水を入れ小川は火を起こす。

旅の心得その2、怪我の対処はテンポよく。

「よし、出来た！！」

「手当て完了！！」

「お薬も十分足りましたね。」

綺麗に包帯を巻き、満足げに手当てチームが頷く。

「いっちはみお湯沸いたぞ。」

「……部屋も暖まるな。」

「白湯でも飲ませるか？」

湯沸しチームもOK、少しづつ小屋の内部が暖まってきた。

「…………。」

「あ、起きた。」

微かな呻き声が聞こえ、少年が目を覚ましたことに気付く。

全員で周りを取り囲み、もしものときに備える。

少年の虚ろな目が、ぼうっと彼等の顔を捕え、ハッと光が戻る。

「…………？」

「そり押さえろ！……！」

暴れだそうとする少年を六人がかりで押さえ付け、素早く彼の口の中にサラシを突っ込み舌を噛み切られないようにする。

モゴモゴ呻き、シタバタする少年に、六人は代わる代わる声をかけた。

「……落ち着け！」

「何にもしないからやー。」

「あたしら敵ぢやうでー。」

「傷に響くよー。」

「暴れないで下さーー！」

「オレ達が手当したんだぞーー。」

必死に話しかけて、何とか理解してもらおうと努力する。やがて疲れが出てきたのか、少年は息を切らしながら動きを止めた。

「ふう……もう暴れるなよ。頼むから。」

流石に全力で押さえ続けるのは、六人がかりでもキツい。梅本は溜め息をつき、少年に言い聞かせるよつと囁いた。

「オレ、飯の用意する。お湯もあるけどだし、貰ったお握りで雑炊でも作るわ。」

少年の足から手を離し、木下は湯気の立つ鍋に向かった。そして全員分の葛からお毎御飯のお握りを出すと、沸き立つお湯の中に全部放り込む。

「たしか味噌は……あつたあつたーー。」

「何で持つてんだお前は。」

用意周到とはこのことだ。木下はウエストポーチタイプの袋を漁ると、味噌を入れた袋を掘み出した。

「これな、凄いんだぞ。乾燥させた味噌をタブレットにしてるんだ」とー。」

袋の中から摘み出したのは、成程確かに味噌タブレット。これを鍋に入れ、かき混ぜて溶かすと……。

「出来たー！名付けて「味噌が効いてるねでも具がないのがちょっと悲しい雑炊」だ！！」

「タダのねこまんまじやないのかそれ。」

時々入る突っ込みをスルーした木下は、葛の中に入っている飯セットを取りに小屋の外に出でいった。

「もう暴れない？」

じつと自分達を見る少年と田舎を合わせ谷中が尋ねると、少年は暫くの躊躇の後、微かに頷いた。

「よし、じゃあ外してあげるね。」

手を伸ばし、口に突っ込んだサラシを引き抜き、同時に押さえつけていた身体を離してやる。

少年は山中に背中を支えて貰いながら、ゆっくりと上体を起した。

そして何か言おうと口を開いた時。

「くわいらこの梅干しとヤード野郎！！テメエらなあ、自分の持ち物ぐらじちゃんと整理しやがれ！！茶碗と匙探すのに、どんだけ時間がかったと思つてんだああ！？」

足音荒く木下が入り込んできて、梅本と小川に茶碗を投げつける。

「ちよ、投げるなよチロ！」「

「…割れたらどうするんだ！」

「知るか！雨水でも啜つてやー。」

茶碗をナイスクヤッチして文句を言つ一人を一喝して、木下は目を丸くして自分を見ている少年にハタと氣付いた。

「お？何だやつと離してもうつたのか。ちよつと待つてろよ、今飯入れてやるからな。」

鼻歌を歌いながら、茶碗に雑炊をよそつていく。

それを後日に、少年は再び口を開いた。

「怪我の手当で、真にありがとうござります。私は……辰市と申します。」

忍の本名は明かさないのが決まり。

多分偽名だろうが、六人は特に気にした様子もない。自分達もそれぞれ名乗ると、木下が茶碗を各自に手渡した。

「しょーもない飯だけど、喰わないよりはマシだろ。怪我人は一杯喰えよな。」

山盛りに雑炊の入つた茶碗を渡すと、辰市と名乗った少年は丁寧に頭を下げた。

「ありがとうござります。」

「あんたがずーっと見とつた通り、毒なんぞ入つとらんからな。」

早速雑炊を搔き込み、北は匙で辰市の茶碗を示した。辰市は一つ

額ぐと、恐る恐る雑炊を口に流し込んだ。

「……っー。」

一口食べて、そこから一気にガツガツと食べ始める。その様子を見届け、六人も食事を再開した。

「それで、辰市さんは何処から来たんですか？」

食器を北に洗わせて、五人は改めて辰市の周りに集まる。山中の質問に辰市は、少し黙り込んだ。

忍という職業上、あまりペラペラと自分のこと喋るわけにはいかない。しかし。

「俺達は全国をフラフラ見て回る旅の途中でね。これから甲斐に向かつ予定なんだ。」

梅本の言葉に、辰市の顔に微かな反応が見えた。

「甲斐に、でござりますか……？」
（（（かかった。）））

一やりと全員が内心で笑つた。

恐らく辰市は甲斐の人間。これで甲斐への道案内が出来るといつわけだ。

最初は、シメあげた盜賊の誰かにやらせようと思つていたが、小

汚ないし見映えもよくないし、何より嫌な噂を立てられたくなかった。

「……もしかして、甲斐の人間か？」

小川が確認の為に聞き返せば、辰市は曖昧な態度をとるだけだ。それにムツと顔をしかめて、木下が囁みつく。

「何だよ、ハツキリしねー野郎だなつ！オレ達、別に盜賊とかそんなのじゃないぞ！変な勘ぐりすんな、アホ！」「

「それにや。あたしらは、甲斐への道がわからんで困ってるんやで？ちょっとくらいお礼してくれても、バチは当たらんと思ひナビ。

洗い物が終わつたのか、手拭きながら現れた北も応戦する。続いて谷中と山中の二人も。

「案内くらいしてくれてもいいと思つけどなー。僕達、そんなに怪しく見えるわけ？わー失礼。」

「だいたい貴方が何であろうと、私達には関係ないことです。」

女性四人に次々と責められ、辰市は困ったような顔で視線を迷わせた。

「いえ、あの、その……」

どうしたものか、と言いたげな辰市の肩を、ガシッと掴むのは小川と梅本。

「……当然、案内してくれるよな。」

「得たら返す、当たり前のことだよな。」

「イツと笑い、全員がジリジリ詰め寄つてくる。

凄く眩しい笑顔が、妙に怖い。

「わ、わかりました……やります、やらせて頂きます！」

怪我の手当を受け、飯まで食わせてもらつたのだ、立場上嫌だと言えない。

自分が忍という事実がちょっと困るが、恩を仇で返すと、「あの方」がきっとお怒りになるだろう。

溜め息について、辰市は目の前の六人を眺めた。

変か普通か、と聞かれれば、間違いなく「変だ」と答えるだろう。一体、どういう素性の人間だろうか。着物や持ち物の質から、農民や商人ではなさそうだし、かといって武士や忍でもないだろう。

「よし、それじゃ王子の着物貸してやれよ。」

「……何で俺のヤツなんだ？」

「お前の背丈が一番ぴったりっぽいから。」

梅本は辰市を指さし、小川はまじまじと自分と彼とを見比べる。

山中がそう言えば、小川はやれやれと言いたげに着物を取りに行く。

「葛は？」

「小屋の外の道です。」

「申し訳ありません……私のような者が着物をお借りしてしまって。甲斐まで辿り着けば、ちゃんと新しい着物を買いますので……。」

忍とは本来「汚れ役」である。それ故、汚らわしい者として扱われるのだ。

辰市は深々と頭を下げようとすると、即座に頭を押さえられた。

「何言つてんのさ、良いつてそんなに縮こまらなくつて。アレはもとからああいう性格なんだ、気にしなくつてもいいよ。」

谷中は苦笑しながら頭を上げさせ、辰市は田を丸くして彼女を見つめた。

「……何やつてる？」

「別にー。ほら、わざわざ渡す渡す。」

戻ってきた小川は、首を傾げながらも着物を辰市に投げ渡した。

「じゃあ、私達は外に出でこますので…。着替え終えたら呼んで下さいね。」

「一人とも手伝つてやれよー。」

女性陣は小屋を出てこき、残されたのは男三人。

「さて、じゃあ着替えるか。辰市だけ、お前身体は大丈夫か？」

「…無理なら手伝つそ。」

そんな一人の申し出に、辰市はぶんぶんと首を振った。

「や、そこまでして頂く必要はありません！私は大丈夫ですので…。」

「

随分と慌てたような様子を見て、一人はあっさりと引き下がった。そりやそうだ、会つて間もない他人に、着替えを手伝つてもらいたくはない。

辰市は出来るだけ素早く着替えを済ますと、自分の脱いだ装束を畳んでしまう。

「お待たせいたしました。」

「…そんなに待つてないがな。」

ぼーっとしていた二人が振り返る。

小川の着物は彼に丁度いい大きさのようだ。
そして、いいタイミングで外から呼び声がした。

「終わつたんか？」

返事の変わりに、辰市を連れて小屋の外に出る。

「おお、着丈も全然問題ないな。怪我は大丈夫か？」
「はい、お陰様ですっかり動けます。」

心配そうな木下に、辰市は微笑んで言った。

「あ、そうだ。案内してもらつ前に、黒蜘蛛のオジサンに報告しないとね。」

「えー…メンディ。」

思い出したように谷中が言つたが、周りは乗つ氣ではなさそうだ。
そのまま放つて行けばいいじゃないか、という意見があがるが、
谷中は首を縦に振らない。

「忘れたの？礼金」

「「「よし行こう。」「」」

最後まで言わないで、馬座に態度を変えた。
素晴らしい変わり身の早さである。

「あの、何の話でしょうか？」

辰市は聞こえ、北は手をヒラヒラさせた一言。

「うひのひの話や、気にせんとわ。」「

説明するのが面倒だし、何かやせこじこじになればもっと面倒
くさい。

辰市は北の素つ氣ない態度で、素直に呴き下がる。

「それじゃあ、黒蜘蛛さんのといひこたえましちゃうか。
「りょーかい。」「

生い茂る草や木を搔き分け、やつと自分達の馬が待機している場所に到着する。

荷物は馬の側に置きっぱなしだが、見るからに普通とはかけはなれた姿の「妖馬」に近付こうとする物好きは、そういうない。

「ただいまー写楽ー荷物番ありがとな。」「

真つ先に木下が三つ田の愛馬に駆け寄り、首筋を撫でてやる。

「写楽？」

梅本が聞き返すと、木下は嬉しそうに頷いた。

「いい名前だろー三つ田なだけに、写楽にしたんだぞっ！」

「僕は黄麟にしたよ。この子、麒麟に見えなくもないしね。ちなみに女の子だった。」

「私は白龍にしました。」

よじよじと、谷中と山中の二人も愛馬を愛でる。

「……俺は、赤兎にする。」

「何を張り合つてんだオイ。そしてまさかの赤兎かよ。」

その様子を見ていた小川がすかさず言い、呆れたように梅本が突つ込んだ。

「あたしは……そりやな、翡翠にするわ。ヒレが翡翠みたいやし。」

何やら次々にお名前披露会が始まつている。

「梅は何にする？」

「なんもん後でもいいだろ？がー！」

とりあえず話を進ませようと、苛々しながら梅本は急かすが、何やら服の袖を引っ張る力を感じて振り向いた。

すると彼の袖をくわえて、ジッと自分を見つめる愛馬の姿。妖馬は知能が高く、人語を理解出来るらしいのだ。どうやら自分

にも名前が欲しいらしい。

「あー、わかったよ！わかったからそんな目で見るなってー。」

溜め息をつき、梅本はしばらく考えたあとポツリと呟いた。

「……地角、でいいか？」

真っ黒な瞳がクルリと動き、馬はたちまち袖を離した。

「ほら見ろ、喜んでるじゃんか。」「

「はいはい、もう行くぞ。辰市さん、悪いな。」

地角を従え、梅本はなかなか話が進まないのを辰市に詫びた。

「い、いえ。私は大丈夫ですので。」

謝られたことに戸惑いながらも、辰市は六人の觀察を続けた。妖馬、しかもかなり質のいい妖馬を持っている。何処か良家の出身なんだろうか？

だが彼等のおちゃらけた雰囲気が、その考えをぶち壊す。辰市は黙つたまま、六人の後に従つたのであった。

十九の嘶 「飯喰えば 元気になるなる 応なら。」（後書き）

やつと更新できました！

ホントにペースダウンしちゃつてすみません・・・。

なかなか進めにくくて（汗）

次くらいから甲斐に入出来るかと思します。

一十一の嘶 「つづじって、漢字で書ける人いる?」

小屋を後にして、黒蜘蛛の元に戻る六人+忍。彼等の帰りを今か今かと待ちわびていた黒蜘蛛は、六人の後にひつそりと立つ辰市に目を向けた。

「ど、どうですかい、大将達。化け物は……？」

「ああ、それコイツ。」

梅本は辰市を指さし、黒蜘蛛は目を見張った。

「こ、こんなガキが！？」

仰天した声が響いて、六人はやれやれと肩をすくめた。

「手負いの忍が潜む忍小屋に、不用意に近付いたあなたの方の不運を嘆くしかありませんね。」

そう言つ山中の背後で、辰市が合点のいった顔をする。

「……で、俺達はもう行つていいんだよな。」

いい加減、こんなむさ苦しい所にいるのは飽きた、と小川が眉を寄せると全員が背を向ける。ぐるっと全員が背を向ける。すると。

「ま、待ちやがれ！ そのガキは置いていけ！」

いきなり黒蜘蛛が叫び、六人は面倒くさそうに視線を向けた。

「何で置いて行かなきゃなんないんだ？」

木下の問いに、黒蜘蛛はギャアギャアと喚きたてる。

「そいつは俺の子分を三人も殺したんだ！そいつだけはぶつ殺してやらねえと、俺の気がすまねえ！！」

彼の言い分を、六人は鼻で笑い飛ばした。

「よう言つわ、義賊ならともかく、お前らどない見ても悪党やないか。」

「今まで何人殺したか知らないけど、それはちょっとムシの良すぎる話じやない？」

北と谷中は顔を見合せ、嘲笑する。

「……仲間想いなのはいいが、自分の行いを見直してからそういうことを言つんだな。」

不快感を剥き出しにして、吐き捨てるように小川は言った。
うつ、と言葉に詰まる黒蜘蛛を厳しい目で一瞥し、六人は再び背を向けてその場から立ち去った。

さて、六人は辰市の案内のものと、甲斐を目標。
今日の目標は、今夜の宿代わりに利用する蕪木村まで辿り着くことだ。

「カブキ村は、何か美味しいものあるかな？」

「蕪木村だ。」

やつぱり村の名前を間違える木下に、小川の訂正に入る。

「蕪木村は…そうですね、獵師が多く住んでおりますので、山鳥や猪が美味しいとか。」

律儀に答える辰市に、周りは苦笑を隠せない。

「辰市さん、ちやんと掘まつてろよ。落馬したら笑えないからな。」

梅本は相乗りしている彼の身体を、小まめに気遣う。

「はい、大丈夫です。梅本様こそ、窮屈にしてしまって申し訳ありません。」

辰市に深々と頭を下げられ、逆に梅本は面食った。

「いや、別にいいけど。」

そこまで一寧に謝らなくても、と思うのだが、やつぱり忍と云いつ身分故か。

とまあ、ほのぼの進んでいると。

「しまつたあああああ！？」

「つおつひょい！？」

こきなり木下が絶叫し、驚いた北の口から何か妙な奇声があがる。

「礼金巻き上げんの忘れつぶつー?」

「つむせえ守銭奴!ー!」

すかさず梅本が手拭いを投げ、見事に彼女の顔面にヒットする。

「梅ー、手拭いに石入れちゃ駄目だよー?」

「雪合戦じゃ反則やな。」

谷中、北・・・そういう問題ではないと思つ。

「イツテエなこの野郎!オレ一応女!」

「ええ!/?女性の方なんですか!/?」

「酷いよタッちゃん!/?」

もう何もわからない。

……一度仕切り直して、テキパキと予定通り一行は蕪木村に到着した。

「肉ー久しぶりの肉ですよマンボウさん!」

「……猪と鹿やな、チロさん。」

蕪木村の村長は、七人を快く泊めてくれた。

事前に宿代として渡したお金の力もあつたせいか、その日の夕飯は牡丹鍋と焼き肉（鹿肉）というデラックスクースを頂けたのだ。

「やっぱり、肉もたまには食べないと物足りないないね。あ、王子

水ちょーだい。」

もぐもぐと肉を咀嚼しながら、谷中は王子に渡された水を煽った。

「辰市さんも食べてますか？」

焼き肉を摘まみ、山中は居心地悪そうに座る辰市に話しかけた。

「あ……はい、ありがとうございます。」

「そんなに固くならなくてもいいのに。やっぱり忍つて扱い酷いの？」

辰市の強張つた様子を見かねて谷中が言えば、少しの迷いの後彼は答えた。

「いえ……そういうわけではないんです。私のお仕えする方は、忍には大層寛大なお方で、大切にしてくださいます。ですが、何分にもこんなに大勢と食事をとることは初めてなので、やはり緊張してしまつて。」

照れるように辰市は俯いた。

「……じゃあ、貴重な体験だな。」

玄米の上に肉を乗せ、小川は即席肉丼をかつ込んだ。この時、全員が予想した辰市の「お仕えする方」とは。

（（（武田信玄だったりして…？）））

孫子兵法の言葉、「風林火山」を旗印に掲げた、戦国一の武将。

その通り名は『甲斐の虎』である。

虎と呼ばれるからには、さぞや猛々しい人物かと思いきや、身分がずっと下の忍を大切にするなど、寛大でおおらかな精神を持つ武将だ。

「優しい人なんですね。辰市さんは、いい人にお仕え出来てよかったですね。」

山中の言葉に辰市はこくりと頷いたあと、意を決したように真面目な顔付きになった。

「あの、甲斐にお着きになつたら……宿は決めておられるのでしょうか?」

六人は首を横に振り、決まってないことを告げる。すると、辰市はよかつた、と呟いた。

「何がよかつたんや?」

「いえ、こちらの話ですからお気にになさらないで下さい。」

北が首を傾げるが、辰市は素知らぬ顔で牡丹鍋に手を伸ばすのであつた。

翌日、村人に丁寧にお礼を言つて蕪木村を出た。

その後、三、四日は村を見つけては泊まらせてもうつたり、野宿したりしながら進んでいった。

「さすがに……いい加減、風呂に入りたいんだが。」

呻くよつな小川の言葉に、無言で六人は頷いた。
毎日濡らした布で身体を拭いてはいるのだが、やっぽりお風呂が
恋しい頃合いである。

「あー、髪ネチネチやし。」

特に北は髪が長いので、気持ちが悪そうだ。

「もう少し我慢して下さご。今日中に到着すると思こますので……。」

「

辰市の励ましに緩慢な動作で六人は頷き、疲れたよつに溜め息を
ついた。

よつやく待ちに待つた甲斐へと到着したのは、ひょいと顔を過ぎ
た頃だ。

「やつと着いたぜこのやうー!」

「風呂があたしを呼んでるぜばかやうー!」

さつきまでダダトがりだつたテンションがグンと上がり、木下と
北が阿吽の呼吸で叫び出す。

「静かにしろよ、恥ずかしいだろー!?」

現代にいた頃もこの世界でも、彼の役割は変わらず、「保護者」の
ままだ。

「あの、宿のお話なのですが……。」

遠慮がちに辰市はあるお願いを六人にしてみた。

「私に少し時間をくれませんか？是非お招きしたい『宿』があるんです。」

「それってお金いへりー？」

すかさず谷中が問う。

どれだけ懐が潤っていても、ムダに高い宿には泊まれない。

「……いま行けば、格安で泊れます。」

「うまく行けば、という言葉が引っ掛かるが、それよりも格安という言葉が魅力的だ。」

しかし、その宿が何処にあるのかといふことは、六人が何度尋ねてみても辰市は口を開こうとしない。

「……念の為に聞くがお前、俺達をどういづする気はないよな？」

声を潜めて小川は囁くように言つた。

それを聞いた瞬間、辰市の顔付きが変わる。

「確かに私は賤しき身分にござります。ですが、命を救つて頂いた方を貶める事は決して致しません。」

辰市は声を荒げて、じばし小川と睨み合つ。

「わかった。疑つて悪かつたな。」

小さな溜め息をつき、小川は田を逸らして謝った。

「いいえ、それでいいんです。」

苦笑して辰市は言い、自分達のやり取りをジッと見ている五人に向き直った。

「で、何処なんだその宿は？」

辰市によつて連れられた「宿」。

果たしてそこは宿と呼んでいいのやら……。

規模のデカさは安土城と比べると、そりゃ多少は小さい。

六人の予感は見事に的中していた。

甲斐にこんな馬鹿でかい屋敷……むしろ要塞じゃないのかコレ? と言いたくなるような箱モノを持つ人間なんて、一人しかいない。

「た……辰市さん、このお屋敷の名前つて……?」

田が点になつてゐる山中に、彼は笑顔で答える。

「躑躅ヶ崎館、といいます。」

分かつていても絶句してしまう。

城を持たない武田信玄の住まつ屋敷だが、その広さは城レベルにしか見えない。

「魔王様の次は甲斐の虎……遭遇率パねえな。」

門番の兵一人に話をつけている辰市を眺めながら、小声で梅本が言った。

「お待たせしました。どうぞお入り下さい。」

それぞれ馬を引きながら、門番の視線を気にしつつ門をくぐると。

「たーつーいーちいいいー！！！」

何かが辰市にタックルをぶちかましてきた。
見えたのは、菖蒲色の残像。

「心配したんだからあああ……アンタ初の単独任務でしょー!? 無事に帰つてきてくれてよかつたよおおお……！」

「ちょ、待つ、待つて下下さいあやめ姉さん！」

艶やかな黒髪をポニーテールにした少女が、辰市にガツチリとしがみつき、彼の頭をぐりぐりと撫で回している。

「誰やねん、アレ。」

「彼女かな？」

あまりの激しさに、啞然とした顔でその様子を眺める六人。

「あら、貴方達だあれ? 辰市の友達?」

一頻り騒いだ後、ぐつたりしている辰市を放り出してよつやく少

女が六人に目を向ける。

「一応、やこで萎びとる奴の連れや。あんたは?」

極めて大雑把な答えに、少女は気にした様子もなく名を名乗った。

「あたしはあやめ。辰市の姉!」

「タツちゃんこのねーちゃんだつたのか!」

田を丸くして、木下は一人の顔を見比べた。
言われば成程、似てなくもない。

「い……この方々が、怪我をしていた私の手当をして下さったんですけど。」

復活した辰市がそう説明すれば、あやめの顔付きが変わる。

「ちよ、それじゃ辰市の恩人じゃない! やだ、あたしつたら何て
ご無礼を……!」

「別に畏まる必要なんてないですよ。私達、そんな大層な身分じゃ
ありませんし……。」

慌てるあやめに、山中はこやかに言った。

「ひつあー、じやあ何でそんな凄い妖馬とか持つてるの?..」

「……よっぽど良い馬なんだな、お前。」

凄いと言われて嬉しいのか、小川は「機嫌な赤兎の頭を撫でてや
る。

「あやめ、辰市……いつまでお宿を立たせておくつもりだ。」

和氣藹々とした空気が流れる中、別の低い声が飛び込んできた。
見れば、白地に流水の柄が入った小袖を着た男が一人、呆れたよ
うにこじらを見ている。

「「い、板垣様！」」

あやめと辰市が同時に叫び、慌ててその場に片膝を立てて跪いた。

「板垣……ってや。」

聞いたことのある名前に、出来るだけ小さな声で木下が山中に耳
打ちする。

「はい……信方さん、でしようか。」

眉を寄せて、六人は男の姿をジッと見つめた。

男は辰市の前に屈み込むと、彼の肩に手を置き、歯み締めるよ
うに言った。

「辰市、よくぞ……よくぞ、戻つてくれた。」

「いいえ……！私がまだまだ未熟なせいで、板垣様に迷惑をお掛け致しました……！」

声を微かに震わせ、辰市はその場に平伏する。

「お前が謝る」とは何もない。顔を上げ、立つてくれ……。」

静かに男は辰市を立たせて、ポカンと傍観している六人の傍まで

くると、懇懃に一礼した。

あまりにも丁寧な態度に面食らい、こちらも急いで頭を下げる。

「某は板垣信方と申す……。此度は我が忍、辰市をお助け頂き、誠に感謝している。」

「はつ……！？いやいや、俺達そんな大したことしてないですから！んな馬鹿！寧に頭下げないで下さい……！」

板垣信方と言えば、『武田四天王』と呼ばれる知勇を兼ね揃えた大物の一人だ。そんな人間に頭を下げられちゃ、居心地が悪いのなんの。

梅本はアワアワしながら信方に顔を上げるよう、必死で説得する。

「いや、部下を助けて頂いた方に頭を下げぬなど、某には出来ぬ。「いや、ホントに困りますから！何か後々困りますから！」

何とか信方の顔を上げさせて、ふう、と一息。

「……板垣様、この方々、まだ宿を決めておられないのです。どうか、お屋敷に泊めて差し上げることは出来ませぬか？」

おずおずと辰市が口を開き、板垣に懇願する。

それを聞き、板垣は険しい表情を浮かべたが、それも一瞬のこと。等、馬を預けてくれまいか？

どうなるのかと固唾を飲んで見守っていた六人は、あつさりと出したOKに半ば目を丸くした。こんな何処の馬の骨か知れない奴を、そう易々と引き入れていよいのやら。

しかし、断るのも特に理由はないし、何より勿体無いではないか。
というわけで、彼等は信方に向かつて頷いた。

いざ、甲斐の虎穴に入場である。そこで得るものは、はたして虎児か、はたまた別の何かか……。

一一〇の斬 「つづじって、漢字で書ける人いる?」

(後書き)

躑躅ヶ崎館にやっと入館です。

今回のはワリと早く上げられたかな・・・?

お次はいよいよ甲斐の虎と面会です。

「イーメージなんて、容易く壊れるもんだよ。」

愛馬を厩に預け、信方に案内されて館に入る。

「見た感じは神社や寺みたいいやな。」

この廊下長しね！
なんか僕走りたくなるよ

キヨロキヨロとあちこちを見回しながら、六人は奥へと進んでいく。

は。

一度聞ナばねかぬ所ど、その声は激怒してゐる。

覆う。

ドタバタと足音と共に現れたのは、真っ黒な小袖に小豆色の羽織を着た男。左目には、小袖と同色の眼帯が。

「板垣殿！！お館様は！！何処にいらっしゃるか！！ご存知ないか
！？」

鬼気迫る表情で信方に迫る男は、今にもガルルと唸りそうだ。
信方はげんなりしながら溜め息混じりに言つた。

「またか……申し訳ない、勘助。」

勘助、という名前にまたまた反応する六人。

「まさか…まさか、あの人つてよ……？」

梅本は眼帯の男を指差す。ちょっと前の大河ドラマの主役だった、その彼の名は。

「山本 勘助……通称ヤマカン！」

それは正しい通称ではないが、山勘といつ言葉が彼から派生したといつのは間違いない。

「板垣様が謝る必要などシラミほどもありませぬ……悪いのは全てお館様！毎度毎度毎度執務をほっぽりだして……！」

勘助は余程頭にきているのか、顔はもはや鬼の形相だ。

「何か……毎日胃痛や頭痛が絶えなさそうですね……。」

怒れる勘助、頃垂れる信方があんまり可哀想で、山中はポツリと呟くと。

「お分かり頂けますか!? 全くお館様という方は…いつもゴキカブリのように逃げるんです…！」

ゴキカブリとは、文字の雰囲気からもわかるようにゴキブリのじだ。

「……甲斐のゴキカブリ……」

ボソッと小川が言えば、頭の中にゴキブリの着ぐるみを着た信玄

が素晴らしく想像できた。

「えへへ、と全員が吹き出し、たちまち爆竹のようすに笑い始める。」
言い出した勘助も、さつきまで眞面目な顔つきだった信方もだ。

「無理ッ……無理無理無理おもうすがる……」

床に膝をつき、バンバン叩きながら笑いまくる。

普通そこは無礼者と怒られるところだらうが、仕える側が言つちやうどいがもう終わつてゐる。

「わ、儂はゴキガブリじゃない！！主をゴキガブリ呼ばわりするな
つ！！！」

しばらくゲラゲラ笑つてゐると、聞き慣れない声が飛び込んでき
た。

その後、息を呑む気配がし、そして勘助の纏う空気が瞬時に変わつた。

「お～や～か～た～む～ほ～……。」

からくり人形のように、一瞬で鬼の形相になる勘助。

彼は手荒く声のした部屋の戸を開けて、中に飛び込んだ。

「待て！待て！待て！勘助！儂はちょっと休憩しよう」と……。「何度休憩すれば気がすむんですかああああ……！」

ドンガラガツシャン、と色々なものを引っくり返して大暴れする音がして、やがて収まった。

「やつと捕まえましたよ、お館様……。」

ニタアとした笑顔も眩しく、勘助は何かをズルズル引き擦りながら再登場する。手からは繩が伸びており、その先に繩でぐるぐる巻きになつた何かがあつた。

それは人の形をしていて、ぐにぐにと動いている。

「…………！？」

六人は一斉に信方に目を向ける。

何だありや、という意味を含んだ視線に、信方は深い溜め息をつくことで答えた。

「勘助……すまんが、お館様を少し貸してはくれんか?」

まだ絶句したままの六人を一瞥し、げんなりした様子で信方は言った。

「…………そう言えれば板垣様、そちらの方々は一体?」

「それを今から説明するから、一度お館様を解放してやってくれ……。」

信方と勘助のやり取りを、何処か遠くで聞きながら六人は感じた。

(((誰が嘘だと言つてくれ……)))

ちょっとした波乱と失望と悲しみの後、やつと六人はまともに甲斐の「ゴキ」……いやいや、甲斐の虎と名高い武田 信玄と正式に面会することができた。

「お初にお目にかかります、『ゴキ力』……『じほん』、信玄公。」

「今儂のこと『ゴキ』、『お館様』……『いむ』、お主等の名を聞こい。」

小川の言葉に信玄が反応するが、笑顔の勘助の一言でたちまち抑え込まれる。

六人の名乗りが済み、どういった経緯でここを訪れたのかを話すと。

「そうであったか……辰市をのう。儂からも礼を言おうぞ。感謝する、小川殿、梅本殿、北殿、山中殿、谷中殿、木下殿。」

信玄は六人に向かい、深々と頭を下げた。

「わ、私達、本当に何もしてません！ 貴方のような一国の主に頭を下げられては、どうしたらいいか……！」

困りきった山中がさう言えば、顔を上げた信玄は豪快に笑う。

「なんの、大切な家臣を助けてもらい、頭の一つも下げんなど儂には出来んよ。」

安土城にいたときは違うこの扱いの差！ 魔王様と比べれば、信

玄公はとつてもいい人だ。

「お館様。辰市の、この者達をしばらくここに置こういやつてほしことの頼み……聞き入れて頂けましょうか。」

信方がそう訪ねると、信玄はすかさず頷いた。のだが。

「いや、おかしいやうぢつと。」

北は顔をしかめて、まともに話題に割り込んだ。

「そんな簡単に決めてええんか？あたしら、まだ名前しか言ってないんやで？怪しいやろ絶対。」

彼女の言ひことは至極まともで、他の五人もうなづくと頷いている。

しかし信玄は不意に真面目な顔になり、静かに言い放った。

「怪しい者は、自ら進んで怪しいなどと言わぬもの。もしお主等が忍で、儂の命や情報を奪いに来たのなら……そのような殊勝なことなど言わんだらう。」

どつしつとした言葉と構え方に、六人は目を丸くする。

「ま、どーしても疑つて欲しいなら牢が空いておるがの……。」

「いえ、それはナシの方向性で。」

慌てて言えば、信玄は豪快な笑いを響かせた。笑い声のでかいおっさんである。

「お主等が何処の何者であるかはどうでもよい！それこそ妖怪変化の類であろうとも、受けた恩を儂は返すつもりぞ？」

武田 信玄……ちよいと器が広すぎやしないだらうか？

「信玄様、スゲー！…やっぱり武田最高だなっ！…！」

「そつか…武田最高か！」

わあつと歎声をあげる木下に、ノリよく信玄も便乗する。はしゃぎ声をBGMに、木下以外の五人は信方と勘助の方に向き直る。

「お館様が決めたことを、我等がどうこう言ふものではない。」「どうよりも、異議を申し立てても無駄だからな。」

呆れたような視線を信玄に送り、武田の家臣一人は苦笑いを隠せない。

というわけで、甲斐での宿は躊躇ヶ崎館に決定した。

「あ～、スッキリした……。」

手拭いで髪を拭きながら、六人は深々と一息ついた。面会の後、やつとお風呂に入ることが出来たのだ。

ネタネタもベタベタも綺麗さっぱり洗い流して、新しい着物を着て、あてがわれた部屋でまつたり寛ぐ。

「想像していたより信玄様は何といつか……お氣楽なオジサマですね。」

山中は、あのキャラかしいイメージが信じられないようだ。

「……ヤマカンも、醜男と聞いていたが、俺には見えないな。「それ、あたしも思つてた。めちゃ普通やアレ。足はちょっと引き摺つてたけど。」

小川の言つこと、北も首を捻る。

「ま、いいんじゃね? だつてほら、ゲームの世界だし。「どんな違和感もその一言で阡付けるよなー。」

木下と梅本は幸せそうな顔で、畠の上をころいろ。
まるでアザラシのようだ。しかし、完全に気を抜ききつていると
いうわけではない。

彼等は何気ない風を装つて、互いに田配せをしあつた。天井裏から、微かに感じる気配……恐らく忍だろう。覚えのある感覚は、神憑きのものだ。

(やーっぱり、監視されますか。)

誰の指図かは知らないが、当然と言えば当然だ。

向こうは六人が神憑きであることを知つてゐるのだろうか?

色々と話したいが、忍がいるとあつちや、そつ簡単に口を開くわけにはいかない。

やれやれ困つたと思つてゐると、いきなり襖が開き、何かがシュバツと入り込んできた。

驚いて素早く身構えるが。

「頼む、匿ってくれ！」

「「「また逃げたのかよ。」」」

すかさずツツコミを入れた相手は、さつきまで謁見していた甲斐の虎。

「わ、儂だつて遊びたいんだもん！？」

「その面でもんとか言つな、気持ち悪すぎるや。」

鬱陶しそうに言つ北に、とにかく匿えと信玄は迫った。

彼等は溜め息をつくと、一人が荷物から代えの着物をつかみ出して立ち上がつた。そのまま信玄の前に着物を広げて壁を作り、残りの五人がその前に座り込む。ちょっと着物の鑑賞会してました、のポーズだ。

すると、廊下をズルツ、ズルツと歩く音が聞こえた。

「お館様ーア……お館様ーア……何処に行きやがったんですかーア……！」

まるで地を這うような声がして、ピタリと部屋の前で止まつた。そして、スワーッと襖が数センチ開き、勘助が顔を覗かせた。その雰囲気たるもの、井戸から這い出でてくる某有名な幽霊のようだ。

「あ、あの……何か？」

冷や汗を流しつつ、谷中が尋ねると。

「…………」こりこりしゃらない。」

低い咳きの後、無音で襖が閉じられて、ズルッ、ズルッと足音が遠ざかっていく。

固唾を呑んで、彼の足音とおつかない気配がなくなるのを待ち、全員が半ば止めていた息をよじやく吐き出した。

「ち、超怖い……あの人怖すぎるでしょ、信玄様！？しかも何アレ、どこの怪談なわけ！？」

止まらぬ冷や汗を浮かべたまま、谷中は信玄の襟首を掴んで揺さぶりまくった。

「勘助怖い勘助怖い勘助怖い勘助怖い……」

信玄はといつと、揺さぶられながら蒼白な顔色で、勘助怖いと咳いている。

「あれ……武田の裏の支配者やな。」

「オ、オレ……今日一人で廁行けないかもしれないぞ……。」

「そ、その時は私、お付き合いします……。」

北と木下と山中の三人は、引き攣った顔でくつつきあっている。

「信玄様さあ、頼むから俺達巻き込まないでくんね？」

「…………」というか、匿つたことがバレればこっちまで飛び火がくるんじゃないのか？」

梅本は呆れが頂点まで達したのか、もう半笑いだ。

そして小川のもつともな言葉に、皆ピタリと動きを止める。

「 「 「 よし引き渡すか。」 「 」

「ちよ、待たんか！お願い待つて！」

六人が真顔で手足や襟首を掴むと、信玄は半泣きで抵抗する。

「ひみさこなつ、あんなのに殺されたら洒落にもなんないんだぞつ
！…」

木下は苛々と言へ、信玄の手をぐいぐい引つ張る。

「ホントに待たんか！儂はただ逃げてきたわけではないのだぞ！」

話があるのだ、と信玄は必死に言い、彼等は疑り深い眼差しを向
けながら渋々手を離した。

「しょーもない話やつたらあの妖怪軍師すかさず召喚したるわ。」

舌打ちする北に、信玄は真っ青な顔で頷いた。

あの武田信玄に完全にタメ口をきいている辺り、イメージの崩壊
とやらは恐ろしい。

信玄の前に座り、そつそつと話せと催促すると、彼は一つ咳払いを
して、天井に向かいペシコと言へ放つた。

「儂はこの者共に話がある。見張りはよい、元の場に戻れ。」

すると、微かな物音と共に窓の気配も消え去った。

「さて、本題に入りや。これは儂の推測に過ぎぬが、お主等、『六

武衆』だろ？。」

躊躇いもへつたくれもない、直球ストレートの言葉。

「……何故、そう思ひつ？」

六人はサッと顔を強張らせ、小川は静かにそう尋ねた。

「ふふ……武田の強味の一つは、忍の使い方よ。儂の情報収集力、なめておひつては困る。」

初めて信玄の顔が、険しくも不敵な戦人のそれに変貌した。

「成程。流石は武田の忍、感服いたしました。それで、私達をどうするつもりですか？」

きりんと姿勢を正した山中は、落ち着き払った視線で信玄を見る。

「どうせさよ。言つたであらひ、お主等が何者であるつと、儂は恩を返すつもりだと。」

「こニまだ言ひ、信玄は楽しそうに笑つてみせた。

「ただ、下手に隠すより、開き直つてしまつたほうが儂はよいと思つたでな。」

「それはそうとして、結局何なんだ？それだけを言いに、あの妖怪軍師の田を盗んでこじままで来たのか？」

長い息を吐き出し、梅本は正座から胡座に座り直した。どうも真意が掴めない。

「もう一つは、何の用で甲斐に来たのか、ということよ。まさか尾張の小僧の密偵、というわけでもないのだろう?」

信玄は六人の顔をそれぞれ見回し、答えを促す。

「オレ達、信玄様に会いに来ただけだぞ。他は特になー!」

あつさりと木下は言い、他の五人も真顔で頷く。

そのあまりにも単純明快な理由は、信玄の目を丸くさせるには十分な威力を持つていた。

一一一の斬 「イメージなんて、容易く壊れるもんだよ。」

(後書き)

やつと甲斐の虎の「」登場です。

ええ、イメージをズタボロにした感じは十分あります。
ごめんなさい石投げないでください。

一応大好きなんですよ武田。

ヤマカンも風林火山見てからす「」い好きですよ。

それ見て大河ドラマはまりましたから。

・・・・・次回は甲斐の武田ライフをお送りします。

一一一の斬 「頭のいい奴ほど、単純な奴の」ことを深読みする」とがある。」

信玄はしばらく黙つたまま、六人を眺めた。甲斐の領主として、一大名として、人を見る目が曇つておらぬ自信がある。彼等は、偽りを言つてゐるよう見えない。

「では何故、儂に会いたいと思つた？」

「あんたが有名な大名やから。」

すかさず北が答え、信玄はどう反応したものか非常に困つた。

「……ホントに、それだけ？」

啞然とした顔で、念を押すように尋ねても、六人は頷くばかり。シーン、としばらく部屋が静まり返り、やがて信玄の肩が震え始める。震えは全身に広がり、彼の口からは噛み殺した笑いが流れてきたではないか。

どうして笑われているのかわからない六人は、顔を見合せながら眉を寄せた。

「そんなに変なこと言つたかな、僕達？」

「変、なんでしょうね。あの様子を見ると。」

とりあえず、信玄の笑いが収まるまで待つこと数分、やつと静かになつた。

「いやあ、お主等は面白いの。儂も多くの人間と会つてきただが、ここまで単純な理由で儂のもとまで来た人間は、お主等が初めてだ。にしても、道中で辰市と会わなんだら、どうやって儂と会う算段だ

つたのだ？」

からかうに問う信玄に、六人は答える。

「遠乗りのときに追い掛けるとか。」

「高いところから観察するとか。」

「キレーなお姉ちゃん使ってたぶらかすとか。」

「食べ物で釣るとか。」

「投げ縄で捕獲するとか。」

「闇討ちとか。」

「後半儂の扱いおかしくね？」

何処かズレている彼等に、全力で信玄は突っ込んだ。
何なんだろ？」のやり取り、過去にいる気がしない。

「じゃあ、とりあえずは警戒が解けたと解釈してもよろしいんですね？」

一頻り笑いあつた後、山中が信玄に尋ねた。

「一応はな。だがあと少しは忍の田がつくだろう……儂の家臣が納得するまでは。」

チラリと天井や周囲に目をやり、信玄はよつと立ち上がつた。

「さて、ここです」と居るのも暇だの。どうだ、儂と一緒に「お～や～か～た～そ～ま～……！」

背後、僅か数ミリ開いた襖から聞こえた声に、ザザアッと見事な

血の引きっぷりを見せる信玄。

息を呑む六人の前で、信玄の頭をガシッと掘る手があり。

「……こいつしゃいましたか……探しましたよ……！」

「つか、かか、かんかん、勘助！？」

隙間からぬるつと液体のよじて出たのは、目を爛々と光らせた妖怪軍師、勘助である。

「随分とお楽しみのようありましたが……そろそろお引き取りしてもよろしく」「わいりますか？」

彼の隻眼がぎろりと六人を見据え、有無を言わさぬ口調で問われる。

勿論、この状態でヤダと言えるほど彼らは恐いもの知らずではない。

「問題ないであります、軍師殿！」

起立して敬礼し、信玄に哀れみの視線を向ける。

さよなら甲斐の虎、我々は貴殿の尊い犠牲を忘れない。

部屋の外に消えた彼の姿を網膜に焼き付け、六人は敬礼の手を下ろした。

断末魔の悲鳴が躊躇ヶ崎館に響き渡るまで、あと数秒。

「……やはり見破られましたか。」

「そのようだな。」

その頃、六人の部屋に忍を放つた張本人一人は、聞こえる主の悲鳴に苦笑いしながら碁を打っていた。

一人は板垣 信方、もう一人は蘇芳の小袖を着た男だ。焦げ茶色の髪を後ろで一纏めにし、虎縞の組紐で結わえている。

「甘利殿は彼等をどう思つておられる?」

パチリ、と黒石を置き、信方は彼を……甘利 虎泰に問いかけた。彼も信方と同じ、『武田四天王』の一人である。

「彼等が巷で噂になつてゐる『六武衆』であることは間違ひないでしよう。三つ者や各地に散つた歩き巫女から情報から、勘助殿も判断できると申しておりました。まあ、既にお館様が話をなさつたのなら、我等が下手に勘織る必要はございませんまい。」

虎泰は白石を打ち返し、腕を組んだ。

「それに、彼等中々腕がたつと思ひますぞ。我等が放つた忍をお館様が退かせたとき、少しも驚きを浮かべなかつたようですから。」

「ああ。六武衆といつ名……噂に塗り固められた張りぼてというわけではないな。」

パチリ、パチリ、と碁石を打つ音が部屋に響く。

「失礼致します。」

聞き慣れた声がして一人が顔を上げれば、やたらとすつきりした表情の勘助が入つてくる。

「お一人とも、ここにおりましたか。」

碁盤の前に腰を下ろす彼に、虎泰が声をかけた。

「勘助殿、一応聞いておきますがお館様は？」

「先程執務室に縄で縛り付けておきました。逃げられないよう、忍の者十人程で警備に当たらせております。」

碁の形勢を見ながら、よどみなく勘助は答えてニタリと笑つてみせる。

「万が一、抜け出そうとなされても……すぐ某に知らせがくるようにしております、」心配なせりず。」

その笑みに、心配しているのはお館様だと言えない一人。

「さて……お一人はあの六人、黒か白かどちらと思われますかな？」

勘助の質問に、一人は困ったような表情を作つた。

「勘助、我等はあの六人と会つて日が浅い。いきなりそのようなことは。」

「某は、あの者共……少々きな臭いかと思います。」

きつぱりと断言した勘助に、虎泰は尋ねた。

「その理由は？」

「あの者共が六武衆であることは間違いないでしょ？。ならば……何故我々がそれを『感じない』のか、おかしいと思いませぬか？」

勘助は片手を上げる。

すると、袖口からにょろりと黒い蛇のようなモノが現れた。彼は影の神憑き、これは彼が操る影なのだ。

「神憑きは神憑きの気配を感じる事が出来る。その気配を消すのは、熟練の忍または厳しい鍛錬を積んだ者が出来ること。そして気配を消している筈の忍を見つけるとなると、『将位』程度の者でなければ出来るのはありませまい。」

勘助は一つ息を吐くと、更に続ける。

「それをあの者共は容易くやってみせた。何よりおかしいのは、神憑きである我々が、あの六人から神憑きの気配を感じないとこりにありますよ。」

信方と虎泰は黙り込み、うつむいた。何とも特異な、といつては異常な話である。

「それは私も思っていたことですが……しかし、「特異である」という理由で、白か黒かを決める事は出来ませんぞ。」

虎泰は碁石を眺めて、そう呟いた。

「……お館様がお会いになり、彼等を判断なされたのだ。その判断が吉と出ればそれでよし、もし凶と出れば、その時は我等が始末をつければ良いだけのこと。」

碁の勝負がついた。どうやら黒の勝ちのようだ。

信方はそう言いながら立ち上がった。

「そしてこれは某の私的な意見……というより勘なのだが、彼等はあ

まり疑わなくともよいかと思つた。」

何せ、忍の介抱をし、同じ釜の飯を食い、着物まで貸してやるような者達だ。

微かな微笑みを浮かべ、信方は部屋を出ていく。

後ろ手に襷を閉め、廊下を少し歩いたところで忍の名を呼ぶ。

「辰市、あやめ。」

「「」」」」」」

スッと現れた忍に、信方は命じる。

「あの六人の世話をしてもやれ。そして、毎日某のところに報告をお前達のほうが、彼等も気を許すだろうから。」

「「……然るべく。」」

現れたときと同じように消える忍を見送り、信方は溜め息をついた。

「さて、お館様の様子でも見に行くとしようか。」

信方、虎泰、勘助の三人に、物凄く深読みされているとは露知らず、六人はころりと引っくり返っていた。

だが好奇心旺盛な孝研、いつまでも一つの部屋にいらっしゃる筈がない。

「ひーまーだーぞー……

芦虫のようになつねしながら木下は呻き、それに随いつくつと頷く。

「勝手」ふりふり出歩きて良かうつな霧雨氣じやないし、かとこつてこのままいこころの嫌だ。

「なー殿下。こつそのこと、遊んでもらつか?」

「あー、それいいかも。」

「何する気だお前等。」

遂に木下が音を上げ、谷中の膝に顎を乗つけて何やら提案し、谷中もそれに賛成する。

嫌な予感を感じた梅本が声をかけると。

「この人には、だよ!」

素早く立ち上がるや否や、木下は影蝶を呼び出し天井をドカッと突いた。

するとそここの板が撥ね飛ばされ、影が伸びる。黒い手のようになつた影に掴まれ、落とされたのは一人の忍。

すかさず谷中が電王を帰電させると、忍の刀や苦無がジャラジャラと引っ張り出されて電王にくつづく。

「凄いです、磁力まで出せるよつになつたんですねー!」

ぱちぱちと手を叩き、山中が称賛の声を上げる。

「……進歩したな、難しかつただろ?」

小川は興味深そうに電王を覗き込み、つまつと苦笑を窺つづく。

「で、何して遊ぶんやコソヒ。」

影でぐるぐる廻せにさせね、モーモーハヤヒの忍を眺めて北が暢氣に言った。

「んー……何する?」

「俺に聞くなアホ。」

木下の様子に頭が痛い、と梅本はがっくり頃垂れる。

「……とりあえず、解放してやれよ。見る、何かピクピクしてる。「その人窒息しますよー?」

小川が無表情で忍を指差し、山中が慌てて戒めを解くよつて言つ。スルッと木下が影を解くと、忍は物凄い勢いで息を吐き出し、軽く咳き込む。

「あらー、危うく死なせかけつとこだったね。」

電王にぐついた色々を外しつつ、谷中はくらくら笑う。

「……笑い事ではないだろうがああーーー。」

やつと呼吸を整えた忍の男は、怒り心頭とばかりに怒鳴った。

「やつがましーなあ、あんた仮にも忍やろ? んなギャーギャーギャー騒ぎなよ見苦しい。」

「何故貴様等にそんなことを言わねければならんのだ!?」

なんかやたらと偉そうに言つ北に、益々怒鳴り散らす男。

「なーオッサン、オレ暇だ。何かして?」

もう無茶苦茶である。

影蝶蛸をしまい、木下が何かを期待した眼差しを向けた。その無邪気な様子に、男は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

(何故…俺はこいつらが神憑きだと氣付かなかつた?何故、こいつらは俺が潜む場所がわかつた?)

男はよつやく、この六人を見張れといつ命の意味を知つた。

「この人、固まつてませんか?」

山中が顔を覗き込み、目の前でヒラヒラと手を振つてみせる。

「……！？」

サッと距離をとり、男は六人を改めて見る。

(子供にしか見えん……しかし、あの力は……。)

色々と考えていると、いい加減痺れを切らせた木下が彼の肩を叩いた。

「オッサン、暇だつてば。」

「俺はまだそんな呼ばれ方をする歳ではないわ!」

何度も失礼な呼び方をする木下に、男は苛々と睨みを効かせたが

そんなものは効果なし。

「じゃあ名前言えば？そつでなきや、僕達ずっとオッサンって呼ぶよ。」

谷中はそう言いながら、奪い取った手裏剣を弄ぶ。

「……貴様等のような連中に名乗る名はない。早くそれを返せ。」

唸るように言つてみるが、やはり効果なし。

「……ねえ、チロちゃん。」

「はいはい、殿下。」

谷中と木下は、何か思い付いたのかニッと笑う。

（（（またまた悪い）））と考へてるな……）））

その様子を見ながら、他の四人は小さな溜め息をついた。
退屈の極みに達しているこの一人、甘くみていろと、とんでもない悪戯を仕出かすのだ。

「忍刀もーりーーー！」

「僕は苦無頂きつー！」

「なつ、何イーーー？」

忍道具のうち、刀と苦無をひつ掴み、脱兎の如く逃げ出す二人。男は田を白黒させると、大慌てで一人の後を追いかけていく。

「……俺は暫く寝る。」

「俺もそつするか。」

小川と梅本はその場で「」と横になり。

「あたしは面白そつやから見に行くわ。」「私もご一緒します。」

北と山中はよつこいらせと立ち上がると、三人が飛び出して行った方へと向かった。

「待てつ、待たんか！！」
「待てと言われて！」
「待つ馬鹿なんぞいるか！」

「ドドドドッ、ダダダダッ、右に左に直進」。

「オッサン遅いぞ！」
「オッサンバテちゃつた？」
「だからオッサンではないと言つていいだらうがあああ……。」

時折後ろを振り返り、ますますヒートアップさせるような言葉を投げ掛けてからかうと、男は青筋を立てて叫んだ。
そんな大騒ぎをしているものだから、あつという間にこの鬼「」は至る所の家臣や侍女に叩撃される。

「一体何の騒ぎだ？」

「何せら賑やかですね。どうかなさこましたか?」

笑い声や囁き立てる声を聞きつけ、勘助と虎泰が顔を出し……田を丸くする。

「忍なら捕まえてみせろー！」

「アーティスト」

雙林寺

素早くジグザグに走りながら追跡を上手く避ける一人と、それを鬼の形相で追う忍。

「はい、勘助殿。」

勘助はぽかんとした顔で、虎泰に呼び掛ける。

「板垣様の勘は、当たつておりましたな。」

苦笑いを浮かべ、虎泰は走り回る三人を微笑ましく眺めるのであ

つ
た

II-1の廻 「頭のこゝ奴ほど、単純な奴のじとを深読みするじがある。」

忍と鬼のじ。

最早フツーじゃない主人公達です。

ん一、武田は有名な人や出したい人が多くて難しいですね。

武田四天王は全員出したいし、あの表裏比興の者も出したいし、逃げ弾正も出したいし・・・・あー、居すきだ武田！

一十一の歎「武田フアミリーと一緒に、やつぱ交友つて大切だと思つんだな。」

強制鬼^ごつ^こがしばらく続いた後、やつと一人は奪い取つたものをかえしてやる。

「はー、面白かったーはい、返してあげるね。
捕まらなかつたから、オレ達の勝ちだなつー」

首筋に「うつすら」とかいた汗拭い、谷中と木下はすつきりした顔で言つた。

「くそ……」の俺がツ……良いよつこ……振り回されるなど……ー

ゼイゼイと息をきらし、男は悔しげに一人を睨み付ける。

「随分遊ばれたようですね、空蝉。」

笑いを押し殺したような、しかし柔軟な声がして、一人は振り向く。

「あ、甘利様に山本様！？」

空蝉、と呼ばれた男は、急いでその場に跪いた。

「見た目によらずお上品な名前だなー。
「喧^喧しい！ー！」

やつとわかつた名前に、木下が茶々を入れ、谷中は一人の重臣に一礼した。

「お初にお申にかかります、六武衆のお一人。私の名は甘利 虎泰と申します。以後お見知り置きを。」

「いきなり丁寧に自己紹介されて、二人は目をぱちくりさせた。

「某は山本 勘助と申す。貴殿等の噂はかねがね聞いておるや。」

続いて勘助にも名乗られ、急いで二人も一礼した。

「谷中 若菜です。」

「木下 千尋です！」

勘助は身を少し屈めて、まじまじと二人の顔を見つめた。

「お主等、歳は幾つだ？」

「スゲー！ホントに眼帯だぜ殿下……！」

「本物はやっぱかつこいいよねー萌える萌えるー！」

二人も勘助の顔を見て、口々にはしゃぎだす。

「…………っ！」

勘助の困惑したような表情に虎泰は横を向き、吹き出しそうになるのを堪えた。人の話を聞いちゃいない。

「虎泰さんの髪の紐つて、やっぱり自分の名前から虎柄にしたの？」「はつ…………？い、いえそういうわけでは。」

「…………でも、いじことをいきなり聞かれ、虎泰も勘助と同じ表

情になる。

この後、勘助と虎泰は一人の質問攻めにあつたが……他のメンバーはどうしているのだろうか？

飛び出して行った一人を追つた北と山中は。

「……どこや、ここは。」

「私に聞かれてもわかりません。」

まあ、案の定というか、定番のオチというか……迷子になつていた。

「何であいつら、こいつときはあんなに足早よなんねん。体力もつきましたから、以前より質が悪くなつてますよね。」

ブツブツ言いながらその辺りを歩いていく。

「もし、そこのお嬢さん。」

「あたしも暇やから、何かしたろと思つてたのに。」

「マンボウさんの「何か」は嫌な響きを持つてますよね。」

ああだのこいつだの、言ひ合ひ歩いていると、後ろから声がかけられる。

しかし「お嬢さん」というガラではない二人 特に北は は、右から左へと聞き流す。

「そら、色々出来るやろ。」

「具体的な例をあげないところが嫌ですね。」

「あの、その二人のお嬢さん?」

もう一度呼び掛けられ、やつと自分達のことだと認識する。

振り向いた二人は、その声の主を見て盛大に顔を引き攣らせることになった。

その人物、多分男だと思うのだが…如何せん、キラキラしていた。ふんわりとした飴色の髪、透けるように白い肌、明るい鳶色の瞳。美青年という言葉がしつくりくるその容姿に、山中の脳裏にある人物の名が浮かんだ。

「もしや貴方は……高坂 昌信様？ あの、『逃げ弾正』といわれる……？」

「私の名をご存知なのですか？」

大当たりだつたのか、青年は驚いたように目を瞬かせた。

「はい、有名ですから。」

「これはこれは、貴女のような愛らしいお方に知つていただけていふとは光栄です。」

高坂 昌信、「武田四天王」の三人目だ。

常に慎重な采配と引き際の良さから、『逃げ弾正』と称される名将だ。また大変な美男子で、衆道が日常的だつた戦国時代に信玄の「お気に入り」だつた。

「私は山中 美那と申します。」ちらは北 修子さん、私達の仲間です。」

北は無言でぺこりと頭を下げ、畠信は一口ひと笑つて口を開いた。

「貴方が、『六武衆』でござりますね。噂とは随分とかけはなれたお姿だ。」

「あのや、わざから氣になつてんのやけど……どんな噂なん、それ。」

あんまり噂噂と言われるものだから、ビックリする噂されいるのか気になる。

「（）で立つているのもなんですから、ようしければお茶でも飲みながらお話ししましょつか？」

魅惑的なお誘いに、二人は当初の目的を忘れてあつさうと頷き、正信の後に続いたのだった。

彼の部屋は直ぐ近くで、畠信は通りかかった下男にお茶の支度を命じて、一人を中に招き入れた。

「めひやくひや綺麗に片付いてんなあ……性格細かいんやな、高坂さん。」

書物から筆、書簡の一つに至るまでひとつひと整理整頓されつくした部屋に、北は思わず感嘆の息を吐いた。

「私達の部屋も、こんなふうだとどれだけいいでしょつか……。」

山 中はいつでも凄惨極まりない大学の部室を思い出し、やれやれと肩をすくめた。

「どうぞ、お座り下さい。」

昌信の勧めに従い、二人は部屋をキヨロキヨロ見回しながら腰を下ろした。

「他に、あと四人の方がここにいると聞きますが……」

「ああ、野郎一人は部屋で寝とる。残りの一人は、忍のオッサンからかつてどつか行つたわ。」

大雑把な説明をして、北は早速足を崩す。

ちなみに、袴を穿いているから見える心配はない。

「忍をからかう、ですか？」

昌信は田を丸くした後、くすくすと笑いはじめた。

「眞面目そうな人でしたし、今頃盛大に遊ばれてそうな気がします……。」

忍の顔を思い出して、山中は少しだけ呆れたような顔をした。
そのとき、失礼いたします、と部屋の外から声がして、先程の下男がお茶を持って入ってきた。

一人が礼を言いながら受けとると、下男は驚いたように田を見開き、直ぐ様に引き下がってしまった。

何だありや、と首を傾げていると、昌信はまた笑いながら口を開く。

「魔王の戦を助太刀し、悪鬼羅刹あくきらかの戦い振り、将位の神憑みだらしきすら一撃の元に打ち碎き、その姿は根の国より出でし鬼のようだと言われた『六武衆』……本当に噂はアテにならないものですね。」

しみじみ言つ畠信、「一人は聞き捨てならないとばかり食い付いた。

「何か前に聞いたときより酷くなつてへんか、それ？」

「その噂を流した方々に、是非ともお会いしたいものですね。」

北は嫌そうに顔をしかめ、山中は笑顔だが目が笑っていない。尾ひれどころか、背びれ胸びれまでくつついているではないか。

「私も驚いているのです。どのよろな方々かと想像していたのですが……。」

今自分の目の前に座り、お茶を美味しそうに味わう一人を見て、畠信は苦笑を隠せない。

何ともポアッとした、平和そうな顔をしているではないか。

「なあなあ、お茶菓子とかあらへんの？」
「出来れば甘いものを頂きたいですね。」「……（汗）」

訂正、想像よりもド厚かましい。

北と山中が、正信の部屋でお茶を味わつているとき、小川と梅本

は……ぐーすか寝ていた。そりやもう、大の字になつて。

「失礼しまーす！」

「あやめ姉さん、もう少し丁寧に入りましょうよ。」

安らかな午睡の静寂を破つたのは、やたらと元気な声と慌てたような二つの声。辰市とあやめだ。

そのおきやんな高音に、よく寝ていた一人はスッと目を覚ます。これも安土城で叩き込まれた覚醒法だ。

「んっだよ、うつせーなあ……。」

「……辰市、と…誰だ？」

ふわあっと大あくびをして、一人はのつそり起き上がつた。

「あやめだつて名乗つたでしょー? もう、覚えといでよ。」

「あやめ姉さん、騒いじやダメですつてば!」

あやめは顔をしかめて喚き、辰市は必死で姉を抑えようとする。

「……で、お前等何しに來た?」

目を擦りつつ、小川は一人に尋ねた。

もし、何も用がないのに來たなら、遠慮なく一人を叩き出すつもりだ。

寝起きってのは、誰しも機嫌が良くないものだから。

「残りの方々は何処に行かれたのでしょうか?」「知らね。一人ずつに分かれて、好き勝手してるぞ。」

溜め息をつき、梅本は床をつついて、忍一人に座るよう促す。恐縮しながらちょこんと座る辰市と、遠慮無しで座るあやめ。小川は両者の性格の違いに苦笑する。

「実はあたし達、板垣様から貴方達の世話役を任命されちゃってね。で、挨拶に来たんだけど……いらないなら仕方ないわね。とりあえず、お一人に挨拶しておくわ。」

「忍という身分上、至らぬところもあるかと存じますが……精一杯、

御世話役を務めさせて頂きます。」

「「そりゃ」「」寧にどうも。」

深々と頭を下げる一人に、こちらも一礼する。

すると、あやめは何か珍妙なモノを見るような目をするではないか。

「……何だ？」

氣付いた小川が問えば、あやめは不思議そうに言ひ。

「やつぱり、貴方達変よ。貴方達、『六武衆』なんて通り名がついてる凄い人なんでしょう？なのに、どうして私達に頭下げたりするの？」

そんなことを聞かれても、と一人は顔を見合させて、うーんと唸つた。

「別に意味とかないけどさ。つてか、身分とか俺達よくわかんねーしな。」

「……こだわる必要もない。」

未来の人間に、身分のどうこうなんて関係のないことだ。むしろどうでもいいことで、考えるようなことではない。

「だから、そんなに恐縮しなくてもいいぞ。あんまり丁寧にされると、居心地悪いから。」

「……これは辰市に言つてるからな。」

梅本は辰市を見ながら言い、小川はあやめをジロッと見る。

「何よ、あたしだつてやるときはちやんとやるんだからねー。」

キーキー突っ掛かるあやめを小川は片手であしらい、聞こえないフリをする。

「ま、六人全員がこんな感じだし、辰市さんも肩の力抜いて、そこそこテキトーにやつてくれりやいいから。」

身分の壁をさらつとぶち壊し、梅本はぽかんと呆けたような顔をしている辰市に笑いかけた。

「……わかりました。梅本様…いえ、梅本殿がそう言つなら。」

「ま、そういうことでよろしく頼むわ。」

未だにワーウー言い合いを続いている小川とあやめを後日に、二人は館の内部についての話を始めるのであった。

同時刻、甲斐と敵対する越後では、こんな会話が交わされていた。

「甲斐の虎の元に、見慣れぬ客が訪れたとの知らせが。」

「……見慣れぬ客?」

薄闇の中、密やかな声が僅かな警戒の響きを含んだ。

「して、どのような者共だ?」

「男が一人、女が四人……何れも武士の装いではありませんが、商人や茶人でもない様子。皆、妖馬に騎乗しておりました。」

声の主は女と男、そして女のほうが報告を受けていた。

「妖馬か……近頃、噂になつてゐる『六武衆』という可能性は?」「神憑きとしての気配は感じない、とのことですが……しかし、あの武田 信玄が謁見を即座に許したようです。ですが、全員がまだ年若く、もし神憑きであるならとても手練れといえるものではあります。」

女は溜め息をつき、呆れたように呟つた。

「全く……『六武衆』とは一体何なのだろうな。ここにこの通り、話が乱されていて一向に正体が掴めない。まるで蜃氣楼のようではないか。」

噂が噂を呼び、眞実が偽りに姿を変えていく。

ここまで「じちや」「じちや」としてはいるなんて、恐らく誰かが話を攪乱させているのではないのだろうか。

「如何いたしますか?」

黙つてしまつた女に、男が声をかける。

「一度、私の方からお館様に話をしてみよ。お前は引き続き知らせを私に報告してくれ。」

「……然るべく。」

スッと消えた男を見送り、女は立ち上がつた。

「甲斐の虎……一体何を考えているのか。」

いすれ、また戦が始まる。

その時、彼がどう出でてくるのか……もし仮に、『六武衆』を手に入れていたのならば。

「私が、始末しなければいけないかもしれないな。」

不敵な微笑みを浮かべ、女は低く呟いた。

そんな不穏な空氣を、甲斐でのほのぼと過ごす六人は知る筈もなく。

「なーなー殿下、今日の晩飯つてなんだと思つ?」
「チロちゃんはいつも『飯のことばっかりだね』。まあ僕も気にな
るけど。」

片や夕飯に思いを馳せ。

「ミナちゃん、これ何やろ?「うわ、あたし読めんし。」

「こりらは……もしかして兵法書でしょうか?そりゃマンボウさん
読めませんよ。」

片や他人の部屋をガサゴソ漁り。

「もー大変なんだよ、あいつらは全然纏まりねえしさ。俺何回囂を
痛めたか……。辰市も色々ありそうだよな。」

「お疲れなんですね、梅本さん……。私もあやめ姉さんがみんな感
じなので、大変なんです。」

片や日々の苦労をブツブツ語り合つ。

「もおーー何であたしづっかり怒られるわけーー!?板垣様つたり
つもいつも辰市ばかり褒めるのよ!酷いと思わない、小川ッ!?
「……だから、それを俺に言つてどうなるんだ?つてかお前、呼び
捨てかよ。」

片やずれていく愚痴を嫌々聞き流す。
さてさて、これからどうなることやら……。一寸先は闇、と
いうことだらうか?

一十一三の歎「武田フアミリーと一緒に、やつぱ交友つて大切だと思つんだな。」

ちょいとだけ出てきました、越後の人々。

さあ次回はどこまで進展するかなー・・・・・。

早く進めたいけどなかなか進まないんですね。

でも気長に待つていてくださいまし！

そしてお気に入り登録が50件になりましたー！！！

祝・50件、皆様このようなまだまだ未熟な作品をお気に入り登録してくださつてありがとうございます！

評価のほうも順調に上昇しておりますがたいかぎりです。
これからも頑張ります！

一十四の嘶「拉致と誘拐の違いは何だ。」

今日もいい天気だ。

青い空、爽やかな風、煌めく太陽……そしてこんな日は、昼寝するのに限る。

甲斐の虎も、のんびりと傍らで寝そべっているが。

「つて、違げエだろ！」

「ハふあ！？」

盛大に跳ね起きた梅本は、自分達の隣で引っくり返っている信玄の腹に容赦なく肘を落とした。

「何で一国の主が俺達と一緒に昼寝してんだよ！？」

「がはつ……そこに突っ込まれるとは思わなんだわ……！」

「普通突っ込むわ！？」

唸りながら梅本は額を押さえる。何だかもつ、頭が痛い。

「うひさいなあ、何騒いで……何で信玄様がここにおんねん！？」

どんちやん騒ぎに気付いた北は、隣で悶絶する信玄に驚いて飛び起きる。

「いやあ、仕事が一息ついたから、ちょっとお主等と遊ぼうと思つて部屋を覗いたのだ。そしたら、お主等があんまり気持ち良さそうに寝ていたものでつい……。

「……子供か、あんた。」

目を開けた小川は、身を起こし呆れたような表情をしてみせた。今目覚めたのは四人。他の三人はいつ目を覚ましたのか、タオルケット代わりの布はもぬけの殻だ。

自分達は余程眠かつたんだろう、全く気付かなかつた。

「春眠暁を覚えず、か？」

「……猛浩然だな。当たらずといえども遠からずと言つた所だ。」

ちょっとびり孝研っぽいやりとりを交わして、四人は立ち上がり、ぐちゃぐちゃとした布に足をとられないよう注意しながら部屋を抜け出した。

「あいつら、どこに行つたんだ？」

谷中、山中、木下の三人は、どこにいるのか。

梅本が辺りを見回してそう言つたとき、ズドン、と物凄い爆音が鼓膜を乱打した。同時に、荒れ狂う風が館中を吹き抜ける。

「な、何事や！？」

耳を押さえて北が叫び、爆音のした方向を見る。バリバリ、と空に見える白金の筋は……雷だ。

「……鍛練場の方だ。」

「嫌な予感がするのー。」

小川と信玄は顔を引き攣らせて咳く。

四人は目配せをして、一つ頷くと脇田もふらずに爆音のした方向へと向かつた。

「あは、あはははは……やつちやつた」

プスプスとあがる煙、黒焦げの地面、バタバタ倒れている人々。その中、無傷で笑っているのは、電王を手にしている谷中だ。

「……雷つて、本当にコントロールが難しいんですね。大丈夫ですか、お二人さん。」

開いた舞風を畳み、山中は背後でムンクの顔になっている辰市とあやめを気遣つた。

「雷の一撃も防げるんですか……丈夫で何よりです、舞風。」

そして、着物の埃を叩いて落とす。

「おい、何したんだよお前等！大丈夫か！？」

駆け付けてきた梅本達は、この惨状に言葉を失つた。

「……何だこれ。」

やつと一言、これだけ言えた。

「いや、あのね……鍛練に付き合つてもうりつてたんだけど……新し
い技使つたら、こーなつちやつてわ……。」

未だに、ビビっと震える空氣を纏い、困りきつた顔で谷中は頭をかいた。

「む？ セツニ言えば、もつ一人ちつこのがおうどや。」

げんなりしていた信玄は、いつもちょいちょいしている木下の姿が見えないことに気が付いた。

「雷に消し飛ばされたんとちやうが？」

ボソッと北が物騒なことを呟いたとき。

「失礼なこと言つな、この馬鹿マンボウ！」

足元からそんな怒声がしたかと思うと、彼女の影から勢いよく黒い棒が伸びる。それを呼び出した凧鮫で防ぎ、北は一、二歩下がった。

「ちょ、何でんなトコから出てくんねん！？」

影蝶蛸を握り締め、影から姿を現したのは木下だ。

「新しい技だぞつー影抜けつて言つんだとー！」

得意気に木下は言い、今度は梅本の影に入ると、小川の影から飛び出してくる。

「影から影へ自由に行き来出来るみたいなんだ。便利だよなー！」

新しい技の結果に、彼女はとても「機嫌そつだ。

「う……な、何という威力か……！」

「あ、「めんね虎昌さん！大丈夫？怪我ない？」

すぐ近くで倒れていた男が、呻きながら半身を起こし、谷中は急いで駆け寄る。

真紅の派手な小袖と、それに合わせたかのような紅蓮の髪。とにかく第一印象は「真っ赤」である彼は、梅本達にとつて初見だった。

「「」つやまた派手にやられたの、飯富。」

にやにやしながら、信玄は飯富と呼ばれた男を見下ろした。

彼は飯富 虎昌。『武田四天王』の最後の一人である。戦場での猛々しさから、『武田の猛虎』と呼ばれており、かの有名な武田の赤備えの元祖でもある。

「お館様……この飯富 虎昌、六武衆を甘く見ておりました……。」「ホントに「めんね。まさかあんなに凄く爆発すると思わなかつたんだ。」

谷中は虎昌に肩を貸して、申し訳なさそうに言つ。

「殿さん、よく制御するのが難しいと嘆いてますものね。」「そーなんだよ。けよつと氣を抜くと、すぐに爆発しちゃうんだもんな。」

近寄ってきた山中も、虎昌を支えてやる。

「辰市ー、あやめー、水くれよー。オレ喉乾いたー！」

「は、はいただいま！」

木下に袖を引かれ、辰市はあやめと共に井戸の方へと走つていいく。
「ところで信玄様、さつき勘助様が信玄様のことを探していました
が……。」

「ム？ 勘助がか？」

思い出したかのように山中が信玄に言えれば、彼はきょとんとした
顔で首を捻る。

「……仕事を放り出していた、というわけではないよ。だな。」「失礼な！ 儂だってやれば出来る子だもん！」「だから、もんって言つた。んで、子つて歳でもないやないか。」

小川の苦笑いに対して信玄が反論し、更に北が呆れた表情で溜め
息をつく。

「とりあえず行けば？ あ、水ありがとな。」

三つの水を持ってきた忍つ子二人に礼を言い、木下は手をヒラヒ
ラと振る。

信玄は頷き、勘助を探しに行く。

「おい、お前等ここ片付けた方がいいんじゃないかな？ その人、俺達
が連れてつてやるから、二人で片付けろよ。」

何か色々散らかっている鍛練場を見回して、梅本はそう提案して
みる。

「あー……そうだね。暴れたのは僕達だし。」

「このままだといけませんね。」

「一応、出来るところだけやつとくか。」

ハハハ、と力なく笑い、三人は虎昌を梅本達に預けて、何かの残骸や黒焦げの材木を撤去しにかかる。

それを後目に、梅本達は頭上にピヨピヨが回っている虎昌を運んだのであった。

その日の夕刻、越後では。

「……面が割れた、と？」

「はっ。飯富 虎昌に肩を貸し、部屋に入るところを田撃したとのことにござります。」

女の纏づき配が、瞬時に変わった。

「他の者共はどうだ？」

張り詰めたような空氣の中、女は男に問う。

男はしばらく躊躇つた後、静かに首を横に振つた。

「わかりませぬ……。本当に、我々にも掴めないです。武田は忍の扱いに長けている。それ故、敵側の忍に対する感覚が鋭敏……こちらがわも、二、三人を忍ばせるのがやつと、と言つたところなのです。情報の不足も理由の一つですが……気配を感じないというのが、最も我々にとつては苦しいことになりますれば……。」

男は悔しげに言い、深々と頭を下げた。

「しかし、何とか顔は確認する」ことが出来ました。如何いたしますか？」

女は組んでいた腕を下ろして、言ひ辛そうに口を開いた。

「実は……お館様に話をしてみたところ、非常に興味を持たれてな。一度会うつてみたいと仰せられてしまつた。」

彼女の苦虫を噛み潰したような表情に、男は深い溜め息をついた。

「出来れば、此方に連れてこことの命が？」

女は「ぐつ」と頷いた。

「……然るべく。」

「すまんな、やりづらい仕事だと嘗てのはわかっているのだが……。」

男は微かに苦笑した後、一礼して姿を消した。

その日の夜。

「とにかく、今武田の戦状況はどうなつてゐんでしょうか？」

ふと思いつ出したかのように、山中は髪をとかす手を止めて言った。

「戦の状況？」

仰向けに引ひくじ返っていた梅本は、その言葉に反応してむくつと起き上がる。

「はい。実は鍛練場の片付けてをしていたときに、信玄様と勘助様が通るのを見かけたんですが……何やら深刻そうな顔でしたので、戦闘のことではないのかと思いまして。」

少し考え込むよつた素振りを見せる山中。

「……考えすぎじゃないのかと言いたいところだが、実際、桶狭間の戦い以外俺達は他の戦のことを知らないよな。」

「いつど！」で手に入れたのか、小川は黒い煙管を吸いつつ、山中に同意する。

「武田と言えば、△村上、△上杉、△織田が有名どころだけじゃ、戦だとどのあたりなんだろーな？」

「この世界やと、何か色々とぞれたり狂つてたりするんやううな。」

「

木下と北の二人は、互いを団扇で扇ぎ合っている。

「多分そうだろうね。明日、誰かに聞いてみよつよ。素直に教えてくれるかな？」

「教えてくれなかつたら、無理矢理にでも聞きだせばいいだろ？」

笑いながら言つ梅本の手荒い言葉に、谷中はそれもそうか、と納

得する。随分と物騒な思考である。

とにかくにも、そろそろ就寝の時間である。鍛練場で暴れた三人は疲れているのか、日蓋が徐々に下がつてきている。

「オレ、もー寝る……眠いぞ……。」

最初に力尽きたのは木下、その後に山中、谷中と倒れていく。当然、梅本、北、小川の三人はまだ眠たくないわけで、彼等は物音をたてないようにしながら部屋を抜け出した。

向かうところは、月のよく見える館白漫の庭だ。

「たまには月見酒と洒落込むか。」

梅本がぱらぱらと手にぱら下げているのは、白い徳利。

「……あの世界じゃ、こんな綺麗な星や月なんて見ることないな。」

上機嫌な小川は、煌めく星空や煌々と輝く月を見上げて咳く。

「起きてりや、殿下も一緒に飲もうと思つてたんやけどな。あの様子じや、起こせんなア。」

北は幸せそうに爆睡する谷中を思い出し、苦笑した。

ちなみに、山中と木下はハイパー級の下戸なので、酒を飲むことが出来ない。

こんなにいい月夜なのだ、何もしないで寝るなんて勿体無いじゃないか。

三人は夜の冷たく透き通つた空気を味わいながら、庭へと入り込んだ。中に座する庭石に腰かけ、彼等はそれぞの御猪口に酒を注ぐ。

「　「　「乾杯ーー！」」

ぐいっと煽り、ふはあつと息を吐く。喉を通り過ぎる味と香りを楽しみ、しばし時を忘れた。

程よく酔いが回りかけた頃、それは突然に起こった。ほわほわしてきた感覚をにわかに刺す、微かな氣配……神憑きのものだ。

「……何だ？」

御猪口を置いて小川は辺りを見回すが、動くものはない。

「えらこちつちやい氣配やな。こりや、隠れどる忍並みにちつちやいで。」

例えるなら、蚊に刺されているときの感じの痛みのよつて微かだ。眉を寄せて北はぼやいた。

全く風流もへつたくれもない、なんて不粋な輩だろうか。せつかの月見酒が台無しだ。

「何処から来てるんだ……？上、か？」

怪訝そうな顔で梅本は空を見上げて、皿にしたものに度肝を抜かれる。

彼が見たものは、空から急降下してくる数人の忍達だった。

「何だありやあ！？」

「ドえらいノーロープバンジーやなあ。」

「感心するところが違う……！」

小川は北を殴り、神器を喚ぼうとするが。

「……これは……粉……！？」

はらはらと舞い落ちてくる粉末を吸い込んだ瞬間、急にだるさと眠気が身体を襲つた。ヤバいと思う暇もなく、力なく崩れ落ちる。意識が途切れる瞬間、聞こえた言葉。

「……捕獲、完了。」

倒れた三人の傍らに降り立つた忍は、屈み込んで彼等を抱き上げた。そのまま軽々と飛び上がる様子が、忍の体力の壮絶さを物語っている。

さて、彼等は一体何処に連れられて行くのだ？「行方は円と星のみが知っている。

「……ふあ？」

気配を感じたのかはたまた偶然か、パカッと谷中の目が開いた。むくつと上半身を起こし、ぼんやりした視線をさせらる。

「……たい焼き、食べたい……。」

ぱつりと軽やか、ぱたっと引っくり返る。そして聞こえるのは、穏やかな寝息。

三人がいなくなつたことに気付くのは、朝日が昇つたときになり

そうだ。

一十四の嘶「拉致と誘拐の違いは何だ。」（後書き）

鯛焼きつてあんこも美味しいけど、カスタードやキャラメルなんて
いう色物もおいしいですね。

さて、いよいよこの進みにくい話にも変化が訪れました。

攫われた三人の安否は？ 何が目的なのか？

ちょいちょい出てくる謎の男女は何者なのか？

あー、やつとここまで来れたですよ・・・お次は攫われた三
人に焦点を当てて書いていきますー！

一十五の嘶 「○・ニ・毘沙門天は彼女なのか？」

s.i.d.e 越後

霞がかつた意識がほろほろと戻り、朦朧とした思考が状況を求めた。

今自分達は何処にいるんだ？

背中に感じるのは、布団の柔らかい感触。

接着剤でくっつけられたような目蓋を無理矢理抉じ開けて、小川はようやく周りの様子を見ることが出来た。

「…………は？」

「ぼうっとしたまま、何度も瞬きを繰り返した後、昨晩のことを思い出して飛び起きよつとしたが、中々満足に動かない。

「…………畜生…………ふざけんな…………」

悪態をつきつつ、必死で上体を起こす。

「…………起きろバカ野郎…………」

幸せ面を曝して寝ている一人が無性にムカついて、小川は苛々と叫んだ。

すると、呻き声をあげながら目を覚ます「バカ野郎」一人。

「なん、何だあ…………うわ、だりイ…………。」

「なんか……気持ち悪いわあたし…………うぶつ…………。」

口を手で押さえる北に、梅本と小川は這こするよつてにして距離をとつた。

「てめ、こいでマーしたらぶつ殺すぞ…！」

「しゃーないやんけ、出るもんは出るんや…。」

「……偉そうに言ひな。」

何だかんだと文句の言ひ合ひをしていふと、いきなり襖が開き、三人は揃つてそちらに目をやる。

「ほう、驚いたな。あの薬を吸い込んで、もう目が覚めたのか。」

目に入ったのは、水色の着物を着た女の姿。キリッとした目は三人を捉えて、驚きの為か軽く見開かれていた。黒く真つ直ぐな髪は、首筋辺りで切り揃えられており、細く白い首には群青の数珠のようなネックレスが見えた。

「あんた、誰や？」

スッと目を細めて北が問いかけると、女は微笑しながら言い返した。

「私の名が知りたければ、お前達から先に名乗れ。それが礼儀だろう？」

口調こそ静かだが、威圧的な響きは隠せない。

「アホかあんた。他人拐つといて、どの面下げて礼儀だの何だの抜かせんねん。出直せ変態。」

「お前が変態言つな！」

梅本に後頭部をしばかれたが、北は淡々と呟つてのけた。
女は、このどつき漫才を驚いたような顔で見ていたが、やがて一
ヤリと唇を歪ませた。

「随分と威勢のいいことだ。この私が誰だか」

「あんたが何処の何者で、どんな偉いかはどうでもええ。能書き
垂れどちらんとさつさと吐き、このグズ。」

言葉を遮り、久し振りの毒舌が炸裂して、梅本と小川は溜め息を
ついて頭を抱えた。流石に、女も口元をひくりと引き攣らせている。
「……成程、あの魔王の元にいたといふ話は嘘ではなかつたのか。
とんでもない肝の据わりようだ。」

苦笑して小さく咳き、女は三人の元まで歩み寄り腰を下ろした。

「私は上杉が家臣、直江 兼続と申す。此度の無礼な振る舞い、どうか許して欲しい。」

手を付き、彼女は……直江 兼続はそう述べて頭を下げた。
その名を聞き、三人は絶句する。

「な、直江……？ホントにあんた、あの直江 兼続なのか？」

呆然として梅本が言えば、兼続はきょとんとした顔で頷いた。

「いかにも、私は正真正銘直江 兼続だが……何故そのように驚いているのだ？」

「……いや、なんかその、想像よりも勇ましい感じだったんでつい。

急いで小川が取り繕い、他の一人もつとつと頷く。

「そ、そつか。勇ましいか……。」

兼続は何やら微妙な表情だ。

三人も名前を告げ、一体何の目的で自分達をここに連れてきたのかを問い合わせた。

兼続は少しばかり躊躇していたが、やがて口を開いた。

「武田との戦の為だ。お前達は『六武衆』と称される、類稀なる神憑きなのだろう?あの『武田の猛虎』といわれる飯富 虎昌を、手合わせながらも無傷で倒したとの報告も入っている。」

「「「はいよい待す。」」」

明らかに話がおかしいので、三人はハモリながら手を前に突き出す。

「……飯富 虎昌を負かしたのは俺達じゃない。それは別の二人だ。

「誤認やで。あたしら、飯富さんの介抱はしたけどな。」

小川と北の言葉に、兼続は驚愕を隠せない。

「そ……それでは、お前達は全くの無関係者なのか?『六武衆』ではないと……?」

「いや、それも違う。一応、俺等も『六武衆』。でも、飯富さんとやりあつたのは俺等の仲間なんだ。」

梅本はやつ言い、地国天を喚び出して見せた。

「それに、通り名に六つてつこてるから、六人おるってわかるやろ？何であたしらが関係者とかやつて思つたんや？」

そう北が問えば、兼続はやれやれと頭を押さえて答えた。

「お前達は知らんだらうが……『六武衆』についての情報は、信憑性のないものや誤報が多いのだ。ましてお前達がいた場所は、忍の扱い方が上手い武田……あの小賢しい虎が、のうのうとお前達の情報をお直に流すと思ひつか？」

三人はへエ、と感嘆の声を出した。

見た目や行動はちやらんぽらんだが、ちゃんと仕事してたんだ、という意味で。

「それに、情報を攪乱しているのは武田だけではない。」

(((信兄、今川焼、GJ... -)))

内心で魔王様と白塗り元公家に礼を述べ、微かに笑う。

「……で、あんたは俺達に武田と戦えつて言いたいのか？」

小川が面倒そうに尋ねると、兼続は頷いた。それは、武田の元にいる二人ともやりあわなければいけないということだ。

「……言つておぐが、断ろうなどと思わないことだ。」

「よう言つわ、さつきから何人忍ばせとんねん。最初からあたしらを齎そりつていう魂胆やろ、見え見えやつちゅーの。」

北は部屋中を見回しながらせら笑つた。

隠れているのはザツと十何人、気配を消しているのだろうが、三人にはちょんバレだ。

「……氣配を絶つた忍を見つけるとは、ますます戦に欲しいものだ。

」

不敵に笑う兼続と睨みあう三人。一触即発な雰囲気が一瞬漂うが。

「控えよ、兼続。私はそなたに、斯様な命を下した覚えはない。」

キン、と耳を貫いた声に、びくっと身を震わせる兼続。

同時に感じる氣配に、三人は思わず腰を浮かせて身構える。

静かに襖が開き、現れた姿に彼等は目を丸くした。

頭には白い頭巾を被り、灰黒色の着物だか、法衣だかわからないものを着ている。切れ長の涼しげな目に、スッと通った鼻梁、顔立ちは綺麗な中性的だ。何処か神秘的な空氣の漂うこの人はまさか。

「上杉……謙信？」

恐る恐る、小川がその名を口にすると、彼の人は柔らかな微笑を浮かべて、軽く一礼した。

武田 信玄が人間味溢れる武士ならば、上杉 謙信はどこか人間離れした武士といったところか。

「御初に御目にかかる、『六武衆』の方々。此度は我が家臣、兼続が御無礼致した……お前達も下がるがよい。」

謙信がピシリと命じれば、わらわらと感じていた忍の氣配が、潮の退くように遠ざかっていく。

「流石、越後の龍。鶴の一聲と言つこなづしい一聲やな。」

のんびりと言つた北に、慌てて梅本が彼女の頭をしばいた。

「アホかお前はああ！…？もつちよい丁寧に喋れボケ！」

「梅ツ、お前も騒ぐな！」

小川は必死で梅本を抑えるが……しかし喧しい。

「いつたいな、さつきから人のことバシバシしばいて。武将だの何だの言うても、一皮ひん剥いたら誰でもタダの人間やんけ……。」

「頼むからもう黙つてろ！…！」

北修子、恐るべく無頼着なヤツである。

ユニゾンで怒鳴った後、小川と梅本は素早く土下座した。切り捨て御免？冗談じやない、「めんなさい。

「すいません、すいません、コイツちょっとアホでしてマジですいません。」

「後でしつかり殴つときますんで、見逃して下さい。」

ペコペコしていると、ふつと吹き出す音がして、笑いを必死に堪える声も聞こえた。

そーっと顔を上げると、謙信は袖で顔を隠していくと笑っている。

「何とも面白い者達だ……。私がタダの人間か……成程正論、間違いではないな。」

やつと笑いが鎮まつたのか、謙信は袖を下ろした。

「やはり、毘沙門天のお告げ通りだ。そなた達が此度の戦に変化をもたらすと。」

「毘沙門天のお告げ？」

梅本が怪訝そうに聞き返せば、謙信はしつかりと頷いた。

「十日程前のことだ。私がいつものように、毘沙門天に祈りを捧げていると、不意に私の頭の中に、そなた達をここに連れてくるように、という言葉が湧きってきた。それからすぐだ、兼続からそなた達が信玄の元にいると聞いたのは。」

三人は顔を見合させて、首を捻った。

「アレか？ここの中上杉 謙信は、ちょっと電波入ってるのか？

なんて失礼なことを思いながら、北が具体的には自分達に何をどうしてほしいのかを尋ねた。

「まあ、毘沙門天は置いといて。あたしらは結局どうすりやええの？戦に出ればええだけ？」

「戦に変化をもたらす、とのお告げだったからな……私としては是非とも参戦して頂きたいところなのだが、そなた達に無理強いはさせたくないのだ。意志が固まつたら、私に伝えてはくれまいか？」

謙信はそう言い、先程から黙つたままこのやり取りを見ていた兼続の方に向き直つた。謙信と曰があつと、気まずそうに兼続は顔を伏せる。

「兼続、この上杉のことを、お前は誰よりも想つてくれているのはわかる。だが、彼等を脅して戦に駆り立てるのはならん。」

優しく諭すように、謙信は兼続に語りかける。

「「」の「」とは、彼等が「」の意思で決める「」と。わかるな、兼続。
「……申し訳ありませぬ。出過ぎた真似を致しました。」

深々と頭を下げる、兼続は謙信に謝罪する。
何というか、すんなりと自分の非を認めさせてしまう辺りが凄い。

「……武田のアレとは大違いだな。」「
「違すぎるで笑えてくるぞ、俺は。」「
「いや、アレはアレで楽しいやん毎日。」

信玄とのおちやりけた日々を思い出し、力ない笑いが込み上げてきた。

とりあえず、危ない日にはあわなくて済みそうだった。
だが問題が消えたわけではない。

いくらあの上杉 謙信の頼みだからと言えど、武田にいる三人と
やり合つわけにもいかないし、まずは仲間達とどうにかして連絡を
とるのが先決。

残念ながら、未来の便利グッズである携帯を持つていない。そり
やそうだ、寝間着の中でも携帯を握り締めているわけじゃない。
どうしたものか、と三人は頭を悩ませるのであった。

s.i.d e甲斐

朝つぱらから、甲斐の躑躅ヶ丘館は上に下にの大賑わいだった。
皆が目覚めたのは、谷中、山中、木下が行方不明の三人に気付き、
館中を走り回った足音と騒ぎ声によるものだ。

そこから家臣総出の搜索が始まり、庭で置き去りになつた徳利と三つの御猪口を見つけたときにや、大騒ぎだつた。

「どうしようつーへ。どうしようつ殿下！？もしやばいことになつてたらどうしようつー？」

木下はジッとしていたが動き回つ。

「大丈夫だつて、そう簡単にやられたりしないよ……多分。」

自信がなさそうに言つ谷中。それを黙つて見ていた山中が、静かに一言。

「チロさんの影抜けで、何とか出来るんじやないんですか？」

間。

「忘れてた！？」

ハツとした顔をして、木下が叫ぶ。

「しかし、いきなり移動してはまずくないか？」

「敵の本拠地の真ん中に顔を出すわけにはこまめさんよ?」

信方と虎泰は、早速影に飛び込むとしている木下の肩を押され
て止めた。

「何だよ、じゃあどうするんだよつ!」

「何か、連絡が取りあえるものがあればよいのだが……。」

腕を組んで考える信玄の隣で、木下はブーブーと文句を囁く。や
れに、やれやれと言いたげな視線を送りながら山中は谷中にてつと
耳打ちした。

「殿下さん、あの入達の携帯……」つそつ持つてきて下せりませんか
?」

「うん、わかつた。」

合点がいったのか、谷中は素早く走り去り、直ぐに戻ってきた。
そして額を寄せ、何だかんだと言つてつゝてこの武田軍団の中から
木下を呼ぶ。

「何か良いこと、思い付いたのか?」

「はい。チロさん、影の中に潜んでいるときは、上の様子つて見え
ますよね?」

確認するよひに問う山中に、木下は頷く。やけで山中は周りから
見えないよう、携帯を彼女に渡した。

「これで渡してきて下せり。良いですか、なるべく身体は外に出さ
ないよつ!」上手くやらなくちゃ駄目ですよ。」

たちまち木下の顔がキリリと引き締まり、携帯を二つ、懐に放り込んだ。

「僕達の気配は、どうせわからぬみたいだから便利だよね。影の中だと、尚更見つかないよ。」

谷中は早速自分の携帯を忍ばせたのか、懐を軽く叩いた。作戦会議、終了。

「お館様！ オレ、一応行つてみる！ 影から出なけりや、絶対に大丈夫だから！」

信玄や勘助が止める間なく、木下はそのままひしめきながら、近くの影に飛び込んだ。

胸に抱えるのは唯一の連絡手段、無事に届ける事が出来ればこっちのものだ。

木下、初の単独任務だが・・・・騒動なしに上手く遂行できるのだろうか？

I十五の斬 「コ・ニ・毘沙門天は彼女なのか？」

(後書き)

タイトルについてはつゝこみナシの方向でお願いします（笑）
はい、やっと出てきました越後の龍。

上杉 謙信は本当に謎の多い武将だと思いませんか？
どこかズバ抜けてるような感じがして、それこそ「電波」な武将だ
ったと思えるんですが私的に。

ちなみに直江も女性にしました、ええ先に謝つとりますごめんなさ
い。

さて、謙信様は今のところ男か女かどちらかは明かしてません。
謎が謎呼ぶ上杉編、それでは次回でまた！

一十六の嘶　「Drive in越後!・デリバリーは確実にね。」

s i d e 越後

「どーしたもんかな。あいつら、どつたんばつたんしてなきゃいいけど。」

寝間着から着替えて、梅本は遠い甲斐の三人を思う。つづづく、未来の世界の便利さを痛感していた。

とにかく、参戦の相談も兼ねて、三人だけにしてほしいと上杉主従に退出を申し入れて、今はうだうだと話し込んでいた。

「……武田との戦、と言えば、川中島の戦以外ありえないな。といふことは、武田側は村上との戦を無事に済ませたつてことになるのか。」

小川はつーむと唸る。

確か、村上との戦で「砥石崩れ」と呼ばれる痛恨の大敗を喰らつたとき、武田は多くの重臣を失つた筈だ。それこそ、板垣 信方や甘利 虎泰といったような大物を。

「……歴史の狂いつてのは、やり難いもんだ。川中島の戦は、何回かあつたみたいだが、今回では何回目だろうな。」

「四回目だったら泣くぞ、俺は。」

五回に渡る戦の中でも、最も激しい戦いが行われたのが、第四回川中島の戦である。この戦で、軍師・山本 勘助が戦死した。

北は両者の話を聞きながらポップとしていたが、ふと何かが自分の太股辺りをつつくのを感じた。

それは細い棒のよなもので、つんつん、つんつん、と一定の間を置いてつついてくる。

普通なら、驚いて飛び上がっているところだろうが、生憎普通とは随分かけはなれた世界に来てしまったもので、あまり驚くことがない。

この自分をつつく何かを直ぐ様理解して、北はニッとした。そして辺りの気配を探り、敵がないことを確認すると、床を叩いて合図を送る。

「何やつてんだ、お前？」

「安心し、来たわ。」

梅本にへラッとした笑みを寄越して、北は立ち上がり影を映すと。

「よつ！大丈夫みたいだなつ！」

安心したような顔で、木下がにゅるんと影から出てきた。

「……そうか、一度出入りした影から影へ、自由に移動出来たんだな。」

「おふこーすだ、M'r・プリンス！」

グツ、と親指を立てて木下は言い、懷から彼等の携帯を渡してやる。

「おお、Gっだチロ！」

梅本は携帯を引っ掴み、懷に隠す。

「で、ここの何処なんだ？」

「ああ、ここの上杉んと。」

部屋をキョロキョロと見回して、木下が肝心な事を聞くと、北はあつわりと答える。

「……は？」

「だから、上杉。越後。天地人。」

ピタッと動きを止めた彼女に、北は更に追い撃ちをかける。

「ひ、上すむぎつー。」

「はい落ち着こづな。」

叫ぼうとした木下の顔面を、梅本はすかさずべちつと掌で押された。

「マ、マジで？」「マジで軍神ん家？」

「マジマジ。ちよいと前に、愛の人と二人セツトで会つたから。ちなみに、俺等を拐えつて命令したのは愛の人だつてさ。」

あんぐりと開いた口に氣付く、木下は急いで口を開じる。

「上杉の「」要望は、あたしらに戦に出で欲しいんやと。」

「上杉の戦……思い付くのは一つか。川中島で間違いないな。」

腕を組み、木下は三人を眺めた。

「理由つて、オレ達が有名だからか？」

「……軍神が言うには、毘沙門天の「お告げ」らしいぞ。」

「お告げ？毘沙門天と謙信様って会話出来んのか！？」

小川は木を丸ぐする木下に、深々と溜め息をついた。

「そんなもの信じられるか。だが、そうとしか言わなかつたんだ。
俺達が、戦に変化をもたらすとかなんとか……。」

しばらく難しい顔をして、何やら考へていた木下だが、答は出る
筈もなく放棄。

「ま、いいや。皆が無事つてことがわかつたし。てなわけでオレは
帰るけど、戦に出るのか出ないのかは全員で決めよづ。もしかし
たら、ホントに変化があるかもしんないし。」

再び北を立ち上がり、影の上に乗る。

「じゃーなーあ、それとメールは細かく寄せつけてミナちゃんが言
つてたぞ！こっちもメールするから、携帯は絶対に見つからないよ
うに隠しつけて。」

ぴらぴらと手を振り、木下は影の中に潜つていった。

「とうあえず、あたしらの居場所と拉致られた理由はチロから伝わ
るな。」

「連絡つてことは、やっぱ戦の情報だよな。まあ、どうせ俺等はど
つちの味方にもつかないし、躊躇つこともないか。」

「……戦に出ると決めれば、重要な情報も手に入る。やり取りして
いて損はないだろ。」

中々悪どいことを考える三人だが、本来彼等には戦云々のことほ

関係ないことだ。

誰かに忠誠を誓つてゐるわけでもなし、必死で天下を狙つてゐるわけでもなし。

三人は立ち上ると、部屋を出ていく。勿論、情報収集の為でもあるが、半分は恐らく春日山城だと思われるこの城の観光だ。

「春日山城と言えば、ほほ空想で描かれた石垣や天守閣が見所だよなー。」

城好きな梅本はうきうきと言い。

「越後の特産品ってなんやろ?」

北は早速物色の姿勢に入り。

「……謙信は酒豪で有名だったな。美味しい酒があるといいけどな。」

酒と煙草が生き甲斐の小川は、まだ見ぬ美酒に心弾ませて。

s i d e 甲斐

一方こぢらでは、影に潜つた木下の帰りを待ちわびていた。

「木下殿は無事であるつか……?」

信方は心配そうに言い、庭でうきうきしてい。

「板垣、少し落ち着かんか。にしても、お主等は静かだの。」

信玄は特に不安そうな様子もなく、淡々と待つている谷中、山中の一人に目を向けた。

「……一応、心配はしていますよ。ですが、そんなに居ても立ってもこられないといつわけではありませんね。」

表情を変えることなく、山中はあっさりと答えた。それに谷中も続く。

「モーセー。皆一筋縄じゃないかないよつな連中ばかりなんだよ?」

停雲落円、なんてことはないらしい。二人の言葉に、勘助はフツと笑った。

「確かに、」両人の言つ通りですな。特に北殿はあんな性格故、拐つた側は気が抜けてしまっているかもしれませぬ。」

ある意味大胆不敵な北を思い出したのか、勘助は困ったように言った。

「俺はまだ、あの三人とは余り話したことはないが……さつと谷中殿のようにお強いんだろうな。」

虎昌は目を輝かせ、一度手合わせ願いたいものだ、なんて言つている。

そんな中、谷中の影から木下が飛び出し、着地にしぶじぶつてふらついた。

「あだつ！？」

「うわあ！？」

当然なんの前触れなく、人間が影から出でればびっくりする。谷中も然り、よろめいた木下を避けようとするが、見事に巻き込まれてその場に引っくり返った。

「……何やつてんですか、一人とも。」

溜め息をついて、山中が一人を白い目で見た。

「いや、ちょっとした戯れ？」

「どじてよ～、チロちゃん苦しいつてばー！」

「ごめんごめん」と謝りながら、木下は谷中の上から身体を退けた。

「で、報告は？」

信玄が報せを促せば、木下は立ち上がってピシッと敬礼をキメる。

「聞いてびっくりだぞお館様ッ！－あいつら、上杉 謙信のところにいる－！」

それを聞いた瞬間、辺りが一気にざわつき始めた。

「……やはり、越後の龍の元であつたか。だが、実行した者は彼奴ではない。そうであるわ！」

一ヤリとした笑みを浮かべ、信玄は確信したように尋ねる。木下は頷き、報告を続けた。

「実行犯は直江 兼続だ。で、皆丁重に扱われてるぞ。拐つた理由は、戦に出で欲しいからなんだと。お館様、その戦つて川中島でやるんだる。」

きつぱりと言い切り、じつと木下は信玄を見つめた。

「何故、川中島だと断言出来る?」

信玄は何氣無い風を装つて尋ねたが、目付きは何かを探るよつと細くなつていた。

「武田と言われれば上杉、この両者の関わる戦など、川中島以外思付かないじゃないですか。」

山中は木下の隣に立ち、当然だとでもこいつみて笑つてみせた。

「だよねえ。それがどうかしたの?僕達、何か変なこと聞いた?」

「いや、お主等の言つ通りだ。」

谷中も首を傾げて問ひ掛けるが、信玄は曖昧に答えるだけだった。

「…とにかく、今一度忍を集め、春日山城の探索に当たらせよ。武田が忍の力、日ノ本一と示すがよい!…」

「…はつ、お館様!」

「見ろよ、凄いぞ！春日山城も良い城だよな～。大きさや派手さは安土城に軍配が上がるけど、雰囲気的だと、こっちの方が上品だ。」

三人は揃つて春日山城を見物中だ。

北はバラバラでもいいんじゃないか、と意見を……いや、「ゴネたのだが、敵地での単独行動はよくないと一人に諫められて、渋々言うことを聞いたのだ。

「なあ、もうええやん行こうや。あたし飽きた。」

「……酒が飲みたい。」

「お前等学科は何処か言つてみろー！」

後ろでブーブー文句を垂れる一人に、梅本は苛々と一喝した。ちなみに、文化財学科である。

「わーったよ、行きやいいんだろ行きや。」

舌打ちして梅本は歩き出そうとする。

すると、彼を呼び止める声がした。

「見ない顔ですね？」

振り返ると、そこには初老の男が一人立ち、物珍しそうな視線を送っていた。

髪は真っ直ぐで長く、色はロマンスグレー。一つに纏められた髪は、片側に寄せられ、ほそりとした肩に垂れていた。柔らかな琥珀色の瞳は、強い好奇心を色濃く湛えている。漂う雰囲気は、上品で穏やか。

「…誰や、あんた。」

腕を組み、北が相変わらずな調子で尋ねると、男はおひといけない、とばかりに佇まいを正した。

「これは、とんだ失礼を。私は名を宇佐美 定満と申し上げます。

」

「……ウサミミ?」

「違う……!」

北がまた、ふざけたことをへらつと笑つて言つと、梅本と小川の二人はダブルで後頭部をしばきあげた。

「……? ウサミミとは」

「いーえ何でもないんですよあはっははははー。」

食いついた話題を、梅本は高笑いで無理矢理強制終了させた。

「……は、はあ。」

何か納得いかなさそうな顔だが、この話は流れた。

「……宇佐美 定満、と名乗られましたか?」

仕切り直して、小川が確かめるように問えば、彼は頷く。

宇佐美 定満、彼は謙信が若かりし頃から傍に仕えていたが、詳しいことはあまりわかつておらずミステリアスな存在の軍師とされている。

「はい。宜しければ、貴殿方のお名前を伺つても?」

何処か見透かしたような口調に、もう既に名前なんか知ってるんじゃないか、と三人は言いたかったが、名乗らないわけにもいかない。

それぞれ名を告げると、定満は琥珀の眼を軽く見開き、微かな微笑みを見せた。

「貴殿方が……殿のお告げによつて招かれた『六武衆』なのですか。」

話の伝達の早いこと。定満の視線を受けながら、三人は同じことを見つた。

「なあ、あたしあ腹空いたわ。何か食べたいんやけど。」

北の言葉に、そう言えば田覚めてから満足に食事らしき食事をとつていなかつたことを思い出す。

「……色々あつて忘れてたな。宇佐美さん、飯が食いたいんだが、どうすればいい?」

会つたばかりの自分に、いきなり頼つてくる三人。

定満は内心驚いていたが、それを顔に出さずにこやかに答えた。

「実は、私もまだ食事をとつていないので。一緒に参りましょうか?」

来たばかりで城の勝手を知るよしもなく、彼等は定満のありがたい提案に二つ返事で頷いた。

定満は定満で、この不思議な三人と早速話すことが出来て大満足である。元より、『六武衆』には興味はあったのだ。

「それでは、行きましょうか。」

定満に連れられ、三人は後に続いた。

～春日山城「食堂」にて～

「いや待てよ、食堂？食堂つてあの食堂？」

何だこりゃ、と梅本は前に広がる光景に目を剥いた。
そこはまさに食堂。社員食堂だととか、学生食堂だとかに当たるなもの。

「……いつも、ここで食事を？」

「はい。殿の提案として、いつもすることで、我々や兵の統率力が増し、戦でも士気が上がるようです。」

定満の話を聞きながら、小川は食堂の中を見渡した。

そこには一兵卒も将も関係なく、和気藹々と食事が行われている。

「武田にはない施設やな。まあ、斬新や。まさか南蛮仕様やとは思わんかったけど。」

北が目を向けているのは、テーブルと椅子である。
この頃、まだ海外の代物は伝わっていないのだが、流石は異世界。
設定が本当に無茶苦茶だ。

「おや、北殿は中々目の付け所が宜しいようだ。」「そりやどうも。」

ざわざわとした中、数多くの視線が自分達に注がれている。それをなるべく気にしないように、三人は空いている椅子に腰掛けた。

「何か、いつも見られるといこ氣はしないな。」

「……居心地は良くないな。」

早速顔をしかめる梅本と小川に、定満は苦笑した。

「それは仕方ないことでしょう。貴殿方は、『自身の奇怪さを知らないようだ。』

「アホ、何処の世界に自分のことが変やと思つ奴がおんねん。」

上杉の一大軍師の一人をアホ呼ばわりし、北はフンと鼻で笑った。

「……それもそうですね。お氣を悪くなされたら申し訳ありません。」

ざわざわ、とますますざわめきが大きくなつた。そりやそうだ、あの宇佐美 定満をアホ呼ばわりする奴なんだ、そうザラにいない。

「……まあ、そんな」とぱづつでもいい。」

小川は興味なさげに話題を終わらせて、ジャストタイミングで運ばれてきた食事に手を伸ばす。

もぐもぐと口を動かしながら、三人は甲斐の三人に送るメールの内容を考えていた。

一十六の嘶　「Drive in 越後！・デリバリーは確実にね。」

(後書き)

ウサミミさん」と宇佐見さんの登場です。

・・・・この人ホントわけわかんない人ですよね。
さて、ここからどうしょうか。

ちょっと悩み氣味です。

甲斐の三人とはここからずっとメールでやりとりします。
次回は上杉の皆とお話タイムです！

「十七の斬「肝心な話は、メールでするためござへむ。」

周囲の視線を無視して、三人は黙々と食べる。そんな中、小川はふと自分の椀の中に食べた箸の山菜が何故かあるのに気付く。はて、と首を傾げ、味噌汁を啜るフリをしながら注意深く椀を見ていると……。

「おま、勝手に何を入れてるんだ！？」

「チツ、見つかったか。」

ガチッ、と素早く小川はこいつを伸びてきた箸の先を挟む。それがつまんでいるのはあの山菜、犯人は北だ。

「自分で食え、それくらい！」

「嫌や。あたしこれ嫌いやもん。」

「だからって俺のトコに入れるなよ！――」

激しい箸の空中戦……最早ドッグファイトと言えるような戦いを、梅本は深い溜め息をついて眺めた。

「行儀悪いぞ、お前等。」

一応、一言注意するが。

「そんなんやから彼女も出来んねん、この生臭野郎が。」

「それとこれとは関係ないだろ！――？いいからそれ入れんな――！」

「うきさいなー、好き嫌いすんなやー！」

全くもって、何一つ聞いたことがないねえ。そんな様子を畠山と見て定満は申し訳なさそうに言った。

「すんません、こいつらこいつもこんな感じで。俺、一人じゃ手に負えなくて。」

色々と苦労してそうな彼を見て、定満は励ましの意味を込めて梅本の湯飲みに茶を入れてやる。

「謝る」とはありますよ。私でよろしければ、愚痴くらいは聞きますから……。」

何やら妙な友情が芽生えてきている。

「毎度毎度あいつらは揉めるし……その度に俺は一人で止めなきゃならないし……だれも叱りつとしないし……。」

入れてもらったお茶をまるで酒のように煽り、グチグチと梅本は呻きだす。それを若干困った顔で聞いてあげつつ、定満は未だドングファイトを続ける二人を見、やれやれと首を振ったのだった。さて、食事をしに行つたのか、愚痴を言いに行つたのかよくわからぬ時間過ごした後、三人は謙信に呼び出しを受けた。

「……話すことなんか、何もないぞ。」

「お前達から武田の情報を聞き出そなど、少しも思っていない。」

「

前を行く兼続は、笑いながら小川の呴きに答えた。

「謙信様は、純粋にお前達に興味を持つておられる。武田や織田の元でどう過ごしていたのか、聞きたいそうだ。」

それはそれで、何やら答へにくい。何をしていたのか、と聞かれれば、口クな」としかしていなかつたよつな……？

「謙信様、六武衆の三人を連れて参りました。」

あれこれと考えていて、兼続の声で我に還り、三人は慌てて廊下に膝をついた。

「入れ。」

「し、失礼します。」

許可を得て、三人は恐る恐る戸を開き、中に入った。それを見送つて、兼続はその場を離れた。

「定満との話は、楽しかったか？」

「軒猿、とやらのお知らせか。」

「いやかに問い合わせてくる謙信に、北は顔をしかめて言ひ返した。すると、謙信は皿を丸くしてみせる。

「よく」存知だな。」

「そりや、俺等も色々と学んでるんだよ。」

よつこりせ、と梅本は腰を下ろして軽く笑う。
軒猿とは、上杉が使う忍の名称だ。

「……で、一体何を俺達に話させよつていうんだ？」

小川の探るような視線を受けて、謙信は苦く微笑んだ。仕方ない、
彼等は無理矢理連れて来られたのだ。

例え自分が命じたことでなかつたとしても、彼等にとつてここは
敵の巣窟……警戒するなというのが無理である。

「何を、と言われても……そなた達が織田や武田でとつ過ごしてき
たのか、私は興味を持つただけなのだがな。」

「ふうーん……。」

シラーッとした目で三人は謙信を眺めつつ、しばらく黙つて考え
る。

嘘は言つてなさそうだし、何かを企んでいるわけでもなさそうだ。
それに、上杉 謙信は何よりも『義』を大切にする武将だし、みす
みす自分から不義なことはしない筈だ。

「……話したくない」とは言わない。それで良いなら。」

姿勢を正して、三人は会話の体勢に入つた。

謙信は嬉しそうに微笑むと、彼等に丁寧な礼を述べる。そこから、
謙信の質問に答えていくのだが。

信兄は濃姫さんにベタ惚れ、信玄は甲斐のゴキカブリで裏の支配
者は山勘、光秀さん萌えー……と、本当にろくな話がない。もう一
度言おう、ろくな話がないのだ。

調子に乗れば、いくらでも事実をねじ曲げられる三人は、脚色を
加えに加えていく。あまりのハチャメチャ振りに、謙信は人目も憚
らず声をあげて笑つた。

「甲斐のゴキカブリとは、それは少し酷すぎる例えではないか?」
「いや、ホントに動き方がゴキカブリそっくりでですね、勘助さん
にギリッギリに縛り上げられて……。」

特に謙信が田を輝かせて聞きたがったのは、やはり好敵手の話だからか、信玄の話だつた。

ただ、信玄の話と言つても、仕事をサボつて勘助に縄で宙吊りにされた話とか、信玄の食事に唐辛子を仕込んでやつただとか、そういうアホな話ばかりだ。

「えらい謙信さん、信玄のオッサンの話を聞きよるなア。」

「ニヤニヤと笑いながら北は謙信に言つ。その笑みのいやらしさと、すかさず梅本のチョップが額に炸裂した。

「や、そだらうか？私はそんなに…信玄殿のことばかり聞いているだらうか？」

首を少し傾げて、戸惑うような表情を浮かべる謙信に、今度はこちらが困つてしまつ。ちょっとからかっただけなのに。

「……そつとは、思わないがな。」

「おつ、俺も同意見。アレだろ、相手があの甲斐の虎だし、色々情報収集したいんだろ。」

小川と梅本は取り繕つよつて、この微妙な空氣を流そうとする。

「ま、別にビうでもええんやけどな。」

「お前が言ひ出しつべだろ。」

自分が振つた話題にも関わらず、興味なさうに放棄する北に、梅本が呆れ顔で溜め息をついた。

「……時に、そなた達。参戦の話はどうなつたのだ？」

その質問に、三人は眉を寄せて視線を交わしあつた。彼等の様子を見て、謙信は少し申し訳なさそうに俯く。

「急かしている訳ではないのだが、やはり気になってしまつてな。私達の『義』の為にも、早く答えが欲しくなつてしまつのだ。」

「……その義、つてヤツが、あたしにはイマイチわからへんわ。」

義理と人情、ならよく聞く言葉だが、謙信が唱える『義』とは一体何ぞいや？

北は説明を求め、小川をチラ見する。彼は面倒そうに北に向き直り、さらつと言つた。

「人として行うべき正しい道のことだ。物事の道理に叶つてゐることも意味に入る。」

まあ、これは小川がわかりやすいように噛み砕いた説明だ。

ちょっと詳しくいと、これは儒教のいう「五常」という教えの一つ。五常とは、人が常に守るべき五つの道をいう。

仁・義・礼・智・信と五つの徳があり、仁は思いやりや慈愛、礼は礼儀や敬意、智は正しい知識とわきまえる心、信は誠実さや信じる心との意味がある。

ちなみに滝沢 馬琴著、「南総里見八犬伝」でもこの五常は使われている。話を戻して。

「ふーん、そういう意味だったのか。仁侠とか義侠とか、色々奥深いな。」

ヤクザものには必ずと詰つてこいほど出でる言葉を、梅本は思い出して一つ頷いた。

「ふふ……そなた達、意外と博学だな。」

「どういつ意味だそれ。」

からかうよつて笑つ謙信に、些かむつとした顔で梅本はじりつと視線を向けた。

まあそんな感じで、何事もなくほのぼのと時は過ぎていった。

さて、謙信との話が終わり、部屋に戻つた三人は、周囲の無人を確認してやつと携帯を開いた。勿論、甲斐チームと連絡をとるためである。

「あ、早速来てるわ。」

北の携帯にメールマークがあり、それを見てみると。

【おせーんだよ、この馬鹿マンボウ！いつまで待たせんだ、お陰で大福一杯食つちまつたじやねーかー】

実際に木下らしいメールに、何やらガックリぐる三人。そしてスクロールしていくと、付け加えた一文が。

【ちなみに四個だぜーー】

「……多いのか少ないのかわからない個数だな。」

「そしてものすげー北斗でもいい内容やな。」

げんなりしつつ、小川と梅本にも届いているメールを開く。
小川には谷中から。

【チロちゃんの報告から聞いたけど、元気そ�で安心したよ。そ�
そう、上杉では一日酔いなんて無様な醜態を曝さないようにな?

んなことしたい】

何故か尻切れトンボのメールだ。

間違えて送信ボタンを押してしまったのだろうが。

「王子、一日酔いになれよ。」

「……何でだよ。」

「いや、どういう制裁が待ってるのか気になつて。」

「俺が感電するところそんなに見たいのか!?」

小川のちゅうと涙田つぱい田で睨まれながら、梅本は自分の携帯を見る。山中からだ。

【川中島についてですが、どうしますか?上杉さんの予言じみた言葉も気になりますよね。】

「なんだろ、ちゅうと期待外れだ……」

「ま、ミナちゃんやしなア。」

至極まともな文面に梅本は肩透かしを喰らひ、北は納得するところに言った。

彼等はその場に座り直すと、返信の為にカチカチとボタンを押し始めるのであった。

side甲斐

越後チームのメールを、甲斐チームが見ることが出来たのは、昼が少し過ぎたころ。

いち早く気付いたのは山中で、彼女は残りの一人に呼び掛け、今現在携帯を覗き込んでいた。

「やつぱり、音も振動もないと気付くのが遅れるね。」

「うーんと唸りながら、谷中は小川の返信を見ている。

【今のところ、戦に関する情報はない。恐らく参戦すると言えば情報が流れてくれるとは思うんだが。ちなみに感電は勘弁してくれ。】

「カンデンにカンベン……何だよ、くつだらねー洒落だなっ!!」

ゲラゲラ笑いながら木下は画面を指差し、谷中と山中はジト目で溜め息をついた。

「マンボウさんは、何と言つてますか?」

山中が木下の携帯を見ると。

【何処の大福?ちなみにあたしは豆大福が好きや。】

「君達は、何でそんなことをやり取りしてんのや。」

呆れ顔で谷中は額を手で覆った。

ダメだこいつら、早くなんとかしないと。

最後は梅本からのメールだ。

【参戦については、俺等はどうでもいい。一応そつりもお館様と話したりいんじやないのか?】

「確かに、一度きりんと話す必要がありますね。」

山中はやうやくと、おもむろに立ち上がる。

「ミナちゃん、何処行くんだー？」

「もう一度、お館様のところに行つて色々お話しよいつかと想いまして。あ、そういうチロさんにお願いがあるんですけど。」

さよとんとした顔の木下に、素晴らしい笑顔で山中は笑いかけた。
途端、木下の顔色が変わる。

(「、これは悪名高き西太后の笑み……！」)

谷中もギャップと皿を剥いて、山中の眩しい笑顔を見つめた。

清王朝末期の中國に君臨した女帝、西太后。殘虐にして残忍、權力に狂う統治者。

まあ、いくら何でも山中がそこまで非道な人間というわけではないが、この笑みを浮かべたときは、大概被害者にドスケベい出来事がある。

肉体的損害ではなく、メンタル面で。

「チロさん、少し耳を貸して下さい。」

谷中が見守る中、おずおずと木下は言つ通つになると、山中はヒソヒソと何事かを耳打ちする。

「う、嘘だろ？！？オ、オレそんなこと出来ないぞー！？」「チロさんにしか出来ません。獲物は大きいんです、従わせるにはそれなりの餌を用意しないと。」「で、でも……！」

「木や葉でも、土の中でもいいんです。数はそうですね、五つ六匹くらいあれば十分な威力かと。」

「う……土の中なら、何とかいけるかも……。」「頼みましたよ。それじゃ早速、行って下さい。」

何が何やらわからない顔で谷中が見守る中、木下は気合いで入れるようペシペシと類を叩き、部屋の外へ飛び出して行つてしまつた。

「……一体、何頼んだの？」

首を傾げて山中に問いかけると、彼女はくすくすと笑った。可愛らしさを全く感じない、毒を含んだ声だ。

「保険ですよ、ござといつときの。」

「……あ、そうなの。」

詳しく述べない方が良さそうだと感じた谷中は、あっさりと頷くだけにしておく。余計な詮索は、我が身に火の粉が降りかねない。

「さて、それでは私達はお館様のお部屋に行きましょうか。
「りよーかい。」

二人は一足先に信玄の元に向かう。
木下に、最強にして最悪の兵器捕獲を任せて。

「十七の歎「肝心な話は、メールであることを述べや。」（後書き）

更新遅つ！

待つていてくれた方もさうじやない方も、お待たせ致しました（汗）
最後にう〇したのが5月の29日つて・・・・・・。

今月に入つて初めての更新です。

理由はですね・・・・・お仕事探しです、ハイ。

もういい加減に見つけないとマズイよなーつと思いつつ、のらりく
らりと探してまして・・・・。

そういう時つて、なんか書けないんですね。

えーっと、次回作ももしかしたらもつと遅くなるかもしれません（
泣）

でも気長に待つて下さい、お願いします。

「十八の嘶「ほり、どんな人でも苦手なモンは必ずあるワケで……」

（信玄の部屋）

武田　信玄は、いつになく真剣な表情で何事かを考え込んでいた。戦のこと、好敵手・上杉　謙信のこと、そして彼等……六武衆のこと。

「さて、どうしたものかの。」

誰に聞かせるでもなく、そつ然べと。

「お館様。入つてもよろしいでしょうか？」

入室を伺う声がして、返事をする間もなく障子が開いた。

「おお、美那殿に若菜殿。」

「お邪魔します。」

一人は真っ直ぐに信玄のところまで来ると、彼の目の前にストンと座った。

「どうかしたかの？三つ者達の情報ならまだだが……。」

山中は信玄の目をジッと見据えて、静かに口を開いた。

「それはいいんです。幾ら優秀な忍と言えど、いつも短時間でお仕事をするには、無理がありますから。」

山中は淡々と続ける。

「お館様、単刀直入に聞きます。此度の戦のこと、教えて貰えませんか？」

「ちょ、こきなりすぎない！？」

谷中は驚いて山中の肩を掴んだ。

「……聞いてびっくりする、お主等も、戦に加わるつもりか？」

表情を変えず、信玄は穏やかに問い掛けた。

「上杉にいる仲間が、参戦を求められては、先程の報告でござ存知の筈です。上杉が参戦を無理強いすることはない、とは思いますが、もし万が一……何かしらの理由で戦うことになれば、私達も打つて出るつもりですよ。」

「仲間同士で戦う気でいるのか？」

信玄は困惑したような顔を山中に向けた。しかし、彼女は首を横に振る。

「いいえ、私達は私達のやりたいように動きます。恐らく、軍に乱れを生じさせる可能性もありますし、参戦において、少し無理なお願いをすることもあるかもしれません。私達は自分の為にも、お館様が此度の戦でお考えの策を知らなければならない。」

谷中は固唾を呑んで、一人のやり取りを見守った。そして、このピリッとする空気を味わわなくて済んだ木下を、心の底から羨んだ。

(つていうか、僕空氣？空氣だよね絶対。)

内心でやれやれと肩を落として、黙つたまま見守ることにする。

「それはならん。正式に戦に加わるのではないところのなら、お主等には教えてやれることは少ない。それに、そのような勝手を儂が許すとも？」

信玄はスッパリとそう言い切り、厳しい顔をして山中を見詰めた。

「許してもらわなければ困ります。」

山中が毅然とした態度で言い放つた瞬間、ドタドタと足音がして、勢い良く障子が開いた。

「燃え尽きたよ……真っ白にな……」「ホントに真っ白になんだけ?...?」

ふらふらつゝ、と今にも倒れそうになりながら登場したのは、小さな木の箱を持った木下だった。何をしてきたのか、着物の袖口が土で汚れている。

「殿下ああああつー!オレ頑張つたぞおおおー!やつてやつたぞバカヤロー!...」「ふぐあつー?」

そしてびいびい泣き喚きながら、谷中にタックルをぶちかましてきた。その様子を呆然とした顔で見ていた信玄は、山中がにこりと微笑んでいるのに気付いた。

「チロさん、お疲れ様です。それじゃ、それをお館様に見せてあげ

てください。

「う、りょーかい……」

キヨツと木下は顔を引き締め、懷から箸を取り出した。

「お館様……御免！」

勇ましく言つや否や、木箱の蓋を開けて何かを摘み出し、信玄の鼻先に突き出した。

箸の先でうねうねとのたくみに蠢く。妙信亥用最終兵器
黄色味を帯びた白い体はぶよぶよしており、茶色く平たい頭に、ソ
ーセージの先のような尻。それは、まじり「芋虫」。種類
は多分、コガネムシの幼虫だろうか？

「え、虫？ 何で虫！？」

虫が嫌いな谷中は猛スピードで距離をとり、訳がわからない、と言つように山中を見ようとしたが。

「ツ」

一気に顔から血の気が引き、文字通り真っ白な顔になつた信玄の
あげた声なき悲鳴に、谷中は目が釘付けになる。

「え? ちよ、え? じいさん? おじいさん? ？」

何が何やら、谷中は説明を求めて山中の隣ににじりよつた。

「やはつねうでしたか……。チロさん、そのまお振えておいてくださいね。」

陸に挙げられた魚同然の信玄を眺めつつ、山中は面白げに話しが始めた。

「武田 信玄には、芋虫が大の苦手という逸話がありましてね。その苦手っぷりは、相当のものだったらしいんです。ですから、私達の中でも唯一虫に耐性のあるチロさんに頼んで、芋虫を捕つてきもらつたんですよ。」

谷中はそれを聞いて、頭を抱えた。

「また…何つー大それたことを。もしその逸話と違つてたら、どうするつもりだつたわけ？」

若干咎めるような響きを含んだ声で、山中はきつぱりと言い切つた。

「歴史モノのゲームには、大概逸話が練り込まれてるもんですよ。」

要するに、結果オーライということだ。

「ミナちゃんミナちゃん、お館様が大変なことになつてゐるぞつー…。」

幼虫を突き付けていた木下の、慌てたような声が飛び込んできて、二人がそちらに視線を向けると。

「わーーー！？出でる、何か出でるからーー？」

口から今にも魂が抜けそうになつてゐる信玄がいた。

谷中は急いで背中に回り込み、思い切りひっぱたくと、何やらふ

わふわしたモノがしゅぱつと口に引っ込む。そして目の焦点が戻り、信玄は這うようにして木下から離れ、何事かを喚こつとしたが、間髪入れずに木下の袖の中から伸びた影が口を塞いだ。

「いやはや、これはこれは素晴らしい話のネタですねえ。このことを「色々な」方々に教えて差し上げれば、もつと素晴らしいことになりそうですよね……。」

むぐむぐと呻く信玄に近付き、山中は囁くよつて囁く。そして更に、谷中から追い撃ちが。

「これでー、甲斐の庶民さん一同は知ってるのかな?」

ラスト、木下からトドメの一撃。

「もう指疲れたぞ……虫、落としちまつ……」

みるみるうちに、信玄の身体が強張っていく。

要点を纏めると、芋虫のシャワーを受けたくなければ、このことを誰彼構わず吹聴されたくないければ、この三人の要求を呑め、ということだ。

信玄が死人のような顔で、コクコクと頷いたのは言つまでもない。

side 越後

チーム・the甲斐の見事な脅迫をメールで知った越後の三人は、

馬鹿笑いしたいのを必死で堪えた。

「芋虫でここまで効果があるなんてな……！」

「なっさけないヤツ……甲斐の虎なんぞ辞めて、甲斐の虎猫にゃんにゃんにしたらええわ……」

梅本と北は口を押さえ、ヒイヒイと変な息を吐き出した。

晩御飯を食べた後で、これはキツかった。満腹になつた腹が痛くて、一人はピクピク痙攣している。

「……にしても、流石ミナちゃんと言つべきか。」

小川はその様子を見ながら酒を煽り、ニヤニヤ笑いながら呟いた。

「まあ、これで参戦の下拵えが済んだな。後は、俺等の答次第つてワケか。」

やつといふ復活した梅本は起き上がり、痛む腹部を擦りつつ胡座をかいだ。重要なところはそこなのだ。しかし、遊び半分ではないと言える事ではない。

「……元の世界に帰る為に、やらなくてはいけないことがあるしな。」

小川は猪口を置いて、一人に向き直った。

最大の問題点もある、「帰る為の方法」。ゲームクリアの条件は『天下統一』、仲間達の間では、様々な天下統一のパターンがあるかもしれないという考えが挙がっているが、この方法が一番無難ではつきりしているのかもしれない。

「とりあえずは、死なへんように技術もあるしな。ヤバなつたら逃

「げたらええんやし。」

「口口りと横になつた北は、右手から屈鉢を喚び出して眺めた。そ
う、魔王様のお陰でなんとか生き延びる為の力は備わつてゐる。

「試しに、出てみるか？」

「……明日考えようぜ、俺はもう寝る。」

「一体どれだけ飲んだのか、小川の周りには徳利が散乱して
いる。そりや眠くなるだろう。」

徳利をがらがらと脇に押しやり、布団に潜り込んでいく小川を呆
れたように一瞥して、梅本と北は携帯をパタンと閉じた。そして明
かりを消して布団に入り込み、眠りに就いた。

一十八の嘶「ほら、どんな人でも苦手なモンは必ずあるワケで……」

（後書き）

今回はちょこつと短めでした。

武田 信玄が芋虫大嫌いという逸話を見たとき、うんうんわかるわ
かるって思つたけど・・・・意外と乙女なんだねお館様。
感想よろしくお願ひします！

一十九の嘶 「戦国つて、燃える逸話とか伝説とか多くね?」

草木も眠る丑二つ時……今でいう深夜一時つて知つてた?いや、そんなことほんびりでもよくて。

「……あ?」

不意に、ぱかっと目が開いた。なんてことない、よくある話だ。そういうときは、妙に頭が冴えてきて、中々眠れないものだ。むくりと北は寝床から身を起こした。少し離れた所では、男一人がくうくうと寝息をたてて寝ている。

男女同じ部屋で寝るなんて、同室を申し入れたときはえらく驚かれたものだ。だが、孝研ではそんなものに恥じらいを感じる乙女なんぞ誰一人としていない。

そんなことをつらつらと考えながら、北は物音をたてないよう注意して部屋を抜け出した。眠れないならいっそ、辺りをふらふらしてみるのもいいだろう。

白い襦袢一枚では肌寒いので、その辺に置んであった瑠璃色の小袖を羽織つて。

真つ暗な廊下は携帯の照明で照らして、外側の道を探す。あちこちを散策していると、どこからともなく、低い声が微かに聞こえてきた。お経だろうか、独特的の節がある。

「……何やひ、こんな夜中に物好きな。はよ寝りやええのこ。」

普通の人間ならビビッてるといふだが、生憎といひ方はそんな生半可なヤツではない。

ボソッと呟き、北は声のする方へと向かった。近付くにつれ、はつきりと聞こえてくるのは毘沙門天の真言。

昔、部屋で谷中と木下が真面で盛り上がっていたのを思い出した。

「まさか、毘沙門堂か？」

更に進むと、開けた中庭のよつなどこ出る。そこには小さな御堂が建つてあり、声は中から聞こえた。

こんな所で、毘沙門天の真言なんぞを唱える人物はたった一人。中を覗き込もうとしたとき、声がふつつりと止む。

「そんなどこにいると、風邪を引いてしまいますよ。入りなさい。」

バレた、と思いながらも、北はあまり動搖していなかった。

「えらい遅うまで起きとるんやな、謙信様は。」

悠々と御堂の中に入り、北は毘沙門天像の前に座する謙信に呼び掛け……田を丸くした。そこには、昼間と全く見た田の違つ謙信がいた。

いつも被つているトレーデマークとも言えるべき白い頭巾はなく、肩の辺りで切り揃えた紺色の髪。ほつそりした身体を被うのは、桔梗の描かれた白地の单。何より北が注目するのは、首から下のふくらした膨らみ。

「……詰め物？」

「違います。」

思わず吐き出した言葉を、謙信は苦笑しながら否定した。

「む、胸？謙信様に胸？嘘やん、マジで？マジで？」

バタバタと鶏のように謙信に近付くと、北は皿を皿のようにして

『彼女』の胸をまじまじと見詰めた。

「ホンマに本物？触つてええ？」

「はい、どうぞ。」

恐る恐る手を伸ばして、膨らみに触れる。

「や、やーらかい……。」

若干変態チックなのは仕方ないが、感触、形共に間違いなく女性の胸。

「信じて頂けましたか？」
「はいぱっちりと。」

しつかり北は頷き、信じられないと呟いた。謙信本人の纏う雰囲気も随分違っていて、別人ではないのかと疑いたくなるくらいだ。昼間の『彼』は、穏やかながらも厳しく凜々しい顔付きをしており、口調や声だって勇ましかった。

しかし夜の『彼女』は、どこか憂いを帯びたような儂い表情で、柔らかな口調と静かな声をしている。

「謙信様、こりやどうこいつことなん？あんた、何者？」

向かい合わせに座り、北はじっと謙信を見詰めた。

「私は、この上杉家に元々姫として産まれたのです。ですが、男として育てられました。」

「男の子、産まれんかったん?」

はて、と北は首を傾げた。上杉家にそんな話などなかつた筈だ。
しかし謙信は首を振る。

「いいえ、いました。私が産まれる前に一人……ですが、人として暮らせる身体を持つて、この世に出てこられなかつたそうです。」

「……奇形児か。」

謙信の悲痛な面持ちと言葉から、すぐにわかつた。

「奇形児……?」

「たまにな、あんねん。産まれた子供の手が三本あつたり、目が一つしかなかつたり。母親のお腹ん中にゐるときに、ちょっとした事故でそういう身体になつてしまふ子。」

北は続ける。医者の娘なだけあつて、いつも見聞きしていた。

「ま、この『時世』、呪いだの災いだのって言われてるけど、そういうのじゃないんよな。でも、奇形児の子つてあんまり長生き出来んとは言つで。」

産まれた男の子がどうこう運命にあつたか、大体予想はついていた。

「……母は、姉と私を産んだ後に亡くなりました。父は養子をとることが許せず、私を男として上杉の頂点に立たせようとしたのです。しかし、それを哀れに思った姉は、私に女としての誇りを忘れてはならないと説き、そのお陰で私は自分自身を失わずにすんだのです。」

話を聞き終えた北は、興味深そうに謙信を眺めて言った。

「……あたしにそんなこと話してよかつたんか？」

明らかに今のは重要そつな話だ。はつきりいって部外者である自分に、あつさりと謙信は話してくれたが、それでもよかつたのだろうか。

ところが、謙信はゆつたりと微笑みを浮かべて、こう言った。

「貴殿方にならば、話しても大丈夫だと……毘沙門天が仰いました。

「……あ、そーですか。」

電波な答えに、北はげんなりして溜め息をつき、胡散臭げな目付きで、堂々と立つ毘沙門天像を見上げた。

「北殿……もし宜しければ、また明日の夜にこうしてお話出来ませんか。」

「それも毘沙門天のお告げ?」

にやつとした笑みで北が問えば、流石に困ったような顔で謙信は首を振った。

「いいえ……私個人的なお願ひです。兼続や定満では、気軽に語り合つことが出来なくて……。」

「まあ、あいつらは部下やし。ってか、あたしとは気軽に話せるんやな〜。」

「……北殿は、私を一国の主としてではなく、ただの人間として見

てくれますか、」

少し嬉しそうに言つ謙信に、殿様には殿様としての人間関係の悩みがあるのかと思つ北だった。

「わい、と。そろそろ寝ようや。あたし、なんか眠たくなってきた。

」

あぐびを噛み殺して、よつこひらせと北は立ち上がる。謙信もそれに続き、一人は一緒に毘沙門堂を出た。

「それじゃ、また明日。夜は今日と同じ時間帯に来るわ。」

お誘いの返事をすると、謙信の顔がまるまる輝いた。

「はー、楽しみにしてます。」

謙信と別れ、部屋に戻る途中。不意に北は足を止め、にやりと口元を歪めた。

「そないに睨まんでも、あたしはさうきのことに誰にも言へんよ。いちいち殺氣飛ばしな、気色悪い。」

ぐるりと振り向き、黒く淀んだ闇の中に呼び掛ける。忍の気配を感じたからだ。北に居場所を見破られたのに動搖したのか、闇中の気配が揺らめいた。

「城内の見回り、『苦労さん。つこてこんでええから、といひととつち行か。』

片手を上げて、わざと面鏡を喰び出してみせる。

これ以上くつこけてきたらどうなるか、威嚇してやると、気配はするすると遠ざかっていった。その方向に田をやり、北はククク、と喉の奥で笑った。

「ま、この世界の人間には…… 嘘わへんよ。」

やうやく、ふらふらと北は廊下の暗闇に消えていった。

翌日のこと。

「起きるよ、おこ。こつまで寝てんだ!」

「つわいな……耳障りな……声で……騒ぎなよ……。」

足の辺りをゲシゲシと蹴飛ばされ、ぶつぶつ文句を言しながら北は起き上がった。キックの犯人は梅本だ。

「……何でお前、そんなに眠そつなんだ? 同じ時間に寝ただろうが。

寝巻きの单の襟元を正しながら、小川はいぶかしげに尋ねた。

「やつやーお前………………」

「起あやがれッ!」

お約束の展開に、小川と梅本のツイン・拳骨が北の脳天にクリーンヒットしたのは言つまでもない。

着替えて朝食を済ませ、ちょっとまたたりとした後に、鍛練場へと出していく。

「身体が鈍つたら困るからな。」

「そろそろ始めよか。」「

神器を構えて、一タツと梅本と北は意地の悪い笑みを浮かべる。
一人の目の前には、同じく神器を手にした小川の姿が。

「何で二人同時なんだ！？」

「「ジャンケンで負けたお前が悪い。」「

納得いかないと叫ぶ小川に、一人は声を揃えて言つ。
ジャンケンで負けた奴は、勝った奴に攻撃されるのだ。
「……火傷しても恨むなよ……！」

忌々しく舌打ちして、神器を振りかざして飛びかかってくる一人
を迎える。辺りにガンガンと響き渡る金属音。威力は弱めだが、
神憑きの能力も使用可能だ。

だがそのせいで、一兵卒は鍛練場に立ち入ることができない。
そんなことは全く頭がないだろう三人を、少し離れたところから
眺めるのは、上杉が誇るダブルブレーンの兼続と定満。二人は言葉
を交わすことなく、じっと、注意深く彼等を観察した。

「……妙だとは、思いませんか？」

先に口を開いたのは、定満。
兼続は黙つたまま、視線だけで続きを促した。

「あの若さで、もうあれだけ己の能力を使いこなせている。見たと
ころ、彼等が能力を安定させる薬を飲んでいる様子はない。薬無し
に、あそこまで自在に能力を調整できるなど……。」「

定満の田は、欺瞞といつよりも純粹な好奇心に輝いていた。それに対しても、兼続は眉間に深い皺を刻んだ面持ちを崩さない。

「随分と興味深そうに観察しているな。監視といつ田的を忘れてもらつては困るのだが。」

「つまらない事を仰る。彼等ほど不思議な……いや、奇怪な存在を、我々は初めて見たといつますのに。」

兼続の言葉に、定満は苦笑しつつ視線は三人から外さない。

「そんなことはどうでもいい。軒猿からの報告、知らぬ貴殿ではないのだらう。」

苛々と、兼続は語氣も荒く定満に言い寄る。

軒猿の報告……それは、謙信が女性であると、北が知つてしまつたといつことだ。

「謙信様が性別を偽つていらっしゃることを知るのは、城内でもごく僅か。それを、ああも簡単に余所者に教えてしまつとは……何を考えておられるのか。」

困惑したように言う兼続を見やり、定満は微かに笑つた。全く、毎度のことながら心配性な家臣だ。

「気持ちはわかりますが、殿にも考え方ってのことでしょう。構えずともよろしいでしょ。おや、そろそろ訓練も後半ですね。」

「定満殿は構えなさすぎだ！」

ビシッと肩を叩かれながら、定満はしぶとくドンパチやる二人に、

そろそろ一兵卒に鍛練場を譲つてやつてくれと伝えに行くのだった。軽く身体を動かした後、三人は馬を借りて城下に向かった。勿論、ちゃんと許可を受けている。

「つてかさ、何でお前のお買い物に俺等が付き合わなきゃいけねえんだよ。」

「やかましいわ、あたしかて好き好んでお前等なんぞと行きたいし。」

「……言動と行動が一致していない気がするんだが。」

北に半ば強制的に連れ出された男一人は、とつても不満そうな顔をしている。それに北は馬を寄せ、出来るだけ声を押さえて囁く。

「話したいことあんねん。あそいじゅめんどいから、到着したら言うわ。」

珍しく眞面目そうな口調に、一人は文句を止めて頷いた。

いつ来ても、古今東西城下とやらは賑やかしく喧しい。
馬を預け、あちこち店を見回しながら、北は要点をかい摘まんで

話した。

「……確かに上杉 謙信には女性説があつたが、まさか本当に女だつたとはな。」

雑多とした通りを歩きながら、小川は深々と息を吐いた。

「やうひ？あたしも最初見たときびっくりしたわ。胸触つてやつと信じられたけど……あ、ちゃんと柔らかかったで。」

「最後の一言こいらねいだろ。」

感触を思い出したのか、いやらしげにタータ笑いを浮かべる北の頬を、梅本はぎゅむつと引っ張った。

「とつあえず、甲斐の三人に伝えとこせ。それから、お前今夜も行くのか？」

つねられた頬を嫌そつに擦り、北は頷いた。

「……梅、俺達は行かない方がいいと思つた。」

「何でだよ？』

小川は梅本のやううとしていることを先に読み取り、釘を刺す。

「女同士の会話に男が入ると、口クなことにならないだろ？が。散々な目に遇うのがオチだ。」

「いや、それウチの女達の場合じやないのか？んでもって、そんな目に遇うのはお前だけだろ。」

妙に感慨深そうに語る小川に、梅本は笑顔でつゝ「なんだ。何やらズズンと凹んでいる小川を後田に、でもコイツの言つことも一里あるなと思つ梅本。

「おい、マンボウ……つて何やつてんだテメエは。」

見れば、北は反物屋で立ち止まり、ああだこうだと店の人間と話している。

話をほっぽりだして反物の値切り交渉をしている北に、一人は痛む頭を抱えて頃垂れるのであった。

一十九の嘶 「戦国つて、燃える逸話とか伝説とか多くね?」

(後書き)

「ここにちは、皆様もう七月ですね。ホントに暑いです。
謙信様女性説・・・・結構好きなんです。

なので欲望に任せて女人になつてもらいました!

あー、にしても川中島決戦に辿り着くにはまだまだ長そうです(汗)

早く書きたいけど、そういうわけにも行かないんですね。

そういえばもうじき七夕ですね。

七夕短編も考えているんですけど、当面までに書けたりひとつする予定です。

そしてお気に入り登録が70人になつてました。

読んでくれてる皆様、本当に有り難いです!

それでですね、感想が取りあえず自由に書き込めるようになつた・・・
・・のかな?

なんかイマイチ解りませんが、そういう規制が外せるようになりましたので、一応お伝えしておきます。

なのでユーザー登録していない人もしている人も書き込みが出来るかと思われます。

まだ感想が六つしかないんで、是非お願ひします。

えーっと次回はside甲斐から始まります、まつたりと待つてくださいまし!

三十の嘶「過去を変えたいと思つた」とは、人生に何度ある?」

それから数日間、北は真夜中に起きては謙信のもとに足繁く通つた。そんなある日のこと。

「謙信様は、気になる男の人とかおらんの?」

匂に、恋バナで盛り上がつていた女中達の事を思い出し、何氣なく北は話をふつてみた。

「気になるお方…？それは、お慕いしている方のことですか？」
「あー、やうとも言つな。」

謙信はしづらへ尋ね込んでいたが、やがてまづと囁つた。

「強いて言つなれば……武田 信玄殿でしょつか。」

「……すまんもつかい言つて?」

「強いて言つなら、武田 信玄殿かと。」

「何あつせつ言つとん! ?」

「言えと聞つたのは、北殿でしょ。」

一瞬。ビシッと固まつた北は、我に還つて叫んだ。

「ちよお待ちや、ホンマかそれ。ホンマにお館様のこと気になるんか?」

再びの大ニュースに、北は我が事のよつて流れて謙信にて詰め寄つた。

「……あの方は、私に勿体無い程の方。私を認め、眞の武人としていつでも真つ直ぐに向き合い、刃を交えて下さる。大切な好敵手です。」

「ん~、ようわからんな。好きなんやでな、お館様のこと。」

何やら複雑な感情入り交じる声に、北は首を傾げずにはいられない。

(これはシンデレカ……? ヤンデレとはまたちゃうな。)

そんなことを思ひつつ、ふとあることが気になつた。

「……戦になつたら、お互に命の獲りあこするんやね? 一応、謙

信様はお館様のこと好きやの、そんなことしてええの？」

その問いかけに、謙信は少し悲し氣な、諦めに近いような微笑みを浮かべた。

「私は上杉を、の方は武田を背負つて立つ者。どうして寄り添うことが出来ましょ。私は、戦場の方と刃を交える……ただそれだけでよいのです。たとえ、此度の戦で雌雄がつこうとも。」

北は黙つて溜め息をつき、ガシガシと頭を搔いた。これぞ殺し愛、と言つべきか？

とにかく後味の悪いことを聞いてしまつたものだ。

「あのやあ、ちょっと極論過ぎひん？あたしはあんまり、愛だの恋だのは鬱陶しいから好かんけど……。」

重たい話題だと思つが、いつ言わずにいられない。何なんだこれは。情熱？ 情念？ それとも執念か。

眉を寄せて、難しい顔をした北に、謙信はふふっと笑つてみせる。 「貴女には理解できないことかもしませんね。ですが、一武人としての方と戦うのを私は楽しみにしているのです。お慕いする気持ちもありますが……ね。」

策を巡らし、鎧を削り、火花を散らし、猛り狂う激情を余すところなくぶつけ合つ。そんな滾りを交わすのも、また良いものだ。 そう言つ謙信を、どうも腑に落ちない表情で北は眺めていた。

「つい話なんやけど。」

大まかに話し終えた北は、ああ疲れたと白湯を一口。

「複雑すぎたんだろ、その話。」

「……どうかうつむべきだ、おー。」

顔を引き攣らせて、梅本と小川は呻くよつと言った。

「あの上杉謙信が実は女で、武田信玄に惚れてて、けど敵同士だから言えなくて、最後は戦でやり合つ?」

「……今時ゲームやドラマや映画にしかないシナリオだぞ。「ゲームやん、この世界。」

小川のボケに、珍しく北がつづけむ。

「よし、マンボウ。甲斐の三人に伝える、何から何まで。」

「あー、無理。電池いっこ減ったから。」

メールの指示を出す梅本だが、即行に却下される。

「……え? 何で?」

メールは交代で送っている為、そんなに電池を使わない筈だ。なのに、何故もう電池が減っているのか。

「いや～、ちょっとドラクエやってもてな。」

「お・ま・え・は　！　！」

あはは、と笑いながら白状した北の脳天に、梅本の拳骨が落とされた。

「無闇に使つなって言つただろーが！アブリするとかアホか！？」「はつはつはつは。」

襟首を引っ掴み、ガクガク揺すられても北は一向に反省する様子はない。

小川はもう付き合つのが嫌になつたのか、煙管片手に明後日の方に向を眺めている。

「王子、悪いけどメールしといてくれるか？マンボウ、お前はそこ座れ。正座しろ正座。」

説教モードに入った梅本を一瞥し、了解の意味を込めて小川は煙管をコラコと揺らした。いやはや、今日もいい天気である。

side甲斐

即時配達、飛脚いらずのメールを受け取った甲斐の三人は、どんな内容にびっくり仰天するはめになる。

「うつわ……それなんていうショークスピア？」

「驚きを通り越して鳥肌ものですね。」

「マンボウってスッゲー！！」

謙信が女だという事実も驚きの一つだが、その謙信が信玄に想いを寄せてくるところ、「う」とはもつと驚きだ。

「なんとも劇的な話ですね。いかにもというか、王道といつか……」

携帯を閉じて、やれやれと溜め息をつく山中。

「なんかさア、これでいいようにオレは思えないぞ。もしどっちかがやられちまえば、絶対悲しいに決まってるぞ。」

木下は顔をしかめて、納得がいかない様子だ。

「覚悟してないで言つても……言い方は悪いけど、所詮言葉だけのものだよね。心や身体は、きっと痛いだろ？」「

頬杖をつき、谷中は溜め息混じりに言った。

「……伝えさせてある、ところのはどうでしょ、」

「「はい？」」

山中の言葉に、一人は首を傾げて顔を見合させた。

「戦に加わり、どうにかしてあの一人に話をさせる時間と言つが、隙と言つが……とにかく、そういうものを作ることはできないですかね？」

何とまあ、壮大な提案か。谷中と木下は目を丸くした。

「今、私達がバラバラになつてゐるのは、案外好都合ですね。正式に戦に参加するということを明確にして、越後の三人と携帯で連絡を取り合つ……川中島の戦いの、歴史をえてみるのも面白いと思いませんか？」

一タリと笑う山中に、一人はつーんと考え込む。普通なら、異世界のこととはいえ、歴史をえることに躊躇いを感じるものだ。

だが、彼女達の答えはこうだった。

「それ、いいね。歴史をえるなんて、誰もやつたことないよ。」

「面白そーだッ！のつたぜミナちゃん！」

躊躇いなんぞ、少しもない返答。理由は単純、好奇心だ。

歴史を狂わせれば何が起きるのか、世界はどう変化するのか、それが見たいだけ。俗世にまみれた願いだが、遠い過去をえてみたいたいと思ったことはある。それに。

「恋といつものはよくわかりませんが……好きあつている方々が戦うのを、無関心で見ている程、私達は情のない人間ではありませんね。」

「だよなッ！オレは悲しいのキライだ！」「どうにかなるなら、どうにかしたいよね。」

三人はうんうんと頷き合ひ、ふとあることを思い出した。謙信は信玄のことが好き、ならば信玄は謙信のことをどう思つていいのだろうか？

「お館様って、独り身だよな？」

木下は彼の周囲の人間を思い出し、そう言った。

史実で信玄は、「三條の方」と呼ばれる京都出身の妻と、「諏訪御前」と呼ばれる側室がいた筈だ。

しかし、この世界ではそのような人物を見かけない。つまり、独身貴族？

「よし、じゃあさりげなくお館様に聞いてみようか。それから一応聞くけど、僕達は戦に参戦するんだよね？」

「勿論！」

いい加減にコレを決めておかないといけない頃だ。谷中の問い合わせに、二人は声を揃えて答えた。

「そろそろ決めないとなッ！今まで話はするものの、保留になつたし。」

早速越後にメールを送る谷中を見ながら、木下は氣合いを込めるように拳と掌をパシン、と打ち鳴らした。

「送信完了」と携帯を閉じる谷中を待つて、三人は部屋を出る。田的
地は信玄の部屋だ。

「信玄の部屋」

「お館様へ、元氣～？」

失礼しますも何もない、いきなりの入室。

もしここに信方や勘助がいたら、眉をひそめられるだろう。しかし、そんなことは知ったこっちゃない三人は、ひょこっと顔を覗かせる。

そして、ピタッと固まった。

「お～、お前達が噂の六武衆だな。ほほお、実物のめんこいことめんこいじと。」

中には、見たこともない男が一人、座っていた。

薫色の短髪に細い目、ニヤリと三日月の弧を描く口元。纏う着物は、

目に痛い程鮮やかな猩々縫。その背中に、白抜きで一際目立つてゐる『六文銭』。

ポカン、と口を開ける二人を前に、男は立ち上がった。
よく見ればその派手な羽織を一枚、前を閉めずに着てているだけで、
その下は上半身裸だ。下は足首を縛つたズボンに似た形の袴？を穿
いている。

「……お館様の部屋に、変態がいるぞ。」

「だあれが変態だ。」

「お前。」「

しばし互いに見つめ合い、木下とそんなやり取りを交わす。

「おれは真田 昌幸。初めまして、可愛らしい鬼のお嬢さん方。」

相変わらずのニヤニヤ笑いを崩さずに『表裏比興の者』は軽く会
釈した。

予想通りの言葉に、三人は目を白黒させて戸惑つ。

真田 昌幸、言わずと知れた六文銭を家紋とし、真田 信幸・幸
村の父である。彼は信玄子飼いの武将で、第四回川中島の戦にも参
戦している。

「申し遅れました。私は山中 美那、こちちは谷中 若菜様、木下
千尋様です。」

器用に片眉を上げて何かを待つ昌幸に、慌てて山中が名を告げる。
すると彼は満足そうに笑い、ドカッとまた腰を下ろした。

「なーにそんなトコで突っ立つてんだい。入んなよ、お館様に会い
に来たんだろ。」「

チョシャ猫のよつな顔で、昌幸はともすれば胡散臭く見える赤銅色の眼をキラリと光らせた。

三十の瞬「過去を変えたいと思つた」とは、人生に何度ある?」

(後書き)

お久しぶりです・・・ホントにお久しぶり。

久々の更新です、最近色々あつて筆が進まなくて(泣)

内容はですね、まあありきたり?ですがけどこんな感じで。

でもそんなにベタベタにするつもりはありませんよ、もつとありますりとスッキリと仕上げたいと思います。

りとスッキリと仕上げたいと思います。

で、ついに登場しました真田様。

今は昌幸パパだけですが、ちゃんと息子もやのうち登場させますよ。

ふ〜・・・にして やつと三十話到達です。

なかなか進展しないですみません。

でもボチボチ感想が増えて嬉しい限りです。

次回ものんびり待つていてくださいね〜。

三十一の嘶「君の本心は五里霧中ー?」

昌幸に手招きされ、三人はおずおずと中に入り、少し離れたところに座る。すると。

「ほーだよー。」木下に座んなよ、そんな他人行儀な。」「いや、僕達めちゃくちゃ他人だし。」

ペんぺんと自分の隣を叩いて昌幸に、すかさず谷中が突っ込んだ。

「手厳しいなア。ほれ、饅頭やるからこっち来なよ。」「饅頭! ?」

びくっと木下が反応した。ビンから取り出したのか、昌幸は饅頭をひらひらと振ってみせる。

「ほーれ、饅頭専門店、望月屋名物の望月饅頭だ。つーまいぞオー」「食べるシー・マッキー、それ食べるヤツ! ! !」

田の色を変えて、木下は昌幸に飛び付いた。まるで犬だ。

「…………お手。」

ぱすつ、と木下の手が昌幸の手に乗る。

「おかわり。」

これもまた、反対の手が乗る。

「頸。」

頸が乗り、堪らず畠幸は吹き出した。

「……よし……！」

震える声でOKを出すと、木下はがぶつと饅頭に口の始へ始へ食らい付いた。それを見て、踞り笑い出す畠幸。

「ううまあああ！－これちよー美味い！－！」

「……よかつたですね。」

「ていうか、マッキーって何。」

饅頭の美味さに吼える木下を、溜め息を吐きながら山中と谷中は眺めた。

「……し、死ぬ……笑い死ぬ……！」

ひくひく痙攣する畠幸は、ゼーゼー言いながら起き上がった。

「何かすみません。チロちゃん、食べ物には見境ナシなもんで。」「そのようだなア。ちなみにマッキーたあ、おれのことかい？」

谷中が頷き、山中が付け加えた。

「畠幸、でマッキーですね。あ、申し訳ありませんー失礼なことを！」

しかし、畠幸はいやいやと首を横に振った。

「はまつ、構わんよ。しかしマッキーか……なかなか粋な呼び名だなア。」

何がどう粋なのか教えてもらいたい。

「なあなあ、マッキー。やっぱ戦するから、ここまで来たのか?」

饅頭を食べ終えた木下は、首を傾げながら問い合わせた。

「あー、やうだな。普段は上田の城で寝てんだよ。」「仕事して下せー。」

山中の弦巻に、畠幸はへらへらと笑つて答えた。

「いじんだよ、信と幸がやつてくれっから。」

「のぶ? ゆき?」

大体わかつてはいるが、一応聞いてみる。

「おれの息子達だ。かーわいいんだぞオ、信幸と幸村つってなア。」

たちまち顔を緩め、畠幸は嬉しげに語り出す。ここから彼の息子の顔が続くのかと思いつきや。

「むへ、何じや、お主等来ておつたのか。」「

スッと戸を開け、部屋の主信玄が登場した。

「早速仲良くなつたようだの。畠幸、この者達は面白いだろ?」

「ええ、そりやもつ。いいもん見つけましたね、お館様。」

昌幸の言葉に、信玄は満足そうに頷きながら何やら文机の周囲を
じっと漁つてゐる。何かを探してゐるのか？

「お館様、何をお探しなんですか？」

次第にあちこちをひっくり返し始める信玄に、田を口黒させて山
中は尋ねた。

「……ない。」

「何が？」

信玄の発した低い咳きに、三人は顔を見合せた。

「お、おやつことつておいた、儂の望月饅頭が……ない！」

悲痛な声で叫ぶ信玄、それに木下の顔が引き攣る。

「……オレ、食べちやつたぞ……！」

呆然と言う木下。

「謀つたなー・マッキー謀つたなー！？」

その後、我に還つて彼女は昌幸に掴みかかった。

「おや、あれアお館様のおやつだつたのか。悪いねエお館様、木下
嬢に喰わせちまつたよ。」

白々しこ口調で畠幸は言へ、左手で木下の頭を撫でながら弓を剥がす。

「まーれーるーれーこーいーいーーーーーまたやつおつたなあー?・儂のお
けつ返せ!ー!ー!」

「嫌ですねエ、御油断めされるなとあれほど言つてゐるのに。これが
戦場なら、お館様はコレですよコレ。」

ギヤー、ギヤー喚く信玄に、畠幸は水平にした手を首の前で横に動
かしてみせる。

「それとこれとは関係ないだらつが!ーあの饅頭買つのじれだけ
時間かかつたと思つておるー?」

「セーあ? いいじゃないですかア、饅頭の一 個や一 個ベアリ。」

黙つていたら延々との不毛なやり取りが続きそつなので、そろ
そろストップをかける。

「はいはー、やめやめ。いつまでいっつてたのセー。」

睨み合つ両者の間に、谷中が割つて入る。

「「」めんな、お館様。オレ、あの饅頭がお館様のおやつだつて知ら
なかつたんだ。」

申し訳なさそうな表情で、木下はペコペコ頭を下げた。楽しみに
していたおやつを誰かに食われる程、悲しきことはない。

「こや、木下殿のせいではない。悪いのは全てコレヤシ。」

信玄は憎々しげに昌幸を見るが、本人は何処吹く風。

「まあ、お饅頭はまた買いに行くとして。お館様、少しお話があるのですが……お時間よろしいですか？」

山中がそう切り出せば、信玄は僅かながらギョッとした顔をする。余程あの芋虫攻撃が堪えたんだろう。

「少し個人的な話になります。つきましては昌幸様には退出をお願いしたいのですが……」「ん？ ああ、別に構わんよ。」

昌幸からあつさつ出した〇×にて、山中は些か驚きを見せた。

「なアにびっくりしてんだい、山中嬢。おれが素直に下がるのが、そんなに不思議かい。」

よつこらせ、と立ち上がりながら、昌幸はやつぱりチョシャ猫のよつな顔で笑っている。

「……そうですね、不思議です。」

彼女の言葉を聞き、昌幸は軽く息を吐く。

「他人様の重要な話に聞き耳をたてるなんて真似、おれは好かんだけさ。時が経ちやあ、わかるんだしな。」

羽織の裾をぱさりと翻し、昌幸はすたすたと部屋を出ていった。襖を閉める際に、「じゅっくり」という言葉を残して。それを見送り、山中は静かに口を開いた。

「随分と変わった方ですね。」

「変わったを通り越したるわ……」

憤慨した口調で、信玄は鼻息も荒くドカッと腰を下ろした。

「で、何の話をしに来た?」

昌幸のせいで、外れに外れた話にやつとメスを入れることができ
る。

「重要な話、というわけではないのですが……お館様の口から、上
杉 謙信がどのようなお人なのかを直に知りたく思いまして。」

山中の申し出に、信玄は不思議そうな顔をする。

「何故そのようなことを聞きたがる?」

「敵を知るつて、大事なことなんじょ。僕達に懲々越後まで行け
つていうの?」

呆れたように谷中が言い、隣に座る木下もそれに續けと口を開く。

「オレ達、戦に出るつて決めたんだ。だから相手のこと、よく知ら
ないといけないんだぞッ!」

信玄はまじまじと三人を眺めた。以前に芋虫を持って、自分を脅
しついたときは違い、何処となく真剣な面持ちだ。何かを決意し
たときに見せる、真摯な眼差し。

それが一体何なのか、信玄には見当がつかないが、彼はその目が
嫌いではなかった。

「ふむ、まあ別に構わんが……。」

「お館様や謙信様程の人が、話さなくちゃお互^ひいのこなんてわからぬ、なんて軟派なこと言わないよね?」

少しばかり挑発するように谷中が言えば、信玄はふん、と鼻で笑つた。

「当たり前のことを聞くでないわ。儂と彼奴を誰と思つておる。刃を交えれば、大概のことはわかるものよ。」

三人はふんふんと頷き、信玄の話を聞く体勢に入る。

「それでは、お聞きしてもいいですよね。謙信様のこと、どう思つてらっしゃるんですか?」

山中のストレートな問いかけに、一人は思わず声が出そうになつた。

(ミナちゃん、せめてオブラー^トトに包んでくれ……)

二人とも、じつ思つた。聞きよつこひつちや、何か違う意味に捉えてしまわなくもない。

「ちよ、直球な問いただの……むへ、じつもすぱっと聞かれたら、何やら答えにくく……」

暫し腕を組み、信玄は考え込む。そして。

「刃を交えることが、あれほど楽しいと思つた相手は彼奴が初めて

だ。今まで名だたる将と戦つてきたが、彼奴は……上杉 謙信は別格。」

戦に関しての内容は、想定内の返答だ。

「つまり、謙信殿はお館様の中で『特別』なんだね。うーん、仲良くなつたら、凄い組み合わせになりそうだなあ……」

龍虎のタッグ、是非とも見てみたいものだ。

谷中の言葉に、信玄はふつと微笑みを溢した。

「確かに……もしそのよつなことがあれば、共に酒を酌み交わしてみたいものだ。前言撤回になつてしまつが、戦いの中ではわからぬことも、杯が交わることでわかるかもしれんな。」

三人は気付かないが、そう言つ信玄の眼に、何か言い知れぬ感情が宿つていた。

「やう思つても、やんないんだな?」

木下はじつと信玄を見つめ、そう言つた。

「木下殿。儂等は武人、そしてこれは戦。左様なことは、決してあり得ぬことだ。儂等は敵同士……相容れぬ者。」

厳しい顔で信玄は言い、三人は小さな溜め息をついた。成程、やはり武将。

「よくわかりました。お館様、ありがとうございます。」

山中はぱへりと頭を下げる、一人も後に続く。

「む？ これだけでいいのか？ 儂はあまり話していないと思つたが。」

「そんなことないぞッ！ お館様、色々教えてくれてありがとな！」

一之と笑う木下に、信玄は若干首を傾げながらも二人を見送った。

「……どう思つ?」

部屋に戻ると、開口一番に谷中がそう聞く。

「ペリヨーだな。はつきりしないんだぞ。」

「私も同じですね。」

北も全く同じ理由で首を傾げているのを知るよしもなく、三人は頭を抱えた。あんまり突っ込んだことを聞いて、何かを企んでいるのかと疑われても困る。

「でもさ、好きか嫌いかでオレ達が判断すると……」

「嫌いじゃない、（ですね）（よね）」「

木下の言葉に、山中と谷中は声を揃えて言った。

わかつたのはこれくらいだが、もとより好きか嫌いかを判断するために話を聞きにいったのだ。これだけわかれれば、後の細かいことを、ああだこうだと言い合つ必要はない。

何故なら、めんどくさいから。

「まあ、必要な事はわかりましたからいいでしょ。」

「なあにがビミョーではつきりしなくて必要なことがわかつたんだい？」

いきなり響いた、三人以外の声。 目が驚きに見開かれ、ザッと全身が総毛立つ。さて、この声の主は如何に……そして、どうするチーム・the甲斐。

三十一の新「君の本心は五里霧中…？」（後編）

今回は更新が早かつたですね～。

いつもやつて更新の速度にバリつきが出てくるんですね。

ここにちは、最近名前をちょっと変えた夜です。

今回は武田側がメインでしたが、まだしばらくこれが続く……のかな？

ところでですね、最近ちょっと悩み事がありまして……やつぱり執筆は音楽を聞きながらが一番はかかるかと思うんですよ。でね、自分の作品やキャラのイメージっぽい曲を聞きながらやつのがイチバンだと！

でもあんまり自分じゃ探しにくくてですね～（汗）ですから皆様の意見をお聞かせ願いたく候、です。
お願いします、何でもいいです、何でも！
ではまた次回ッ！

三十一の嘶 「ラブストーリは突然に、ピンチだつて突然に。」

スッと襖が開かれ、三人は飛び上がりそうになつた。
木下や谷中に至つては、神器を喚び出して身構えている。

「待つた待つたーおれだよ、マッキーだ！」

今にも強烈な一撃を喰らわされそうな状況に、慌てて畠幸は両手を挙げて部屋に入ってきた。

「……いつから聞いていたんですね？」

神器をしまわず、木下と谷中は畠幸をいつでも攻撃できるように取り囲む。

山中はそれを見ながら、静かに口を開いた。表情、声共に、とんでもなく冷たい。

「あー……謙信殿のことをどう思つ、ってどいつもがつ……？」

「ほとんど最初からじゃねーかよッ！人間なら、自分の言つたことに責任持てよッ！……」

ガンッ、とすかさず影蝶蛸が畠幸の頭をぶん殴つた。頭を押さえて呻く畠幸。

「い、いきなり殴なんないでくれ……！」

「ふざけたこと言つてんじやないよ、マッキー。盗み聞きは好かんとかカツコつけといで、何をあつそりやつちやつてんのぞ。」

バチッ、と谷中の持つ電王に電気が走る。にしてもおかしい。

自分達は、気配を消している筈の忍でさえも見つけられた筈だ。なのに、何故わからなかつたのだらう。

「そ、それは謝る一ちょっと氣になつちまつてなア、神器でちょこつと。」

「神器で盗み聞き？方法をお聞きしても？」

ジロリと山中が畠幸を睨み付けて、彼に詰め寄る。

畠幸はバツが悪そうに両手を出すと、そこに白い光が集まり、弾け飛ぶ。現れたのは、肘の辺りまでを覆うガントレットのようなもの。先程みた光と同じ色をしており、ガツチリとした丈夫そうな造りだ。各指の付け根にあたる部分には、小さな突起物がそれぞれついている。

「光糸・白蜘蛛……まあ、糸でおれは戦うんだがね……」

「ああ、大体わかりました。」

深々と溜め息を吐いて、山中は腕を組む。

「糸つて、音を伝えるもんね。」

「糸電話の応用編たなツ。」

三人はジリジリ、と畠幸を囲む距離を縮めていく。
どうする？人の口には立てられぬと言うが、今までに二人の心中はそれだった。

先程の会話だけでは、詳しいことはわからないだろう。だが、確実に自分達が戦に関わることについて、何かを企んでいることだけはわかる筈だ。

「あー、何だ……その……」

「ヨーヨーもる畠幸に、三人はササッとアイコンタクトを取り合つた。

「知りたそつな顔ですね？」

山中がそう言えど、畠幸は居心地悪そつに視線を逸らした。
その目に、明らかな好奇心の色が見え隠れしているのを、彼女は見抜いていた。

元々山中は、他人の顔色や感情を読み取るのが上手い。

「罪悪感があるときは、表裏比興といつわけにはいきませんか。」

畠幸はやれやれと肩をすくめると、次には表情を一変させた。
赤銅の瞳は鋭く細められ、能面のような無表情になる。

「勝手に話を聞いたことは、謝る。だがな……聞いちまつた以上、
おれアお前達に聞かなきやなんねエんだよ。何を企んでやがる、つ
てなア。」

三人は頭を抱えて叫びたくなつた。ああ、もうややこしく…
真つ先にそんな気持ちを口に出したのは、木下だった。

「もうヤダ！ お前めんどくさいッ！ ……何だよ！」の変態野郎！ お前
ホントめんどくさいマジで存在 자체めんどくさい！ ……「
いきなりおれの存在全否定かい。」

ギッシュイと畠幸を指差し、木下は憎々しげに叫ぶ。そして残る一
人も。

「ほんつと最悪……いい年してんだから、空氣読めよつて感じだね。

「最悪で最低ですね。挙げ句の果てには脅すとか、人間の風上にかけないです。」

どよーんとした空気を背負い、シラーッとした目で眺められる。
あれ、何これ？おれ今コイツらを尋問してるんだよね？
何やら自分が凄く悪い奴、もしくはどうしようもない奴のような扱いをされて、畠幸はちょっと毒氣を抜かれた。

「……おれア、一体どうすりゃいいんだ？」

思わずそう呟いてしまった。

そういづしてゐる間に、二人は額を寄せて話し込む。

「どうする、話す？」

「テキトーに話しても見抜かれそうですよね。」

「とりあえず核心の核心はハズして言えばいいんじやね？」

仕方ない、そうしよう。三人はコクリと頷いた。

やけにあつさりしているが、彼女等の勘が多分大丈夫だと告げていふ。さしづめ「囁くのよ、私のゴーストが」と言つたところか？

「マッキー、今から話すこと、聞いてくれる？」

後は好きにしていいから、といづ谷中の言葉に、畠幸は何ともいえない表情を作つた。

「あのね、僕達は、この戦をいい方向に向かせようとしてるんだ。」「いい方向、だと？」

昌幸は一瞬、虚を突かれたように口を開いたが、すぐに嘲笑うかの如く、口元を歪ませた。

「戦に、良いも悪いもあるのかい？馬鹿げたこと言ひや
「そんなもん、あるわけないだろッ。」

彼の言葉を遮って、木下がきょとん、とした顔で言つた。

「どんな理由があつたって、喧嘩や戦争や小競り合ひはよくないこ
とだぞ。けどや、起きちゃつたもんは仕方ないよな。」

話の辻褄が全然あつてない。

「でも、その中で上手く動けば……起じらなくていいことを回避で
きる。逆に、起こつてほしいことを起しこそが出来るやつ！！！」

意味がわからない。何が言いたいんだコイツ。

「要するに、私達は武田と上杉に、「戦つて欲しいけど戦つて欲し
くない」気持ちを持つてるんです。」

山中の言つことも、昌幸には余りにも曖昧過ぎてわからなかつた。

「せつぱりだ。おれにも解るよつて言つてくれ。アレかい、上杉に
拐われたお前達の仲間も関係してゐるのかい？」

困惑したよつて眉根を寄せ、昌幸はそつと言つた。

「それもさうだけど。でもさ、よく考えてみてよ……越後の三人は、
謙信様のとこで世話をなつてゐるでしょ。僕達はお館様のとこで世話

になつてゐよね。恩義がある人同士が戦い合ひの、見てて氣分いい
と思う?」

肩をすくませて、谷中は溜め息交じりに言つた。

「……これア戦だぞ。そんとこ、わかつて口きいてんのかい。」

格段に低くなつた畠幸の声に、法むことなく三人は頷いてみせた。
彼は頭が痛むのか、額を手で押さえた。正直、ふざけるなど言い
たい。お前達戦をナメてんのか、とも言いたい。

「で、お前達はどうしようつて算段なんだい?」

そんな気持ちを抑え込んで、畠幸は質問を続ける。

「だからな、戦はしてもいいけど、潰し合にはしてほしくないから、
今どうしようか考えてんだ。」

腕を組み、神妙な顔で木下は言つ。

つまり、『戦うこと』と『殺すこと』とは別物といつ考え方をし
ているのか。

「要するに、お前達は双方に害がないようにしたいってことか。そ
いつアスゲH。」

未だ、畠幸の嘲るような表情は消えることはない。
その様子に、やれやれと三人は溜め息をつく。
最も、最初から理解を得ようなどとは思つちやいなかつたが……。

「あの方々、何でそんなに意固地なの。僕達のやうとしたじる」と

つて、悪いこと？そんなに間違ってる？」「

あまりの頑なさに、若干疲れ気味の谷中。

「善か悪かで言えば、間違っちゃアいないな。けどな、武士としては間違ってる。」

そんな昌幸に、すかさず山中が言い返す。

「武士よりも何よりも、私達は人間です。人の道に反してまで、私達は戦をしたいと思わない。人道に比べれば、武士道など大したものじゃありません！！」

「じゃあ何故戦に出るんだ！？何故武器をとる！？お前達の志はなんだ！？」

鞭打つような怒声が昌幸からあがるが、それでも怯まずに木下は喰い付いた。

「お前等、志がなけりや何にもできないのかよッ！？！オレ達はやりたいからやるんだ！？自分が正しいと思つたよつになッ！？」

自分達現代の人間と、戦国の間の考え方が途方もなく違つているのは認めよう。

だが現代人には現代人としての意地や信念がある。暫し昌幸と二人は睨み合い、目には見えない火花を散らした。
やがて昌幸の方から目を伏せ、額を手で覆つた。

「……本気なんだな。」

その手の下から、低い問い合わせが流れれる。

三人は静かに頷き、次の言葉を待つた。重苦しい沈黙が続き、やがて。

「ああ、畜生！わかつたよ、勝手にしな。」

今までの中で一番大きな溜め息を洩らし、昌幸はやけくそだと言わんがばかりにその場に座り込んだ。

「いいんですか？私達は、戦を邪魔しようとしているんですよ？」

少し困惑したように、山中は彼の顔を覗き込む。

「両軍に被害は出ないんだろ？なら好きに動けばいい……何だ、認めてほしくないのかい？」

三人は慌てて首を振った。

しかし、さつきまであんなに反対していたのに……これは一体どうしたことか。

三人の表情を見て、昌幸は続けた。

「もう腹決めちまった奴相手に、何を言おうと無断だろオガ。それになア、悔しいがお前達なら大丈夫なんじゃないかって、頭のどこかで思うおれがいるんだよ。不思議なことになア……」

自分でも、腑に落ちないと云ひたげな昌幸。

「にしても、話に聞いた通りの曲者揃いだねえ。おれ達「武士」って存在を、いつもきつぱり否定されるたア思わなかつたぜ。」

彼はゆるりと口元に苦笑を浮かべせた。

今まで、自分は幾多の人間を見てきたが、彼等は逸そ馬鹿馬鹿しいまでに真っ直ぐな物の考え方をする。

恩義があるから戦つてほしくない、だから戦をどうにかしたい。自分に何か徳があるわけでもなし、何かの野望を抱えているわけでもなし。

「で、おれは何をすればいいんだい？」

「「「は？」」」

しみじみした表情を消し去り、昌幸はキラキラした目で二人ににじりよつた。

「何をつて……何を？」

谷中の啞然とした顔に、彼はにんまりと笑いかけた。ああ、嫌な予感……。

「何、ボケた面してるんだ？お前達の企み事に、おれも入れろつて意味さ。見張りも兼ねてるが、たつた三人だけで仕掛けようつてエのは、些か無理があると思わねえかい？」

「……マッキーさ、結構騒ぎを起こすの好きだろ？」

決して善人面とは言えない笑顔を見ながら、木下は呆れた顔で言った。

さて、何やら思わぬ協力者が現れたのはいいのだが、果たして昌幸をあつさりと信用しても大丈夫なんだろうか？三人は首を捻つて考えた。

「マッキーさん。私達は貴殿方と違つて、策略を巡らせる頭もありませんし、相手の本質を見抜くことも素人です。ですから、貴方が

もし「」の件について何か別のことをお考えになつていても、それを知ることは出来ません。協力者として、貴方を信用するしかないんです……」「」の意味、お分かりいただけますよね？」

そう言つ山中の声は、どこか困ったような様子だった。

そうだ。自分達は、戦のプロである彼等とは真逆の生活を送つてきた人間。もし裏切られても、どう対処すればいいのかわからない。

「……おれの要望は一つだけさ。一つ、両軍はともかく、武田が不利になるような動きだけは絶対すんな。二つ、隠くし」とたア感心しねえぞ。以上だ……これだけできたら、おれアお前達に力を貸すよ。」

昌幸の言葉に、がつくり頑垂れる。何で隠し事があるつてばれたんだ。

つまりは、最初から話せとそう言いたいんだな。

「……わかったよ。全部教えてあげる。」

谷中は深々と息を吐き出し、今自分達が知る全ての「」とを、昌幸に語り始めた。

（数十分後）

「…………」こいつア驚きだ。」

「だよなー。オレもびっくりしつぱなしだつたぞッ。」

とりあえず全部話し終えると、昌幸はその細い手を真ん丸にしてみせた。それに、木下がうんうんと同意する。

「というか、どうやってその話を聞いたんだい？出所は勿論、越後に拐われたお前達の仲間なんだろ？ここから越後ったら…………」

「あはは～、だってほら、僕達『六武衆』だし？」

「…………そういうことにじつといでやるよ。」

谷中のワザとひしご言ひ方に、昌幸はジト目で言ひ返した。

「わかつていいとは思いますが、くれぐれも秘密にして下さこよ。」

険しい顔で念を押す山中に、昌幸はこくこくと頷いてみせるが、何だらうこれでよかつたのか？と思わざるをえない。

「しつかし、何ともたまげた話だよ。あの軍神が実は女で、ウチのお館様に木の字たあな。で、お前達は川中島の戦を利用して、両軍の大将同士に話をさせようつて魂胆だ。上手くいけば武田と上杉にや太い繋がりができる……そんなことは前代未聞、成功すれば天変地異でもおこるんじゃないのかい。」

そう言いながらも、昌幸の顔は楽しみで仕方がないといつよつて

「ヤーヤしてこる。

「マッキー、何でそんなにわくわくしてんだ? 変わり身早いな。」

木下が問えば、畠幸は嬉々として答える。

「わくわくもするわ。考えてもみな、とんでもなく突拍子もない計画なんだぞ。それを、たつた四人でやろうってんだ。楽しくもなるだろうが。」

「ヤーリッシュモンなのが……?」

きょとんとする木下の頭を撫でて、畠幸は谷中と山中を見る。

「ま、表の動きはおれに任せときな。お前達は策が決まつたら、なるべく早くおれに教えるんだぜ。じゃあな。」

よつしりせ、と畠幸は立ち上がると、三人が止める間もなく、するつと部屋を出ていったしまつた。

「ミナちゃん、大丈夫かな?」

心配そつた谷中の声に、山中は微妙な顔で肩をすくめた。

「わかりません。ですが、多分他言はしないかと……。」

全く、本当に表裏比興という表現がぴったりな奴だ。一人がやれやれと溜め息をついていると、木下があっけらかんとした調子で言った。

「ま、いいんじゃねーの? 何とかなるぞ、絶対。マッキー、色々考

えてるだけでも、変なことはしないこと願ひやシ……」

勘だけどな、と呑氣に笑う木下に、一人はもう一度、溜め息をついた。

三十一の嘶 「ラブストーリは突然に、ピンチだつて突然に。」（後書き）

九月です。「うおお、もうこんな季節ですか！？」

皆さんこんにちは、夜です。

えー、ハイ・・・・・取りあえず昌幸パパを引きずり込んでみまし

た。

うーん、戦の心構え？をつらつらと想えるのは実に難しいですね。
悩みまくった結果がこれです、キヤツホーイお粗末だー。

理屈つてメンドクセー！

えー、次は越後でのスタートですよつと。

あ、もうじきしたらキャラ設定があがる・・・・・かもしぬませ
ん。

今更？今更ですよ。

まあそういうワケで次回も「ひげ」期待！

そうそう、活動報告？っぽいの始めました。

皆様よければコメント残して下さいまし、すっげえ喜びますんで。

三十三の斬「ijyaちも決めよつ、大事なことー」

（side越後）

「成程な……あ、にしてもどうすんだよ。」

「……味方が一人、増えたのはいいとして。」

「参戦するつて、謙信さんにも伝えんとあかんわな。」

甲斐の三人から届いた、戦に出るという決意表明メールを読み、越後の三人はボケーッと午後のお茶を飲みながらそれぞれ呟いた。ついでつきまで、鍛練という名の忍いじめをして遊んでいたところだ。

まあこれには理由がちゃんとある。

軒猿、という上杉の忍隊、三人が上杉の重要な秘密を握ったことを知った兼続に命じられて、昼夜問わず三人に張り付いているのが……如何せんＴＰＯがお粗末なのがいただけない。

「トイレや風呂や着替える時までくつつかれたら、流石にキレるよな。」

梅本の言葉に、一人は何度も頷いた。

まずは地国天と陽炎丸が忍の潜む壁の天井をぶち破り、凧鮫が彼等を叩きのめすか水に叩き込む。

誤解してほしくない、これは最終手段だったのだ。

「……何度も止める、程々にしろと言つてやつたのにな。」

「まあ死んでへんからええやん。」

ズズツ、と年寄り臭く茶を啜り、小川と北はヘツと笑つた。

現在、この部屋の付近には、忍つ子一人存在しない。

全員直ぐ様見つけ出され、いじくりまわされ、完膚なきまでにertz飛ばされ、泣きながら逃げ帰つていったのだ。

とりあえず、ナニをどうされたのかは、忍達があんまり可哀想なので察してやつてほしい。

「アレやな、灰と山椒の粉末は忍でも効くな。

「……お前、一度と室内で使うなよ。」

一体何をやらかしたのか、北の納得したような口振りに、梅本は胃に当たる部分を押さえて呻き、小川は心底嫌そうな声で釘を刺した。

さて、こちらも決めようじやないか。

「向こうが出るなら、こっちも出ないとなあ。」

湯飲みを置き、「ロロンと梅本は仰向けにひっくり返つた。

「一応、上杉にも参戦してくれと言われてるしな。だが、色々と知つた後になると、請われたから戦に出たという理由だけじゃ、少し気が悪い。」

甲斐の三人の考えは、メールにもしつかり書いてあつた。

「参戦の理由は十分あるんやけど……問題は戦そのものやな。桶狭間んときと違つて、今回は武器もあるし能力だつて強なつた。人ぐらいあつさつ殺せるで。」

心配の種はそれだ。人を殺すつもりで戦うのは簡単、だが人を殺さないつもりで戦うのはどうも難しい。

「どうしたもんか、と頭を悩ませるが、ふと先程の忍にじめの」と
を思い出した。

あらかじめ仕込みを行つておぐ、ところのはどうだりつ。
兵士や武将も、皮を剥いでしまえばタダの人間である。鍛え上げ
られた肉体がどうのどう話をするべあげても、弱点は必ずある。

「ほつや、ウチの悪戯帝王様に」と提案だな。」

「マツと笑つて、梅本は携帯を開いた。素早く打ち込み、送信完了。

「……弱らせれば大丈夫そうだな。それに、いつぞや盜賊とやりあ
つたときのように戦えば、なんとかなるか。」

「力加減さえ間違わへんかつたら、多少の怪我くらい平氣やわな。」

小川と北は、そう結論付けて立ち上がった。
相変わらずのテキトーさだ。

「さて、と。それじゃあ謙信様に、遅くなつた参戦のお返事を伝え
に行くか。」

三人はのほほんとした顔付きのまま、謙信の元へと向かつた。

「失礼します、小川です。」

「入れ。」

短い返事を聞き、三人はそつと謙信の部屋に入った。

謙信の座る机の前には沢山の書簡があり、お仕事中だったようだ。

「すんません、俺等出直した方がいいですか？」

それを見て、梅本は少しバツが悪そうに言った。

「いや、構わんよ。今、一段落ついたところなのだ。」

散らかっているがな、と困ったように謙信は微笑み、申し訳なさそうに足の踏み場を作り出した。

「……手伝つたほうが、よさそうですね。」

至るところに、何かよくわからない色々が置いてあり、ぶつちやけとても座れたもんじゃない。

小川はそう呟くと、あちこちに散らばる書簡をまとめ始めた。それに、残る一人も加わる。

程なくして、なんとか小さなスペースを作り上げ、ちょっと一息。

「ぎょーさんあつたなあ……何や、仕事でも溜めとつたんか？」

ちょうどそこに座り、北は平積みにされた書簡だかなんだかを見回した。

「そろそろ忙しくなつてくる頃だ。終わらせておける仕事は今片付

けておいたと思つてな。」

忙しくなる、といつゝ言葉の意味を、三人は間違つことなく捕えた。

「……戦の話ですが、答えを持つてきました。」

小川がそう口を開けば、謙信は少しだけ驚きに目を見開いた後、表情をキリッと引き締めた。

「さうか、長い間悩ませてしまつたが……。」

一度座り直し、謙信は話を聞く体勢に入る。

「遅くなりました、俺達は戦に出たいと思います。」

小川があつさつと告げると、謙信は微かに目を見開いた。

「何か不都合でもありますか？」

眉を寄せて、梅本は怪訝そうな表情をつくった。
それに、謙信はいや、と首を振る。

「最初、この話を持ちかけたときはえらく困つていたように見えていたのでな。今が随分とあつたりしていよいような……」

三人はへりと苦笑した。

そりや、甲斐とのタッグがあるからだ。

「嫌やな、本来これが目的であたしらのこと抜つてきたんぢやうんか？」

ニヤーッと意地の悪い笑い方をして、北は謙信を眺めた。

「……それを言わると、少々耳が痛いな。」

「おい、それはこの人のせいじゃないだろ。」

申し訳なさそうに俯いてしまつ謙信を見て、梅本はフォローを入れた。

事実、あれは兼続の独断で、謙信が命じたものではない。「ともかくにも、礼は言わねばならないな。感謝する、六武衆の方々。」

謙信は三人の方をしつかりと見ると、軽く頭を下げた。

「大将になる人が、簡単に頭なんか下げていいんですか？」

苦笑を浮かべて梅本が問えば、彼はニヤッと笑つて言つた。

「何、今は私しかいない。越後の龍も一皮剥けばただの人間……そなた達の前では、私は一人の人間なのだろう?」

北に笑みを含んだ目を向け、皆でくつくつと笑いあつた。

「何や、覚えとつたんか。」

「中々響いた言葉だつたのでな。」

北との会話が終わるのを待ち、今度は梅本が付け加える。

「ただし、条件があるんですよ。」

「条件、か？」

梅本はしばらく間を空け、一つ息を吸い込み、おもむろに口を開く。

「俺等を、自由に動かしてくれませんか。」

甲斐の三人と同じ願いを、申し出てみた。

「あたしら、あれこれ命令されるの嫌いやねん。せやから、戦んと
きは自由にさせてほしいんよ。」

ちょっと、とした顔で自分達を見る謙信。さて、このお願いは無
事に通るのだらうか？

「わかった。そなた達の希望通りにしてやつ。」

いや、それ無理。と答えられたひじりひとつと身構えていたが、
ひりひとつが貰えて拍子抜けする。

「……マジですか？」

「まじっ。」

「……本当ですか？」

思わず出た現代の言葉を何食わぬ顔で言い直し、小川は確認をと
る。

「全では毘沙門天の導きのまま」。じつしてそれを疑ふつか。

胸の前でそつと合掌し、謙信は一ひとつと微笑んだ。

「あー……何かよくわかんないんですけど。」

これは自分達もやつといたほうがいいのか、と梅本に続き、一人も微妙な表情ながら手を合わせる。

ハタから見れば、ちょっと変な光景だ。

「失礼しま……何をやつておられるのです?」

「あ、うさみー。」

スッと空いた襖から顔を覗かせた定満は、それを見て無意識につっこんでしまった。

「ちなみにうさみー、とは?」

「……宇佐美からとつた呼び名ですね。」

「ウサ!!!とかマシだな。」

真顔で言い合つ小川と梅本。それにどう反応したものか、若干困った顔の定満。

堪らず謙信は吹き出し、腹と口元を押さえて笑いだした。

「……殿?」

笑われてますます情けない顔をする定満に、ひょつとタンマとばかりに謙信は掌を突き出した。

「いや……すまん、定満……一つもみーなど……あんまり愛いらしー、呼び名だったので……つこ……」

ハー、と息を吐き出し、謙信は無理矢理笑いを押し込んだ。

「……もつうひみーなり何なり、お好きに呼びになつてください。
私は気にしませんので!」

珍しく投げやりな口調で、定満は出来上がったのであらう書簡の束を抱えた。

「大変やなあ、うさみーも。」

「原因の方が何を言いますか。」

ジロッと定満は北を睨み付け、やれやれと言わんがばかりに部屋を出でていってしまった。

「ちなみに、兼続は?」

何やら期待に満ちた田で謙信が尋ねる。北は暫しの間考え、ポツリと一言。

「カネゴン……とか。」

小川と梅本の脳裏に、カエルとカタツムリを掛け合わせたような怪獣の顔が浮かび、ブハツと息を吐き出した。

「カネゴン……ふ、くくくくく……！」

謙信は謙信で、奇妙な文字の響きに再び笑いの波が押し寄せる。一頻り笑つて、痛くなつた腹を擦り三人は立ち上がつた。

「どうへ?」

そつ尋ねる謙信に、肩を回しながら北は言った。

「ちゅうと鍛練や。戦に出ゆつて決めたぶん、強おなつとかんとあかんしな。」

思えば正式な初陣なのだ。本番でヘマをしないよつこ、出来る限りのことにしておかなくてはいけない。

「では、兼……いや、カネゴンにでも手合わせを頼むといこだらつ。恐らく、一人で鍛練場にいるだらうから。」

悪戯っぽく謙信は微笑み、鍛練場の方を指差した。
三人は楽しげに頷くと、一つ礼をして部屋を出ていった。

「……殿。」

それを見送った後、謙信の前に一人の忍が降り立つ。

「兼続から聞いた。あの者達に随分とやられたようだな。」

からかうような謙信の声に、忍はガックリと頭垂れる。

「お恥ずかしい限りです。」

彼も被害者の一人だらつ、陰鬱とした声でポツリと言った。

「フフ……まあそつ氣を落とすな。して、武田の動きは?」

「躊躇ヶ崎館内が少しずつ慌ただしくなつてきております。それに、上田の知将、真田 昌幸が参上いたしました。」

真田の名を聞き、謙信の口元がふわりと弧を描く。

「やはり来たか。表裏比興の者……」

忍はその様子を見、それから、と諱ご辛せうに報告を続けた。

「これはまだ断言は出来ませぬが、甲斐にいる六武衆の三人も……戦に加わるとか。」

謙信の目が険しさを帯び、みるみるうちに尖った。

「恐らく……それは断言していいだらう。」

「わかりました。」

謙信のきつぱりした返事に、忍は同意を示す。
そして、すぐに顔を曇らせてしまった自分の主へ、気遣つような
視線を向けた。

「……彼等は、そのことを知っているのだらうか。」

少し沈んだ謙信の声に、忍は自分が出来ることうを口にしてみる。

「……ようしければ、私が伝えておきますが。」

謙信はそうしてくれと言ひと、忍は小さく頷き姿を消した。
それを見送り、謙信は溜め息をつく。

「……予想していたこととはいえ、やはり躊躇いを隠せぬ。毘沙門天よ、これでよかつたのでしょつか。」

複雑な感情が滲む問い掛けに答える者は、この場にはいない。

三十三の歎「いやちも決めよつて、大事なことー。」

(後書き)

はい、どうも畠さんおはこんにちばんわ。

越後の三人も参戦決定です。

何かもう秋ですね~、朝晩のさつむいことさつむいこと。

風邪ひかないようにしないといけませんね。

ではまた次回。

三十回の巻「仲間同士が戦うあつひで? やるワケなこじやん、めんどくへやん。」

「それから！」

ギンツ、と噛み合う小太刀と大槌。

片や地国天を降り下ろそいとする梅本、それを下から防ぐのは兼続だ。

「がーんばれ力・ネ・ゴン！ つーよいぞ力・ネ・ゴン！」

ギリギリと鐸迫り合いの最中、思いつきり間抜けな声援が聞こえ、思わずずるつと滑る一人。

堪らずゲラゲラ笑う梅本、田を白黒させながら怒鳴る兼続。ちなみに、その声援の送り主はやっぱ北だ。

「何って、兼続さんの呼び名や。かねつぐ、でカネゴン。ええやろ？」

ぬぼーつとした顔で、北は淡々と言った。相変わらずムカつく真顔である。

「いやがだー今すぐ止めりー」

「細かい」とイチイチ気にしいなや。そんなんやからいつまで経

つても独り身なんやで？んな狛犬みたいな顔しどつたら、男一人寄つてけーへんやん。」

そして相変わらず相手の一番痛いところを的確に突いてくる。顔を真っ赤にして唸る兼続の隣を、ゼーゼー息を切らした梅本が通り過ぎた。

「あー、腹筋が死んだ……王子水くれ。」

小川は竹筒水筒を梅本に差し出し、兼続にもそれを渡す。

「……流石に強いな。その小太刀、名前は『鳳・三条宗近』だっけ。」

小川は感心したように言い、まじまじと兼続の神器を眺める。柄は濃紺、鍔は翡翠のような色合い。刃の造りは少し変わっていて、切つ先から数十センチは両刃、そこから鍔までは片刃という構造だ。

木下がいれば、それはバスター・ソードといつ西洋の剣の造りと同じだ、と言つだらう。

「突き刺すんも、斬るんも出来るんやな。で、カネゴンは風の神憑きか。」

確認するように尋ねる北に、兼続は頷く。もう呼び名の訂正は諦めたようだ。

「そうだ。にしてお前達、中々に出来るな。」

兼続は兼続で、噂に違わぬ三人の強さに内心舌を巻いていた。

一通り相手をしてみたが、それぞれ特徴があり面白かったのは秘密だ。

小川は神器の長さを考え、常に一定の距離を保つたまま素早い斬り込みを入れてくる。

梅本は技の手数は少ないものの、神器を巧みに操り、一発一発が強烈な重みを持つ。

北は普段の鈍い動きを一変させ、ワン・ツーの攻撃を常に密着した状態で放つ。

(……とても子供の腕とは思えんな。)

と、感心する兼続。

お気づきの方も多いだろうが、この世界に来てからというものの、六人は一度も自分の歳を口にしたことはない。

つまり、周りの人間は誰も彼等が二十歳過ぎだと思っていないのだ。

そんなに自分達は年相応に見えないのだろうか、と苦笑とする二人だった。

(まあ…面白いし、都合のいいこともあるからだまつていよ。)

ひつそりそう思い、三人は再び鍛練を開始するのであった。

その日の夜。

「おり、起きや野郎共。」「「んがつー?」」

すやすやと気持ち良く眠っていたのを手荒く蹴り起こされ、目を覚ます。

寝惚け眼で見上げた先に、偉そうな態度の北がいた。

「お前いきなり何すんだよ！？」

「つていうか、普通他人の頭蹴るか……？」

梅本と小川は青筋をたて、北に掴みかかるばかりに詰め寄った。

「あたしは何べんも声かけたわ。起きひんかったお前等が悪いんやろーが。とつとと着替え、行くで。」

「何処にだよー？」

用件も何もなく、いきなり行くぞと言われても。

「つぬさいな、謙信様のトコに決まってるやう。」

面倒くさそうに言つ北は、もつずつかり着替えていて準備万端だ。一人はいきなりの招待に面食らいつつも、とりあえず寝間着の上に一枚着物を羽織り、帯を無造作に巻き付ける。

「何なんだよ、一体。」

「……俺達は、行つても大丈夫なのか？」

今時分、謙信は「彼」から「彼女」に姿を変えている頃だ。

北は別として、自分達はそのことを知らないという設定……の筈。

「大丈夫や、ええから来い。」

モタモタする男二人に痺れを切らし、ついに北はするつと部屋を出でてしまつ。

一人は慌てて後を追い、北の左右に並ぶ。

「軒猿がな、何か呼びに来たんよ。今日はお前等も一緒に行けつて。

」

暗い道を、北はスタスターと歩いていく。

「……本当に暗いな。よく歩けるもんだ。」

一寸先は闇、小川は足下に注意しながら進んでいく。やがて、見たこともないような中庭に辿り着いた。そのど真ん中に佇む、小さなお堂。

「…………がそうなのか？」

北に続き、恐る恐る足を踏み入れる男二人。

「まあな。謙信さん、入るで。」

北は戸を開け、すたすたと中に入つていく。

「お待ちしていましたよ、北殿。」

柔らかな声と、奥に座する姿に、小川と梅本は絶句した。

「…………謙信さん、か？」

頭巾に隠されていた濃紺の、長く美しい髪と胸元の膨らみに唖然

じかる。

「IJの姫でお会いするのも初めてですね。お初にお皿にかかります、
小川殿、梅本殿。」

静々と頭を下げて、謙信は言った。

「お前等こつまでやうに来つ立つたるをや。森山子やないんやから、
わつわと座り。」

北の呆れたよつた声に我に返り、一人はぎくしゃなく腰を下ろし
た。

「あの、これは一体……？」

怪訝そうに、梅本は謙信を見る。

「おや、北殿から私のことを聞いていないのですか？」「
いやわうこいつじじゃなくて。」

小川のつひこみに、きょとんとした顔で謙信は北に視線を向け
た。

「あー、つまりはあたししか知らんつていう設定の筈やの、自分
達にその姿を見せてくれんかつていいたいんよ。」

早速足を崩し、北はそう説明した。

「北殿は、彼等に何も言つていないのでですか？」

「いや、一応言つたし。ライシラが氣イ使つとるだけやで。」

「ラーラと笑つて、北は一人を指差した。何だろうこれもしかして馬鹿にされてる？」

とにかく、今は何故自分達がこの場に呼ばれたのかを聞かなくては。

「……どうして俺達をここに？」

小川がゆづくりと尋ねると、謙信はスッと目を伏せた。

「昼頃、そなた達が兼続の元へ行つたとき……軒猿から知らせが届きました。甲斐にいるそなた達の仲間が、もづじき始まる戦に加わる可能性が高いと。」

なあんだ、そんなことかと内心で思つ三人だが、一応ここでは初めて聞いたことになつてゐる。
そんなことを思つてみると、反応が遅れたのを別の意味に捉えたのか謙信は困惑したような目を向けてきた。

「驚かないのですか……？」

「ま、そういうやううと思つてたしな。別段びづくつする必要ないやつ。」

わざと答えた北に、謙信は眉を寄せた。

「しかし……友なのでしょう? 私は」

「あのや、俺等がやううとしてるのは殺し合いじゃないから。」

彼女の言葉を遮つて、梅本は苦笑を浮かべた。

「……俺達はちゃんと自分の目的の為に動いてる。それは、あいつも同じことだ。」

胡座を組み直して、淡々と小川は言った。
「そうだ、自分達は殺しに行くんじゃない。
どうにもならないと誰もが思い込んでること、出来っこない
と決め付けていることを、どうにかなるんだ、出来るんだと見せつ
けてやるために戦に出るのだ。」

「それには、俺等、武田にも上杉にも世話になつてんだ。一宿一飯
の恩返しを返したいだろ。」

「一じやすまんな、何宿でもしとる。」

冗談めかして梅本が言い、北も笑いながら答える。
そんな彼等を、謙信は目を丸くして見ていた。

「……驚きました。此度のこと、やはり軒猿より直接私の口から言
わねばならないと思い、そなた達をここに呼び寄せた次第ですが…
…。私が言つより先に、そなた達は既に心を決めておりましたか。」

やがて、感嘆の溜め息と共に謙信はそう言った。

「……そんな大層なものでもない。ただ単に、自己中心的なだけだ。」

「

ふん、とそっぽを向いて、小川は居心地が悪そうに言い捨てた。

「自己中心的ですか。私にはあまりそつぱ見えませんよ。」

口元を袖で隠して、謙信は淑やかに微笑んだ。

さて、眞面目な話はもう終わり。

「セヒ……いつも卑く」の話に決まりがつくとは思いませんでしたね。お一人には悪いことをしました。」

「謝ることあらへんよ、一昔前は平氣で夜更かしつたしな。」

眉を下げる、申し訳ないと謝る謙信の肩をポンポンと北は叩いた。

「……むしり俺はお前に是非とも謝つてほしいな。」

わざの起じし方とか何かもう色々、という小川の咳きを、北は明後日の方に向いて無視した。

～ side 甲斐～

日が過ぎ、次第に騒がしくなつていいく躑躅ヶ崎館。
そんな中で、甲斐の三人は何をしているのかといつと。

「殿トー！山椒の粉、調達できただぞ！」
「いづちも唐辛子を調達してきました。」

せつせと戦の為の下準備に精をだしていた。

梅本からメールを受け取った谷中は、嬉々として戦の「仕掛け」に応じた。

「いいねいいね～、山椒に唐辛子！後はこれをいい感じに調合して、目眩くスペイシーな世界が広がれば最高だよね～！」

「ふふ～、ふふふふふ、と谷中は一つの袋をもみもみしながら怪しく笑う。

「でも……これ、私達は被らないよ！」といけませんね。」

布の切れ端を風で細かく操る練習をしつつ、山中は咳いた。
目潰しを自分達まで食らっていたら、それこそお笑いである。

「あとは、川中島の地形を知つとかないとなつ。」

「地図はまだかな？今日辺りに、現場周辺地図が出る筈なんだけど。

」

木下の言葉に、やつと我に帰つた谷中が顔を上げた。

第四回川中島の戦いでは、最終的に両軍は八幡原という場所で衝突する。

しかし三人は、戦場所がどのような所なのかを知らなかつた。
どこに何があるのか、利用できそつなものはあるのか、それを知つておかねばならなかつた。

「忍さんを脅し……」ほん、お願いして、現場の下見に行つてもらつてるんですよね。」

何やら物騒な言葉を咳払い誤魔化し、山中は遅いですねと風をくるくると回した。

すると、小さな気配がして、天井からコンコンと音がする。

「お、噂をすればだなーお帰りー、八嶋の兄ちゃんー。」

木下の楽しげな声を入室の合図に、板がコトコトと動いて、旅人の姿に化けた忍の青年が降り立つた。

「お疲れー。どうだつた? いい感じに描けた?」

三人は膝を使って忍の青年、八嶋にじり寄った。

「……このよくな感じで宜しいでしょつか?」

八嶋は懐から折り畳んだ紙を取り出し、広げてみせた。

「うん、キレイキレイ! 流石忍だね!」

そこに描かれていたのは、上空からみた戦場の地図。

「おおー、スッゲー!」

「これならわかりやすいですね。」

正確に的確に描かれた地図に、木下と山中は感嘆の声を上げた。

「あの、山中様……例の件ですが、その……」

三人の満足そうな反応を見て、おずおずと八嶋は口を開いた。

「ああ、やつですね。ちゃんとといいお仕事をしてくれましたので、「あの出来事」は私の記憶から抹消しておきますね。」

顔は笑っているが、その裏側の表情は八嶋にとって物凄く恐ろしいものだろう。

「ほ、本当にですねー?本当に、忘れて下されるんですねー?」

ハ嶋の顔付きがガラツと変わり、必死な様子で山中に詰め寄った。

卷之三

山中は眩しい笑顔を少しも崩さない。それに若干退き気味になりつつも、八嶋は何度も念を押して、逃げるようて天井から出ていつてしまつた。

「…………ミナちゃん、一体あの人何をネタに揺すつてたの？」

引き攣った顔で谷中が尋ねるが、彼女は一コ一コと笑つたまま何も言おうとしなかつた。

「まあ、気を取り直してだ。作戦会議するんだろ?」

場を仕切り直すかのよひで、木下は手をぱんぱんと鳴らす。

これ以上聞かない方がよさそうだと判断した谷中は、素直に弓き下がつて地図に目をやつた。

「史実だと、武田で使われた策は『啄木鳥の戦法』だったよね
……ある意味有名な。」

「それを上杉謙信が見破つて、両軍がドンパチやり合つた、って
いう話だぞ。」

「たしか、上杉が最初に布陣したのが妻女山……あ、ここですね。
そしてここには載つていませんが、武田は海津城に入ります。」

さあ、ここからが未来を知る者達の見せ場だ。

三人は一体全体、どのような邪魔を・・・・・いや戦い方を

頭に思い描くのだろうか？

三十四の嘶「仲間同士が戦いつつも？ やるワケないじゃん、めんどくさい。」

はーい、仕事も見つからないままで十月になりましたー！

おはこんにちばんわ、夜さんです。

いやー、やつと作戦を練るところまでやつてきました！

ここからがめんど・・・『ほん、難しことこ』ですよね。
よくわかる戦国時代つていう本庄村に、あーだのこーだの並んでま
す。

そして、多分「いや、駄目だろお前」つていうよつた作戦が出てき
ます。

ええ、ホントに。

とこりで、「異世界戦国大乱記 短編集」つてのに短編纏めました。
なのでお気に入り登録＆評価お願いします。

そして短編の量増えました。

で、十月三十一日ハロウィンに向けてハロウィン短編制作中だった
りします。

ハロウィン出来るとこいのになー、そーだつたらいいの
になー・・・・。
じゃ、そこならーせいなー。

三十五の嘶「寝返り？裏切り？とんでもない、それも作戦です。」

地図を中心に、三人は額を寄せあって考える。

「ところで、どうして謙信は啄木鳥の戦法を見破つたんだっけ？」

不思議やうに木下は首を傾げ、ジッと山中を見つめる。

「……炊き出しの煙がいつもより多く見えたことから、これは何か仕掛けてくると予想して、最初に布陣していた才女山を降りたという話です。」

「流石ミナちゃん、得意なのは中国史だけじゃないね！」

ワザとらしく手を叩く谷中を、苦笑いを浮かべて山中は一瞥した。

「なら、その煙が解らなかつたら、この戦法は成功してたわけだ。
「成功させちやダメじゃねーの？」

木下の言葉に、山中も頷いた。

「両軍を上手く噛み合わせて、私達は大将同士を引き合わせなくてはならない……なるべく史実通りに動きたいですが、互いの被害も最小限に止めたい。」

難しい話だ。それこそ、この戦国乱世ではあり得ない話。

「そこで、僕が仕込みをするんだけど……うん、一人じゃ無理だよ。お手伝いが欲しいとこだけど、もう揺られる人はいないでしょ？無

理に動かして、足がついても困るし。」

山椒と唐辛子の粉末は強力だが、相手は何百何千という人数だ。

「雑魚はそれで適度に足止め出来ても、神憑きはそんな小手先の仕掛けでどうにかなるとは思わないしな……」

腕を組み、木下は唸った。

問題はそれだけではなく、他にもある。例えば。

「武田が背後から廻した別機動隊も困り者だね。えーっと、あの時つて上杉チームに守衛隊いたつけ？」

谷中の質問に、山中は頷いた。

「武田の別機動隊と上杉の守衛隊……」の両方を妻女山で抑えておきたいですね。この戦、前半は上杉の勝ち、後半は武田の勝ちと言われています。後ろから別機動隊がくれば、ただでさえ複雑な戦いが、もっとと面倒なことになる。」

そう言しながら、山中は地中を指先で撫でる。

「じゃあ、別機動隊と守衛隊の中には、オレ達と向こうの二人のうちそれぞれ一人ずつを潜り込ませておくつてのはどーだ？」

「そうするのが一番いいのかな……とりあえず、あっちの二人にもそれ、提案してみようか。」

しかし、内容が内容なだけにメールを送るのは面倒だ。

「チロさん、悪いですけど配達頼めますか?」

山中は荷物を漁り、帳面と筆を取り出す。

「あ、それオレも言おうとしてたトコ。オレなら影を抜けて直ぐに行けるもんなつ！」

久し振りの活躍である。

木下はテンション高く言い、ビシッと山中を指差した。
その間、山中は立ち上がりて墨と硯の用意をする。
いつも山中が絵を描いたりするので、道具一式は部屋の中にいるのだ。

「地図も一応[写メ]とくか。」

谷中は念の為、地図を携帯のカメラで撮つて送信する。
北と違つて、余計なことはしていないので、電池はまだ大丈夫だ。

山中は素早く墨を摺り、帳面の紙に作戦のことをすらすらと書いていく。

しばらくすると、木下の届ける手紙が完成し、山中は丁寧にそれを折り畳んだ。

「今から行つても大丈夫かな？」

「大丈夫だろ、無理なら影から出なけりやいいだけだし！」

山中が手渡した手紙を、木下は大事そうに懐に入れる。

「それじゃ、お願ひします。」

「気をつけてね。」

木下は頷くと、立ち上がって自分の影を映す。

「じゃ、行ってくれんなッ！」

元気よく言い、するつと自分の影に入り込んで行った。

「さてと、僕達はお館様のところにでも行って、作戦の確認でもしてくるかな。」

「どこで戦うか、それも追々考えていかないと。」

木下を見送った一人は、のんびりと信玄の元に向かった。

（side 越後）

その頃、越後の三人も、同様に作戦について頭を悩ませていた。

「……これからどうする？」

谷中から送られてきた地図を見ながら、小川はボソリと言った。

「まあ、この写真が送られてきたってこと、まだ出てこないってことだよな。」

腕を組み、梅本はつーんと首を捻った。

「第四回川中島の戦があ……武田が上杉を挟み撃ちにしようとして、

失敗したつづーことしか知らないな。」

大体伝わつていいことはそれくらいだ。

「あつちの考へてる作戦がわかんねえ限り、こつちも考へようがな
いよな。」

暢気に梅本はじょうじと仰向けに引っくり返る。
すると、背中をつんつんとつつく何かあり。
これはもしや、と梅本は直ぐ様辺りを探る。

「……今のところ、大丈夫か？」

忍の気配はない。梅本は身を起こし、よつと立ち上がる。
「チロだろ？ 出てきてもいいぞ。」

ゆらり、と彼の影が揺らめき、急に濃さを増した影から見知つ
た顔が覗く。

「よつ、久し振りだなつ。」

声を低めて木下は言い、影から這い出してきた。

「……便利な能力だよな。」
「いいだろ、羨ましいだろ。」

一シシと得意氣な笑みを小川に向け、木下は懐に手を突っ込ん
だ。

そして、手紙を取り出して梅本に渡す。

「何だこれ。」

「作戦と解決すべき問題点。メールだとめんどくセーから、オレが届けに来たんだぞっ。」

手紙を渡し終えれば、もう仕事は完了だ。

「じゃ、そゆことで。ちゃんと考へりよつー。」

ヒカラと手を振って、木下は三人が止める前に、再び影に消えてしまった。

あつさりしてゐといつか、薄情といつか。

「相変わらずやな……小動物並みにせこせこじるわ。」

やれやれと北は肩をすくめ、山中からの手紙をむしりとり、畳の上に広げた。

そして、三人で額を寄せあい目を通す。

「……武田の別機動隊と上杉の守衛隊を妻女山で抑える為に、両隊に六人のうち一人を入れるのか。」

「でも、これだと寝返りみたいにならぬないか？それに、抑えるつたつて言つても、たつた二人でとか……」

小川の言葉に、無理だるとでも言ひたげに梅本は顔をしかめた。
そりやそりや、一人だけではいくら何でも。

「攻撃範囲の広いやつと、攻撃距離の長いやつなら何とかならんか
？」

北は眉を寄せ、そつ提案してみる。

「史実やと、結局武田の別機動隊が後ろから来てなんとかなったんやつたな。そしたら、お互に攻撃するフリとして、後半一気に置み掛けねばええんとちやうん？」

随分と腹黒い作戦だが、軍師でもなんでもない自分達が思い付くのは、これくらいしかない。

「あんまり気は進まねえなあ……でも、俺も他の作戦なんて思い付かないし。」

梅本は難しい顔をして、溜め息を吐きながら言った。

これはかなり良心が痛む作戦だ。出来れば寝返り役なんて、引受けたくはないが。

「じゃ、妻女山チームは梅と殿下な。」

「あー? おま、何勝手なこと言つてんだよーーー!」

いきなりのご指名に、梅本は北に喰つてかかつた。

しかし彼女からは、普段からは想像もつかない程に知的な返事が返ってくる。

「お前、あたしの話聞いてたか? わつき言つたやん、適役は攻撃範囲の広いやつと、攻撃距離の長いやつって。それ、お前と殿下がぴつたりなんやで。」

「……詳細希望だ。」

珍しそうやうらマトモな事を言こ出す北に、小川は視線を向ける。

「謙信さんにな、教えてもらひたんや。あたしらの能力の特長つてやつ。」

ニヤッと北は笑い、話し始める。

北が言つては、神憑きの力には特長があるらしい。

「今は細かいこと省くけどな、あたしらの中で一番攻撃範囲が広いんは、地の神憑きのお前やねん。で、一番攻撃距離の長くて早いんは、雷の神憑きの殿だ。」

「……広範囲、長距離で止付けるか。なら丁度いいな。」

梅本抜きで進む話に、彼は口をぱくつかせた。
ちよつと待てと言いたいが、口を挟む隙がない。

「……なら、それをあつちこも言つてみるか。」

「こや、おこつ……！」

携帯を取り出そうとする小川の手を、慌てて梅本は押さえ込んだ。

「諦めの悪いやつちやな。どない考えてもお前が最適や。ぐちやぐちや言つたな、このへっぴり腰。」

「うっせえ……！そんな大それたこと言われて、はいそうですかって簡単にOKできるかよー？」

小川から携帯をむじつ取ろうとする梅本と、それを妨害する北。

「……諦める。」「うわ熱つー？」

いいザマだ、と笑う小川の体から炎が沸き上がり、梅本は思わず手を離す。

邪魔は北にまかせ、その隙に素早くメールを打ち込む。

「……送信、と。」

「最悪だ……マジで最悪だ……！」

ズーンと効果音が付きそうな程に、梅本はがっくりと頃垂れた。暗雲を背負い、ブツブツと陰鬱な呟きを発している彼を一瞥して、無情にも小川と北は作戦の続きを話し出した。

「……とりあえず、機動隊と守衛隊の話は置いといて。俺達の位置はどうある？」

晴れやかな顔で、小川は機嫌が良さそうに言った。

「個人的には一番後ろがええけど……でもそれを決めるんは謙信さんやろ。」

手紙を弄る手を止め、北は「コキリと首を鳴らした。

「……おー。」

ひつきまで沈んでいた梅本が、まだ陰鬱な声のまま口を開いた。

「何や、粘菌。」

「……可哀想になってきたからあんまり言つてやるな。」

流石に酷いので、小川は北を諫めた。

粘菌呼ばわつは地味に匂む。

「……霧が出たよな。」

「霧イ？」

部屋の隅でいた梅本は、のそのそと一人のところまでやつてくれる。

「第四回川中島の戦にはな、濃霧が出た筈なんだよ。その霧のせいで、両軍は互いに気付かずに、すぐ近くで鉢合せちまつて、ともでもない大乱闘になつたんだ。」

「……なら、その霧を利用して、妻女山チームの時間稼ぎができるな。」

もづじう文句を言つても、この配役は覆らないと語つたのか、梅本は小川の言葉に頷いた。

「つてことは、ゆつくり進んだ方がいいんやな……ん? や、よう考えたら、あたしらの位置つて最前線の方がええんだけやつん?」

北は思い付いたようにいい、小川と梅本は顔を見合せた。

「何でだよ?」

「だつてさ、時間稼ぎすんならゆつくり進まなかんよ、つて言わんとあかんし、被害を最小限にするんには、相手を殺す氣のないあたしらが一番気張らんとあかんや。」

めんどくさいに、北は田を細める。
確かにその通りである。

「……お前、一年に数回はまともなことを言つな。」

「褒めとん？貶しとん？」

「……勿論貶してゐるが。」

舌打ちしながら、ギリギリと睨み合ひつ小川と北を横日に、梅本は一人、キリキリと痛み始めた胃を押さえるのであった。

（ side 甲斐）

一方こちらでは、甲斐の三人が軍の会議に乱入していた。

彼女達の参戦を知った重臣達は、最初はあまりいい顔をしなかつた。

彼等曰く、客人である三人を戦に出すわけにはいけない、とのことだったのだが、その三人の強い要望と信玄の推奨により、半ば押し切るような形で重臣達を納得させてしまったのだ。

「しかし、本当にいのか？」

未だに踏ん切りがつかない表情の信方は、何度もこいつ尋ねてくる。

「大丈夫だよ、ガッキー。僕達、一応六武衆なんだし。」

「それにさ、三ツ者だって言つてたんだろ？越後のあいつらも戦に出来るつて。」

いい加減に同じことを繰り返すのも面倒だ。

心配してくれるのはこいが、何事もせびせびが一番なのである。

「板垣殿、やよつて心配せずとも大丈夫でござりやー。彼等はなかなか手強ひいざわる、あいつとよく働きをしてくれましょー。」

二二二二二しながら言つのは、武田の猛虎」と虎昌。

彼は一度谷中と手合させをして、雷で黒焦げにされた経験がある。

「ですが……仲間同士で戦ふことになるんですよ?」

困ったよつて眉根を寄せて虎泰は言つが、それを山中が一笑に伏せる。

「そこは私達も十分承知の上ですよ。ですが、私達全員は武田でも上杉でもない……互いを攻撃しなければいいだけの話です。」

その言葉に、武田四天王は顔を見合せた。

「あつさつしてこますね。どちらが勝とうと負けようど、仲間が無事ならば問題ないとこうことですか。」

「ま、そーなるな。オレ達の目的は、皆が無事に会つことだし。」

畠信が苦笑混じりに聞けば、能天気な顔で木下は笑つた。

武田四天王としては、少しでも寝返り・裏切りの可能性のある輩は戦に参加させたくないところだ。

だが、是非戦に加わらせて貰ふと頭を下げて頼み込んできている。

戦が近いこの頃、『六武衆』と呼ばれる彼等の参戦は、正直切り札としては好ましい。

何度も勘助や信方が、武田に仕える気はないかと尋ねてみたが、彼等は笑つて一様に言い放つた。興味がない、と。

「まあ、そう氣を張らなくともいいでしようがよ、四天王の皆さん方。あちらさんも三人、こっちも三人、これで互いに過不足なしの戦が出来る。それに、それぞれが越後と甲斐に恩があるんだ。いくら得体の知れねエ六武衆でも人の子、いい加減疑うのはナシでいいんじやねえのかい？」

へらへらと笑いながらも、その声色の底にピシリとした響きを含ませたのは昌幸だ。

「珍しいこともありますな、真田殿。いつもならば、貴殿が真っ先に噛み付いていようだ。」

隻眼を瞬かせ、勘助が驚いたように昌幸の方を見る。

「それは儂も同感だの。昌幸よ、お主が飛び入り参加の者を買いつとは。」

信玄もどうこう風の吹き回しだ、と言いたげである。昌幸は笑みを崩すことなく、三人に顔を向けた。

「失礼ですねエ、揃いも揃つて、人を山犬かなんかのように思つてるんで?ほら、お前達も言つてやりやあいいさ。」

三人は頷くと、決意表明とばかりに高々と宣言した。

「先程、ああは言いましたが……私達は貴殿方武田を、悪意を以て陥れるようなことは絶対に致しません。」

山中は静かに、だがキッパリと。

「今は、武田の為に尽力する。必ずいい結果を出してみせるから、期待しててよ。」

谷中は力強く、余裕を持つて。

「だから、オレ達のこと信じてほしいんだ。この戦、絶対に良いよう終わらせてみせるぞっ！……」

木下はグツと拳を突き出して、勢いよく。

それぞれの言葉を聞き、信玄はおもむろに口を開いた。

「ようわかった。お主等の覚悟、この武田 信玄しかと受け止めた。

」

武田四天王も名軍師も、一様に頷き微笑む。

それを見ながら、三人は多少心が痛んだが、同時に必ずこの戦を良い方向に向かわせようと身に力を込めるのであった。

三十五の嘶「寝返り？裏切り？とんでもない、それも作戦です。」（後書き）

夜 様 で す。

十月も終盤ですね、時よ止まれお前は美しい
はい、『めんなさい』と暴走しました。

次回からはいよい戦の準備編ですよっと。

早く進めばいいのに・・・・・・ストーリーがなかなか（汗）

三十六の嘶「決戦まであと少し—彼等の過1し方は。」

（side甲斐）

あれから何度か、メールのやり取りを繰り返し、両軍の軍議にも顔を出していた六人。

互いに情報交換を繰り返し、彼等の作戦も固まりつつあった。武田の別機動隊と、上杉の守衛隊を抑える役目になつた梅本と谷中は、必死に鍛練を積んでいた。

谷中には、事情を知る昌幸から嬉しいお届け物が。

「……えーっと、誰？」

鍛練を終えて、汗を拭きつつ戻ってきた谷中の前に深々と平伏する青年の姿。

ぽかんと口を開けて谷中が言えれば、青年はスッと顔を上げた。キリッと釣り上がった目は、深い海の色。

同色の髪はポニー・テールにしており、流れるよしだ。

「畠幸様から名を受け、貴女様の駒となるべく参りました。海野六郎と申します。」

もう一度深々と頭を下げる青年に、ビーッしたもんかと谷中はボリボリと頬を搔いた。

海野 六郎、真田が使う忍集団『真田十勇士』の一人。

「ご用があれば、何なりと。」

「あ、待つてよー。」

そう言い残し、六郎は姿を消そうとする。それを慌てて谷中は呼び止めた。

怪訝そうに振り返る六郎に、谷中はこいつと笑いかけた。

「海野さんつていったよね。知つてると悪つけど、僕は谷中 若菜。よろしくお願ひします。」

ペロリと一礼しようとした彼女の頭を、やんわりと六郎は押さえた。

「今、貴女様は我が主……簡単に頭を下げてはなりません。」

淡々と六郎は言い、シユパツと消えてしまった。
残された彼女は、やれやれと苦笑を浮かべる。

「堅物なんだなあ、まつたく。」

真面田そくな六郎の顔を思い出し、谷中はそう呟いた。

さて、こちらは木下と畠幸の一人が向かい合つて座り、何かを話している。

「出陣は一応七日間後だ。いいか、まずおれ達は海津城に入る。そこから上杉の出方を見つづ、策を練る。」

「海津城、な。」

確認するように呟いて、木下は神妙な顔で畠幸に問い合わせた。

「皆、戦の準備してる。マッキー、他に俺達に出来ることがないか?」

畠幸は少しだけ苦笑すると、安心させるために彼女の頭を撫でながら言った。

「ねエよ。お前達は自分のやらなきゃならないことにしっかりと気回してろ。戦の途中でも、おれの力が必要になれば絶対に言つんだぜ。」

「いくつ、と木下は頷いた。表のことは畠幸に任せっぱなしで、少し申し訳なく思つての言葉だったが、どうやら必要なかつたらしい。

「わかった! じゃあ、オレはオレのやることをするつーてなわけでマッキー、相手よろしくつ。」

「またかよ。」

「さう」と木下は、勢いよく立ち上がった。

最近、木下はよく誰かを捕まえては鍛練に付き合わせている。畠幸が思つて、気が昂つて居ても立つてもいられないんだろう。病氣ではないが、これはまだ、戦の経験が浅い神憑きによく起この症状だ。

(これが起つて二回目、まだまだ戦いに馴染んでいないことだなア。にしても、随分と氣性の荒い雛だ。)

何度も昌幸も彼等三人の相手をしたが、日に日に成長している
ようだ。

(「戦……意外と早くケリがつくかもしだねエなア。」)

そう内心で笑い、昌幸は早く早くと急かす木下の後に続いた。

そして山中はとこりと。

「う……ーー」されば、中々手強いですね……」

愛馬白蓮に乗り、躊躇ヶ崎館から少し離れた草原で宙に「浮いて」いた。

新しい技、『鳶舞』の練習である。

耳元でひゅうひゅうと風が鳴り、山中は懸命にバランスをとる。

「戦までに、これをマスターしておかないと……」

空を飛べるといつことは、何かと便利だ。

偵察や上空からの攻撃なんかにも使えるし、是非とも早く覚えたい。

よろよろと危なつかしい飛行を続ける山中の額に、じわっと汗
が浮かぶ。

「山中殿——」

そんなとき、下から彼女を呼ぶ声がして、山中は足元に目を向けた。

ふわふわしたアマ色の髪の美青年は、昌信だ。

「高坂さん……？」

ゆづくりと下降しながら、山中は彼がどうしてここにいるのかと首を傾げた。

差し出された手をとり、ふらつてなく着地すると、昌信はにこりと微笑んだ。

「鍛練ですよね。居場所、忍に聞きました。私も同じ風の神憑きですでの、何かお手伝い出来るかと思つたのですが……」

それは初耳だ。ならば、練習するにもつてここに相手である。

「ありがとうございます。どうせふらつてしまつて、速く飛べないんですねよ。」

苦笑いを浮かべながら、山中は汗を手拭いで拭った。

「少し見ただけですが、どうやら力の放出が遠慮気味ですね。もう少し多めに放出しても大丈夫だと思いますよ。」

昌信のアドバイスに、山中は成程と頷いた。

「わかりました。じゃあ、少しだけ。」

再び、山中の周りにはヒュウヒュウと風が渦を巻く。

呼吸を整えて、心を落ち着けて、山中は軽く地を蹴つた。

「あ……凄い、高坂さんの言った通りですね。」

さつきよりかなり安定した飛行をする山中を見上げ、昌信は眩しげに目を細めた。

S i d e 越後

「おーい梅、避けんと死ぬでー。」

「…………？」

間延びした北の忠告に、怪訝そうな顔で振り返った梅本は、自分めがけてフツ飛んでくるタイヤ程の大きさの氷塊を、絶叫しながら地国天で叩き潰した。

槌部分を半分ほど地面にめり込ませたまま、梅本は鬼の形相で怒鳴つた。

「いやー、すまんすまん。ちょっと氷系の技の練習しどつたら、つい暴発してもうたわ。にしてもマンガみたいな展開やな。」

「…………も「ハヤダ、こんなヤジ…………」

ズーンと影を背負つて、梅本はその場にしゃがみこんだ。

泣いてないよ、これは田から汗が出てるんだよ。

北はそんな彼の様子などお構いなしに、しげしげと地國天が受けた大穴を眺めている。

「何ですか、今の音は！？」

地響きと轟音に驚いたのか、目を丸くして定満が登場した。

「あ、」むななつれむー。ちよひとした事故や事故。

手をヒラヒラ振りながら、北は定満に向かつてあははと笑つてみせた。

「大丈夫ですか、梅本殿。お怪我は？」
「すんません、大丈夫です。」

心配そうに定満は彼に駆け寄り、梅本は溜め息を吐きつつ立ち上がった。

「鍛練に精を出すのはよろしいですが、戦に行く前に怪我をしてしまっては本末転倒ですよ。」

「わかってるんですけど、何と言つか……何もしないでいると、落ち着かなくて。」

どうやらこちらの三人にも、あの症状はしつかり起きているよ

うだ。

梅本は沸々と沸き上がつてくる奇妙な感覚に、ぶるりと身体を震わせた。

「神憑き特有の症状なあ……難儀なもんやで、じつとしどいたら、気持ち悪いて昼寝も出来んわ。」

『まーっとするのが好きな北は、顔をしかめて心底迷惑そつだ。

「わすがにそれだけはどうもできませんね。やつこえは、小川殿はどうひりに?』

困ったような表情を作った定満は、いつも三人一緒にいる彼等が一人足りないことに気付いた。

「ああ、あいつは症状が酷いみたいで……個人差つてあるんですね、今ちょっと城下の人には貸し出し中なんですよ。」

ふふんと笑った梅本の言葉に、ワケがわからず定満の頭上には疑問符が散乱している。

「貸し出し中……?』

やよとんとした顔の定満を横目に、北は今頃忙しそうにしているだろう小川の姿を想像して、口許を緩ませた。

で、話中の人とは「

「もうちょい火力上げてくれ！」

「はい。」

鍛冶屋で刃物作りの手伝いをしていた。

炎の神憑きは症状が重く出ることが多く、小川も例外ではなかった。

じつとしていると、畳や襖を焦がしてしまいそうな程に熱気が溢れ出し、かといって鍛練をしても抑えが効かずに相手を吹っ飛ばしてしまう。

ド派手に炎を吹き上げても大丈夫などこうといえば、鍛冶屋が絶好の場所だ。

「おーい、こっちも頼むよ！」

「わかりました。」

黙々と炎を操り、小川は灼熱の仕事場を汗も流さず悠然と行き来する。

能力のせいか熱さをあまり感じないので、一人涼しい顔だ。

一つ息を吐き、小川は黒々とした鉄に炎を吹き付けた。

たちまちそれは赤く輝き、振り下ろされる槌の音が響き、火花が飛び散った。

「よし、今日はここまでだ。お疲れさん。」

「お疲れ様でした。」

しばらくすると、バイト時間が過ぎ、小川は鍛冶屋の親方に一

礼した。

懐にまじっかりとお給料が入っている。
親方と別れ、預けていた馬を受け取る。

「……こら赤兔、舐めるな。」

甘える愛馬の鼻面を軽く叩き、馬に跨がり城への道を駆ける。
ある程度鍛冶屋で力を使つたので、今のところ熱気が溢れ出することはない。

風を頬に受けながら、小川は残すは僅かとなつた戦のことを思つた。

（力のせいか、戦うことに妙な高揚感があるな。）

この様子だと、本番は色々とトんでもしまいそうだ。

（炎の神憑きは苦労するとカネゴンに言われたな……まったくその通りだ。）

小川は緩やかに走る赤兔の鬚を撫でて、深々と溜め息を吐いた。

が迫った。

兵糧の準備だの、兵士の鍛練だの、情報の探り合いだの一際賑やかしかつた両軍も、前日となれば準備も整い、静かになつた。

しかしその静けさも穏やかなものではなく、ピリピリと張り詰めた、実に居心地の悪いものだ。

当然と言えば当然だが、慣れぬパンペー共にはちと堪えた。

「あー、何か心臓の辺りの圧迫感がヤベエぞ……」

ぐたりと座り込んだ木下は、げんなりした顔で左胸の辺りを掴んで呻いた。

「僕もだよ……何か緊張しちゃうし、夜も寝れないし……」

谷中も同じく、がっくり頃垂れて情けない声を出す。

「でもさ、俺達つて……」

「うん、まだマシだよね。」

二人は顔を見合せ、ちらりと隣を見る。

そこには、顔色が真っ白になつていてる山中がいた。

「ミナちゃん、大丈夫か？ 何か新雪みたいな顔色してるや。」

気遣わしげに木下は山中を覗き込む。

「大丈夫です……と言いたいところですけど……あんまり大丈夫じゃないです……」

か細ご声で山中は言ご、両肩と一の腕を「じじ」と擦つた。

「武者震いつてヤツ?」

「そんな勇ましいものでもないですよ……」

「ぶつちやけ怖いよな。」

三人の表情は、眉を寄せた情けないものになつてゐる。

ま、無理もない。桶狭間での戦いは正式な手順を踏んだものではなかつたし、精神的に切羽詰まつた状態だったので何とか戦えた。しかし今は違つ。

「思えば無茶で無謀で無理な作戦立てたよね……僕達超バカかも。」

「『言えてるー。』」

それを言つてしまつていゝのか、君達。

そういひしつてゐる間に、光陰矢の『』とし、時間はすぐに過ぎていく。

三人は夕食を食べた後、自室に籠り必死に精神統一をしていた。そんなとき、懐に入れていた携帯がぶるぶると震え肩が跳ねる。見れば、越後チームからのメールだ。

『明日の出陣、ちょっと早くなるみたいだ。』

「……とすれば、啄木鳥の戦法が考へ出されるのは、出陣してからすぐではなさそうですね。』

梅本からのメールを読み、山中はそう言った。

「そーなのかー？」

ひょこっと右側から顔を覗かせた木下に、山中は頷く。

「この世界だとどうなるかはわかりませんが、確か数日間睨み合いがあつたような……」

「まあ、いきなりドンパチってことないよ。ってか、上杉が啄木鳥の戦法に気付いた理由って、炊き出しの煙を見たからだよね。といふことは、作戦は夜に始まるってこと?」

やうやく左側から谷中が顔を出し、やつぱり。

「だったら、夜道はオレの出番だなッ！能力のせいいか、やたらと夜目が効くようになったし。」

得意気に木下は胸を張つてみせた。

「とりあえず、戦が始まつても時間はありますね。追々調整していくましょ。」

山中の言葉に一人は頷くのだった。

甲斐の虎と越後の龍、内に伏せ隠した想いを宿したまま、両者は牙を剥ぐ。

そこに割り込むのは、異なる世界からやつて来た六人の異分子。

彼等の練つた作戦は、前代未聞の大仕掛け。

破天荒で向こう見ず、一体全体どう落とし前をつけるのやら…

…。

次回はいよいよ第四回川中島の戦いの幕開けだ。

三十六の嘶「決戦まであと少し—彼等の過」し方は。」（後書き）

次回から一・川中島入るおー

どいつも皆様、夜です。お久しうひゞぎわこます。

ちよつといいのところ立て込んでまして、更新がすつゞく遅れました。

いやー、なんだかんだでようやく決戦ですわ・・・・・・・いこまでもぐるのにどんだけかかつたんだ自分。

次も頑張りますよー、お楽しみにです。

三十七の嘶「開戦！参戦！激戦へのプレリュード」

（side上杉）

その日が、遂にやつてきた。

愛馬に揺られながら、戦装束をその身に纏つた三人は、緊張した面持ちで腹に力を込める。

「あれが妻女山だ。」

隣を進む兼続が、静かに目前に見える山を指差した。

春日山城を出陣してから丸一日間、ようやく最初のポイントに到着する。

今からあそこに布陣するのだ。

「……大丈夫ですか？」

あまりにも強張った顔に、定満が心配そうに後ろから声をかけてきた。

「大丈夫、とは豪語出来ないですな。」

梅本は苦笑いを浮かべるが、それすらもぎこちない。

上杉が動き出したことは、甲斐にメールを送信済みだ。

今頃、少し遅れて（といつても日単位の話だが）武田も出発しているだろう。

馬を降り、手綱を引きながら布陣する場所へと山道を歩いていく。

「あ、もつ布陣してゐやん。」

北が陣の様子を見て、目を瞬かせた。

そこには既に兵士や将達が集まり、『やせじやせ』騒がしい。

「……兵糧とかの積み荷があるからな。」

小川はやう言ひ、辺りを見回した。どの兵士の顔も、引き絞られた弓のよう張り詰めていた。

「皆の者、殿の御成であるぞ！――！」

兼続がピシリとした声で叫べば、皆一斉に整列し、道を空けた。まるで海を真つ一つに割つた、モーセのようだ。

謙信は悠然とした足取りでその道を行き、一番前に立つ。

「我が戦友諸君！幾度にも渡る武田との戦も、四度田を迎える！此度の戦、六武衆と名高い神憑きの内、三人が加わってくれることになった！」

いきなり謙信に紹介され、三人は慌てた。

え、何か皆ひつち見てるし。

三人はどうまきしながら、田を泳がせる。

「おい王子、お前何か言え！」

「はあ！？ふざけんなよ何で俺が……」

「――いつ時に役にたたんで、いつ役に立つねんアホンダラ。」

梅本と北に背中を小突き回され、小川は物凄く嫌そうに向と言

おつか考えを巡らせた。

「……あー、微力ながら、お力添えしたいと……思います。」

変な汗がだらりと出てくるのを感じながら、小川は至つて普通のことを言い、次はお前だと梅本を肘でつついた。

「げつ！？俺もか？」

梅本は顔を歪めるが、沢山のオーディエンスの視線にがっかりと肩を落とした。どうやら三人とも、きつちりと喋らされるらしい。「えーと……どこまで役にたてるかわかりませんが、今までの飯と宿の分はきちんと働きます！」

何とも微妙な言葉である。梅本は自分でそう思しながら、北に視線を送った。

彼女はいつも通りの無表情のまま、淡々と口を開く。

「お互い、死なへんよ！」氣合を入れて行こか。」

どうもしつくり来ない三人の一言に、やれやれと溜め息をつく上杉軍。

本当に大丈夫なのかこれ、と言いたくなるようなチームTHE・越後とは対極的に……。

（ Side 武田）

「みーなーぎーるあああ……」

「キバツて行くぜーーー！」

「一万一心ですッーーー！」

チームトニー・甲斐は、ハイターにてンショングが高かつた。

現在、武田は茶臼口を目標して進行中だ。その道中、三人はずっとこんな調子。

「……のう、何である者達、あんなに元気なんじやろ？」

信玄は三人の豹変振りに、顔を引き攣らせていた。

「あつと、闘志がみなぎつておるのでしょーーー！某も負けてはおられませぬな。」

「ヒヒヒヒヒヒ」と陽気に笑つて虎昌が言つた。

「そんな訳ねーだろ。おい、海野。お前何盛つた？」

呆れ顔で昌幸は後ろを走る忍、海野 六郎に尋ねる。

「……少し、気分を高揚させる薬を。」

「少しづねーよな、あの様子だと。」

何か言いたそうな昌幸のジト目こ、六郎はふいっと顔を背けた。

「まあ、確かに戦が近付くにつれて、塞ぎ込みがちになつておひましたからな。」

勘助がまじまじと、キーキー喚く三人を眺める。
うん、何か目がイッちゃつてなくもない。

「例の症状が薬と相成つて、精神がぶつ飛んでおられるようですね。」

それってヤバくないのか。むしろそれって、頭にマのつく薬じゃないのか。

虎泰の冷静な観察に、ナレーションも忘れてつっこみたくなる。皆様、薬物はダメ、ゼッタイですよ。

とりあえずこの話は一端置いておいて、話を進めよう。

現在、武田軍は最初予定していた海津城ではなく、そこから西に見た茶臼山に向かっている。

先に海津城に向かっていた高坂 弾正こと、高坂 昌信から妻女山に上杉軍が布陣したという連絡が入ったのだ。

急遽武田軍は上杉軍の退路を絶ち、尚且つ妻女山を見渡せる標高を持つ茶臼山に布陣することを決定した。

「茶臼山に到着するまで後少し。それまでに、彼等の元気がなくならなければよいのだが。」

信方は心配そうに三人を見て、ぼそりと呟いたのであった。

目的地である茶臼山に到着するまで、四日かかった。

そこに布陣を完了させ、両軍は暫しの睨みあいに入る。

「……武田も無事に布陣完了、か。オープニングはこんなもんだな。

」

パチンと携帯を閉じ、小川は一つ息を吐いた。

つい先程、谷中から武田軍の様子を知らせるメールを見た。
睨み合いに入つて、十数時間。未だ両軍の動きはない。

「小川殿、ここにおられましたか。」

携帯をスッとしまったところで、小川の背に声がかけられた。

「……宇佐見さん、何かありましたか？」

彼は振り向くと、自分を呼びにきたのであり[ひ][足]満に言つた。

「軍議が始まっていますよ。本陣へ行きましょう。」

そういえば、と小川は思い出したよつた頃を、急いで本陣に向かつた。

そこに到着すると、もういつもの顔触れが揃つており、申し訳なさそうに頭を下げつつ、小川は梅本の隣に座つた。

「揃つたな。」

謙信は一同の顔を見回し、荒削りに作られた卓上の上に地図を広げた。

「さて、皆の者……まずは一言言おつ。信玄に先手を打たれたようだ。」

楽しげに笑いながら、謙信はまるで危機感のない口調で言った。

「先手、と申されますと?..」

「こちらも全く焦っていない顔で、兼続が口を開く。

「何、大したことではない。信玄の奴が、我が本陣を見下ろせる茶臼山に布陣したのだ。勿論、我等の退路を絶つためだろうな。ふふ、最初は海津城だと思っていたのだが……速いものだ。」

すいません、特に大変さを感じられないのですが。

三人は思わずそう言いつらになるのを、「ククリと睡」と一緒に呑み込んだ。

「ならば、どう致しますか?..」

「定満は、もう謙信が何と答えるかわかつていいようだ。

「何、まだ動かんさ。信玄は必ずや先に動く。我等はそれを待とつ。」

「やつはつと思つておつました。」「

謙信の答を聞き、やつぱつと定満は苦笑する。

「……なあ、あたしりこじにいても意味ないんとひやうんか?」

「奇遇一、俺もそつ思つてた。」

「以下同文。」

ひそひそと梅本に耳打ちしてきた北元、ついでにと梅本と小川は頷いた。

（side 武田）

「どうだ、動きは?」

「依然、ありませぬ。」

「じきりも軍議の真つ最中だった。」

「フム……。」

忍の報告に、信玄は腕を組んで溜め息を吐く。

「まだ動かぬか……くくく、これではまるで逆よ。謙信め、動かざる」と山の如しきときたか。」

「一ツと笑つ信玄曰、虎泰がやれやれと言わんがばかりに言つた。」

「お館様、ニヤニヤ笑つてゐる場合ですか？今上杉が動かないのは、もしかしたら越後からの援軍を待つてゐるからかもしませんよ。」

「その通りですぞ。上杉がその気になれば、我が軍を上回る程の大軍、容易く動かせましょ。」

「」

続いて信方も、険しい面持ちで言つ。

双方の意見に、信玄はわかつてゐる、と言ひ返す。

「ならば仕方ない。」これはあ奴の望み通り、動くとしよう。皆の衆、海津城へ向かうぞ。」

ぼーっと先程までのやり取りを聞いていた三人は、え、今からかと目を丸くした。

辺りは真つ暗、夜である。

「夜ならば、直ぐ様移動出来よ。飛んでくる矢に怯える必要もない。三ツ者達に周囲の監視をさせよ！」

「御意に！」

忽ち忙しく動き出す彼等の間を通り抜け、信玄は三人の元にやつてきた。

「木下殿、勘助と二人、夜道は任せたぞ。」

「おうッ！任されたぞッ！」

軽く信玄に肩を叩かれると、木下は目を輝かせて勢い良く返事をした。

その日は満月でもなく、三日月だった。月明かりはアテになりそうにないが、敵には見つかりにくい。

「よろしいか、木下殿。」

「いりでもいいぜ、勘助のおつかやん！」

軍の先頭に勘助と木下が並び、互いに視線を交わし合つ。

「二人とも頼んだぞ。」

「お任せ下さい、お館様ッ！――！」

ハモつた言葉と掛け声の後、一騎を先駆けに武田軍は海津城を団指した。

↓ side上杉

「ふうん……武田は海津城に移動したんか。」

夜も更けかけた頃、珍しく田が醒めていた北が、山中からメールを見ていた。

「……何やつてんだ、メールか？」

仮眠をとつていた梅本がごそりと身動きして尋ねた。

「ああ？ 起きとつたんかお前。」

「満足に寝れるかよ。で、何て言ひてんだ。」

北が男一人に目をやると、一人共目を開けていた。
北はズイツと携帯を差し出してやる。

「……海津城に行つたか。」

「よく夜道を行けるな。」

「まあ、チロやヤマカンもいるしな。大丈夫や。」

もう少し寝るか、と余話を止めると、三人は掛け布を引っ張り上げて目を閉じた。

早朝、慌ただしい声が聞こえてきた。

「申し上げますー。武田軍、茶臼山より海津城に移動しておりますー。」

軒猿の報告に、ざわざわと周囲がざわついた。

「殿の仰る通り、先に動いたようですね。」

兼続はそう言い、朝焼けの光を眺めた。

「それで?あたし等はどうすんの?」

欠伸を噛み殺して北が問うと、小川が横から言った。

「……まだ動かないつもりだろ?」

「左様。まだ我等は動かぬ。」

正解、とばかりに謙信は微笑み、ゆつたりと椅子に腰を下ろした。

「海津城は、あの山本 勘助が築城したもの。守りが固い城だ……
迂闊に攻めではこちらが疲弊してしまつ。」

つまりはまだここにいるわけか、と三人は退屈そうに視線を交わした。

「……なら、朝飯を食わないか。腹が減つた。」

「ああ、そうしよう。炊事隊、準備をしてくれ。」

小川の提案に謙信が頷き、指示を飛ばす。

「……なあ、マンボウ。一個だけつっこんでいいか?」「なんや。」

炊事隊とやらをチラッと見て、梅本が言つ。

北の表情は、何とも言えない半笑い。

「何で炊事隊……割烹着着てるんだ?」

「そりやお前、炊事隊やからやん。」

むさ苦しい男の割烹着姿に、梅本はげんなりと頃垂れた。

可愛い和服美人の割烹着は嬉しいが、何が悲しくて野郎の割烹、着姿なんか見なくちゃいけないんだ。

つていうか、炊事=割烹着つて標準装備なの?

「寧ろあたしらの士氣がダダ下がりやと思つたやけどな。」

「……止めとけ、もう諦める。」

三人は溜め息をついて、敵地の方角を遠い目で眺めるのだった。

（ side 武田）

「こちらは一晩の内に海津城へ移動した武田軍。
只今作戦会議の真っ最中だ。」

「お館様、この策は如何にござりましようか？」

特に言つることもないの、黙つたまま軍議の成り行きを見守つ
ていた三人の前で、勘助が口を開いた。

「まず、隊を二つに分けます。一つは本隊、もう一つは上杉が本
陣を背後から攻撃する別動隊、という具合に。」

啄木鳥の戦法を説明する勘助に、虎昌が加わった。

「成程！わかりましたぞ、勘助殿！その別動隊が妻女山の上杉軍を
追い落とし、我が本隊と挟み撃ちにするのですな！」

ほん、と手を叩いて、虎昌はきらきらした目で言った。

「それは妙案。お館様、これで参りましょう。」

畠信も賛成らしく、黙つて考へ込む信玄の方を見る。

「……ふむ、確かに。それでは、別動隊は……」

隊の振り分けを開始する信玄に、ちょっと待つたと谷中が声をかけた。

「お館様、僕もそつちに入れてよ。」

すく立ち上がり、谷中はじっと信玄を見据えた。

「どうしたのだ、いきなり……二人一緒にいたほうがよいのではな
いか?」

突然の申し出に、信玄は目を瞬かせた。

「何言つてんのか、僕達の参戦の理由は、武田を守る為つていうのもあるんだよ。一人くらい入れておいたほうが安心じゃない。」

保険だよ保険、と谷中は笑つて言う。

「そいつアありがたい。噂の六武衆が一人いてくれるたア、随分と
心強いじゃねエか。」

思案の視線が交わされる中、畠幸の楽しげな声が響いた。

「お館様、谷中殿は雷の神憑きでいらっしゃる。獲物を追い落とすには、効果的な手かど。」

「ヤツと田を組め、昌幸は含みのある笑顔を見せつけた。

「それでは、私とチロさんは本隊で迎え撃ちましょうか。」

「そーだな！よーし、気合に入ってきたあああ！！！」

山中と木下の二人は顔を見合わせ、どうだと言つようじに信玄を見つめた。

「しかし、上杉本陣にはお主達の仲間がいるのではないのか？」

ところが、信方が待ったをかけた。

「一人を別動隊に加えてしまえば、谷中殿は上杉方のお仲間と刃を交えることになってしまいますぞ。三対一では、いくら何でも……」

だが昌幸が口を挟む。

「奇襲をかければ上杉軍と言えど、少なからず混乱するだろうよ。そこから一気に移動が始まるんだ……形勢的にはこちらが有利、このままで大丈夫だと思いますがねエ。」

双方の言葉を聞き、信玄は腕を組む。その判断は。

「よからう、谷中殿は別動隊へ。他の二人は儂の隊へ来てくれ。」

「やつた！ありがとね、お館様っ！」

ガツツポーズをきめて喜ぶ谷中を見て、信玄は険しい顔で続けた。

「しかし、無理は許さんぞ。危ないと思うたら直ぐ様退くのだ、い

いな。」

「勿論！任しといて。」

安心させるように、谷中はグッと親指を立ててみせた。
かくして、山本 勘助立案、勘助『啄木鳥の戦法』がここに決
定し、やつとこさ戦らしくなってきた。

別動隊は、高坂 昌信、飯富 虎昌、真田 昌幸、それと谷中
の率いる隊、本隊は川中島の八幡原で上杉を待ち伏せることにな
た。

「お館様、決行はいつにするんだ？」

木下の問いに、信玄は答えた。

「今夜だ。皆、早速準備にかかり！」

三十七の巻「開戦—参戦—激戦へのハントルーナー」

(後書き)

あ～・・・・・・長かった、やつと戦だよ戦一

びひむ、おはこんにけせんわ夜さんです。

よく見てみたら別動隊つて「畠」のつべヤシしかいねーじゃなーの、
今返づいたよ。

よつやくここまだたゞつ着ました、でも進むるに難しくなる
だよねー。

それから四十話かー、長いなあー。でもこの話で武田と上杉両方
攻略（？）するから仕方ないか。

早く書を上げてしまいたいぜ・・・・・。

三十八の話「げつじだうん・えねみーず! 巻き込まれたいヤツだけかかるここ

（side上杉）

あれから少しも動くことなく、上杉軍はほんと妻女山で時間潰していた。

しかし、三人だけはそういうわけにはいかなかつた。

「……どうだ、降りそうか?」

近くの川辺にて、小川は辺りを警戒しながら北に訪ねた。

「雲の出は充分や。後はあたしの力次第やな……」

唸るようこいつ北は、片手を空に、もう片方を川に向けて、何やら必死に念じてゐる。妙なポーズだが、笑つてはいけない。今彼女が必死で行つてゐるのは、「雨喚び」という技である。簡単な話、これは雨乞いだ。

「ここで俺と殿下が粘らなくちゃならないんだ、絶対少しひらげは降らせりよ。」

そんな梅本の言葉に、北は忌々しげに舌打ちした。

「よつまつわ、しんどいんやでこれ。」

この技は、いつもや携帯に載つていた自分達のデータから見つけた技だ。

雨を喚ぶ技なんて、あんまり使つことはないだろうと思つてい

たが、案外早くその時はやつてきた。

うんうん呻く北の額や首筋に、幾つも汗の筋が出来ている。

次第に、彼女の頭上から雲の色が黒みを増していく。雨雲に変化していっているのだろうか。

「うー、もう無理やー」これ以上やつたら、あたしが使い物にならんくなるわー！」

力尽きたのか、ベタッと北はその場に座り込み、大きく息を吐き出して汗を拭つた。

「ほれ、水。」

竹箇を手渡し、梅本は空を仰ぎ見た。

雲の黒さは出てきたので、後は雨が降るのを祈るばかりといつたところか。

「……雨が降れば、妻女山の戦いで時間が短縮される。運次第だな。」

涼しい顔で言つ小川を、ジットリと北は睨んだ。

「あいつだけ倍は働かしたる。」

そう呟く声を梅本だけは聞きとったが、あえて聞こえないフリをしてやり過ごした。余計なことは言わない方が得なのだ、何事にも。

とりあえずやることをやって、本陣に何食わぬ顔で戻ると、どういつワケか空気がピリッと張り詰めている。

何事かと急いで近寄れば、彼等の姿を見つけた兼続が声をかけて

きた。

「何処をほつつき歩いていた。軍を移動させるぞ、早急に準備しろ。

「はい？」

思わず間抜けな返事で返せば、定満が更に説明を加えた。

「海津城から通常より多く、炊き出しの煙が上がっていましてね、どうやら武田に動きがあるようなのです。」

ああ、始まつたなど三人は田配せをした。

「……わかりました。すぐに馬の用意をします。」

小川はそう言い、北と二人で直ちに愛馬の元へと走った。

「やつと来よつたな。」

「……ああ。」

声を低め、二人はそう言った。

川中島の戦いの日、『啄木鳥の戦法』がついに始まるのだ。
馬に乗り、小走りに本陣に向かうと、兵卒から白い布を渡される。

「……これは？」

布を受け取り、小川は首を傾げる。結構分厚い布だ。

「馬の蹄にお巻き下さい。物音を立てられませんので。」

成程、と合点が行つた。消音効果か。

二人は素早く布を巻き付けた。

「それでは守衛部隊。後を頼んだ。皆の者、武運を祈る。」

支度をしながら聞かされた作戦は、守衛部隊をここに残し、本隊は山を下る予定だ。

「恐らく信玄は、明朝までに動いてくるだろう。私の考えが正しければ今夜、ここに夜襲がかかる筈だ。だが信玄にとつてここは地形的に不利な場所……攻撃は見せかけよ。決戦はどこか別の場所で行うつもりだろう。我が軍の動きを読み、待ち伏せをしている筈だ。」

謙信の考えを聞きながら、小川は口を開いた。

「およそ先に戦地におりて敵を待つものは佚し、後れて戦地にありて戦いに赴く者は労す。故に善く戦う者は人を致して人に致されず、よく敵人をして自ら至らしむる者はこれを利すればなり、だな。」

これは孫子兵法の一説である。簡単に言うと、相手より先に戦地に布陣して、敵が来るのを待っているものは楽だが、後れて到着し、戦に赴くものは苦労するだろう。

戦争巧者は主導権を握つて相手を思いのままに動かし、自分は相手に惑わされないようにする。相手自ら行動にまで至るようにするには、利益を見せて誘つのである……ということだ。

「そんじゃ、梅。生き残れよ。」

「ひみせーよ。ハナからそのつもりだ馬鹿野郎。」

軽口の挨拶を交わして、梅本は遠ざかっていく本隊を見送った。

「……コンティーコーは効かないんだよな。」

強張った顔で、ポツリと梅本は呟いた。

「 Side 武田 」

同 時 刻 、 武 田 軍 も 本 隊 と 別 動 隊 に 別 れ て 支 度 を し て い た 。

「 海 野 さ ん 、 出 陣 す る と き に 飲 ま せ て く れ た 薬 つ て ま だ 持 っ て る ？ 」

改めて武器の確認を行つていった六郎は、顔を上げて声をかけてきた谷中に目をやつた。

「 …… 持 つ て は 、 い ま す が 。 」

淡々と答へ、彼は腰に着けていた袋から薄紙に包まれた薬を取り出した。

「 そ れ 、 ま た も ら え な い か な ？」

申し訳なさむつに谷中は言つと、僅かに六郎は顔をしかめた。

「 あ ま り 多 用 す る の は 励 み ま せ む 。 後 が お 辛 く な り ま す 。 」

そんな彼の表情を、谷中は苦い笑みを浮かべて見ていた。そして、押し殺した声で呻くように呟く。

「わかつてゐるよ。けど、今回だけお願ひ。僕の役目、マッキーから聞いてるでしょ？何かで気分を上げとかないと、まともに動けそうにないんだ。」

顔の前で両手を合わせ、谷中はお願いと頭を下げた。

彼女の役目は、六郎も知つてはいる。

だが例の薬は、少量なら問題ないが多量服用すると肉体への負担が大きいのだ。長時間効果を持続させるには、それなりの量が必要である。

しばらく六郎は考え込んでいたが、仕方ないと言わんがばかりに薬の包みを彼女に渡した。

「……あの方々の分も、余分に渡しておきます。貴女様がお決めになつたことだ、私に逆らう権利はないまませぬ。」

ですが、後々覚悟してください、と六郎は付け加えた。薬を数個手渡され、谷中は軽く溜め息を吐いた。

「じめんね。今はじうでもしないと、本当にヤバいんだよ。」

「私も微力ながら、お側でお力添え致します。貴女様お一人ではありますまぬ、それをお忘れなきよついに。」

常に無表情でいる六郎が、励ますように微笑して谷中の肩を叩いた。

「……うん、ありがとうございます。」

谷中は六郎を見上げ、ポツリと言った。

「さあ、早く持ち場へ参りましょ。」

彼に連れられ、谷中は皆のところに戻る。

「殿下、大丈夫か？」

氣遣わしげに木下は谷中に近寄り、顔を覗き込んだ。

「うん。 いけるよ、心配しないで。 はい、これ一人の薬。」

緊張しているときは、少しでも平氣そうなフリをすれば平氣になるといつ。

谷中は薬を渡しながらへらりと笑つてみせるが、やはりぎこちない。

「本当に大丈夫ですか？」

山中も傍に寄り、心配そうな顔で彼女を見つめた。

「大丈夫つたら大丈夫！ ほら、いつまでも僕の回りにいないで、本隊に行く！」

谷中はわざと大声を出して、緊張と不安を振り切るよつにピシリと言った。

「これ以上心配をかけては、一人にもよくないし、作戦にも支障を出す。」

「谷中様には私がついております。どうかご安心を。」

六郎にも言われ、二人はやっと谷中から離れた。

「……谷中殿、そして全ての者。策の成功と、無事を祈る。全員、死ぬのは許さぬ。必ず儂の元に戻つてこい！」

信玄の激励を受け、応、と勇ましい声があがる。
啄木鳥の戦法、これより始動する。

（side 谷中）

本隊と別れ、谷中は勢いよく自分の頬を叩いた。

「……シ！ よし、行こうか黄鱗！」

愛馬、黄鱗の首をぽんと叩き、手綱を握り締める。

「谷中の嬢ちゃん、動けるかい？」

別動隊の元に向かうと、赤と朱の戦装束を纏つた昌幸が声をかけてくる。

「行けるよ。僕、先頭だったよね。」

隊の先頭へと谷中が馬を進めると。

「進軍開始！」

号令一発、全軍が一斉に進み始めた。

相手に気取られないよう、こちらも蹄に布を巻いている。

谷中は腰に下げている様に手を突っ込み、中で携帯を広げた。

（ショートカット設定にしておいてよかつた。）

内心でほつと一息つき、谷中は指定された番号を押して梅本に電話をかける。これは進軍を梅本に知らせる合図だ。

ワン切りして、谷中は携帯を閉じた。

「薬、そろそろ飲んでおこうかな。」

揺れる馬の背で、谷中は器用に六郎から貰った薬を口に含み、水筒の水で流し込んだ。

（side 梅本）

ブルブルと携帯の震えを感じとつてからしばらへ経す、梅本は人知れず深い息を吐いた。

「どうなされた、梅本殿。」

隣で座っていた兵士が、彼の様子を見て声をかけてきた。

「いえ、緊張してるみたいで……何か落ち着かなくて。」

肩の辺りを擦り、梅本は真っ暗な夜空を見上げた。

まだ、雨が降る様子はない。

待機を始めてかれこれ数時間、耳を澄ませてみるが物音は聞こえない。

やれやれと肩を竦めたそのとき、再び懐の携帯が震え、すぐに止まった。

梅本の顔色が変わり、彼は弾かれたよつに立ち上がって呟いた。

「……来たんだ。」

様子が激変した梅本を見て、他の兵士にも緊張が走った。
そして、聞こえてくるのは蹄鉄の音。

漆黒の夜を引き裂いて、金色の稻妻が唸りをあげ突き刺さる。
谷中の一撃だろうか。

瞬く間に怒声が飛び交う中、梅本は静かに地國天を喚び出した。

／ side 谷中～

「これせどりこいつ」とだー!?

どう見ても、目の前の敵が最初の狙いであつた本隊に見えない。

虎昌や昌信は思わずそう叫んでいた。

「これは一杯食わされたなア！上杉の野郎、読んでいやがつたか。」

畠幸は苛々と舌打ちした。

上杉の本隊はここにはいない、いるとすればそれは……。

引き返すか、という畠幸の考えを、彼の真横から放たれた雷の矢が消し飛ばした。

「引き返してどうなんのさ！？余計なことを考えてる暇があんなら、一刻も早く相手をぶちのめせばいいんだよ……！」

完全にスイッチが入っているのか、谷中の日は爛々と光ついて、さながら虎のようだ。

「しゃたらこや
駿雷矢！」

電王が日映く輝き、弦から雷が湧き出る。

それは矢の形に姿を変えると、バンッという音を残して発射された。

空を斬つて飛んだ金色の矢は、五本に分かれて敵地に襲いかかつた。

ドン、ドンと矢は爆発し、それを見届けずに新たな矢がつがえられた。

「おーおー、血氣盛んなこいつて。」

畠幸は苦笑すると、片手を横に軽く振る。すると、彼の神器、光糸・白蜘蛛から細い光の糸が流れ出た。

「そんじゅあ、ちょいちょいと片付けちまうか。」

畠幸の手首や指尖の動き一つで、硬質化した糸が相手を切り裂いていく様は、まるで舞を舞うかのようだ。

「あの雷の神憑きを先に仕止めろ！……」

最も厄介な人物がやつとわかつたのか、数人の兵士達が谷中に武器を向けるが。

「……退がられよ。」

煙のように現れた六郎の投げる手裏剣に、ことごとく阻まれる。そうしている間にも、谷中は脅威的なスピードで敵を撃破していく。

「払う露も頂けませんなあ……」

虎昌は目を丸くして、雷の爆発に巻き添えを食わないように距離をとりながら呟いた。

（side 梅本）

「うーっわ～……殿下がいつちやつてるよ……」

地国天をぶんまわし、梅本は顔を引き攣らせて呟いた。

何やらミヨーな薬でもキメたのか、目付きが怪しい。

「ま、俺もドン引きしてる場合じゃないな……よつとー。」

大地を叩きつけないと、メキメキと舌が突出し、鮫の背鰭のような形になつた。

「お二ユーの技、威力はいかほどに……土地鮫ッ！」

地國天で背鰭岩をぶん殴れば、それはまさしく鮫が獲物に急接近するが如く、猛スピードで大地を疾駆した。

敵の神憑きが放つ攻撃も何のその、岩の背鰭は次々に何十人もドカドカと撥ね飛ばしていく。

が、それで終わりではない。

動きが止まり、迂闊に近付けば……。

「あ、それバーンってなるんで気を付けるよ~。」

ケラケラと笑う梅本の背後で、バーンと爆ぜる音。

岩の背鰭が爆発し、幾つもの礫^{つぶて}がひゅんひゅんと弾丸のように辺りに飛び散つた。

「にしても、マンボウのヤツ……本当に雨降るんだろうな。こっちとあっち、だいぶ人数に差があるぞ。」

上杉の守衛隊は、武田の別動隊に比べれば結構人数が少ない。加えてあの状態の谷中が暴れていっているのだ、そう長くは保たないだろう。

それに、こちらの守衛隊にはそこまで強力な力を持つた武将はない。武田と戦うべく、皆本隊に移動している。

「真田さんまともかく、飯富と高坂をここで止めしないといけないんだよな。へやつ、戻さえ降れば……」

何十本も飛んでくる矢や炎や風の塊を、防ぎ、避け、梅本はどうするかを考えた。

完全に倒せなくともいい。動きを絶え何とか出来ればいいのだ。

「おーこー技その一なら、何とかなるか?」

おーこー技を使ひこな、どうしても雨が必要だ。

頼む、雨よ降つてくれ。

梅本は祈るようて、汗だくの空を見つめるのであった。

三十八の話「げつじだうん・えねみーず! 巻き込まれたいヤツだけかかるここ

やあ、皆様。

やつと続きが出来たよ、うんしんどかった!

戦闘シーンは本当に難しいね～・・・・・・・・ああ、これから更に

うマスクペードが遅くなると思つよ。

だつてほんとんど戦闘だもの。

・・・・・で、お気に入り登録が二つのまにか150件越えてビックリしました。

ありがとうございます、次の目標は200ですね。

感想・一言・質問、いつでも受け付けしております。

どんな短い御言葉でも、尻尾を高速に振って喜びますんで、是非どうぞです。

ではでは、これにて御免ッ!!

三十九の嘶 「げつとだうん・えねみーずー巻き込まれたいヤツだけかかつて

（side 武田）

夜明けが近いのだろうか。

八幡ヶ原を覆う、白い霧。

その中を、武田軍はゆっくりと進んで行く。

「殿下、大丈夫かな？」

眉根を寄せ、木下は情けない顔で山中に囁いた。

「……大丈夫ですよ。海野さんもいますし、殿下さん、今まで頑張つて鍛練してましたし……新しい技だって、習得しましたし。」

山中は、自分に言い聞かせるように答えた。

心配は消えない。何せ、これはとんでもない無茶だから。

八幡ヶ原と海津城を隔てる千曲川を越えている途中、辺りに漂う霧を見たとき、もうじき上杉と鉢合わせる頃合いだと気づいた。

谷中の心配ばかりしている場合ではないのだが、それは出来ない話。

「今之内に、「レ飲んでおくか？」

「……やりますか。」

二人は額き合い、谷中から渡された薬を飲む。

今現在、別動隊と別れて一時間経過していた。

武田軍のとる陣形は、守りの固い「魚鱗の陣」。読んで字の如く、魚の鱗のような陣形だ。

「お館様、妙ですね。」

薬を飲み込み一息ついたとき、虎泰が重苦しく口を開いた。
それに、信玄が答える。

「……お主もそう思つか、虎泰よ。」

ぴくりと木下と山中の一人は、張り詰めた空気に反応する。
「もうそろそろ、別動隊が上杉軍を追い落としている頃合い。です
が、妻女山の方向からは……」

虎泰は鋭く細めた目で、妻女山の方向を見つめた。

先程から、ズシン、ズシンと爆音が聞こえてくる。霧のせいでは
光は見えないが……おそらく、谷中の暴れる音だろう。

「……様子を探りに行かせた忍も、いつこひに戻りませぬ。」

信方が淡々と言つた。

「…………まさか。」

信玄がぽつりと呟いたとき、霧の向こうに何かが見えた。

一気に空気が緊迫し、息を呑む音があちこちからする。

目前を覆い尽くすのは、白く翻る旗物。その旗の中央に堂々と、
黒く太く『毘』の一字。

「う、上杉、軍……。」

呻くよつに、背後から聞こえた言葉。

白い旗の一軍の前で、それらを背負つかのよう立つのは、美しい白馬に騎乗した軍神の姿。彼の手がすいと武田軍を指示し、その口が叫ぶ。

「全軍……進撃開始……」

上杉は円型の陣形を組み、くるりぐるっと回つながら迫っていく。これこそ、かの有名な『車掛かりの陣』である。

「鶴翼の陣に変形せよ! 上杉軍を畳み込む!」

驚いたのも一瞬、直ぐ様信玄は指示を出すが、兵卒はさすがに混乱しているのか、陣に乱れが生じる。苛々と舌打ちした信玄の目に、猛然と駆ける一騎が映る。木下と山中だ。

「お主等! 下がれ、下がらんか! ……!」

慌てて一人を呼び止めるが、そんなの止まるわけがない。

「行つぐや!! ナちゃあああああん! ……!」
「はこつ! ……!」

そんな雄叫びを響かせて、特攻していく。

すると、疾走する馬がいきなり急ブレーキをかけたではないか。勿論一人は、慣性の法則よろしく敵地に向かつてフツ飛んでいくのだが。

「鳶舞!」

空中で山中が木下を見事キャッチ、そのまま勢いを殺さず滑空していく。

地面が近づくと、ザザッと木下は両足を広げて着地、そこから両者戦闘体制に入った。

「影爪！バー・ジヨン・アッ・プその2！」

木下の命令に反応した影が、彼女の手から肩までを覆い隠す。華奢な腕は一変、黒く太い丸太のような腕に型を変えた。

「さあ、夜はこれからだつ！お楽しみはこれからだつ！ハリー！ハリー！ハリー！」

二ターッと不気味に笑い、木下は化物じみた腕をワキワキと動かした。

「行きます、舞風！」

山中は懐に手を突っ込み、小袋を掘み出した。それを空へとぶん投げ、舞風を大きく動かす。

轟と巻き起こされた風は燃え
る赤い粉末がぱあっと舞い散つた。

なんたあれは、と上を見上げた兵士や武将達の顔に、再び山中の巻き起こした粉末混じりの風が叩き付けられる。すると……。

「うぐーー？」

「めッ、目が！目がああああああああああ！」

何処かで聞いた悲鳴に、ふふつと吹き出しながら、木下は山中

「グッズサインを出してみせる。

「//ナナちゃん、ナイスクントロール！」

上手く風を操り、敵兵だけに『殿下特製 スターダスト唐辛子（その他香辛料多数含む）』を炸裂させると、次は木下の番だ。

「そーーーらああーーー！」

ぐん、と異形の腕を横に薙ぐ。

するとその腕は飴のように伸び、痛そうな打撃音を何発も響かせながら敵兵を跳ね飛ばしていく。

「！」のッ……小娘があーーー！」

幸いにも唐辛子の難を逃れた者が、木下に刃を向けるが。

「私のこと、忘れないで下さいね。」

横から山中に顔面を強かに殴られ、呆氣なく倒する。
置けば鈍器の舞風、いやはや実に硬い造りだ。

「よくそんな応用編を思い付きましたね。神器、いうないじゃないですか。」

「影爪バージョンアップモードその2、モデル『A RMS』の『ジャバウォック』だ！」

「何となく漫画に登場するものだとわかりました。」

わかる人にはわかるが、わからない人にはさっぱりな木下の返答に、山中は半分呆れ気味で言った。

「木下殿！山中殿！」

「一人が蹴散らした敵兵の中を、円を丸くした虎泰が急いで駆けてくる。

途中、仕留め損ねた雑魚を切り払いながら。

「何をしているんですか！？下がれと命じられた筈ですが！…」

鮮やかな水色の長柄の先に、半月型の刃をとつつけた槍を肩に担ぎ、虎泰は声を荒げた。

「いいですかー。甘利さんは軍の混乱を鎮て下さいー。」の混乱具合では、鶴翼の陣すり組めませんよー。」

振り向いて負けじと叫んだ山中の背後に、デカい岩の塊が飛んできた。

「山中殿ッ！」

虎泰の神器、『深蒼・流水用』が、彼女の顔すれすれを通過して岩を突き碎いた。

「ツ……！？あ、ありがとうございます。」

飛び散る礫を舞風で防ぎ、山中は虎泰に礼を言った。

「今、板垣殿と勘助殿、そしてお館様が軍をまとめ直しているところです。私もここで、敵を仕留めることになりました。」

そう虎泰は言い、にんまりと笑った。そしていきなり、朗々とした声で叫ぶ。

「武田四天王が一人、甘利 虎泰はここぞ！命のいらぬ者から順にかかるつくるがよい！」

同時に、どこからともなく水流が溢れ出し、彼の背後に広がった。その形は、まるで鷺のようだ。

堂々とした名乗りに応え、上杉側からも似たよつな名乗りがする。

「柿崎景家と剛胄・斧玄山がお相手つかまつる！」

のしのしと効果音が付きそうな雰囲気で、雑兵を搔き分けて登場したのは、筋肉隆々の体躯をした武将だった。

くしゃくしゃした真っ黒な髪と虎髭、がつしりした太い腕には、煤けたような包帯がぐるぐると巻かれていた。

その手に握られているの神器だろう、持ち主に似合いの大戦斧。バトル・アックスと同じ形をしていた。

「ほう、豪腕の柿崎か。いつぞやは、我が本陣まで見事な攻め込みつぶりを披露してくれたな。」

「抜かせ蒼鷺。己がこの俺を阻んだのであるうが。毎度毎度邪魔立てしよつて、いい加減己の顔は見飽いたわ！」

両者の間にバチバチと散る火花。

あれ、君達知り合いなの？木下はそう言いたいのを堪え、山中に田をやると。

「柿崎さん……張飛にお顔がそっくりです……！これで武器が蛇鉾

なら、パーフェクトです！」

「どーでもいいんだぞそれッ！……」

グッと両手を握り締め、キラキラした目で語る山中に、彼女は全力でつっこんだ。

「だ、だってチロさん…よく見てくださいよ…ほんとに、ほんとに張飛にそっくり！」

「張飛だか提灯だかどーでもいひつーの…今戦中だから…戦争の真つ最中だから！」

「これも薬の効果だらつか？ 山中のテンションが妙に高い。何やらギヤーギヤー言い合つ一人に、隙ができたかと兵士達が一斉に攻撃を仕掛けるが。

「「「うるせこつ…」」」

舞風と木下の影が、ドガツとまとめてフツ飛ばす。

「……おこ、あれは山のところの六武衆の片割れ共か？」

「……。

「……まあ、気にするな。」

微妙な顔で二人の言い合いを眺め、両者は改めて戦いの構えをとつた。

「あつぶな、氣イ抜いとつたら掠つたし今。」

車掛かりの陣の中、北は愛馬の翡翠に乗り、武田の兵士を叩きのめしていた。

今現在、彼女は兵团一つと共に、鶴翼の陣の端を攻撃している途中だった。

「雨は……もうじょいで降るっぽいんやけどなあ……ってか降つてくれんとヤバイし……水流弾っ！」

深い霧の水分を凝縮し撃ち出す。

ちらつと向こうを見れば、小川が豪快に火柱をあげていた。

「おい！あんまり最初から飛ばすなよ！後々もたんで！」

「いらん世話だ！それくらいわかつてん！」

北が声を張り上げて叫べば、噛み付くように小川は言い返した。その口には、いつものどよんとした雰囲気はなく、獲物を狙う肉食獣のような猛々しさがあった。

炎の神憑きは、他の神憑きに比べて苦労するとはこのことか、と北は納得した。確かに普段よりも、かなり鬪争心が上がっているようだ。

「……退け！炎狐！」

陽炎丸を一振り、すると湧き上がった炎が三つ、彗星のように尾を引いてしゅうしゅうと飛ぶ。それは狐が駆け抜けるように見えて、敵地に鮮やかな朱線を残した。

しかし、敵兵を焼き倒す炎の塊を切り伏せた者がいた。

武田四天王の一人、板垣 信方だ。

「……板垣さん。」

くすんだ黄金色と深紅の戦装束、両手で構えるのは上下に刃のついた槍。

「小川殿、お退きあれ。そなた達には、辰市を救うて頂いた恩がある。某は刃を向けたくはない。」

落ち着いた声で、信方は諭すように言った。が、おいそれと退けるわけがない。

彼等武士に比べれば軟弱な人間だが、それなりに腹を据えてここまで来た。

「……こちらにも事情があります。俺達は簡単にこの戦を放棄出来ないし、する気もありません。」

きっぱりと言いつけて、小川は陽炎丸を信方に向けた。

あわや一触即発かと思いきや、彼はにんまりと笑って陽炎丸を下ろしたではないか。

「それに、板垣さんの相手は俺じゃありません。」

そう言つ小川の声を聞きながら、信方は右へと視線を向けた。

「……宇佐美 定満殿、とお見受けする。」

いつからそこ居たのか、青蓑毛の馬に跨がった定満がひつそりと立っていた。

「貴殿は板垣 信方殿ですね。」

定満は軽やかに馬を降りると、軽く会釈した。

「小川殿。ここは私が引き受けましょ。」

「……お願いします。それと……感謝します。」

小川は深々と定満に頭を下げる。

定満は軽く微笑み、先に行くよう手で促した。

「赤兎一つ！」

愛馬の名を呼べば、忠実な彼は直ぐ様姿を現した。

定満の隣を通り過ぎる瞬間、戦の喧騒に混じって彼が何事か囁く。その言葉に、小川は目を見開いた。馬上で振り返ると、定満の片手が上がり。

「グ、グッドラック？」

「ほお、うさみーも結構ノれる人やつたんやな。」

恐らく、自分達が何かの拍子に行っていたのを見ていたのだろう。

「ほり、行くで。殿下と梅が来るまで、できるだけギョーサン倒しこな……そういや、さつき何て言われたん？」

馬を寄せ、北は小川に尋ねた。

彼は少し黙り込み、微妙な表情を作つて口を開いた。

「殿をよろしく頼む、と言われた。」

「……どういう意味でのよろしくやうつなあ。」

ちよつと、いやかなり色々考えてしまう一言だが、二人は首を振つて雑念を払つた。

side妻女山

「あつはははははーほらほら、早く逃げないと黒焦げになつちゃうよーー！」

バリバリッと谷中の身体の周りを稻妻が這いすり回る。響く高笑いと轟きは、容赦なく敵兵の鼓膜を乱打していた。

「おおおおおらああああーーー！」

梅本の咆哮に応え、大地は隆起し、次々に飛ぶ岩が刃を阻み、矢を碎く。

唯今妻女山、大混戦中である。

うつかり踏み込めば、瞬きする間に昏倒する破目になること間

違ひなし。

「へつも、雨はまだかよ！」

忌々しげに空を見上げ、梅本は呻いた。

そもそも太陽が昇る頃だらうか。

後も少しお、もう少しで雨が降りそつた氣がするの。

「地壁ッ！」

数十枚もの土の壁が足元からせりあがり、敵兵達は空高く放り投げられる。

梅本はそりやつて、少しずつ武田軍を削り取つていった。

三十九の嘶 「げつとだうん・えねみーずー巻き込まれたいヤツだけかかってー

どうもー、最近温かくなったり寒くなったりで大変ですね。
お待たせしました、三十九話うや出来ました。
まだまだ終わりそうにない川中島編、多分次くらいには龍虎激突出
来ればいいなあと思っております。
・・・・・よ、予定だよ予定。
では、また次回つ！

四十の嘶『げつとだうん・えねみーすー・巻き込まれたいヤツだけかかってこー』

混戦の中、昌信が声を張り上げた。

「弓兵！構えよ！」

昌信の命に従い、一斉に弓兵が弓を引く。

一人一人なら大したことはないが、何十人、何百人といれば話は別だ。

「放てッ！――！」

数百本は下らない数の矢が、映画でしか見たことのない光景のように、自分に向かつて飛んでくる。

「ヤ、ヤベッ！？」

喰らえば針ネズミ、梅本は慌てて壁を立ち上げようとして、ふと思いつき直す。

自分でではなく、周りの兵達も守らなくては。
おニユ一技の出番か、と舌打ちした。

「あーあ、あんまり早い段階で見せたくないんだけどな……うまくいけよ、龍隆岩ッ！――！」

地国天が地面を殴り付ければ、字の如く大地が龍の背のように、長く隆起した。

思つたより広範囲に技が効いて、出した本人である梅本自信も目を丸くしたくらいだ。

降り注ぐ矢の嵐から仲間を守る中、ふと梅本の頭の天辺にぽつりと感じた滴……これはもしや。

最初はぱつり、ぱつりと頼りなかつた滴も、たちまちザアザアと勢いを増していく。

「雨だ……！マンボウの野郎、遅いんだよやつとかよ！」

水滴を荒々しく拭い、愛馬の地角を呼ぶ。

直ぐ様駆け付けた地角に跨がると、ハイヨーシルバーと言わんがばかりに駆け始めた。

先程起こした岩の隆起に地国天の槌部分を押し付けて、沿うよう

すると、彼が進むにつれ、土煙と地響きを立てて隆起が横に伸びていく。

「地角、もつと早く頼む！」

愛馬の首を叩いてスピードアップを促せば、地角は一聲嘶いて加速する。

血の薫る戦場を突つ切つて、彼が進むとそれの後を追つよつて、大地の隆起が両軍を囲む。

「っしゃあー箱庭だコノヤローー殿下つ、一発デカイの頼んだぞッ
！！！」

なるべくその場所から距離をとるため、駆けながら梅本は叫んだ。

「まつまつてましたアーーーーお前の罪を数えろオオオオーーーー！」

谷中はフツ飛んだ答えを返すと、電王を天に掲げ弓を引く。天候は雨、頭上には真っ黒な雲、この状況で狙うのはたつたつ。

「元気ハツラツう！？駿・雷・矢！……！」

雷の弦から眩い稲妻が溢れ、馬鹿デカい矢を作り出す。限界まで引かれた弦が手を離れ、金色の矢が発射された。当然、物凄い轟音と衝撃を伴つて。

震える空気、天に突き刺さった一撃は雲を照らし、梅本の囲つた巨大な箱庭の戦場に幾つもの稲妻となつて落ちてくる。雨で濡れた大地に落ちた雷、そこにいればどうなるのか……予想はつくだろう。

爆音と激しい光を、梅本は馬上で耳を塞ぎ田を瞑つて何とかやり過ごした。

愛馬の耳も、必死で身を乗り出し肘を使って塞いでやる。やがて音も光も治まり、やつと感覚が戻つてくる。

耳鳴りと目のチカチカを堪え、カムバックしてきた視界に映るのは、見事に全滅した両軍だった。岩の周りには先程の一撃で壊れている。

「おいおい……死んでんじゃないのかよ、これ。」

「いや、見事に氣絶してやがるぜ。あれだけ派手に落としたつてのに、器用なモンだ。」

青ざめた顔で呟いた彼の背後から、うつそりと答える声。

「あ……あんたが、真田さんか？」

恐る恐る振り返ると、呆れたような顔をした昌幸がいた。

「よオ、お前が六武衆の片割れの一人だな。知つてゐるだらうが、一応礼儀として名乗つておくれ。おれは真田 昌幸だ。」

「話は聞いてます。俺は梅本 佑樹、今は武田に寝返つたことになつてます。」

お互ひ軽く一礼して、改めて戦場を見回す。

「……あンの雷娘、大丈夫かア？おい、六郎！」

「…………」

昌幸の背後に、スツと六郎が現れた。

「おこ、谷中嬢はどうに置いて来たんだよ？」

「…………」

無言で六郎は一点を指差す。そこには……。

「ちよ、何で殿下までピヨつてんだよー？」

バツタバタ倒れている有象無象の中に混じつて、頭にピヨピヨ^{ピヨ}ひよこを回らせている谷中がいた。

「六郎……？」

溜め息を吐いた昌幸に、六郎は淡々と言つ。

「ただ単に、自分の力にあてられて田を回していくだけじゃござります。」

「で、お前は巻き添え喰つ前にとんずらした、と。」

慌てて谷中を引き起^ひす梅本を眺め、畠幸は疲れたように肩を落とした。

「ああ、もう一起きるのアホ！」

谷中をずるずる引きずりながら、梅本はギャンギャン喚いた。早くハ幡ヶ原に向かわないと、皆が心配だ。

「忍さん、コイツ運んでもらっていいですか？」

六郎はこくりと頷き、谷中を受け取った。

傍には黄麟が控え、六郎が乗るのを待つて居る。

彼が谷中を抱えて黄麟に乗るのを確認すると、畠幸は一度首をゴキリ、と鳴らした。

「そーで、行くかい……真田忍隊、いるな？」

低く呟くと、何処からともなく答える声。

「然るべぐ。」

梅本はギョシッと畠幸の方を見た。

「真田さん……忍隊、いたんですか？」

「おうよ。いくら何でも、おれと六郎とお前だけじゃあ、突っ込むにやあちょいと無理がある……あいつらにま、この時まで潜伏するのが大変だつただろうがな。ま、これくらい出来ねエと、真田の忍は務まらねエよ。」

からからと笑つて、畠幸はあつけらかんと言い放つた。

「……忍隊の皆さん、潜伏お疲れ様です。あと、これからもう一頑張りお願いします。」

溜め息をつき、梅本はそう言つて頭を下げた。

「畠幸様、梅本様……早く参りましょう。」

六郎の言葉に一人は頷き、愛馬に跨がつた。

（ side 八幡ヶ原、武田軍）

彼は、山本 勘助は、胸を抉るような後悔を必死で押し殺して
いた。

まさか、自分の策が見え透いていたいたとは。

「何と言つ失態か……」のままではお館様に申し開き出来ぬ………

なんとか軍の乱れを律し、ようやくまともに迎え撃てるようになつたが、攻め込まれ厄介なことになつてゐることに変わりはない。

「某も撃つて出らなければ………」

勘助が握るのは、鞘も柄も鍔も漆黒の野太刀。

刀身だけは美しい白銀で、名は『不影・郷義弘』といつ。

神器と同じ漆黒の馬に跨がり、敵地をギリツと睨み付け、勘助は疾風のような勢いで駆け出した。

その後ろで、信玄が呼び止めるような声がしたが、敢えて振り返らず。

勘助が一人無謀にも突撃したころ、木下と山中は一人背中合わせで敵をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返していた。

「やつたぞミナちゃん！ 雨も降ったし、後は梅と殿下の到着を待つばかりだなっ！」

俊敏な動きで放たれる攻撃を避けつつ、影蝶を振るう。

ちなみに、今の彼女の様子は……。

「影の腕が一本肩から生えて、生身の腕で神器を使って……壮大な言い方になりますけど、どこの仏像なんですか。」

山中は苦笑を隠せない。

確かに一面四臂、ミョーに気持ち悪くも見えなくない。

「三面六臂なら、阿修羅像になれんだけなッ！」

バキッ、と嫌な音をたてて、黒い腕が敵兵を薙ぎ倒した。

そのとき、何かを思い出したのか谷中が慌てたような声をあげた。

「しまった！！忘れてました！！！」

「何だどうした何事だ！？」

それでも戦う手は止めず、一人は会話する。

「勘助さんの」と、忘れてました……」

「あーーー!?」

顔を見合わせ、何でこいつたいと叫ぶ。

「ミナちゃん、探そう。そうしねーと勘助、特攻して死んじまうー」「でも、どこにいるのかわかりませんよー!」

「ミナちゃんは飛べるから、空から探してくれー! オレは白龍つれて、[写楽と一緒に地上から探す!]」

幸い、武田軍の混乱は収まりつつあり、もう一人が暴れなくて
も何とかなりそうだ。

「わかりました! 見つかれば、連絡いれますね!」「おーーらーーミナちゃん!」

風を巻き起こして飛び上がった山中を見送り、木下は山中の愛馬を引き連れ、自分も馬に乗って走り出した。

（ side 八幡ヶ原、上杉軍）

「ちらは小川 & 北チーム。

板垣 信方と宇佐美 定満を引き合わせた一人は、降り頻る雨の中を駆けていた。

「……やつと降ったか。」

「やかましな。えりやうて言わんと、ちつたあ感謝しこや。」

互にジロジと睨みあこ、ジトジトと言葉を交わす。

「……で、俺達はここれからどうするんだ?」

「知るか。ただでさえ行き当たりばつたり作戦やる、テキトーにすりやええんぢやう?」

戦場でもこの緊張感のなさは、びっくりとか。
いや、もう既に緊張感のメーターが振り切ってしまったのだろうか。

二人とも、若干青ざめた顔色をしており、浅く早い呼吸を繰り返している。

メンタル的に、そろそろキシくなつてしまつてこむのだから。

「……おこ、あれ……」

「ああ?」

ふと、小川はある方向を見やり、見覚えのある姿を捉えて北を呼んだ。

「なんや、何かおつたか?」

「あれ……ヤマカンじゃないか?」

「あ、ホンマや……つて、ヤバイやんけあこつボロボロやん!」

北はゲッ、と顔を強張らせた。

漆黒の装束は破れ、背中や腕には矢が突き刺さり、血みどろだ。

同時に、彼の握り締める神器も、恐らく上杉軍のものであろう血を浴びて紅く染まつていた。

「……今、あたしら行つたる、‘ひつなむと細’へ。」

「確実にアレの鎧だな。」

即答した小川は、おもむろに掌を空に向けた。

「発火弾ツ！」

ボンッ、と爆音がして、紅の炎弾が空中に撃ち出された。小川の合図だらけ。

「……あつひにほ川ちゃんがいるんだ、多分探してん筈だ。」

小川はそう言しながら、手を下ろした。

そのまま、一人は勘助を見守る。

彼がやられそうになつたら、何とか助けに入れるよつよ。

～ side 八幡ヶ原、武田軍～

空を飛び、山中は必死に勘助を探した。

途中、自分を狙つて飛んでくる矢や火薙や火炎やらを、最小限の動きで避けながら。

「早く見つけないと……一早くしないと、ヤマカンさんが討死しちゃいます！」

だが、地上からみた戦場は何が何やらわからない状態だ。そんな中からたつた一人を見つけるのは、恐らく無理。しかし放つておけるわけがない。

諦めそうになる気持ちを叱咤して、山中が高度を下げたとき、

ボンッ、といつ爆音と紅い光が視界の隅に入る。

「……もしかして、王子さん？」

まさか、と山中はその方向に向かつと……。

「いた！」

血まみれで、今にも倒れそうになりながらも戦つ勘助がいた。慌てて携帯を取りだし、木下を呼ぶ。

『ミナちゃん…さつものつてもしかして！？』

ワンホールで電話に出た木下は、喧騒に負けじと声を張り上げている。

「はい！勘助さん見つけました！」

『オッケー！オレも近くにいるんだ、すぐ向かうぞっ！』

会話を切り、山中は急いで勘助の元に急降下する。

「退いて下さい、鎌鼬！」

舞風を振るい、勘助を取り囲む敵を一掃する。

「！」無事ですか！？

着地すると、彼女は急いで勘助の元に駆け寄った。

「山、中…殿…申し訳…ない…」

「申し訳なくないです！何勝手に死にかけてるんですかあなた馬鹿ですか！」

途切れ途切れの声で謝る勘助を、山中は叱り飛ばした。
彼に肩を貸していると、派手に敵兵をフツ飛ばしながら木下が到着する。

「生きてつか勘助！」

「半死にですけど生きてます。」

木下は安堵の表情を浮かべると、直ぐ様山中の愛馬の背に勘助を乗せる。

「すぐ本陣に連れて行こう。」

「はい。」

顔を見合わせて頷きあつていると

「応急措置、いるか？」

「……おこ、いいができるのか。」

「このところのこらの方を見ると、聞いていなかつた声がして、弾かれることも

「王子ー。」「マンボウさんー。」

そこには、上杉に身を置く小川と北が、悠然と立っていた。

四十の斬『ナットだうん・えねみーず』書き込まれたいヤツだけかかってこい

久しぶりの更新です。

やつと次に進める・・・・・長い、長すぎる道のりですだよ。

今回も戦場でどたばた、次回はもうどたばたさせたいなー。

四十一の嘶「龍虎激突！危険なものか、遠巻ぞ見て見ると面白い。」

小川と北の二人は、武田軍の心配をよそに、怪我もなく元気そうだった。

「しばりぐやな、一人とも。とつあえず止血ぐりこせんとあかんで。

」

ニッと北は笑うと、戦装束のケープの下から何かを取り出して投げる。

「ほれ、包帯。ミナちゃん、あたしの言つ通りに巻きや。

山中は包帯を受け取ると、急いで止血を始めた。

「医者の娘は伊達じやねえってか！たまには役に立つな、マンボウツ！」

木下と小川は、その場所を守るように立ち、止血の終わりを待つた。

「……よし、できた。」

「ありがとうございます、マンボウさん。」

応急措置を施した勘助をまた馬に乗せて、山中と木下は本陣へと向かつ。

「やうそろ鶴翼の陣も開いてる頃だな。俺達も一度本陣に戻る。」

車掛かりの陣は、敵が混乱している時こそ有効だが、周囲を取り囲まれば効力が下がる。

「上杉 謙信が単騎で武田に突っ込むのも時間の問題や。あたしらはその道をこじらえる。やつこいつしてて間に、梅と殿下がくるやう。」

「

北はそう言い、小川と共に走って行く。

「私達も行きましょう。」

「りょーかいつ！」

山中と木下も頷き合い、馬に跨がるのであった。

その頃、武田 信玄は自ら武器をとり、敵兵を蹴散らしていた。大将が共に戦うことで、自軍の士気も上がる。リスクは高いが、混乱した軍を鎮めて士気を高めるには、これが一番効果的なのだ。

「おのれ、あの生真面目軍師め！勝手に死ぬなとあれほど儂が

「言つたのこ、先走りよつて！」

その手が握るのは、一本の刃。

朱色と深緑の柄は、普通の刀の柄よりも長く、刀身は切っ先にいくに従い幅広になつていて。刀にあるべき反りは殆どなく、鉈に近い形をしていた。

名を『赤虎・来国長』といつ。

「誰ぞ勘助の姿を見た者はおらんか！」

配下の者に呼び掛けるも、答えはあります。ギリッと食いしばつた歯の隙間から洩れた唸り声は、さながら怒れる猛虎のようだつた。
すると、にわかに向こうの方が騒がしい。

「どうした！？」

声を張り上げて問えば、焦りを帶びた返答が返つてきた。

「勘助殿がお戻りに！ 酷い怪我です！」
「何だと！？」

ぐつと神器を握り締める手に力が入つた。
その瞬間、来国長から炎が湧き上がり、うねる鞭のように敵兵を焼き払つた。

「！」は頼んだ！

「「「お任せあれ！」」

信玄は踵を返し、愛馬・黒雲に跨がつた。

「ヤマカンの容態は？」

「ご安心下され、出血が激しゅうじゅりますが、恐らく大丈夫でしょう。木下様と山中様が、手遅れになる前に連れてきてくださいましたから。」

馬をかつ飛ばして、軍医の元に勘助を運んだ一人は、容態を説明しにきた彼に噛み付くように尋ねた。

「よかつた……さすがは武人、体力だけは人一倍ですね。」

ほつと胸を撫で下ろし、山中は安心して微笑んだ。これで、勘助が討ち取られる未来は回避されたのだ。

そうしていると、ざわざわと辺りが騒がしくなり、顔中を焦りの色で埋め尽くした信玄が勢いよく飛び込んできた。

「勘助ッ！勘助は無事か！？」

直ぐ様、粗末な寝台に横たわる勘助を認めて、彼が無事なのを確認して安心したように長い溜め息を吐いた。

「心配をせよつて……知らせを聞いたとき、心の臓が止まるかと思うたわ。」

「お館様……彼等に感謝して下さい。彼等が軍師殿を見つけなければ、確実に命を落としていたでしょう。」

軍医の話を聞き、信玄は一人に向き直った。そのまま、深々と頭を下げる。

「お主等には、部下を救われてばかりだのう……礼を言つ。」

「何言つてんだよつ、とーぜんだろ！」

「ヤマカンさんがいなくなれば、お館様の監視は誰がするんですか？」

申し訳なさげな信玄の礼をあつさつと笑い飛ばし、一人はあつけらかんと言い放つた。

「ほら、さつさと戻れよお館様。大将がいなきや、他も底力出ねえぞ！」

木下はそう言い、竹筒に入った水をぐいっと飲んだ。再び出撃するため、乾いた喉を存分に潤し、手の甲で口を拭う。

「チロさん、行けそうですか？」

山中も同様に水を煽り、空になつた竹筒を外して放り投げる。

「そつちこや。オレはもう行けるぞ！」

ぐつと拳を握る木下を見、山中は眠る勘助を振り返つた。

「ヤマカンさんのこと、よろしくお願ひしますね。
勿論にござります。お一方も、無事の御帰還を。」

丁寧に一礼する軍医を背後に、一人は馬の元へ走つて行つた。

（Side上杉）

勘助を運ぶために、一度戦線を離脱した武田チームと別れた上杉チームの一人。

今は上杉の本陣近くで、謙信が武田の本陣に単騎で乗り込みをかけるのを今か今かと待ちわびていた。

「あー……遅い！遅すぎるんとちやうん、乗り込み！」

苛々と舌打ちしながら、北は唸つた。

彼女の周囲には、六つのバスケットボール大の水球が浮かび、水鉄砲と呼ぶには威力の高すぎるものを撃ち出していた。

「……もう夜が明けたな。発破かけに行くか？」

小川も疲れたような顔で、炎の弾幕を発射している。
二人がよし行こうと動き出したとき、何やら騒音に混じって兼続の声が聞こえた。

「 様！ ち さい！」

そもそも、こんなどえらい音が溢れる中で特定の人物の声を聞き取れることじたいが異常なのだが、生憎慣れてしまっているので不思議に思わない。

そうこうしてると、もつとほつきりと声が聞こえてくる。

「謙信様！お待ち下さい！単身では危険です！」

「案ずるな兼続！道が開けているのだ、今行かずにいつ行けど！」

見れば、凄い勢いで疾走してくる白馬と、それを必死で追い掛ける焦茶の馬。

騎手は言わずもがな、謙信と兼続である。

やつと来たか、と二人は若干へばつた己の顔を引き締めた。

「おら王子！とつとと行くで！」

「つるわこ知つてゐる。」

馬を駆り、謙信の両サイドを並走する。

「よつ謙信様。びー行くん、付き合ひつわ。
「……俺も。」

埃と汗で汚れた顔を一々タリと笑みの形に作る一人を見て、謙信は苦笑した。

「行き先は武田の本陣だ……危ないぞ。それでも共に来るか？」

「行く。」

ソックローで返つてきた返事に、謙信は上等だ、と呟いた。

「ならば行こう。どうだ兼続、これで単身ではなくなったぞ！文句はあるまい！」

「おおありです！毎度毎度一騎打ちじよつとして、こいつの身にもなつてください！」

結局、兼続付きの計四騎で本陣に向かうことになつたのだった。

上杉の本陣から武田の本陣まで、距離はそれなりにあるのだが、馬を走らせれば大したことはない。

ここで初めて二人は、謙信の戦う姿を見た。

神器の名は『電華・姫鶴一文字』といい、鮮やかな青一色の細身の刀だ。

柄部分は水晶のように透明で、濃紺の房飾りが一本、頭金の辺りに付けられていた。

さすがRPGの世界、武器は凝つてるなど、今更ながら実感だ。そして予想通り、謙信は速かつた。何が？攻撃が。

「居合いかそれ。」

シユツ、と音が聞こえる度に、敵兵がスパツと切り払われていく。

「……まあアレだ、テンブレ？」

「……そーやな。」

「何の話だ？」「

きよとんとした顔で聞いてくる兼続に、何でもないとハモつて誤魔化した。

敵軍の大将が突っ走ってきたのを見て、武田軍がワアッと集まつてくるが、前後左右に死角無し、一太刀、一振りの内に崩されていく。

「……厄介な將は、いい具合に噛み合つてゐるな。本陣まで後も

小川の言葉を遮つて、謙信が鋭く叫んだ。

「散れッ！――！」

あまりの鬼気迫る叫びに、反射的に一人と兼続は言葉通り謙信から距離をとつた。

刹那、バカでかい炎の塊が謙信に真つ――つに断ち切られ、瞬時に「凍つた」。

「……え？」

思わず間抜けな声が口から漏れた。

ポカンと見ていると、謙信がにっと笑う。

パラパラと碎け散る氷の合間に縫つて、謙信は白い矢のように神器を振り上げて何かに突進した。

「……このシーンって、まさか……！？」

小川がハツと息を呑む。

そう、まさかのまさか、川中島の戦の中でも最も有名なシーンである。銅像にもあつたよね、これ。

振り下ろされる謙信の刃を、火花を散らして軍配で受け止める者。

虎の頭を模した胄には、毛先だけ深紅に染められた白い毛皮。鮮やかな赤い上衣や、黄金の装飾が付いた防具を纏う体躯は隆々と逞しく。

猛々しい笑みを浮かべた甲斐の虎が、咆哮した。

「久しい……一まこと久しいのう、謙信ッ！……」

対する越後の龍も、爛々と眼を光らせ、恐ろしいまでの気迫をみなぎらせて叫ぶ。

「！」の時を待ちわびていた！存分に、信玄ッ！……！

信玄は素早く攻撃を受け流し、軍配と「！」の神器とを入れ換えた。
龍虎激突の瞬間である。

「ヤベエ超みすちー肌なんですけどオレ！」

「鳥肌と言いたいんですね私もです。」

両雄が神器をぶち当てる度に、熱風や氷の破片が飛んでくるのを、木下はギヤー・ギヤー言いながら防いでいる。

隣の山中は、そんな彼女のテンションに呆れながらも、田の前の戦いを食い入るように見ていた。

既に、信玄の腕には氷の飛針が数本突き刺さり、謙信の肩には火傷が見える。

だが両者共に、その怪我が戦いの邪魔になつていい様子はない。

「……痛みも何も、頭から吹っ飛んでいいようですね。」

クライマーズ・ハイならぬファイターズ・ハイだろうか。

「つーかよオ、もうアイツらお互い大好きなんじゃね？」

木下は顔をしかめて、頭をぼりぼりと搔いた。

周囲は、派手に鎧を削りまくる大将一人に近付こうといしない。そりやそうだ、巻き込まれたらやつてられない。凍るのも燃えるのも、断然お断りだ。

「さて……いつ私達はあの中に入れそうですかね。」

今までのは序の口、こつからが本番、一番大事なところだ。

「とりあえずや、梅と殿下が来るまで待とうぜ。」

さすがに一人ずつで龍虎の相手をするほど、自分達はまだ威勢よくない。

「それもそうですね。カタつけるならつけるで、適度に戦つてもらつた後の方が、まだマシかもしませんし。」

山中はふり、と軽く息を吐き、傍観する体制に入つたのであった。

（side龍虎）

灼熱と氷結の中、刃と刃が混じり合い、凄まじい音をたてていた。

辺りは耳をつんざくような騒音に包まれているのに、一人の頭は冴えきっていた。

ああ、何て愉快いのだろう。謙信は静かに微笑んだ。
想い慕う愛しき御敵と、倒れ逝くその時まで戦う。

今この時、この瞬間だけは、彼は自分のものなのだ。

「こつぞやの塩の礼……まだ言つてなかつたな、謙信よ。」

猛る戦人の表情がふと緩み、信玄が柔らかな笑みを浮かべる。

「構わん。ここで貴殿と戦える、それが礼だ。」

鎧迫り合いを弾き返し、謙信は後ろに飛んで距離をとった。
ひゅうと風が、いや、冷気が渦を巻き、謙信の周囲を取り巻く空気の温度が急激に下がっていく。

そして、掲げた刀の切つ先の上に、きらきらと輝くものが舞っている。

それは、無数の氷の礫だった。

ダイヤモンド・ダストと呼ぶべきか、とにかくあれに触れたが最後、骨の髓まで凍り付く。

信玄は目を細め、来国長をしっかりと握り締めた。

「ふふ……そう来るか、謙信よ。今回はまた、随分激しいのう。」

信玄はそう咳き、身体にグッと力を込める。

謙信の時は逆に、ゆらりと彼の身に揺らぐのは、陽炎と朱色の焰。

噴き上がった炎は、徐々に勢いと熱を増していく。そして、両者の力が最高潮に達した瞬間。

龍と虎は、天まで届くような咆哮を上げ、氷と炎が牙を剥き、互いに激突した。

熱さと冷たさがじちゃ混ぜになる中、一人は息を荒くして、そこに立っていた。

しかし、信玄は上半身半分が凍り付き、謙信は衣服こそ燃えてはいないものの、その下は火傷しているようで、身動き一つする度に顔を歪めている。

ダメージはそれなりに、一人の体力を削ったようだ。

それでも尚、ややふらつく足で神器を掲げて打ち合おうとした時、横から文字通り「横槍」を入れるように、ガキン、と何かが入つてきた。

「……悪いな、二人共。」

「残念ながら、ここで相手変更や。」

赤銅色の刀身と、水色の棍が、信玄の来国長をがつちりと押さえている。

「これ以上は、見ていいられませんね。」

「ごめんな、オレ達邪魔するぞ。」

漆黒の棒が姫鶴一文字を受けとめ、銀の扇は謙信の腕に狙いを定めている。

六武衆、八幡ヶ原チーム……ついに龍虎と対する時來たり。

四十一の嘶「龍虎激突！危険なものは、遠巻きに見ると面白い。」

（後書き）

いつも、おはこんにちばんわ夜さんです。

あの、とりあえず元気です。

そして九月までですが、市役所で臨時職員として働くよっこになりました。

五月から仕事が始まりますが、これから更新が今までより遅くなる可能性があります。

嬉しい反面、ちょっとあーあ。って感じもありますね。

さて、お待たせしました四十一話でござります。

ついに主人公達が両雄の間に乱入しました・・・・・ははははは。殿下と梅は今どこで何をしているのか、この二人は多分次回登場します。

みんなが知ってるあの有名な文句とともに、冒幸も巻き込んで。それでは皆々様、四十一話でまたーとつー！

四十一の嘶「切り札もヒーローも、後から出でてくる。」

あーあ、やつちまつた。

龍虎の前に立ち塞がつた四人は、後に退けぬこの状況に舌打ちしたい気持ちだった。

目の前で燃えたり凍つたりした人間を見て、飛び出さないヤツがいるんだろうか、いやいない。

「……そなた等が、小川殿と北殿の仲間か。何のつもりだ?」

冷え冷えとした眼で、越後の龍は山中と木下を見据えた。

「別に疚しい考えはねーぞ。オレ達、自分のしたいことしてるだけだし。」

汗が首筋を伝うのを感じながら、木下は出来るだけ落ち着かせた声で言った。

「私と信玄を……戦わせないつもりか。」

尚続く謙信の問いかけに、今度は山中が答える。彼女も木下と同様、淡々とした口調だ。

「それも一理あります、八割は私達個人の願望ですね。」

謙信は訝しむような目付きで、無謀な一人を見詰めた。
そして、甲斐の虎と向かい合つて立つ二人の一人も。

「……行くぞ、武田信玄。」

「ナメとつたらエライ目見るで。氣イつけや？」

山中と木下を一轡して、小川と北は宣戦布告を信玄に言い放つ。

「……仕方ない。だが後悔するなよ。儂等は今、ちいとばかり加減が出来んぞ。」

荒々しく言う信玄に、四人はぐくりと固唾を飲み込んだ。

本来なら、膝が震えまくっているんだろうが……不思議なことに、恐怖心はあまり感じられなかつた。

そのかわりに、どくどくと全身の血が沸き立ち、何か熱いものが胸を突き破つてしまいそうだった。

戦経験の浅い神憑きに起こる症状、というものだろう。この症状に感謝して、四人は目の前のラスボスこと龍虎に、果敢にも挑みかかるのであつた。

（ＶＳ信玄）

「……炎狐ツ！」

陽炎丸の剣先が信玄に向けられ、そこから三発、紅蓮の彗星が尾を引いて飛ぶ。

「面白い、儂と炎を競うか！」

豪快に信玄は笑うと、来国長をぶん回し、襲いくる炎を叩き潰そうとしたが。

「競うんは炎だけじゃうで。飛氷柱！」

丘駒の片方で来国長を止めた北は、もう片方から信玄の腕を狙つて氷柱を撃ち出した。

そして、いきなり地面に膝をつき、上体を伏せる。

タツチの差で、伏せた彼女の背中の上を、小川の放った炎が通り抜けた。

「まづ、やりよるわ！」

信玄は楽しげに叫ぶと、片手に炎を宿らせた。

気合いを込めた声と共に、文字通り燃えるストレートが北の放つた氷柱にヒットし、氷柱は砕け、水となり地に落ちる。

そして来国長も同様に、刀身に纏う炎で、小川の炎を切り払おうとする。

だが、三発の炎は同時に信玄の身体に被弾する。

切り払えたのは一発だけ、しかも予想外に重たい攻撃に、信玄は目を見開いた。

「やつぱ氷はあかんな……水流弾！」

「つおつ！？」

被弾の勢いに、ぐらつと揺らいだ信玄の足元から、新たに北の攻撃を宣言する声がした。

下から吹き上がる水鉄砲が信玄の肘に当たり、神器を握る腕が

真上に上がった。

「せ のつ！」

神器は跳ね除けられ、隙ありとばかりに、北の凧鮫が彼の反対の腕に叩き込まれた。

来国長を持つ方の手ならば、凧鮫を防ぐこともできただろうが、残念ながら狙われたのは武器を持たぬ方の腕。加えて水と炎とでは、勝敗は明らかだ。

ゴツツ！と凧鮫の先端が、信玄の腕にヒットする。

北の扱うこの旋棍、先端には鮫の牙のような棘がついている。それに殴られれば、当然流血沙汰になるワケで。肘の下を強かに抉られ、血の飛沫が飛び散る。

「ツ……！中々よのう、六武衆！」

「そいつは恐悦至極でツ――！」

するりと北がそこから退くのを確認し、小川は勢いよく陽炎丸を振り下ろした。

金属の打ち合つ音と、炎が舞い踊る。

ギチギチと刃が噛み合ひ、睨み合つ小川と信玄。

「……つ――！」

小川の喰い縛つた歯の隙間から、細い吐息が漏れる。

体格は信玄の方が厳つく、純粹に腕力では小川の方が圧倒的に不利だ。

「おい、大丈夫か！？」

徐々に押される小川を見て、北が急いで加勢に加勢に加わらうとする。

「……大丈夫だ、問題ない。」

「いや、あるやろ大問題やろ。お前はアレか、ルシャダイか？」

彼女が盛大につっこむといつ、非常に珍しい光景だ。

「うるさい、んなわけないだろ……こっち来んな。」

ギラッと光る眼が、信玄を捕らえる。

途端、熱気が一人を包み込むように蠢いた。

胸の鼓動が、身体を苛む熱が、一際激しさを増す。

ゆらりと小川の周囲に昇るのは、陽炎だろつか。

彼の様子が変わったことに、信玄が気付いて眉を寄せた。これは、この雰囲気はもしかして。

「来るか……！？」

「火輪尾ツ！－！」

信玄が呟いたと同時に、小川の声が響く。

彼の背後に、紅蓮の炎が立ち昇る。

それは狐の尾のような見た目をしていて、円を描きながら信玄に襲いかかつた。

対する信玄も、それを相殺せんと吼える。

「瓊珞火！－！」

頭上から、炎が流星のように降り注いできた。

その名の通り、瓔珞のような炎の雨が、美しく尾を引いて二人の上に落ちていく。

「ひらあかんわ！！」

上も下も、真っ赤な火の海だ。

北は舌打ちして、小川の元に急いだ。

いくら彼が炎に強くても、あんなものをノーガードで喰らつては無傷で済むわけない。

「あつっ！ちよ、あたしまで燃えるやんけ！」

メイドイン・妖怪の戦装束は、素晴らしい防火性を示してくれたが、熱はそれなりに肌に伝わる。

幸いにも、雨上がりの地面には、水気がたっぷりと含まれている。

彼女は地面の消火をしながら走った。

炎の雨はまだ降り止まない。

その中で、必死に信玄と打ち合つ小川を見つけ、北は慌てて加勢に入る。

「まだまだじゃのう！それでは儂に勝てんぞ！」

「つるさーオッサン！……」

かか、と笑う信玄に一人は悪態をつくが、悔しいことにそろそろヤバかつた。

これはリアルに死ぬかもという考えが頭をよぎったとき、救いの手は唐突に大地から現れる。

＼＼＼謙信＼＼＼

さて、時を少しばかり巻き戻して、謙信との戦いはどうなるのだろうか。

「そんじゃ、頑張りましょうね。」

「はい、頑張りましょうね。」

パシリ、と二人は互いの手を打ち合わせ、励まし合つかのよう
に笑った。

その時、第三者の声が割り込んでくる。

「謙信様ツーーー！」

何だとその方向を見れば、見たことのない女武将が一人。

「手を出すな、兼続。」

ピシリと言つ謙信を見て、あの女武将が『愛の人』こと直江兼
続だとわかつた。

「しかしつ、一対二では……。」

兼続はキツと二人を睨み付けるが、謙信は彼女の加勢を許さなかつた。

「彼等は、私に戦いを挑んでいる。私はそれを受ける覚悟だ……それが『将位』たるもの務め。案するな兼続、私は負けぬ。」

きつぱりと言い切る様に、おおーっと内心感動する一人。

「……御意。ならば手出し致しませぬ。」

兼続はまだ何か言いたそうだったが、黙つて引き下がった。

「話は終わりましたか？」

山中がそう尋ねると、謙信はこくりと頷いた。

「なら、行くぞ。いーち、にーの……」

木下のカウントに双方、神器を構えて。

「さんつ！――！」

地面を蹴り、同時に駆け出す。

まずは第一発、謙信の周囲がキラキラと煌めいたかと思つと、次の瞬間、矢のような形をした氷が六本、唸りをあげて飛んできた。

「チロさん、私が！」

「おう！任せたぞっ！」

低空飛行で木下を追い抜き、山中が前に躍り出る。

轟、と空気が荒れ、開いた舞風に風が集まっていく。

「旋風！」

山中の声と共に、小さなつむじ風が氷の矢に牙を起て、硝子が割れるような音をたてて三本が砕け散った。

「残りは此方でやるつ！縛影！」

木下の足下から、太い影が蛇のように鎌首をもたげた。そして、飛んでくる氷の矢をそれぞれ見事に絡めとつたではないか。

次に彼女がやらかす行動を読んで、山中は急いで空高く舞い上がった。

「これつー返すぞー！」

木下がニッと笑い、氷を持った影が大きく振りかぶり　氷をぶん投げた。

謙信の頭上に振り降ろされるそれだが、剣の間合いに入つた瞬間、あつという間に細切れにされてしまう。

「げ、マジで……じわつー？」

その勢いを殺さぬまま、謙信の刃が木下を捕らえるが、何とか影蜈蚣で受け止めた。

「まさつとしてると、命が散るぞ。」「散つてたまるか！」

躊躇いのまつたくない斬撃を、木下はちょこまかと小回りの効くステップでかわしていく。

「くそ、はえーんだよバカヤロウつー影爪！」

このままじゃ埒があかない。

木下は影を纏つた片手を、タイミングを見計らって前に突き出した。

それに、謙信がハツと息を飲んだ。

ガキッという音が聞こえ、木下の口元が笑みを描く。影の鎧を装着した右手は、しつかりと姫鶴一文字の刀身を驚掴みにしていた。

「つーかまえた……！」

どんなに速いものも、掴まれてしまえば動きは止まる。

舌打ちして謙信は冷氣を集めようとするが、それを彼女が許す筈がない。

冷たい空気が凍る前に、影蝶蛹を握つたままの左手が、器用に謙信の手首を掴む。そして、そのまま全身に力を入れて。

「つせえええい！ーー！」

「なつー？」

気合い一声、謙信の身体が宙に浮いた。

否、木下に投げられたのだ。

六武衆の中で最も小柄な彼女が見せた、豪快な投げ技。

「ミナちゃん！」

「待つてました！」

パツと手を放した木下は、山中の名を呼ぶ。

空中で体勢を満足に調えられない謙信の目の前に、急降下してきた山中が迫り、その脇腹目掛けて舞風がぶち込まれた。

武田戦に比べて、なんというか力任せといつか……とにかくこちらも、それなりに重たい一発を入れることができた。

地面に叩きつけられた謙信は、ダブルの衝撃で激しく咳き込む。

「ぐ……つ、魔王、め……何をどう、仕込んだ……！？」

どう考えても、並みの女の腕力じゃない。

どうやら、自分はあの二人の力を見誤っていたようだ。

姫鶴一 文字を地に刺し、それを支えに立ち上がる。

「……だが、私に勝機がある。」

そう咳き、謙信は向かってくる一人を視界に入れた。

「鉄砲水！」

湿った地面から集まつた水が、唸りをあげて押し寄せる。当然かわされるのだが、それで終わりではなかつた。

「爆ぜろー！」
「え！？」

避けよつとした矢先、謙信の命令通り水流が爆発したではないか。

大量の水を頭から被つた二人は、視界を遮られ思わずたらを踏む。それがまずかつた。

「凍れ、氷牢！」

しまつた、と思ひ頃には、もう遅かつた。

浴びた水はたちまち凍り付き、文字通り氷の牢が一人の自由を奪う。

「ミナちゃん、これ鎌鼬で切れねーのかー!？」

「いめんなさい、手が……！」

首を捻つて木下が山中方を見ると、舞風を握る彼女の手首ががつちりと凍つている。

「ヤツベニぞこれー?」、割れる口ノヤロー!」

ジタバタと暴れる木下の鼻先に、白銀の刃が突き付けられる。

「勝負ありだな……私と信玄の戦いに乱入するとは、自惚れているのか?」

冷たい目で見下ろされ、呆れたような口調で謙信が言つ。

「…………んだと、『ラ。』

「…………今、何ど?」

ピキッ、と一人の額に筋が立つ。

「違うのか。ならばもう少し身の程を知るといい。甘い気持ちで戦場に立つな。」

「イツ黙つて聞いてりや人の氣も知らずに……一と一人の苛々がギュインと急上昇する。

そして、ぷちんと線がキレる音がした。

「「黙らつしゃい！あんたにだけは言われたくない（です）（ぞ）この大嘘つきの臆病者！－！」」

一瞬だけ目配せして、二人同時に腹の底から見事にハモつた怒鳴り声を響かせたその瞬間、抜群のタイミングで、天から救いの轟音と閃光が降り注いだ。

二つの助けは、小川と北に降る火の雨を、大地から盛り上がりた岩の塊が防ぎ、天からの稻妻は、山中と木下の動きを阻む氷の牢を打ち碎いた。

「これは……！？」
「一体何だ！？」

いきなりの事態に、龍虎の口から驚きの言葉が洩れる。すると、もくもくとした霧だか土煙だかの向こうから、意気揚

々とした声が聞こえてきた。

「一体何だと聞かれたら！」

「答えてやらんこともない！」

ビュウ、と風が吹き、土煙を払う。

「絆の破壊を防ぐため！」

「絆の平和を守るため！」

ビシッと格好よくポーズをキメて、遅れて登場する例の一人。

「愛と真実がバカを貫く！」

「グレートストレンジな救世主！」

「佑樹！」

「若菜！」

「乱世を駆ける六武衆がこの一人には…」
「縦横無尽！フリーダムな明日が待ってるぜー。」

“じーん！”と何故か背後に爆発を背負い、良いのか悪いのか贊否両論ありそうな登場をした、我等が妻女山チームこと谷中と梅本。

そしてワンテンポ遅れて、引き攣った顔の真田 昌幸と無表情の海野 六郎がラストを締める。

「な、なあーんてな……」

「そおーなんす。」

シン、と辺りが静まり返る。

痛い、その静寂がものす”ーく痛い。

「　「　「　ア……アホかああああああああああああああ！」！」

四人の盛大かつ壮大なつっこみが、戦場にながーく長く、木靈

した。

四十ーの嘆「切り札もヒーローも、後から出でへや。」（後書き）

何か勢いにのつて続おひらしました。

口ケット団が登場するときの台詞つて口詞だよね、異論は認めない。

次回、「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけないときもある。」お楽しみにー。

四十三の斬「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。前編だったりす

四人のピンチに、颯爽登場した妻女山チーム。
しかしながら、とんでもない出方である。

「何で口ケツ 団なんだ！ もうちょっとまともに出てこいー。」

ついこみ役変更、小川が梅本に変わつてお送りします。

「そーだぞーそれ、初期の口上じやねーか！」

「根本的なところが違うー何でそんなに詳しいんだファンか！？毎週見えてたクチか！？」

偉そうに言つ木下に、小川はチョップをおみまいする。

「なんや、お前えらこいつこみに熱心やな。さてはアレが、梅の座を狙つとつたんか？」

「そりなんですかー？でも、なんでしょう……イマイチ梅さんに比べてキレイがないですね。」

「誰が狙うか！誰か一人つつこまないとカオスになるだろ？がーこんななの俺のキャラじゃないのにッ！…！」

北と山中でラスト、一通りつつこみ終えて、ハーハー息を切らせながら小川はがつくしと頃垂れた。

とりあえず仕切り直してください、マジで。

「仕切り直してワンモアタイム」

「……ゴホン、梅本殿、これは一体どうしたことだ？」

「昌幸よ、何故お前だけここにいる？他の者はどうした？」

謙信と信玄は、咳払いして、厳しい声で新たに登場した四人に問い合わせた。

「どうもこうもないですよ。俺は仲間とやり合ひ程、あんたに忠誠を誓つてるわけじゃない。」

そう梅本が答えた瞬間、彼の身体が真横に飛んだ。

否、何者かに抱えられて飛んだ、という言い方が正しいだろう。その瞬間、唸りをあげた風の一撃が、さっきまで梅本が立っていた場所を深々と抉つっていた。

「ああ、危ない危ない。気をつけて下さりよ、土竜様。」

いきなりすぎてボカンとしている梅本の目に、少しばかり呆れたような顔をした青年が映る。

狐色の髪に、深緑のノースリーブ状の上衣を纏い、額には同色の鉢金をしている。

え、誰こいつ？と首を傾げる暇もなく、青年は梅本をサッと地面に降ろす。

「俺は真田忍隊隊長、猿飛 佐助と申します。お噂は予々、昌幸様から聞いてますよ。」

早口に青年、猿飛 佐助は言い、大地を抉つた一撃を放つた方向を見る。

そこには、怒りに頬を染めた兼続が、忌々しげに舌打ちして立っていた。

「邪魔立てするな、忍風情がッ！……」

「いきなり外から叩つ斬つてくるような輩に言われたくないっての。」

「

「どうやら先程の攻撃は、怒れる彼女の仕業らしい。」

「許さない……！恩義ある身にも関わらず、謙信様を裏切るなどー！」

佐助はやれやれと肩をすくめ、チラリと畠幸の方に視線を寄越した。

畠幸は小さく頷くと、殊更ヘラヘラとした笑みを浮かべ、兼続の前に悠々と歩み出てきた。

「お怒りのトコ悪いけどよ、お前の相手はおれなんだわ。あいつらは先約があるんでなア！！」

しゅっ、と畠幸の手が振るわれ、白い糸が兼続の神器に絡み付いた。

「貴様ッ！」

「おー怖エ怖H。ちつ たあ おしとやかさつてモソンを身に付けたらどうだ？ 狼犬みてエな顔しやがつて。」

畠幸の小馬鹿にしたような挑発に、ビキツと兼続の額に青筋が

浮いた。

「！」、狛犬だとおおお！？」

以前北に吐かれた暴言、あれ実は地味にショックだったんですね兼続さん。

とりあえず、兼続の相手は昌幸に任せておいてよせそうだ。

「相変わらず、昌幸様は他人を怒らせるのが上手いですねー。」

佐助の苦笑いに、同感だと梅本は頷いた。
さてさて、それでは長い前置き終了。

六武衆vs龍虎、ここから真の始まりと相成る。

「……わからんの！」

ぼそりとした信玄の呟きを、謙信は拾い上げた。

「確かに、理解に苦しむ。」

姫鶴一 文字を握り直し、謙信は自分達の田の前に立ち塞がる六人を眺めた。

ちなみに、佐助と六郎は他にこなさなければならぬ仕事があるらしく、後ろ楯は全くゼロの状況だ。

「何故我々と刃を交えようとする?」

「そうすることで、お主等に何の得がある?」

龍虎の問い掛けを、六人は鼻で笑い飛ばす。

「……あるからこんな馬鹿げたことをしてゐるんだ。」

小川は頬の傷から伝つ血を拭い。

「得がなきや、誰もやらねえよな……こしても無謀だ。」

梅本は苦笑して、肩に引っかけていた地国天を下ろし。

「ホンマやで。あたしだけなら絶対やらへんわ。」

北は溜め息と共に肩をすくめて。

「でも仕方ないじゃないか、こいつらも後には退けないしね。」

谷中は組んだ腕をほどいて。

「こまま放置といつのも、いい気分で旅ができません。」

山中は、ぽんぽんと装束の汚れを払つて。

「オレ、嫌いなものはどーやつても認めらんねえや。」

木下は、気合いを入れるように地面を踏み鳴らし。彼等は一斉に、龍虎目掛けて飛びかかつていった。

信玄を相手にするのは、小川、北、梅本の三人。謙信を相手にするのは、谷中、山中、木下の三人。

「行つくよー！せーのつーーー！」

未だハイが残り氣味の谷中が、電王を謙信に向けた。すると、数個の小さな鉄球がふわりと浮かび上がってきた。

「電磁砲！」

彼女の掛け声がするや否や、その鉄球は雷を纏い、凄まじい勢いで次々に発射されていく。

「無駄なことをツー！」

謙信は不敵に笑うと、迫りくる雷の弾丸を弾き返そうとしたが。

「んー、やつぱまつぐる?」

谷中は軽く電王を振ると、弾丸の幾つかは急激に角度を変えて、謙信の足元に直撃した。

土台を吹っ飛ばされ、よろめきながらも残りを弾いた謙信の頭上から、銀色の輝きが振り下ろされる。山中の舞風だ。

姫鶴一文字が防ぐには間に合わない。

「飛氷牙ツ!」

掲げた片手から、鋭い氷柱が飛ぶが、岩を碎いたような音と共に、氷柱が粉碎される。

せりせりと氷の破片が、昇りきった太陽の光を反射して煌めく。

「風神の一盾ツ!」

山中が叫ぶと、風が急激に彼女の前に渦を巻く。
氷の破片を巻き込み、竜巻の塊が迫りくる。

そして、舞風が再び広がったとき、それは一気に爆発、いや、
弾けたといったほうが正しいだろうか。

氷の破片は、爆発的な風の力を借りて、空を斬つて飛ぶ飛針となつた。

「速い……!」

打ち返すのは無理と感じた謙信は、姫鶴一文字を地面に突き立て、氷の壁を作り出す。ドガガツ、と壁に刺さる針。
だが、三人は謙信に一息つく暇もない。

「こつくぞ謙信！……」

山中の背後から、黒い影が伸びる。木下の右手に纏つた影爪が、氷の壁を貫通していく。

山中と木下が防壁を突破して、道を作り出す。

それを確認して、いつの間に移動したのか、遙か後方で谷中は弓に矢をつがえた。太く、銀色に輝く矢だ。

最後の一発の為に、電王を作り出した妖怪、雷獣の裂空に急遽こしらえてもらつた特製の矢。

ところが、肘ががくがくと震え、目が霞んできたではないか。

「あー……やつときたんだ。副作用つてヤツ？」

舌打ちして、彼女はギリッと下唇を噛み締めた。

たつた一本しか出来なかつた矢だ、外してたまるか。

バリッと雷が腕を伝い、矢の先端に集まっていく。

それは次第に大きくなり、先端だけに止まらず、矢全体にまで

行き渡る。

彼女の現段階で、渾身の一発だ。

「届いてよ、絶対に。」

雷の弦を、谷中は離した。

耳をつんざくような爆音と爆風が轟き吹き荒れ、眩しく美しい

黄金の矢が、目前で暴れる龍に真っ直ぐ飛んでいく。

それを見届けることなく、谷中の膝は力なく地についた。

両手を突き出して、無様に倒れることは回避したが、最早意識を保つだけではつどだ。

「今は……これが精一杯……！」

当たれ、死んでも当たれ。
残りの一人に後を託して、彼女の身体は動かなくなってしまった。

越後の龍田掛けて放たれた雷の矢。
その存在を、山中と木下はしつかり認識していた。

「あれを外したらもう無理ですよ、チロさん…」
「わあつてゐよ…」

叫び声に怒鳴り声で返して、数秒間のアイコンタクトを交わす。
いくつと頷き合い、やるべきことを確認する。

「これは…あの距離から射ったのか！？」

またまだひよっ子の神憑きなのに、まさかの長距離射撃。
しかも、今までの攻撃と比べて格段にバカでかい。

「墜としてやる……！」

瞬時に冷気が渦巻き、周囲の温度が下がり、小さな氷の礫が現れる。

信玄と戦ったときに使用した技だ。

姫鶴一 文字を黄金の矢に向け、氷点下の一発を打ち出しつゝするのを見て、一人はマズイと顔をしかめた。

あの攻撃の威力はわかっている。

あんなものが射たれれば、雷の矢は悪くて押し出し、良くて相殺。そうなれば今までの苦労が水の泡だ。

「ちよ、ミナちゃん！？」

いきなり身を翻して、謙信の元に向かう山中に、木下は慌てて声をかけた。

「アレを止めます！チロさんは、謙信さんを押さえてくださいー！」
「はああー？」

ちょっと待て、と木下が手を伸ばすが、山中はするりとそれを搔い潜つっていく。

そして、謙信の攻撃が放たれた瞬間、その前に山中が立ち塞がつた。

「な……ー？」

無謀の一言に忍かれた行動に、謙信の目が驚愕に見開かれた。

山中は舞風を開くと、風神の盾を使い、風の盾を作り出す。

高速で回転する風と、荒れ狂う氷の塊がぶち当たり、互いを喰い潰そうとする。

防いでいても、骨まで凍るような冷たさが、切り裂く氷の礫が身体を襲う。

「…………少しでも…………威力を下げられたら…………」

ビキビキと手から凍り付いていく恐怖に堪えて、山中は盾を支える。

しかし、それも長く続かない。

「もう…………もたない…………！」

腕の力がなくなり、礫でいくつも切り傷を負い、山中は悔しげに咳いた。

風の盾が勢いをなくし、あわや直撃かと誰もが思つたが。

「やうはせせるかあああああ…………！」

しゅっと木下が黒い影を伸ばして、山中の身体に巻き付かせ、横に引っ張る。

ちょうどぞすれそれで、雷の矢と氷の塊が衝突した。

飛んできた山中を、両手で受け止めた木下は、横倒しになつた視界で二つの技の勝敗を見守る。

ギギギ、と押し合う雷と氷、一見、氷が優勢に見えるが、ビンビンとヒビが入る音がした。

「まさか！？」

「余所見してんな、コノヤロがつ……」

耳を打つ木下の怒声に、ハツと謙信が顔を向けると、間近にまで迫る黒い影。

直ぐ様回避の体制に移るひつとする謙信だが。

「逃がさねえぞ！大人しく喰らえ」のべタレ蛇！』

必死で木下は謙信の神器を影蜈蚣で押さえ付け、縛影で縛り付ける。

すると、後ろから聞こえるバーンという音。氷を打ち碎いたのだろう、もうすぐそこまで迫る雷の矢が見えた。

「貴様！私とアレを喰らう気か！」

「当たり前だチクシヨー！覚悟は出来てんだバカ！」

しかし、あと一メートル程、と言つところで、急に二タリと木下の顔が歪んだ。

「…………なーんちゃつて？」

「…………は？」

するり、と木下の身体が沈んだ。正確には、謙信の足下の影に。散々揉み合つた今の体制は、謙信が木下の前に立つもの。つまり、雷の光を謙信が背負つているということだ。当然、その下には濃い影が出来る。そこを木下が影抜けで抜け出したのだ。しかも、縛り付ける影は残したまま。

直後、雷の矢は謙信に命中し、轟音と共に黄金の柱が立ち昇つた。

四十一の斬「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。前編だったりす

いやー・・・・・・・お久しぶりです（汗）

一ヶ月ぶりですかね、やつと、やつと更新できました。

描写的の良し悪しは見逃してください、速さを重視したんです（泣）

思つてたより進まなくて、タイトルに前編とつけなくちゃならなかつた・・・・・。

いい加減終われよ川中島。

いきなりめんどくさいストーリー設定にしちゃつて自分でも後悔します。

でも何とか龍を撃破できました。仕事がなければもつと早くうロできるんでしょうが、ないとダメですもんね。

合間を縫つて書いてはいますが、それも微々たるもので進みません。やっぱり時間のあるときにはガーッと書くのが一番ですね。皆様、長らくお待たせ致しました。

次回もこんな感じですが、よろしくお願ひします。

タイトル 「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編
だつたりする。」

四十四の嘶「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編だな。」

チカチカとした目の眩みと、痺れと、右肩の焼けるような傷み。

「う……」、れは……？」

目の前に広がる、朝の眩しい光を宿す空。
どうやら仰向けに倒れ、肩口にあの矢が刺さっているらしい。

「よー、生きてるか上杉 謙信。」

ひょこつと視界に入るのは、疲れはてた木下の顔だ。
肩には回収してきたのだろう、くつたりした谷中がもたれてい
た。その隣には、同じくくつたりした山中が座っている。

「……何故？」

木下の手に握られた、自分の神器を見つめて、謙信は理由を問
う。

神器の破壊が、討ち取ること。なのに、三人はそうしようどし
ない。

「うつせーな、お前みたいな臆病者の首「神器」なんかいらねーぞ。」

顔をしかめて木下はそう吐き捨てる。

「まったくです……鬪わずして逃げるような人の首捕つても、意味
ないじゃないですか。」

「やうだね……後味悪いし、面倒だよ。」

山中は呆れたよつに溜め息をつき、谷中は力なくへらりと笑つた。

「……私が、臆病者……？」

そんなこと、産まれて初めて言われた、と謙信は困惑したような表情を見せる。

「そりゃやうだろ。監、お前のこと好きだからそり思わないんだ。
何度も、言つていたな……理由を聞かせてくれ」

謙信の視線を受け止めて、三人は声を揃えて言つてやる。

「「「自分で考える努力をしろー」「」」

ピシャリと叩き付けるように言われ、ますます困惑してしまつ
謙信なのだつた。

とりあえず、場面転換といつ。

残る大将首、甲斐の虎との戦いの行方は……？

辺り一帯に、炎と土の匂いが満ちていた。

焦土を踏み締め、小川、梅本、北の三人は猛虎と対峙する。双方共に、肩で息をしていた。

先程まで、地面を凍らし焦がし揺るがす、チャンバラと呼ぶには規模の大きすぎる立ち回りをしていたところだ。

「…王子、大丈夫か？」

梅本が、特に疲弊している小川を気遣う。炎の神憑きは、抜群の攻撃力を誇る反面、スタミナ切れが早いのだ。

「……いける。」

いつも以上に言葉少なく答える小川に、「一人はああ、限界なんだな」と思った。

だが、それは同じく炎の神憑きである信玄も言えることだらう。

「ふう……さすがに、お主等三人はキツいのう。」

表情こそ余裕そうだが、顔色の悪さと冷汗だけは隠せそうにな
い。

「そらこいつのセコフやわ……そろそろ終わりにしたいんやけど。」

北は吐き捨てるよつて言つて、手や足にできている火傷の痛みに唸つた。

「思つことほ同じよ。甲斐の虎ともあらう儂が、お主等のような新参者の好きなようにされるとは……もう歳かのつ。」

来国長が紅に輝き、熱を帯びる。煌々とした光に、三人は慌てて身構えた。

「……だつたらー。」

「もつ觀念しろッー！」

小川と梅本が叫び、信玄に向かつて駆け出した。

「抜かせ、そういうわけにもいかんのよー。」

体力的な問題か、梅本の方が信玄に辿り着くのが早かった。

降り降ろされる地国天を、熱を帯びて真っ赤に染まる来国長が受け止める。

「問うぞ六武衆、今一度ー！何故斯様な無茶をするー？儂の納得する答を申せーーー！」

地国天を弾き、信玄は己の掌でそれを掴んだ。
続く小川の刀身を、来国長で防ぐ為だ。

「こた、えも…何もー！」

ぐつと噛み締めた歯を抉じ開けて、梅本は言葉を続ける。

「あんたが認めて受け入れないと！俺等がいくら言つてもわからねえだろッ！！！つてか気付けよこの朴念人！」

バキバキ、と彼の周りの大地が盛り上がり、蛇の鎌首のような形を作つていく。

「む……！？」

次々に突き刺さる岩の鎌首を、信玄は来国長で叩き落とす。

その岩の間から、陽炎丸の切つ先が縫うように現れた。

深紅の袖を翻して、小川が陽炎丸を信玄田掛けて降り下ろす。やむなく彼は、来国長で陽炎丸を迎撃つた。

防ぐものになくなつた岩の鎌首は、鋭く硬いその先端で、遠慮なく信玄の身体を切り裂いていく。

「ツ、調子に乗るな童供が！」

信玄の咆哮が上がつた瞬間、紅蓮の炎が噴き上がり、周囲が爆発を起こす。

彼を切り裂いていた岩の鎌首は、一瞬で粉々に砕け散った。

当然、その爆発に巻き込まれた小川と梅本は、熱風と衝撃に、ぬいぐるみのように吹っ飛ぶ。

地面に叩きつけられ、肺の中の空気が一度に吐き出される感覚は、元一般人にあまりにもキツい。

「う……」「、りや……マズイ……！」

痛みと苦しさに、梅本は身を捩つた。

片目を開けて小川の様子を伺うと、既に息も絶え絶えのようだ。

武田 信玄、なんというパワー・タイプだろうか。体力も筋力も、到底段違いである。

どうすればいいのか、と答に辿り着けない思考を巡らせていると、ふと、懷の奥から微かな振動を感じた。

間違いない、携帯のバイブレーションだ。

信玄に見えないように身体を壁にして、梅本は必死に携帯を掴み出した。

パカリと開くと、メールの送信者は『マンボウ』である。

そういえば、先程から北の姿が全く見えない。

「あンの、腐れ変態……一人が……死に、かけてんのに……！」

憎悪の声もおどろおどろしく、梅本はメールを開いた。するとそこには、短い文面が。

『虎を抑える。炎上網をあげて、空を隠せ』

人間、追い詰められ過ぎれば、逆に頭が冴えてくることがあるという。まさに今、梅本の脳味噌がそれだ。

一行ちょっとの文章で、北が何をしようとしているのかが大まかにわかった。

「王子……一おい、起き……る！」

懸命に手を伸ばして、梅本は小川の肩を掴んで揺すつた。

「…………う、め……？」

目をゆっくり開いた小川は、ボーッと呆けたような顔をしていたが、すぐに自分達の状態を理解して、正気を取り戻した。

「大丈夫か……？起きるぞ、よつと！」

歯を食い縛つて、一人は身体を起こした。

信玄を見ると、彼も堪えてきたのか、片膝を一歩荒い息を吐いている。

「王子……一回でいい、炎上綱つて、出せそうか？」

梅本は軋むような痛みに顔を歪めながら、小川に問いかけた。
今度で終わりにしないと、もう自分達が持たない。この一回で、
止めを刺す。

少川に相手の義理に任すを察ひかう。一語力に詠葉を察ひかう。

「おつ。」

頷く小川に、にんまりと笑いかけ、一人は神器を支えに立ち上
がつた。

股を抱きしめ、腰をくねらせる。おまけに、胸元で手を握る。

鬼気迫る顔で、腹の底から気合の絶叫をあげ、走れ孝研男衆！風のように！

何やら雰囲気がガラリと変わった二人の勢いに、信玄は目を丸くした。

「伸びる土地鮫ええええーー！」

ガアン、と梅本の地國天が大地を打ち付けると、鮫の背鰭型の岩が次々に起き上がる。

そしてその岩は、生き物のように地面を走り出す。小川はその内の一つに飛び乗ると、真っ直ぐ信玄のもとに走った。

信玄は向かってくる背鰭岩を破壊していくが、出るわ出るわ、幾ら潰しても岩は途切れないことはない。

彼の噴き上る炎も、次第に威力を弱めていく。

「何と……しぶとい……ーー！」

苦々しく呻いた信玄が、来国長を大きく振るおつとしたその時、何やら硬い物が片手を封じた。

目をやれば、先端を伸ばした背鰭岩が一つ、己の腕にがっかりと噛み合っていた。

そうこうしてゐ間に、残る手足も絡めとられてしまう。

背鰭岩の一つに乗った小川は、その瞬間を見逃さず、これが最後とばかりに陽炎丸を強く握り締めた。

「……翔べ、炎狐！ーー！」

水平に空へ翳した陽炎丸の刀身から、炎が滝のように溢れ、空を鮮やかな朱に染め上げていく。

信玄の視界が、一面炎で一杯になったとき。
声が、聽こえた。

「上出来や、じじ苦労。」

のんびりしているが、何処か傲慢な響きを持つこの声は。

突如、周囲の温度が下がり、炎上網がフツと消えたがと思いつと、上空に見えた光景に、皆口をあんぐりと開けた。

何故か、北が飛んでいる。何処をつて、空を。

その両手……正確には廻鮫の先に、バカでかい水の塊を持ち上げて。

「おま……その水……！？」

梅本がようやく言葉を吐き出し、何事か思い出したらしく、あつと声をあげた。

すっかり忘れていたが、川中島には何本もの川が流れている。

その中でも、一番太い川が『千曲川』である。

龍虎や自分達の力により、大半の川は埋まり凍つたり煮えたりしたが、千曲川の水は乱入により距離が離れたのか、あまり被害を受けていなかったのだ。

彼女は、小川と梅本が必死に信玄と戦っているどしゃくさに紛れ、馬を捕まえて千曲川まで走り、水を背負えるだけ背負つてきたのだ。どうやって空まで昇ったのかは謎として、余程疲れたのだろう、北にしては珍しく、汗だくだつた。

「行くで……！防げるもんなら、防いでみいや、水・流・弾！……！」

直径50センチはあるだろ？

通常よりも遙かに大きい水の弾丸が、マシンガンの如く乱射される。

それを信玄はもろに受ける。あまりの威力に岩の枷は砕け、彼の大きな身体は地面へと倒れこんだ。

「まだ終らんで！折角重たい思いして運んだ水や、全部受けでもら

「うわ！！！」

ギラリと目を光らせ、北はグッと力を込めた。

途端、ビシビシと水の塊が凍り始め、瞬く間に巨大な氷塊に姿を変えていく。

信玄は何か身を起こすが、

「……………」

仁王立ちになり、真っ向勝負の構えをみせる信玄。彼の身体から熱気が立ち昇り、来国長に炎が宿る。あれだけ疲れきつて尚、彼の炎は絶えないのか。

全身全靈を込めた熱いフルスイングが、氷塊とぶつかり合う。ジュウウ、と水が蒸発する音と水蒸気の煙が、辺りを漂う。

で炎を出し続けるのは無理だった。

元気なときならいざ知らず、今は力尽きる一歩手前なのだ。
腕が徐々に下がり、肘が曲がったその瞬間、巨大な氷のハンマーは信玄もろとも地面に激突して、虎の敗北を周囲に知らせたのであつた。

うつ伏せの視界、肌を刺す冷たさ。

呻き声も出ない中で、下から何かが右肩を押し上げた。そのままどさり、と少々手荒に仰向けてされ、信玄はくぐもつた声をあげる。

「俺等の、勝ちだな。」

見えるのは、地面に四肢を付いている梅本と、横倒しなつて氣絶してゐる小川と、座り込んでゐる北の三人。

彼等の真横に突き立てられてゐるのは、己の神器である。

どうやら、梅本が小さな地壁で信玄を仰向けてさせたようだ。

「……壊さんのか。」

「壊やへんよ。」

神器を横田に、吐き捨てるよつこいつた北の言葉に信玄は苦笑する。

「壊さないかわりに……」つ、言ひとを聞いてもひがい、武田信玄。

「イイゼイと歸る息のような息の中、梅本は有無を言わざぬ口調で言った。

「……よからひ。」

穏やかな声で、信玄は頷く。

不思議と、絶望感はなかつた。

「多分、あんたはこの後……謙信さんと話すことになる。そのとき、余計なことを考えずに答えてあげて欲しい。」

「余計なことは?」

信玄の問へに、梅本はやれやれと肩を落とした。

「城主だとか、武田のお家とか……んなしょーもないもん全部ナシで、ただの人間の野郎として答えろって言つてんねん、察しろやボケどんのかオッサン。」

苛々と北が舌打ちして、信玄をジロリと睨み付けた。

疲労で彼女の機嫌は、すこぶる悪い。

遠くで、陣太鼓の音が鳴つている。

戦の終わりを知らせるべく、昌幸の忍達が駆け回り知らせているのだろう。

第四回川中島の戦い　両軍の大将が共に戦鬪不能という、極めて異例な形で、終結となつた。

四十四の斬「口舌の刃で、人を斬らなきゃいけない時もある。後編だな。」

できたーーーーー！

長かったよ川中島！

やつと一番ややこしいところが終了しました！

タイトル詐欺のはごめんなさい。

そして！いよいよ近づいてきましたお気に入り200件！
ナメクジ以下のスピードですが、頑張って書いていきますーーーーー！

四十五の斬「認め合いこそイイ大人の証だつて、テレビとかで言つてた。」

痛い。熱い。だるい。疲れた。喉乾いた。腹減った。
そんなことばかりが、頭の中をぐるぐる回転する。

そんなことばかりが、頭の中をぐるぐる回転する。

閉じた目を開けることさえ億劫だが、ぼやーっとした中で、自分達が今どのような状況なのか、あの二人はどうなったのかということが、フラツシュバックのように現れた。

「お館様!？」

ガバッと飛び起ければ、ゴツチーンと頭に衝撃が走る。

「……………」

目にチカチカッと星が散る。

じうやら、お互の頭を結構な勢いでぶつけ合つたらしい。あまりの痛みに呻いていると、クスクスと笑う声がした。

そちらを見れば、互いの傷の手当をする龍虎の姿

「起きたる瞬間まで、お主等は騒がしきのう。」
「本当に。見ていて飽きない。」

両者の間に漂う穏やかな空氣に、六人はパチパチと目を瞬かせた。

彼が頭がカッカッとしているせいが、彼が腹みそは漫遊していくべく、ペーデが遅い。

「……で、全員どうなつたんだ。」

やつと、小川がぽつりと口を開いた。

龍虎はチラリと田配せしあつと。

「「どりあえず、六武衆（お前達）の勝利といったところか。」

その言葉を聞いた六人は、ぽかーんと口を開けて固まつた。

勝利……勝利……！？

その言葉が頭の中をリフレインする。

真っ先に反応を示したのは、木下だつた。

「いいこつやつたああああ……！」

身体の痛みも忘れて、木下はバネのように飛び上がって喜ぶ。

「いやあ……まさかホントにこの龍虎に勝っちゃうとはね。ま、僕も頑張った甲斐はあるかな。」

薬の影響で、まだキツそうな谷中だが、彼女は満足そうに頷く。

「これで私達も、心置きなく前に進めますね。」

山中はバサバサに乱れた髪を治しつつ、ニコニコと笑つた。

「は……つ……疲れた……マジに疲れた。」

梅本は安堵に天を仰ぎ、小川は無言でこんまつと口角をあげる。

「……お、何かようさん来よつたで。」

戦中には影を潜めていた北の塩鰆のような目が、遠くの方から集まつてくる一群を見つけた。

赤と白の旗印がじりじりやになつたそれは、上杉軍と武田軍だつた。

「わうるせー、と六人が顔をしかめている間に、一群は物凄い蹄鉄の音を響かせて、それぞれの主を取り巻いた。

龍虎は視線を交わし合つと、すつと立ち上がり。

「「鎮まれ、」」の馬鹿者共ッ――――――」

川中島に、龍虎の雷が落ちた。
その威力のハンパないこと、この怒鳴り声には全く関係のない
六人ですら、首をすくめ姿勢を正した程だ。
シーンと静まり返った中、謙信が口を開いた。

「我等の戦は終わったのだ。我等が六武衆に敗北したのは、偽りなどない。」

その後を、信玄が引き受けた。

「その通りよ。」の者達は、純粹に口の「武」のみで我等に挑み、見事勝利を納めたのだ……。そうであつて、真田の忍達よ。」

チラリと後ろを振り返ると、いつの間にいたのか、真田忍隊が

恭しく片膝を付いた姿勢で黙まつている。

「仰る通りで。」

「我等の名にかけて、真なり。」

忍と言えど、只の忍ではない。武田に仕える「真田の」忍なのだ。

しかも、さつきの言葉は真田忍隊のデュアルホーンこと猿飛佐助と霧隠才蔵のもの。

そんじょそこらの一兵卒とは格が違う。

「ほら、これ返すよお一人さん。」

「これ以上のこざりはナシだ、の意味を込めて、梅本は一人の神器を龍虎に手渡した。

神器を破壊せず、尚且敵である一人にそれを返したこと、周囲は驚愕した。

「……これが俺達のやり方だ。」

「お館様も謙信様も、スゲーいいやつだしなつ一世話になつたってのに、恩を仇で返すこととはしねーよ。」

まだふらつく身体を、よつこいらせと小川と木下は起^レした。

彼等の行動に、周囲は困惑の色を隠せない。

「さて、それではお一方。敗軍の将として、私達の要求を呑んで頂きましょうか。」

「ミナちゃん、それ脅迫っぽく聞こえるで。」

爽やかな笑みを浮かべて、有無を言わぬ口調の山中に、北が

半笑いでユルいつつこみを入れる。

あまり穢やかではなさそうな言葉に、再び周囲は敵意の眼差しを向けた。

それを龍虎は一瞥して制し、こくりと頷いた……のだが、流石は戦国時代。主人を想う心が人一倍強いヤツが、やっぱりいる。

「恥を知れ、この外道共ッ！……！」

「……！？」

燃えるような怒りの絶叫が響いた瞬間、巨大な竜巻が六人目掛けて放たれた。

いきなりの攻撃だが、梅本がギリギリのところで壁を出し、竜巻を防ぐ。

しかしその威力の強いこと、強固な壁がごつそりと抉れた。

「あつっつぶねえええ……！」

血の気が引くのを感じながら、ぐつたりと梅本はその場に座り込んだ。

「テメーーいきなり何てことすんだ！！！」

木下が食つて掛かる先には、切り傷だらけの女武将、直江 兼続の姿があつた。

「喧しい！！！貴様等のような薄汚い裏切り者など、私は勝者と認めない！！！」

再び風が渦を巻き、六人を狙つ。

こりやマズイ、と彼等の背中に汗が滲む。

今あれを喰らえば、多分防ぎきれない。

しかし無抵抗でいるわけにもいかず、ああ畜生と悪態をつきながら立ち上がろうとした。

だがそんな悠長な時間を、田の前の女武将は与えてくれない。

「止めよ兼続！これ以上の戦いは無用！」

「いいえ、止めませぬ！上杉をここまで侮られて、どうして大人しく退き下がれましよう！？」

謙信の制止の声も、頭に血が昇りきつた兼続には無駄らしい。渦巻いていた風が爆ぜ、幾つもの鎌鼬が同時に六人へ刃を向けた。

「梅ツ、壁は！？」「

「だああああ！俺だつてかなり限界なんだぞ！？」

まことに、一番攻撃力のある小川、続く谷中は、もう体力・精神力共にすっからかんの状態だ。

残る四人も疲弊しきつて、兼続の攻撃に耐えきる自信はなかつた。

「その血肉で詫びろ！？！」

詫びるかボケ、と叫びかけたとき、彼等の傍を白と赤が駆け抜けた。

そして、目の前に紅が散る。

「信玄……！？」

「……無事だな、よかつた……」

状況はこうだ。

六人を庇い、その前に立った謙信。そのまま前に、信玄が立っている。

信玄は謙信と六人を、背中を鎌鼬に切り裂かることで守つたのだ。

がくりと膝を突く信玄を、半ば茫然とした顔で謙信は眺めた。

「お館様っ！」

「誰か布！あと水も！」

いち早く我に返った六人が、血相を変えて彼に駆け寄つた。

「馬鹿な、何故敵である貴様が……！？」

佐助と才蔵の二人がかりで取り押さえられた兼続は、信玄の行動に言葉を失う。

「……まだ解らないのか。」

兼続を険しい顔で見つめながら、小川と谷中が近付いてきた。

「敵だつて言つても、色々あるでしょ……そのままの意味もあるし、また少し違う意味もあるんだから。」

諭すように谷中が言い、呆れたよつに溜め息をつく。

「……心酔するのは結構。でもその想いが、結局あの人になんか顔をさせたんだ。」

そう言つ小川の視線の先には、悲痛な面持ちで信玄の名を呼ぶ

謙信がいた。

思いもよらぬハプニングに、ドタバタすること数時間。

信玄の手当てに、いきり立つ両軍のまとめ直し、場所の変更、野営の準備……とにかくヘトヘトの身体に鞭打つて、六人は戦後の川中島を駆け回った。

ようやく野営地を作り上げ、何とか落ち着きを取り戻した時は、日が傾きかけていた。

「……死ぬわ。」

六人は、魂がほやーんと口から抜けそなりかけていく状態だった。

げつそりとした表情で、北が呟く。
暫しそこで、空虚を眺めていると。

「おい、大丈夫かよ。」「食事を持ってきましたよ。」

茶碗の乗つた盆を持って登場したのは、昌幸と定満だ。どうやら、少し早めの夕飯を持ってくれたらしい。

「…………」「はん？」

びくっと木下が反応を示す。

昌幸と定満は、その様子に苦笑しながら、六人に茶碗を手渡していった。

「一気に食べてしまつてはいけませんよ。ゆっくり少しづつ、ね。

定満はがつがつとする木下の肩を押さえ、宥めるように囁つた。

皆が注意通りに食事をする中、昌幸は彼等を見回して口を開く。

「それ食つたら、お館様のところ行きな。上杉の大将も、お前らをお呼びだ。」「」「「じょーかい。」「」

もういちじるとした返事を背に、昌幸と定満はその場を後にした。

茶碗に大盛りご飯をしつかり食べて、ちょっとだけ元気がでた

六人は、龍虎の待つテント（？）へと向かつた。

正方形に張られた幕の入り口を捲つて中に入ると、中央に横たわる信玄と、彼に付き添う謙信が見えた。

「お館様、怪我大丈夫か？」

すぐに木下が信玄の元に駆け寄つて、その枕元に膝をつく。

背中に大きな傷を負った信玄だが、すぐに施した応急処置が功を奏したのか、そこまで大事には至らなかつた。

「なに、儂ならこのとおり、ピンピンしてあるわ。お主等こそ、身体は大丈夫なのか？」

謙信の支えを借りて信玄は身を起こした。

「とりあえず、半分死にそうだけだ。けど、まだやることがたくさんあるし……飯喰つて、何とか立つてるとこだよ。」

ドカツと梅本はその場に腰を下ろすと、胡座をかいだ膝の上に頬杖をつく。

「そりか……すまない、迷惑をかけた。」

「謝る」とはあつませんよ。本を正せば、私達の仕掛けたことなんですか？』

申し訳なさやうな謙信を見て、山中は苦笑を浮かべながら語り始めた。

「……そう言えば、兼続はどうなったんだ？」

兼続が昌幸の忍に取り押さえられてから、一向に姿を現さないのを気にしてか、小川が辺りを見回す。

「とりあえず、今は謹慎中にさせである。軒猿の報告によると、大人しくしているようだ。」

謙信の言葉を聞き、六人は少しばかり微妙な表情を作った。
何と言つか、ちょっと悪いことしたかなー、とこいつ的な感じ

か？

「謙信よ、あまり責めてやるでないぞ？儂はほれ、何ともないのだからな。」

「わかつてゐる……だが、どのよくな理由があれ、兼続のやつたことは……」

一気に場の空気がどんよりしたものに変わるが。

「んなもん、後からグチグチ言つてもしゃーないやろ。止めや辛氣くせこ……つーかお前ら、やるこいあるんとちやうんか。」

どんより感なんぞ我関せず、いつでも言つたいたいことをビシバシ言い放つ北に、龍虎はうつ、と言葉を詰まらせた。

正論と言えば正論だろうか。

「だね。負けたときの話、忘れたとは言わせないよ。要求はただ一つ…全部正直に話すこと…」

谷中はふふん、と笑い、龍虎を眺めた。しかし。

「…どうか…私は色々初耳なことが多いような気がするのだが。僕、一体何をさせばいいのかわからんぞ。」

あれ?と六人は首を捻つた。

そう言えば、具体的な内容をはつきり言つてなかつたような気がする…特に謙信には。

「……まあ、アレだ。謙信さんは自分のことと、自分の気持ちを全部話す。で、お館様は理解して受け入れて答えてやる。これが俺等の要求だ。今決めた、異論は認めない。」

説明が面倒になつたのか、投げ遣りに梅本が言つ。

残りの五人も、うんうんと頷いた。

「……確実に私の負担の方が多くないか、それ。」

「何だよ、まだ逃げんのかよ。何でオレ達に臆病者呼ばわりされたのか、まだわかんないのか。意外と頭わりーんだな、お前。」

不満を溢す謙信を、木下が嘲笑う。

「……。」

キツい言葉に、謙信は悔しげに俯いた。

しばらぐの沈黙の後、深々とした溜め息を吐き、顔を上げる。

「わかつた。望み通りにしよう。」

「…………そうになくなっちゃな。」

決意の瞳も力強く、謙信は信玄の方へと視線を向けた。
その表情に、小川が励ますかのような咳きを贈る。

「…………信玄、私は…………私は、今まで貴殿を騙していた。私は、そ
の…………お、男ではなく……女、なのだ。」

震えそうな声を必死で抑えて、謙信はそう告げた。
そして両手を伸ばし、自分の頭を覆つむじに頭巾を、髪を留める
紐を取り去った。

同時に、ぱさりと零れ落ちる濃紺の髪が、微かな白檀の香りと
共に広がる。

注がれる視線を耐え忍んでいると、ようやく信玄が口を開いた。

「美しい髪よの、謙信。まさか、お主の本当の姿を見ることが出来
よつとは。儂は、六武衆に負けてよかつたわ。」

優しく笑つた信玄は、慈しむよつて謙信の髪に触れたのであつ
た。

四十五の斬「認め合いでこそイイ大人の証だつて、テレビとかで言つてた。」（後

終わった・・・・・・最近仕事がめっちゃ忙しくて、全然進まないですよ（汗）

あー、なかなかおわんねーなこれ。やつと正体暴露編まで来ました。あともうちょっととかな、あと2、3話で終わらせたい。いや終われない加減次書きたい・・・・短編も書きたいのに全然進まねえー。えーと、じゃあそういうことでーまた次回つ！

四十六の嘶「わかつて黙つてゐのひて、性質悪くね？」

憚いて目を丸くしたのは、謙信だけではない。

「待て、ちょ、え？ 今何つた？ 何つた？」

「本当の姿つて言つたよな？ な？」

現代語丸出しで、信玄に詰め寄る六人。

その形相に若干退きつつ、彼はおろおろと目を泳がせた。

「え？ 儂、何かマズイこと言つた？」

「いやまづくないけどね！？ 寧ろうつまい…… ジゃなくて謙信さんが

！」

そこで一度言葉を切り、全員でハモる。

「「「女の人だつて、気付いてたわけ！？」」

大声で叫ばれ、信玄は呻きながら耳を塞いだ。

「あー！ 耳元で叫ぶでないわ喧しウグッ！？」

「叫びたくもなるわ！ なにそれなめてんのふざけんなコノヤロウバ
カヤロウツ！？」

「ま、待て！ 締まつている！ 信玄が締まつているぞ！ 落ち着け六武
衆！」

間。

色々と飛び出たびっくり要素をとりあえず鎮めて、六人はジトーッとした目で信玄を眺めた。

「信玄、いつから気付いていたのですか？私が女である」と。

謙信はそう尋ねた。

自分の部下でさえ、知るものは僅かだったというのに、この男はいつから気付いていたのだろうか。

「そうだのう……はつきりとではないが、大体一回目の戦の時くらいいだつたか。」

「え、そんなに早期で？」

思わず梅本は、謙信をマジマジと見た。

「なんだ、お主等は気付かなかつたのか？」

逆に問われ、六人はつーんと曖昧な表情をつくる。

「どちらかと言えば、中性的な感じですからね……声もそれなりに

低くしてこましたし、立ち振舞いも仕草も男性のそれでしたし。」

「……体つきも男っぽくしてあつたからな。男か女か、判断しかねていたんだ。」

山中と小川がそれぞれ言い、皆はそのとおりだと頷いてみせた。

「じゃあ、全部わかつてやつてたのか。タチわりー……」

げんなりした顔で、がくじと梅本は頃垂れる。

「つまんねービーナカ、骨折り損のくたびれ儲けだぞ。お館様、オレ達の努力返せよ金目のもので今すぐ。」

「何で！？ 儂強制してないよねお主等にーー！」

真顔で木下は信玄の胸ぐらを掴む。

チンピラ並みの因縁の付け方に、信玄はワタワタともがいた。

「いけませんよ、チロさん。」

穏やかな声と共に横から手が伸びてきて、木下の無体を押される。

見れば、にっこりと笑う山中がいた。しかし、その微笑みは泣く子も主に恐怖で黙る、「西太后の笑み」である。

「そんなのでは生温いです。温すぎて半身浴すらできないくらいですよ？」

ギリリ、と木下の肩を掴む彼女の細い手に、力が籠った。

「い、いだだだ！？ 痛い、痛いんだぞミナちゃん！？」

バタバタする木下から、あら「めんないと離れた山中は、張り付けた笑みのまま龍虎にこじり寄った。

「え……あの、山中殿？」

何か黒い後光を背負つ山中に、顔を引き攣らせて謙信が声をかけた。

「まったく、何ですかこれ。ドラマチックな川中島の戦いが、今私の中でタダの痴話喧嘩にランクだ下がりですよ。」

「……そこなのか、ポイントは。」

山中の舌打ちに、小川は呆れて咳くが、彼女の一警を受けて、素早く口をつぐんだ。

「まったく、言いたいことがあるのなら、ちと話してしまいかない。いつまでも煮えきらずにぐずぐずして。お館様もお館様です、何ですかのふざけた態度は。戦国大名のクセに貴方アホですか？」

山中の醸し出すおつかない雰囲気と、ハリセンボン並みに刺々しい視線が、龍虎にザックザク突き刺さる。

「いや、その、山中殿。私は……」

「山中殿、と、とりあえず落ち着いて……」

「お黙りなさい、この腰抜け共。つべこべ言える立場ですか。」

びゅん、と鎌鼬が顔スレスレを掠めて、ピタリと龍虎は口を閉ざした。

あーあ、と残りは溜め息をつき、誰が山中を宥めるか話し合つ。

「どーするよ、あれ。」

「どーもこーも、ほつとくしかないんじやない？僕は嫌だよ、あの間に入るとか。」

あつはつは、と軽やかな笑い声をたてて、谷中は爽やかに切り捨てる。

「だよなー。迂闊に触ると、うつかり死んじやいそうじゃね？精神的に。」

同じく、鬱わる気がサラサラない木下が言つ。

「……ちょっとタバコ……」

「待たんかい」「ハ。」

そそくさと逃げ出さつとする小川の襟首を、光の速さで梅本が鷲掴みにする。

「何だよ！影の薄い俺なんかいてもいなくても状況に変わりはないだろ！」

「一人だけおいそれと逃がすか！飛び火喰らうならお前も一緒だ！」

題田は「山中の説得及び事態の收拾」だった筈なのだが、初っぱながら軌道がズレている。

しかし六武衆諸君よ、氣付かないか。一人足りないと云ふことに。

いつのまに姿をくらましたのやら、北が何処にもいない。その頃、北は。

「なアーラーんでお前はここにいるんだ？」

「何か色々めんどくさそうな予感がしたから逃げてきたんや。」

「……お話は宜しいのですか。」

少し離れたテントでまつたりと窓いでいる北に、昌幸と定満は呆れたような目を向けた。

しかし、彼女はゆるりと半田で笑つてみせる。

「あればっかりは、当人の気持ち次第やわ。けじまあ、あれやな。なし崩しひこいつの専売特許やし、そのうひつまことまとまるやろ。」

グダグダさら、現代人の方が何枚も上手だ。

しかも、今あそこで弁舌を振るうのは、かなりご立腹の我等が「西太后」。おまけに「勝者」の特権付き、ついでにも一つ、惚れた腫れたの弱みありときたものだ。

「ありや一勝ち目ないわなあ。陥落間近やで、果報は寝て待てつてゆうやん。」

一人で納得して、北は本格的に休む体制に入る。それをポカンと見ながら、昌幸は首を捻つて呟いた。

「なあ、さすがに意味がわからねえんだが。」

「大丈夫ですよ、真田殿。私もまつたくわかりませんから。」

豊幸の肩を軽く叩き、定満は状況の追求を諦めるのであった。

（龍虎のテントにて）

さて、お怒りの西太后様のお説教を絶賛味わい中の龍虎二人。

「いいですか、謙信様。将たるもの、時には思い切りの良さが求められる場合もあります！迷いがあるまま戦に挑むなど、言語道断もいいところですよ！」

「……は、はい。」

ビシッと山中に指差され、謙信は眉を下げて頷いた。

迷いがまつたくなかつたのか、と聞かれれば、答は嘘になる。「己を兼続の攻撃から庇い、傷を負つた信玄の姿を見て、取り乱した自分がいる。

彼の傷が大したものではないと知り、目を覚まして元気そうだ

つた彼を見て、ホッとした自分がいる。

結局、いかに心の底に沈めようとしても、無駄なことだったのだ。

深々と溜め息を吐いた謙信を一瞥し、山中は信玄の方へと目をやる。

「お館様。一つお聞きしても?」

「う、うむ。」

「素直に答えてくださいね。上杉と武田、両者を結ぶ親密な縁……欲しくはありませんか。」

いつになく真剣な顔で、山中は信玄に問いかけた。

「……親密な縁、とは?」

「共に刃を交わせるような縁。刃を交わすのではなく、楽しみや悲しみを交わしあえるような縁です。」

怪訝そうな表情をつくる信玄に向かい、山中はにこりと笑つてみせた。

「以前に仰つてましたね。謙信と共に刃を交わせるなら、と。それ、実現したくはありませんか?」

「この言葉を聞き、信玄は謙信の方へと目を向ける。

ぱちりと合った視線を、どこか慌てたような様子で、謙信は逸らした。

「……縁か。山中殿も、随分とずるい言葉を選んでくれたものよ。

「

ふつ、と微笑む信玄は、そう一人ごちて。

「儂は、欲しい。その縁を望む。謙信よ、お主はどうだ？」

そうきっぱりと言い放つた。

謙信は俯けた顔を上げ、拳を握る手に力を込める。

「私も……欲しています。信玄、貴方との繋がりを。私は……私は、貴方をお慕いしているのだから。」

告白キタ　！！！！と、今の今まで空氣と化して状況を見守ってきた四人は、満足そうな山中に／＼サインを送った。

「……儂を、か？」

背後にて、無言でジタバタする四人の気配を感じつつ、信玄は頬を染めて頷く謙信をポカーンと見つめた。

「儂は見ての通り、むさ苦しいじじいだぞ。いつも職務をほっぽりだして、勘助に大目玉を喰らうておるし、オヤツは昌幸に勝手にとられるし……その、芋虫が大嫌いだし。」

あわあわと信玄は狼狽えて、助けを求めるように後ろの五人へ視線をやるが、彼等はスイツと顔を背けてどこ吹く風。

「それは……今初めてお聞きしました。でも、少しも情けないなどと思ひませぬ。信玄、私は今すぐに答を頂きたいとは考えておりません。少しずつ、私と貴方との縁を結んでいきたいのです。」

「言つことを言つてしまつて胸のわだかまりが解けたのか、謙信

の声や表情に凜々しさが戻ってきた。

「まずは、甲斐と越後の間に和議を。それから、沢山のことを私に教えて欲しいのです。甲斐のこと、貴方のこと、貴方の素晴らしい家臣のこと……。」

押せ押せ、押して押して押しまくれー！
声を殺し、だが必死に皆は謙信を応援する。

「……お館様、女人にここまで言わせてしまつのは、少々男の誇りに関わるのでは？」

最後の一押し、山中が笑いを何とか噛み殺して、信玄の肩を叩く。

「え、あ、う、そ、その……儂で良いのか、ホントのホントに、儂で？」

何かもう一杯一杯なのだろう、信玄はオーバーヒート寸前だ。
そこに、トドメの一言。

「私は、貴方がいいのです。」

「ふしゅー、といふ音が、今にも聞こえてきそうなくらいに、信玄は真っ赤だ。

「う、う、ふ、不束者だが、よ、宜しく頼む……」
「いいえ、私こそ……信玄、これから宜しくお願ひいたします。」

「ブハッ、と誰が吹き出したのか。」

もうこれ以上は堪えられないとばかりに、もの凄いバカ笑いが爆竹のように弾け出た。

え？と龍虎がそちらを見れば、黙つて事の行く末を見ていた五人が、折り重なるようにして呼吸困難に陥っているではないか。

「無理ツ……もー……無理ツ……！……！」

「不束者つて……逆じやね……？」

ヒイヒイと変な声が喉から漏れ、ひくひくと体が跳ねる。

「えーと……とりあえず、大丈夫かお主等……？」

（落ち着いて深呼吸、深呼吸）

何はともあれ、六人の作戦は見事成功した。

川中島の戦は終結、甲斐と越後には和議を結ぶことになり、謙信も自分の想いを伝えることができたし、対する信玄の反応も悪くない。

しかし、やることはまだ残っている。

「……両軍に、このことを伝えないといけないな。」

一頻り笑い終えた後、ようやく小川が口を開く。

「あー、さうだなあ……めんどくせー。」

「ひちまひつ、へとへとなのだ。」

梅本は喋る元氣もない、と肩をすくめてみせた。

「お……そーいや、マンボウの奴どこに行つたんだ?」

木下が辺りをきょろきょろ見回す。ようやく氣付いたのかお前ら。

「あれ? ホントだ。いつからいないの?」

「さあ……私、お一人にお話しうるのに夢中でしたから気がつきませ
んでした。」

谷中も山中も、といづか誰も北がいつ抜け出したのかわからな
いらしい。ヒ、噂をすれば影。

「おお、終わつたんか。『苦勞』苦勞……八方丸うに収まつたか?」

テントの幕を捲り、無性に腹のたつニタニタ笑いを浮かべて登
場したのは、話中のマンボウである。

「お前はちょっと吹つ飛んでこいよこの世の果てまで。」

「どの面さげてきやがつたこの腐れ能天氣。」

「オホーック海に沈めんぞ!」

至つて真顔で吐かれる散々な罵倒にも、微動だにしない北。ある意味神々しい。

「オホーツク海にマンボウおらんて。」

「いやあ太平洋にブッこんでやんよ——」

彼女が拳を二発ほど喰らひのば、いつものことだ。

「毎度毎度懲りないね、楽しい？」

溜め息をついて、谷中と山中は痛そうに頭を擦る北を眺めた。

「楽しそうに見えるん、これが。」

「…」
もじで痛をこに見えますね

力正角七

わへ、馬鹿げたやつとつむれんまだこいつはうるさい。

「で、何してきたんだよマンボウ。お前、どうかその辺で寝てやがったんじゃねーの?」

木下の問いかけに、マンボウはむふふ、と笑う。

「聞いて驚け見て笑え。あたしかて、ずう一つと寝とつたわけぢやうで。」お前らの為に色々働いてったんや。せ

「恩着せがましい言い方だな。」

ジト田で呴く梅本だが、あつさり無視される。

「まあ後から色々あるやうつかひ、マジキ一に頼んでみたと面倒

を省いてもうたで。「

そう言いながら、北は手を一回打ち鳴らした。
すると、幕が勝手に左右から引き上げられていく。そこから見え
たものとは。

「…………え？」

田を丸くる彼等の前……正確にはテントの前に、そりやもつ
見事に平伏する西軍の姿があつた。

四十六の斬「わかつて黙つてゐるのひで、性質へね？」

(後書き)

師走です、おはこにちばんわ。

惜しくも1~1月中にはうつできませんわんわ。。。。。。。

まだ続きます、うふふナゲヒよ馬鹿。

でもお気に入りが200件超えてたりしました。うわーお。
こんな進みの遅い作品をお気に入り登録して頂き、ありがとうございます！
りです。

ありがとうございます、そしてありがとうございます。

次回もよろしくおねがいします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6578j/>

異世界戦国大乱記

2011年12月1日20時51分発行